

# 東京国立文化財研究所年報

2000年度

東京国立文化財研究所

— 庶 務 課 —



東京国立文化財研究所新館竣工（平成12年2月4日）



東京国立文化財研究所新館開所記念式典（平成12年5月11日）

— 美 術 部 —

黒田清輝筆  
「ブレハの海岸」  
1892年  
カンヴァス 油彩  
38.7×64.0cm



ブレア島（Ile de Bréhat）の海岸



黒田清輝 写生帖 9号より  
1891年ごろ



— 芸 能 部 —



楽器調査 彦根城博物館の和琴「葵」

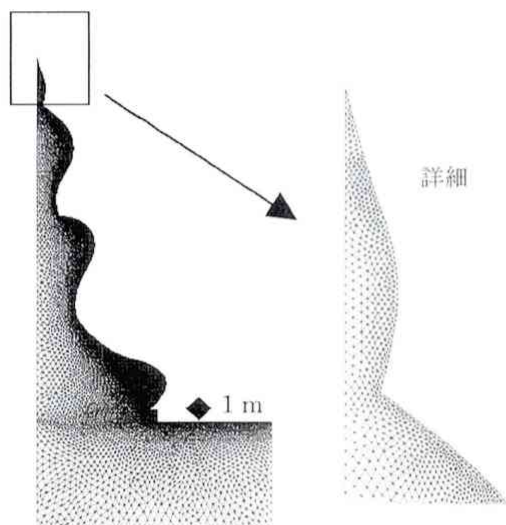


公開講座での実演 金春安明氏による「翁」

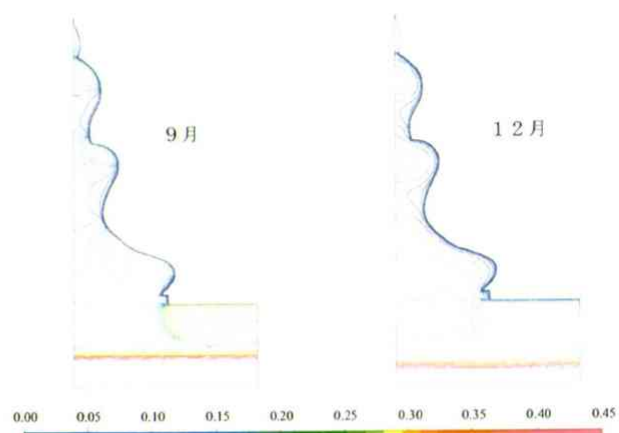


実演記録 桂古朝氏の上方落語「蛸芝居」





タイ国スコータイの大仏中の体積含水率分布計算のための有限要素法メッシュ



タイ国スコータイの大仏中の体積含水率分布計算結果  
(表面の撥水処理前の状態)



中国山東省平度県、東岳石文化遺跡（紀元前2000年頃）



可搬型蛍光X線分析装置による仏像の表面彩色の測定



二酸化炭素による文化財の殺虫試験  
(（財）元興寺文化財研究所、液化炭酸（株）との共同研究)

— 修復技術部 —



◎ 厳島神社高舞台の修復



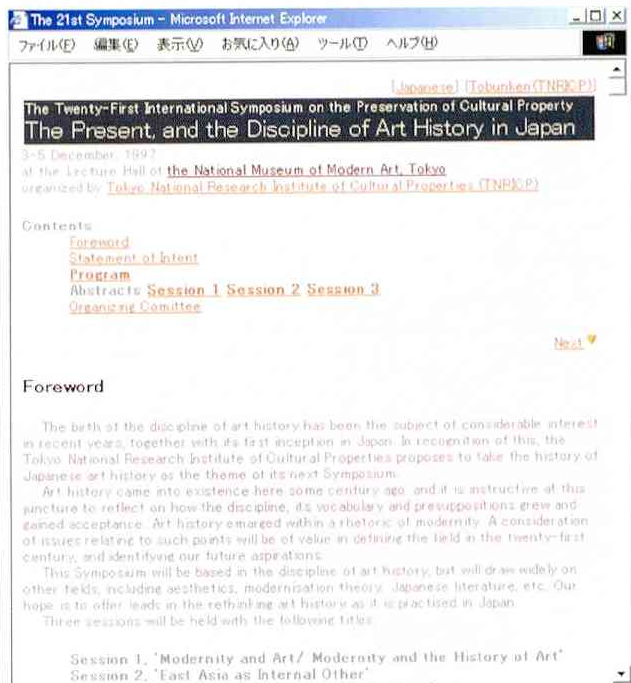
国際研修会「紙の保存と修復」



在外日本古美術品保存修復協力事業 「花鳥螺鈿食籠」(ベルリン東洋美術館蔵)



## — 情報資料部 —



第21回国際研究集会「今、日本の美術史学をふりかえる」の概要を報告するページ。発表者の要旨と3つのセッション報告のほか、英文ページには、英語発表者のフルペーパーも掲載している。



情報資料部では、研究所のホームページを担当している。新たに作成したグレー紀行のページでは、黒田清輝がフランス滞在中に制作を行ったグレー村の現在のようすと黒田作品との関わりを紹介している。



— 国際文化財保存修復協力センター —

文化財保護法50年記念シンポジウム  
Tokyo, 18-21 December 2009

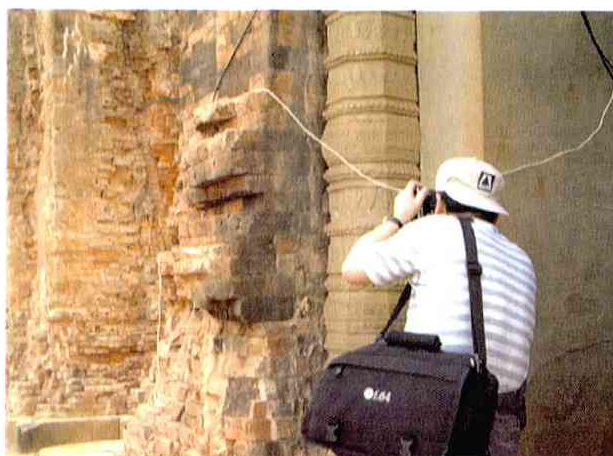
文化の多様性と文化遺産  
Cultural Diversity and Heritage



国際シンポジウム「文化の多様性と文化遺産」(82頁参照)



タイ・スコタイ遺跡のスリチェム  
寺院大仏 (47頁参照)



カンボジア・アンコール遺跡群の調査 (40頁参照)



ユネスコ・ミッションによる  
龍門石窟調査 (48頁参照)



龍門石窟研究所保護研究室・馬朝龍研究員の研修  
(48頁参照)

# 東京国立文化財研究所 年報 2000年度

## 目 次

### 緒 言

## 1. 機 構

1. 組 織 図 .....	1
2. 組織の概要と職員 .....	2
(1) 庶 務 課 .....	2
(2) 美 術 部 .....	2
第一研究室 .....	2
第二研究室 .....	2
(3) 芸 能 部 .....	2
演劇研究室 .....	2
音楽舞踊研究室 .....	2
民俗芸能研究室 .....	3
(4) 保存科学部 .....	3
化学研究室 .....	3
物理研究室 .....	3
生物研究室 .....	3
(5) 修復技術部 .....	3
第一修復技術研究室 .....	3
第二修復技術研究室 .....	4
第三修復技術研究室 .....	4
(6) 情報資料部 .....	4
文献資料研究室 .....	4
写真資料研究室 .....	4
(7) 国際文化財保存修復協力センター .....	4
企 画 室 .....	4
環境解析研究指導室 .....	5
保存計画研究指導室 .....	5

## 2. 研 究 活 動

1. 各部の研究活動 .....	6
美 術 部 .....	6
芸 能 部 .....	7
保存科学部 .....	8
修復技術部 .....	9
情報資料部 .....	10
国際文化財保存修復協力センター .....	11

2. 研究一覧	12
中長期研究計画一覧	12
受託研究一覧	12
文化財保存修復に関する国際交流促進事業一覧	12
文部省科学研究費補助金による研究一覧	13
凡例	13
3. 中長期研究計画	14
4. 受託研究	42
5. 文化財保存修復に関する国際交流促進事業	44
6. 文部省科学研究費補助金による研究	50

### 3. 個人の研究業績

.....	66
-------	----

### 4. 事業

1. 研究集会など	82
(1) 国際研究集会	82
(2) 各種の研究協議会	84
(3) 研究会・講演会など	87
2. 調査指導など	93
(1) 所外経費による調査指導	93
(2) その他の調査指導	97
3. 研修	101
(1) 国際研修「紙の保存修復」	101
(2) 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修	102
(3) 資料保存地域研修	104
(4) 海外学術調査員および研究者のための保存修復講座	105
(5) 博物館学実習	105
4. 文化財修復協力	107
(1) 在外日本古美術品修復協力事業	107
5. 講座など	109
(1) 公開学術講座	109
(2) 夏期学術講座	110



6. 大学院教育	112
7. 出版	113
(1) 定期刊行物	113
1) 美術研究	113
2) 芸能の科学	113
3) 保存科学	113
4) 日本美術年鑑	114
(2) シンポジウム等の報告書	114
8. 公開・出品	118
(1) 公開	118
1) 黒田記念室	118
2) 資料閲覧室	118
(2) 黒田清輝巡回展	118
(3) 所蔵作品等の貸与	118
9. 年度内主要事業一覧	120

## 5. 研究交流

1. 職員の海外渡航	121
2. 招へい研究員等	124
(1) 海外	124
(2) 国内	127
3. 海外研究者等の来訪	137
(1) 来訪研究員	137
(2) 表敬訪問	137

## 6. 主な所蔵資料

1. 図書資料	138
(1) 美術関係図書	138
(2) 芸能関係図書	138
(3) 保存科学・修復技術関係図書	138
(4) 外国文化財関係図書	138
2. その他	139
(1) 美術関係資料	139
(2) 芸能関係資料	139
(3) 保存科学・修復技術関係資料	139

## 7. 研究所関係資料

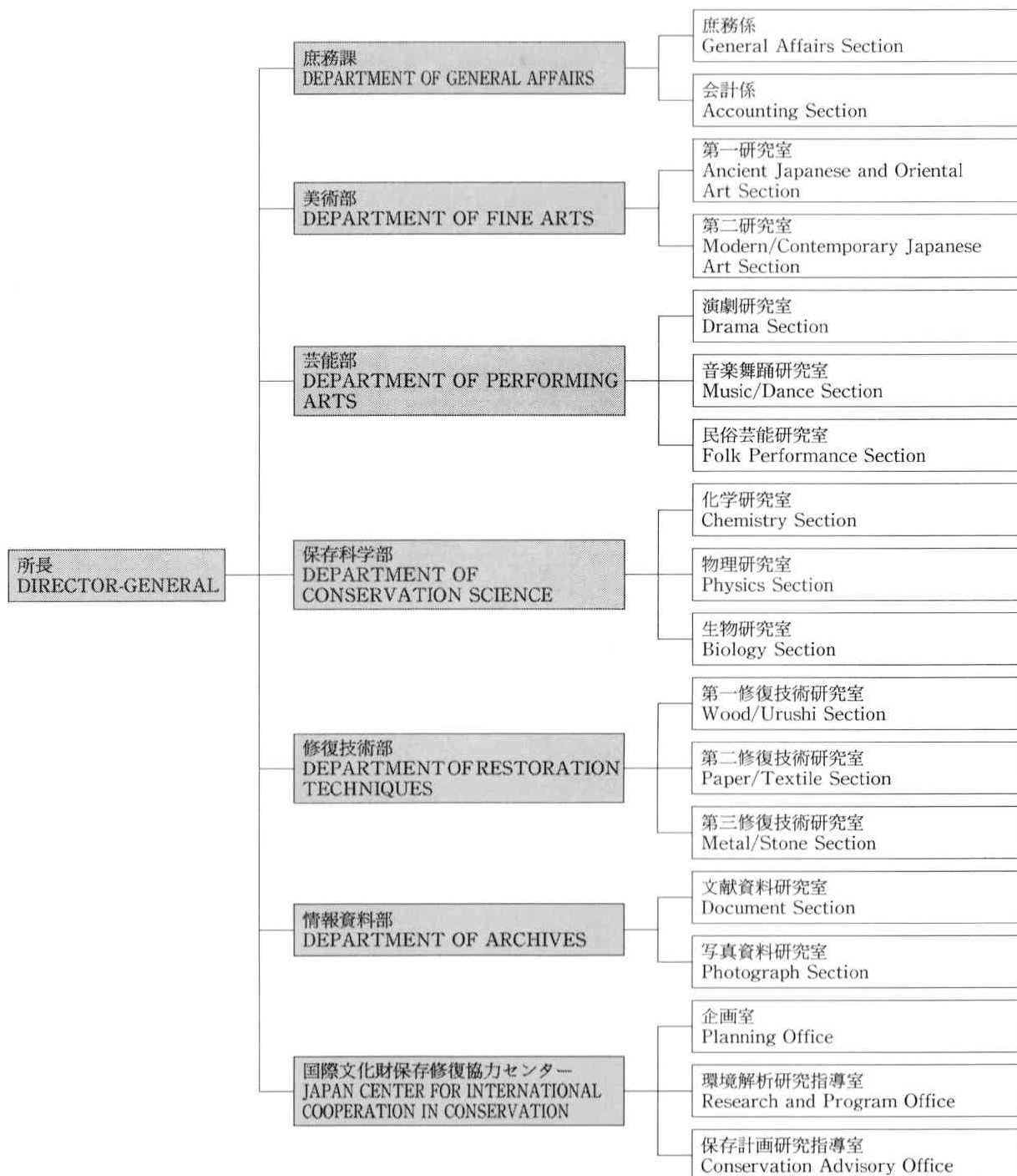
1. 設立の経緯 .....	140
2. 年代別重要事項 .....	140
3. 歴代所長（昭和5年～平成12年） .....	143
4. 名誉研究員 .....	144
5. 2000（平成12）年度予算等 .....	145
6. 関係法規 .....	147

# 1. 機 構

## 1. 組 織 図

東京国立文化財研究所

TOKYO NATIONAL RESEARCH INSTITUTE OF CULTURAL PROPERTIES





## 2. 組織の概要と職員

所 長 渡 邊 明 義 (美術史)

### (1) 庶 務 課

課 長	白 井 国 明		
課長補佐	長谷川 洋 一		
庶務係長	小 関 仁 志	会 計 係 長	庄 司 義 則
庶務主任	森 田 健 一	会 計 係 員	坂 巻 信 宏
事務補佐員	岩 戸 滋 子	事務補佐員	堀 江 祐 子
事務補佐員	古 川 恵 子	事務補佐員	工 藤 幸*
事務補佐員	竹 岡 祐 子	事務補佐員	堀 内 朋 美
		事務補佐員	田 島 由紀子

\* 平成12年 6 月30日辞職

### (2) 美 術 部

日本・東洋の古美術、ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関連する西洋美術について基礎的な調査研究をすすめ、その成果の公表を行っている。

**第一研究室** 江戸時代までの日本美術および東アジア地域の美術に関する調査研究、ならびに資料収集、成果の公表を行っている。

**第二研究室** 明治以降の日本近代美術とこれに関連する西洋美術および日本近世の洋風美術の調査研究、ならびに現代美術の動向に関する資料の収集と調査をすすめ、その成果の公表を行っている。

美術部長 (事務取扱)	渡 邊 明 義 (美術史)
主任研究官	山 梨 絵美子 (日本近代絵画史)
主任研究官	岡 田 健 (東洋彫刻史)
第一研究室長	中 野 照 男 (東洋絵画史)
第二研究室長	田 中 淳 (日本近代絵画史)
同 研究員	塩 谷 純 (日本近代絵画史)
調 査 員	青 木 茂 (日本近代絵画史)

### (3) 芸 能 部

伝統芸能を対象に、諸芸能の史的展開・理念・構造・技法・演出に関する実際的な調査研究をすすめ、その成果を公表している。

**演劇研究室** 歌舞伎・浄瑠璃など古典演劇の演技演出について、歴史的な考察と現在の伝承への提言のための基礎的な調査研究をすすめている。

**音楽舞踊研究室** 古典音楽・舞踊・能・狂言の技法、演出について伝承と文献の両面から調査研究をすすめている。

**民俗芸能研究室** 民俗芸能・民俗行事を実地に調査し、それらの芸能史的位置づけや保存伝承に資するための基礎的な研究を行っている。

芸能部長	星 野 紘 (民俗芸能)
主任研究官	高 桑 いづみ (日本音楽史)
演劇研究室長	鎌 倉 恵 子 (日本近世演劇)
演劇研究室員	児 玉 竜 一 (日本近世演劇)
民俗芸能室長	宮 田 繁 幸 (民俗芸能)
調 査 員	小 田 幸 子 (日本中世演劇)
調 査 員	野 川 美穂子 (日本音楽史)
調 査 員	小野寺 節 子 (民俗音楽)

#### (4) 保存科学部

文化財の材質・構造やそれを取り巻く環境を様々な科学的方法で調べて、保存の現場や美術史、考古学など歴史研究に役立つ研究とその成果の公表を行っている。

**化学研究室** 青銅や鉄など金属製文化財を中心に、各種のX線分析装置や鉛同位体比分析装置などを用いて、材料・錆の化学組成や原料産地などを明らかにする研究を行っている。

**物理研究室** 温湿度、空気汚染などを測定して文化財公開施設における保存環境を評価し、文化財の劣化を防止するための研究と、X線、赤外線などを用いた非接触調査手法の開発を行っている。

**生物研究室** 生物が原因となった文化財の劣化の機構を調べ、防除する研究を行っている。現在は特に、環境に被害を与えることの少ない防除法の開発に力を入れている。

保存科学部長	三 浦 定 俊 (物理計測)
主任研究官	佐 野 千 絵 (光化学)
主任研究官	木 川 り か (生物化学)
主任研究官	早 川 泰 弘 (分析化学)
化学研究室長	平 尾 良 光 (無機化学)
物理研究室長	石 崎 武 志 (地球科学)
生物研究室長事務取扱	三 浦 定 俊 (物理計測)
調 査 員	山 野 勝 次 (応用昆虫学)
客員研究員	藤 村 貞 夫 (計測工学)

#### (5) 修復技術部

文化財の修復材料・技法に関する調査研究と新たな要求に対する修復材料・技術の開発を行っている。また、近代の文化遺産の保存修復に必要な材料・技術の調査研究を国内外の研究者・機関と協力しながら行っている。国際協力の分野では、各国からの要請に応じて現地指導や日本における指導、国際研修、在外日本古美術品の保存修復協力などの業務を行っている。

**第一修復技術研究室** 木材や漆などを素材とする文化財の伝統的な修復技術の調査研究と新たな修復技術の開発を行っている。

**第二修復技術研究室** 紙、布などを素材とする文化財の伝統的な修復技術の調査研究と新たな修復技術の開発、および合成樹脂を用いる修復技術の開発を行っている。

**第三修復技術研究室** 金属、石材およびその他の無機材質からなる文化財の修復技術の研究を行っている。

修復技術部長	増 田 勝 彦 (装こう技術)
第一修復技術研究室長	加 藤 寛 (漆芸技法)
第二修復技術研究室長	川野邊 渉 (高分子化学)
技術補佐員	井 口 智 子 (2000.4.1～5.31)
	高 橋 千 恵 (2000.6.1～)
第三修復技術研究室長	青 木 繁 夫 (考古学)
研 究 員	早 川 典 子 (有機化学)
技術補佐員	大 森 信 宏 (1999.5.15～)
客員研究員	松 田 史 朗 (腐食工学)

#### (6) 情報資料部

文化財に関する研究資料の作成・収集・保管・閲覧等の業務を行い、さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかっている。

**文献資料研究室** 文化財に関する図書・雑誌、調査研究活動によって収集された研究資料各種の整理・保管・閲覧を行っている。また、日本・東洋古美術関係の文献目録の作成とともに文献データベースの開発を行っている。

**写真資料研究室** 研究用写真資料の作成・収集・整理・保管・閲覧を行うとともに、各研究者の調査活動に協力して研究資料を撮影し、資料の充実に努めている。また、美術史研究への画像処理技術の応用および画像情報のデータベースに関する研究を行っている。

情報資料部長	米 倉 迪 夫 (日本中世絵画史)
主任研究官	井 手 誠之輔 (東洋絵画史)
主任研究官	勝 木 言一郎 (東洋絵画史)
文献資料研究室長	鈴 木 廣 之 (日本近世絵画史)
事務補佐員	中 村 節 子
写真資料研究室長	島 尾 新 (日本中世絵画史)
研 究 員	津 田 徹 英 (日本彫刻史)
専 門 職 員	城 野 誠 治 (美術写真)
調 査 員	長谷川 稔 子 (日本仏教美術史)
客員研究員	伊與田 光 宏 (情報工学)

#### (7) 国際文化財保存修復協力センター

世界の文化財の保存・修復に関する国際的な研究交流、保存事業への協力、専門家の養成、情報の収集と活用などを実施し、文化財保護における国際的な責務を果たしている。

**企 画 室** 国際協力事業の企画・運営、諸外国や関係機関との連絡、調整などの事務を行っている。



**環境解析研究指導室** 世界の文化財の保存・修復に関する調査研究を進め、また国際協力事業の技術的内容についての調査・指導を行っている。

**保存計画研究指導室** 国際協力の相手国の伝統材料・技術を生かした形での保存・修復計画の立案に寄与するため、経済・社会・文化など、文化財を取り巻くさまざまな環境や、人材養成のあり方などについて、幅広い視点からの調査・研究を行っている。

センター長	齋 藤 英 俊 (建築史)
主任研究官	朽 津 信 明 (地質学)
企画室長	河 原 脩
企画係長	山 岸 智 幸
(併任)	吉 野 貴 子
調 査 員	松 原 美智子
環境解析研究指導室長	西 浦 忠 輝 (材質改良学)
保存計画研究指導室長	松 本 修 自 (建築史)
研 究 員	二 神 葉 子 (考古科学)
研究補佐員	宇田川 滋 正*
客員研究員	野 口 英 雄 (国際協力)
客員研究員	宗 田 好 史 (都市保存学)

\* 平成12年9月1日採用

## 2. 研究活動

### 1. 各部の研究活動

#### 美術部

美術部では、日本及び東アジアの古美術、ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関連する西洋美術について基礎資料の収集、調査研究、研究成果の公表等を行っている。

##### (1) 美術作品の実証的研究

美術部の研究調査は各時代の絵画、彫刻、工芸の各分野の作品について、作品そのものと文献資料の両面から実証的な研究を進めている。本年度は、「日本における外来の美術の受容についての研究」(5年計画3年次)、「美術に関する基礎資料の研究 ―中国日本拓本資料・室町時代水墨画資料・未公開仏教美術原典史料・指定関係文書―」(5年計画3年次・2年次・2年次・1年次)、「木彫仏像の調査研究」(5年計画2年次)、「昭和期の美術団体、内外博覧会に出品された作品及び作家の研究」(4年計画1年次)の4テーマを研究の中心に据え、関連領域の作品を含めて、精力的に調査、研究を行った。調査にあたっては、光学機器等を利用した科学的調査法を積極的に活用している。また、近年におけるコンピューター技術の進展、普及にともない、新たなデジタル画像処理技術を取り入れ、これまで行ってきた光学的作品分析の精度を高める努力をしている。また、美術部では、情報資料部と共同で研究会や研究協議会等を開催し、当研究所がこれまでに蓄積してきた研究資料の活用を基盤とした研究者間のネットワークづくりをすすめ、日本における新たな美術史研究の方向性を示唆できるようにつとめている。

##### (2) 美術史学の今日的課題に関わる研究

美術部ではまた、美術作品および美術に関わる諸現象を社会的な文脈の中で問い直すことによって、美術に関わるさまざまな問題を解き明かす研究を行っている。「日本における美術史学の成立と展開」(4年計画4年次)では、明治20年代以降、国家の制度や機構と密接な関係を維持しながら、日本の文化的ナショナルアイデンティティの構築に寄与してきた美術史学の歴史を、建築、工芸、書道、考古学など関連領域をも視野に入れつつ、ふりかえることによって、美術史学の今日的課題と今後の展望を明確にした。

##### (3) 基礎資料の収集と集成

美術部は、情報資料部との緊密な協力のもとに、さまざまな作品のデータや研究情報を収集し、今後の研究に資すべき高度な研究資料として整理している。上記、美術作品の実証的研究の遂行に伴って、美術史研究に不可欠な上質な研究資料の収集を積極的にすすめているが、その他に「日本近代美術の発展に関する調査・研究」(4年計画1年次)では、昭和期を中心に各美術団体の展覧会出品目録を収集調査し、これをもとに同時代の美術界の動向を総合的に分析、研究している。この研究に関連して、『林忠正宛書簡集』(フランス語)、『大正期美術展覧会出品目録』(仮称)の刊行を準備した。

##### (4) 研究成果の公表

調査研究の結果は、機関誌『美術研究』(昭和7年創刊)やその他の学会誌に発表し、研究報告書も随時刊行している。また現代美術の動向に関する資料の収集と研究の成果は、毎年、『日本美術年鑑』(昭和11年創刊)として刊行している。さらに、情報資料部と共同で、毎年1回、公開学術講座を開催し、研究成果の一部を一般に公開している。

##### (5) 所蔵作品ならびに研究情報の公開

美術部は黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所を前身としており、現在も黒田清輝の作品やその他関連

資料を保管して、毎週一回（木曜午後）、黒田記念室（黒田記念館二階）においてそれらを公開している。さらに昭和52年以降、毎年一回、他美術館等との共催で、巡回展「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展」を開催している。また、インターネット上の当研究所のホームページに「黒田清輝記念室」を設け、彼の芸術への理解が深められるように、黒田に関する研究情報の公開を積極的にすすめている。

## 芸 能 部

芸能部では、日本の伝統芸能を対象に、実証的な研究を進めている。研究目標としては、諸芸能の史的展開、理念、構造、技法、演出などに関する基礎研究を行うと同時に、無形文化財・無形民俗文化財の指定、選択などの行政に対応すべく、諸芸能の現状を把握し、保存と継承のあるべき姿を追求するよう努めている。

### (1) 芸能の実証的研究

#### ○文献資料に関する研究

芸能部では、能の基礎的文献資料として各家に伝わる型付（舞踊譜）や手付（楽譜）、伝書、また歌舞伎の基礎的文献資料として、歌舞伎番付や下座附帳などの複写・収集に基づく総合的な分析・研究を行ってきた。現在では、所蔵している江戸後期の上方面を中心とする歌舞伎番付について、関連所蔵機関とネットワークを作りながら整理・公開のための調査・研究をすすめている。

#### ○中長期計画「『翁』の技法集成」（7年計画7年次）

芸能部では、文献資料に偏りがちな芸能研究へ一石を投じるため、実際に行われている芸能の技法や上演実態の記録を行ってきた。その記録をもとに技法の分析を行い、演技の変遷をたどろうとしたのが本研究である。「翁」に関しては過去6年間に実技者による記録を行い、技法の比較や江戸期の伝書との比較を行って『芸能の科学』に発表した。平成12年度は、民俗芸能との比較を行っている。

#### ○中長期計画「日本伝統楽器の変遷研究」（6年計画1年次）

演じた瞬間に消え去ってしまう芸能を記録にとどめ、上演の実態を把握することは難しい。そこで芸能部では、上演に際して用いられる大道具や小道具、楽器を通して伝承の一端を解明する調査研究を平成5年度より行ってきた。これら芸能用具に関しては未調査部分が多く、新しい芸能資料として今後注目される可能性が大きい。現時点では楽器に焦点を当て、各地に残る楽器の形態変化から、音楽の変遷を跡づける試みを行っている。

### (2) 芸能の現状に関わる研究

芸能部では古典芸能・民俗芸能の現状に関わる、さまざまな問題をめぐる研究および検証を行っている。

#### ○民俗芸能研究協議会

民俗芸能研究協議会は、各地の保存団体関係者、各地教育委員会等の芸能行政担当者及び民俗芸能研究者らの参加をえて、民俗芸能の伝承と今日的課題を検討しあい、情報交換の場を設けることを目的として、平成10年度に発足した。

第3回は「芸能用具の保存・修復・新調・活用」をテーマに、事例報告がなされた。

#### ○無形文化財の伝承に関する研究

前年度に引き続いて、上方歌舞伎の伝承に関する聞き取り調査を行った。

### (3) 芸能の上演に関わる基礎資料の収集と集成

芸能部では古典芸能・民俗芸能の上演に関わる、基礎資料を収集・整理して公開している。

### ○芸能の上演記録の収集と集成

国立劇場におけるすべての芸能公演の上演記録と資料のほか、能楽関係の上演記録を継続的に収集・整理している。また各県の民俗芸能調査報告書を収集し、今後の上演研究に資すべき研究資料として整理をすすめている。

### ○映像・音声資料の収集と集成

演じた瞬間に消え去るのが宿命である芸能では、映像・音声による記録がきわめて貴重となる。芸能部では、義太夫節レコードの一大コレクションとして知られる「安原仙三コレクション」をはじめとするSP・LPレコードの数々を、収集・整理している。

これまでに『音盤目録』Ⅰ～Ⅴを刊行し、各種の複製・復刻による芸能記録の普及に貢献している。同時に、劣化が懸念されるオープンリールその他に納められた貴重な記録の、媒体変換による保存をすすめている。

### ○写真資料の収集と集成

所蔵する明治期歌舞伎写真資料の整理の準備をすすめたほか、石井雅子氏撮影による昭和30～50年代の舞台写真を収集・整理し、研究者の活用への方途を検討している。

#### (4) 技法の記録

芸能部では各種芸能の技法を、録音・録画・スチール写真などの形で記録することを重要な業務としてきた。現地での実況記録ばかりでなく、実技者を研究所内の舞台に招き、特別に演技や演奏を依頼して行った記録も多い。これらの記録はきわめて貴重で、研究資料として部員および所外の研究者の利用にも共している。さらに、求めに応じて書籍、視聴覚メディアなど、各種刊行物に掲載され、あるいは収録された記録もある。とくに東大寺修二会の調査を初めとする寺事（寺院行事・寺院芸能）の研究は、芸能部が先鞭を付けた分野であり、その成果の一部であるレコード「東大寺修二会観音悔過（お水取り）」は、1971年度芸術祭優秀賞を受賞している。

今年度は中長期計画「無形文化財・無形民俗文化財の伝承に関する研究」の一環としてロシア・ハンティ族の「熊送り」、桂吉朝氏による上方落語の記録作成を行った。

#### (5) 研究成果の公表

調査研究の成果は、機関誌『芸能の科学』やその他の学会誌に発表している。また毎年1回、一般を対象とした公開学術講座、大学院生を対象とした夏期学術講座を開催し、成果の一部を広く公開している。

## 保存科学部

保存科学部は文化財の材質・構造・技法及び劣化機構に関する研究を行うとともに、文化財のおかれている保存環境の研究も行っている。またそれらの研究を基に、文化財保存の現場に生かせる技術開発を行っている。すなわち文化財の産地推定など自然科学的手法による歴史的研究と文化財保存のための科学研究を軸としている。化学研究室は青銅や鉄などの金属製文化財を中心に、各種の分析装置を用いて材料・錆の組成や原料産地などを明らかにする研究を行い、物理研究室は温湿度・空気汚染などを測定して、文化財公開施設における保存環境を評価し、文化財の劣化を防止する研究と、X線・赤外線などを用いた非破壊検査手法の開発を行っている。また生物研究室は生物が原因となった文化財の劣化機構を調べ、防除のための研究を行っている。

研究テーマの設定に当たっては、1.行政施策面からの必要性、2.学問分野における先端性と発展性、3.博物館など保存現場からの要望などを考慮し、化学、物理、生物の研究室ごとに中長期の研究テーマを設定して研究を進めている。

### ○中長期研究計画「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」

行政施策と保存現場からの強い要望に基づいた研究として、物理研究室を中心とした「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」がある。この研究は国指定文化財の公開（文化財保護法第53条）に関わる研究として文化庁美術学

芸課と密接な連絡を取りながら進めているもので、これまでに室内汚染物質の問題、美術館用免震装置の問題、ハロンに代わる消火剤の問題などを取り上げてきた。今年度からは山車などの大きな民俗資料の保存を念頭に置いて、大空間での資料の保存と展示の問題を取り上げている。当初は一般研究費を利用して研究を行っていたが、1995年度(平成7年度)から特別研究として予算措置された。

#### ○中長期研究計画「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」

オゾン層破壊防止のために行政上の緊急性を持って実施されている中長期研究が、生物研究室を中心にした「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」である。1997年のモントリオール議定書締約国会議で、2005年に先進国では臭化メチルの使用を全廃することになり、2001年1月からは使用量の50%削減が始まった。臭化メチルは文化財の殺虫燻蒸に広く利用されている薬剤であるため、文化財の保存に関する研究部を持った唯一の国立研究機関として、臭化メチルに代わる薬剤や代替法を文化財材質や人間の健康への影響も考慮し、関係機関と連絡を取りながら研究が行われている。この研究も当初は一般研究費を用いて行っていたが、1997年度(平成9年度)から特別研究として措置された。さらに1998年度からは関連した研究が文部省科学研究費補助金を用いて実施されている。

#### ○中長期研究計画「東アジア地域における金属文化財の自然科学的研究」

自然科学的な手法を用いて、日本文化を東アジア地域の中でとらえることを目的として進められている中長期研究が、化学研究室を中心にした「東アジア地域における金属文化財の自然科学的研究」である。この研究では国内の青銅資料に関する研究だけでなく、韓国の湖巖美術館や東京国立博物館の協力を得て、朝鮮半島、中国からの資料に関する研究も進めている。

#### ○その他

この他、中長期研究計画に上がっていない重要な研究として「文化財保護に関する日独学術交流」に基づいたドイツとの共同研究をあげることができる。日独学術交流は平成10年度まで、文部省科学研究費補助金(国際学術)により「漆・ニス等伝統的天然樹脂塗膜の劣化と保存に関する研究」(1993～95年度)、「文化財の微量試料分析法の開発」(1996～98年度)と、主に輸出漆器の保存に関する研究を行ってきた。平成12年3月11～13日には、ICOMOSドイツ国内委員会などと国際シンポジウムを共催したが、平成12年度にはその論文集をバイエルン州立文化財研究所と共に、“East Asian and European Lacquer Techniques”として出版した。平成11年度からは「彩色文化財の材料と技法に関する科学研究」(基盤研究(A)(2)、平成11～13年度)を行っている。

### 修復技術部

修復技術部は、文化財の修復に関する科学的調査・研究とともに、文化財修復技術・材料に関する調査・研究を行っている。文化財修復の過程は、その対象となる文化財を取り巻く環境の調査、材料の選定、材料の使用方法的決定等を経て行われるが、こうした過程の中で生じる様々な問題点に関わり、現場に直結した対応、応用を主目的として研究テーマを設定している。

実際の文化財修復においては、伝統的な材料・技法と新材料や新技術を応用した方法とが併用されており、伝統的なものについてはその科学的解明や応用方法の検討、新材料や新技術については環境測定方法や材料選定も含めたあらゆる手法の開発などを研究している。

また、修復を必要とする文化財自体も、近代の文化遺産のように、従来の文化財の概念には含まれなかった素材や構造を持つ大規模文化財までを対象として広がってきており、これらに対する研究も大きな課題となっている。

平成12年度では以下の中長期計画を中心に研究をすすめた。

#### ○中長期研究計画「文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発研究」

周辺環境の悪化による文化財への影響や、過酷な条件下にある文化財の周辺環境からの影響を観測・評価し、その影響を軽減するための材料と技法を開発することをめざしている。白杵の磨崖仏群での次期修復事業のための調査研



究、厳島神社における各種材料の耐候性向上の試み、日光社寺群における環境調査とその評価などを行い、その結果の公表を行っている。

#### ○中長期研究計画「近代の文化遺産の修復に関する調査研究」

近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行っている。重要文化財旧下野煉化製造会社煉瓦窯を例として大型煉瓦構造物の劣化機構の究明とその修復方法立案を行った。また、国内外の研究者と研究交流を行い、航空機、船舶など大型器械類の修復保存上の問題点とその解決方法を調査研究している。今年度は、船舶の保存修復に関する研究会を行った。

#### ○中長期研究計画「漆の加熱硬化メカニズムに関する調査研究」

焼付漆の技法は、古くから建築金具や金属工芸品の防錆あるいは下地作りとして行われてきた。現在伝承されている焼付漆技法の実態を明らかにし、文化財修復技術の観点から、技法を確立することを目的としている。

平成10年度は、焼付漆を文化財に活用している3工房で、漆塗りおよび焼付方法などの調査を行い、条件によっての相違点を検討した。さらに、漆の種類や焼付温度の違いによって生じる、物性の変化についての検討を行った。平成11年度は、120℃で2時間といった低温焼き付けを含む焼付漆の耐久性について実験を行い、結果について検討した。平成12年度は、前年までの研究結果をふまえて、18世紀後半の輸出漆器である蒔絵プラークをもとに、銅板への焼付漆の耐候性や蒔絵、螺鈿などの伝統的装飾への影響を製作工程を追って復原を行い、本研究のまとめとした。

#### ○中長期研究計画「近世輸出工芸品の実証的研究」

海外所在の日本工芸品に対する関心の高まりの中で、海外美術館などから、所蔵工芸品に関する問い合わせが始めている。しかし、従来この分野の研究は国内でも十分に行われておらず、詳しい調査もできていない。輸出されてから百数十年を経過して、損傷が顕著になってきたことから在外日本古美術品修復協力事業の対象として、近世工芸品が日本に来る機会を捉えて調査を行うものである。

平成12年度は、ヨーロッパ・ギメ美術館1件、アメリカ・メトロポリタン美術館から43件の刀剣類を輸入して修復事業を行った。さらにアシュモリアン美術館より1801年製作の「風景蒔絵ナイフボックス」1基とハンブルグ工芸美術館所蔵の「逢来蒔絵手箱」1合が新たに修復作業に加わった。

## 情報資料部

情報資料部は、前身となる美術部資料室が行ってきた美術に関する研究資料の作成・収集・保管・閲覧などの業務を継承し発展させるとともに、本研究所の5部・センターが取り扱う研究資料に関する情報の統合化を進めている。これらの研究資料は内外の研究者に広く利用され、当部は文化財に関する研究資料センターとしての役割を果たしている。

近年では学術情報が著しく増大し多様化しているが、このような状況に対応できるよう、当部ではいち早くコンピュータを導入して研究用資料のデータ化を進めるなど、データの生産・蓄積・活用の効率化に努めてきた。また、所内にローカル・エリア・ネットワークを構築して情報の一元化をはかり、コンピュータ・システムの整備と運営の中心となって活動を行ってきた。最近では、各種の情報をインターネット上で公開する研究所ホームページを開設し、その運営にも当たっている。

本年度は、まず、長期研究計画「美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—」（1989～2000）の最終年度にあたる。その研究成果は、新館におけるコンピュータ・システムの再構築に反映され、所内ではイントラネットシステムによる所蔵資料の検索システム、外部へはホームページを通して、順次、生産・蓄積されたデータを公開している。また、前年度3月に新館へ移ったため、システムの再構築にあわせて、4月より図書・雑誌・展覧会図録・写真などの所蔵資料の総点検を実施するとともに、平成11年11月より休止していた資料の閲覧業務を9月から新館2階の資料閲覧室で再開した。資料閲覧室では、所蔵資料の検索システムを通して、利用者のいっそうの便宜がはかれることになった。さらに、次年度に本研究所が独立行政法人に移行するのにともない、当部の改変が予定さ

れているので、その準備を進めた。

また当部では、長期研究計画と並行して2つの中期研究計画を行うとともに、彩色文化財に関する特別研究を保存科学部と共同で実施している。文献資料研究室を中心とする「文化財に関する研究文献情報の活用」(1999～2004)と、写真資料研究室を中心とする「デジタル画像情報の多重化に関する研究」(1999～2004)、「国宝源氏物語絵巻の調査研究」がそれだが、本年度の研究成果については、「3.中長期研究計画」の当該ページを参照願いたい。

## 国際文化財保存修復協力センター

世界各地に所在する文化財は、それが所在する国を超えて人類共有の財産としての側面を持ち、多くの人々がその価値を享受する権利とともに、国際協力の下にそれらを守る義務をも課せられている。この意味において、多くの文化財を有し、文化財保護のための体制が整い、研究・技術の進んでいる我が国の果たすべき役割は大きく、また、世界各国からの協力要請も年々増加している。

日本が文化財の分野における国際協力に本格的に取り組みだしたのは、比較的近年のことである。そのなかにあつて、東京国立文化財研究所では「文化財の保存に関する国際研究集会」や「敦煌莫高窟の保護に関する共同研究」など、この分野で先駆的役割を果たしてきた。また、1990年に「アジア文化財保存研究室」を設置し、3年後にはこれを「国際文化財保存修復協力室」と改称し、さらに1995年に至り、「国際文化財保存修復協力センター」に改組し、国際協力に積極的に対応するための体制を整えた。

国際文化財保存修復協力センターでは、研究所の国際関係活動全般の企画・調整や外部機関との連絡業務などの他に、保存科学や修復の専門家を配した2つの研究指導室においては、世界の文化財の保存環境や保存計画についての調査研究や情報収集なども行っている。

研究所が行っている国際関係の活動としては、諸外国の専門機関・専門家との共同研究や研究交流、専門家を招聘しての研修事業、諸外国の文化財に関する保存修復協力事業、文化財に関する国際情報の収集と解析とその成果の公表などがある。

これらのうち、敦煌莫高窟に関する共同研究や紙や漆の研修事業、在外日本古美術品保存修復協力事業など、活動の主体が他の部で行われているものもあるが、センターにおいても、タイ国政府芸術総局との「文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究」、日独科学技術協定に基づく歴史的建造物の分野における共同研究、アジア諸国の専門家を招聘しての「アジア文化財保存セミナー」、外国の文化財の調査研究や保存修復に関わっている国内の専門家・研究者を招いての「国際文化財保存修復研究会」などの諸活動を継続的に行っている。なお、これらに加えて、2000年度からは、中国・龍門石窟とパナマの歴史地区カスコ・アンティグオの保存修復協力事業をあらたに開始するなど、積極的に活動の範囲を広げ、内外からの期待に応えている。

## 2. 研究一覽

### 中長期研究計画一覽

当研究所における研究活動は、中長期研究計画に基づいて進められている。これは組織としての研究活動の方向性を示すもので、毎年春に、研究に関わる部、センターによって策定されている。本年度における当研究所の中長期研究計画は下記一覽の通りである。

日本における美術史学の成立と展開	14
日本における外来の美術の受容についての研究	15
美術に関する基礎資料の研究	
—中国日本拓本資料・室町時代水墨画資料・未公開仏教美術原典史料・指定関係文書—	17
木彫仏像の調査研究	18
昭和期の美術団体、内外博覧会に出品された作品及び作家の研究	19
「翁」の技法集成	21
日本伝統楽器の変遷研究	22
無形文化財・無形民俗文化財の伝承に関する研究	23
文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究—大型資料の保存—	24
無公害な文化財生物劣化防除法の研究	26
東アジア地域における金属文化財の自然科学的研究	27
文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発研究	28
近代の文化遺産の修復に関する調査研究	29
漆の加熱硬化のメカニズムに関する調査研究	30
近世輸出工芸品の実証的研究	31
敦煌莫高窟壁画の保存修復に関する日中共同研究	32
美術情報システムの研究—データの共有化を中心として—	33
文化財に関する研究文献情報の活用	35
デジタル画像情報の多重化に関する研究	36
国宝「源氏物語絵巻」の調査研究	37
世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集	38
屋外石造（レンガ造）文化財の劣化と保存修復に関する調査研究〔国内〕	39
屋外石造（レンガ造）文化財の劣化と保存修復に関する調査研究〔海外〕	40
文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究	41

### 受託研究一覽

茨城県新治村武者塚古墳出土金属製品の修復研究	42
装潢材料の物性研究	43

### 文化財保存修復に関する国際交流促進事業一覽

ベルン歴史博物館およびエルミタージュ美術館所蔵の日本美術品に関する調査	44
スミソニアン研究機構との国際研究交流	45

文化財保護に関する日独学術交流	46
文化財の保存修復技術に関する国際共同研究—屋外遺跡の保存修復に関する日タイ共同研究—	47
龍門石窟の保存修復に関する調査研究—中国文化財保存修復に関する調査研究—	48
パナマ歴史地区保存修復協力事業（中南米諸国文化財保存協力事業）	49

## 文部省科学研究費補助金による研究一覧

研究種目	研 究 課 題	
基 盤 研 究 (A)	日本における美術史学の成立と展開	50
	世界の文化財の保存—わが国による国際協力体制構築のための調査・研究—	51
	彩色文化財の材料と技法に関する科学的研究	52
	早期中国青銅器の原料産地に関する研究	53
	文化財の新たな総合的虫菌害防除対策（IPM）のシステム構築に関する研究	54
基 盤 研 究 (B)	タイ国アユタヤ遺跡の保存修復に関する研究	55
	古代日本の動物遺体のDNA解析および免疫学的分析	56
	石造文化財の劣化機構と保存対策手法の研究	57
	屋外環境下での遺跡、石造文化財の保存対策手法の開発	58
基 盤 研 究 (C)	極楽浄土を表象するモチーフとしての迦陵頻伽の諸相とその文化的特質 —鳥と人からなる動物を通して見た東西文化の交流とその中国的受容—	59
	新史料翻刻による花祭りの芸能史的位置づけ—大神楽から花祭りへ—	60
	石造、レンガ建造物の劣化にかかわる材料物性の研究	61
	宋元時代の江南仏教世界と舶載仏画	62
	壁画顔料の現地非破壊分析法に関する研究	63
奨 励 研 究 (A)	菊池容斎についての基礎的研究	64
	可搬型分析機器を用いた未調査文化財の材質調査に関する研究	65

### 凡 例

課題名・目的・成果・研究組織の順に配列した。

研究代表者には○印をつけた。

必要に応じて備考をつけた。

### 3. 中長期研究計画

#### 日本における美術史学の成立と展開

(5年計画の第4年次)

##### 目 的

西洋近代の学を範として明治20年前後にはじまった日本の美術史学は、近代国家として西洋に認知されようとする国情を背景として、国家的制度や機構と密接な関係を維持し、日本の文化的ナショナルアイデンティティの構築に寄与してきた。今日、一般的に用いられる美術史の言葉や思考が、こうした美術史学の歴史のなかで形成されてきたことは、美術史研究者が広く認識すべき問題となっている。

本研究はこのような問題意識にたち、明治以来の美術史学の歴史を振り返ることを通じて、美術史学の今日的な課題と可能性を問い直すことを目的とする。

##### 成 果

本研究は美術に関する言説の歴史を振り返ることにもつながるため、基礎となる資料の収集とその整理が必要となる。今年度は昨年度に引き続き、日本において「美術」という外来の概念の確立以前に制作された物品が、「美術」として位置づけられる過程を明らかにするため、明治期博覧会等に出品された「古美術品」の出品目録に注目し、東北地方で開催された明治期博覧会についての現地調査を行った。

本研究に関わる研究会としては、美術・美術史学の制度をめぐる問題についてより多角的に検討すべく、とくに考古学の分野をめぐる研究者を招へいし、研究会と総合討議を行った。

##### 研究組織

○田中 淳、中野 照男、山梨絵美子、岡田 健、塩谷 純（以上、美術部）

米倉 迪夫、鈴木 廣之、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英（以上、情報資料部）



# 日本における外来の美術の受容についての研究

(5年計画の第3年次)

## 目 的

日本には、長い歴史の中でもたらされた中国や朝鮮、欧米の美術品が数多くあるが、一部の作品を除いては、日本にもたらされた経緯など、具体的な状況について明らかにされていないことが多い。またそれらが日本でどのように受け入れられてきたかを時代を追って跡づける作業も不足している。本研究は、そのような中国・朝鮮・欧米の美術の請来と日本での受容の様相を具体的に把握し、文化的な背景を含めて研究しようとするものである。日本に所在する中国・朝鮮・欧米の美術が本来どのような人々によって、いかなる動機で日本にもたらされたかを具体的に把握し、さらに日本における収蔵、流通、鑑賞の歴史を明らかにするとともに、従来不十分であった作品の伝来に関する基礎データを整備する。

## 成 果

本年度は、基本的な資料を収集するとともに、研究会の開催を通じてテーマの共有化をはかった。

### (1) 研究会の開催

- 4月26日 田中淳(美術部)『近代日本美術史』研究における『受容』の諸問題
- 5月24日 山梨絵美子(美術部)「黒田清輝とラファエル・コラン」
- 6月21日 岡田健(美術部)「二つの仏陀イメージ—優填王像と阿育王像」
- 6月28日 研究計画についての討議
- 10月18日 勝木言一郎(情報資料部)「中央アジア探検隊と敦煌学」
- 11月8日 岡田健(美術部)「龍門石窟研究史」  
松村茂樹(大妻女子大学)「六朝書道の日本への受容について」
- 12月20日 研究計画についての討議
- 2月28日 井手誠之輔(情報資料部)「宋風受容に関する言説をめぐって」  
江川佳秀(徳島県立近代美術館)「美術家とパトロン 福島繁太郎と薩摩治郎八—パリで開かれたふたつの日本人展」
- 3月14日 ミニシンポジウム「水陸画の受容」  
井手誠之輔(情報資料部)「東銭湖の四時水陸道場と大徳寺伝来の五百羅漢図」  
中野照男(美術部)「元末・明の水陸画—毘盧寺と宝寧寺の画題—」  
山本泰一(徳川美術館)「愛知県の水陸画と考えられる作品」  
鷹巣純(愛知教育大学)「日本に請来された水陸画」  
総合討議 司会：津田徹英(情報資料部)

### (2) 基礎資料の収集

中世における日中交流の実態を明らかにする第一段階として、『禅林墨蹟』『続禅林墨蹟』に掲載された墨蹟をはじめ、常盤山文庫、正木美術館、根津美術館所蔵の墨蹟資料について、画像と基礎データのデータベースを作成した。(井手、島尾)

また、当所に保管されている林忠正宛書簡772通の読み起こしを完了し、データベース化を行い、年譜、解説、索引を伴った『林忠正宛書簡集』の編集に着手した。(山梨)

継続的に行っている黒田清輝に関する調査研究の一環として、フランス留学中の制作地のひとつである、ブルターニュ半島のブレア島を平成12年11月に現地調査し、当地の資料を収集するとともに、画家の足どりを調査した。(田中)

中世における日中交流についての調査研究の一環として、多くの日本僧が訪れた中国浙江省杭州・西湖の寺院・仏教遺跡等の現地調査を行った。(島尾)

(3) 成果の発表

井手誠之輔『日本の宋元仏画』（日本の美術 No.418 至文堂 2001.3）

山梨絵美子「明治期の洋画界における林忠正の位置づけをめぐる」『ふたつの『林忠正蒐集西洋絵画図録』について』（『林忠正コレクション』別冊 ゆまに書房 2000.9）

研究組織

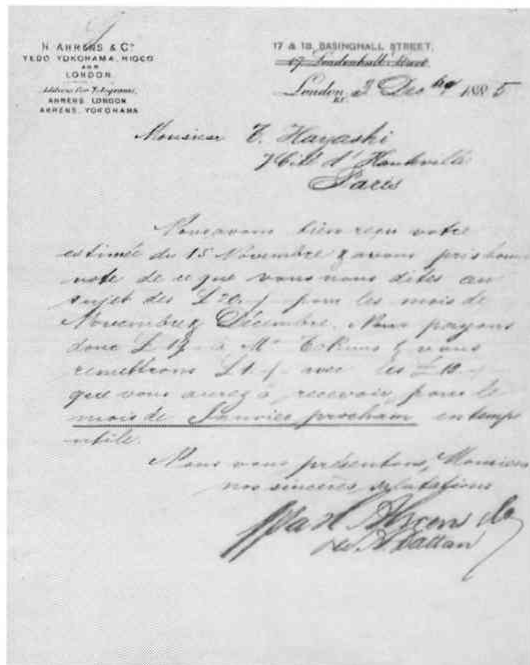
○中野 照男、田中 淳、山梨絵美子、岡田 健、塩谷 純（以上、美術部）、  
米倉 迪夫、鈴木 廣之、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英（以上、情報資料部）

備考

一部調査研究等特別推進経費

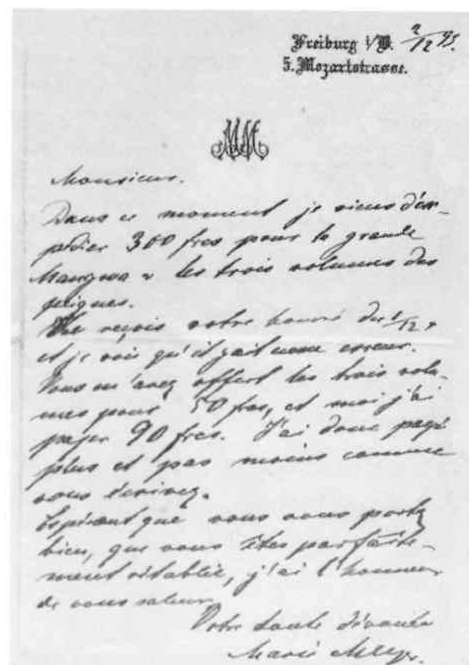


ブレア島の街並み



林忠正宛書簡

1885年12月3日 アーレンス商会より



1893年12月2日 マリー・メイヤーより

## 美術に関する基礎資料の研究

—中国日本拓本資料・室町時代水墨画資料・未公開仏教美術原典史料・指定関係文書—

(5年計画の第3年次)

### 目 的

- (1) 中国・日本拓本資料の整理・研究、研究所所有の中国拓本資料約3,000枚について点検・整理と目録化を行う。
- (2) 室町水墨画に関する基礎資料の調査研究
- (3) 仏教美術史に関連する文献資料の原典史料の調査研究
- (4) 国宝重文指定関係等文書の整理

### 成 果

#### (1) 拓本資料の点検整理

東京国立文化財研究所には、明治・大正期の美術史家らが収集した中国・朝鮮・日本の金石文・工芸品等に関する拓本（一部模写）が所蔵されている。これらはこれまでも数次の点検作業を経て約550袋分が整理されていたが、今回は全拓本についての調査カードを作成し、貴重な美術資料として活用するための方法を検討している。

本年度までの調査によって、730袋についての整理作業が完了した。その内訳は、龍門石窟造像銘約2,000枚、その他の資料が約3,000枚にのぼる。

龍門石窟造像銘2,000枚については、『龍門石窟の研究』（東方文化研究所、1941年）および『龍門石窟碑刻題記彙録』（龍門石窟研究所編、1998年）所載の銘文に関するデータ、『龍門石窟総録』（龍門石窟研究所編、1999年）の内容との照合作業に着手し、『龍門石窟碑刻題記彙録』との照合が完了した。この作業によって、龍門石窟研究の基本データが整備されるものとする。

#### (2) 室町時代水墨画資料

本年度は、拙宗等揚筆「山水図」雪舟筆「天橋立図」（京都国立博物館）、拙宗等揚筆「山水図」（正木美術館）、雪舟筆「倣高克恭山水図巻」「倣李唐牧牛図」（山口県立美術館）、雪舟筆「山水長巻」伝雲谷等顔筆「山水長巻模本」（毛利博物館）、伝雪舟筆「山水図」狩野古信筆「山水長巻模本」（東京国立博物館）等の調査を行い、雪舟画に関する基礎データを収集した。

#### (3) 仏教美術史に関連する文献資料の原典史料の調査研究

未翻刻の仏教美術史料、ならびに、活字化されてはいるが内容的に改めて原本との照合が必要と思われる重要史料について、本年度は以下の内容で調査を行った。

東寺観智院金剛藏聖教調査

『五大虚空蔵様』

東寺観智院/五大虚空蔵堂「勧進帳」

『禅林寺請来目録』



雪舟筆 倣高克恭山水図巻 山口県立美術館

#### (4) 国宝重文指定関係等文書の整理

情報資料部に保管されている大正7年から昭和38年までの国宝、特別保護建造物、重要文化財の指定関係及び修理関係の文書類合計366件の整理を行い、完了した。



狩野古信筆 山水長巻模写 東京国立博物館

### 研究組織

○岡田 健(1)(3)(4) (美術部)、島尾 新(2)、井手誠之輔(2)、津田 徹英(3) (以上、情報資料部)

## 木彫仏像の調査研究

(5年計画の第2年次)

### 目 的

木を用いた仏像は、良質の木材を産した日本の風土とも調和して、多彩な発展をとげた。木彫仏像に関する研究はすでに多年の蓄積によって大きな成果をあげているが、なお重要作品の多くについて、その詳細な調査研究が課題として残されている。同時に、飛鳥時代以来およそ鎌倉時代に至るまでの間、日本へもたらされ、日本の木彫に多大な影響を与えた中国の木彫像についての系統的な研究も進められるべきである。とくに初期の作品においては、日本製・中国製の判別に課題を残すものさえある。本研究はそれらの中国木彫仏像および平安時代の重要作品に焦点を当て、日本における木彫仏像発展の状況を把握しようとするものである。

### 成 果

本年度は以下の作品の調査・撮影を行った。

- (1) 京都・福田寺 伝釈迦如来立像
- (2) 京都・福田寺 地藏菩薩立像
- (3) 京都・大將軍八神社 神像群
- (4) 京都・行住院 宝冠阿弥陀如来坐像
- (5) 京都国立博物館（東寺旧蔵）十二天面

### 研究組織

○岡田 健（美術部）、津田 徹英（情報資料部）



京都・福田寺 伝釈迦如来立像



京都・福田寺 地藏菩薩立像



# 昭和期の美術団体、内外博覧会に出品された作品及び作家の研究

(4年計画の第1年次)

## 目 的

日本近代美術史研究は学会、美術館等を中心に拡大し、かつ多様化してきており、実証的調査研究に基づく作家、作品の史的位置づけの再検討が求められている。本研究は個々の作家、作品について調査研究を行うとともに、美術団体・展覧会活動・美術雑誌等の基礎資料の収集、データベース構築を目的とし、前記の状況に寄与しようとするものである。

## 成 果

本研究は、昨年度までの研究計画としてあげていた「明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に出品された作品およびその作家の研究」を継続し、またその成果のとりまとめとともに、「昭和期」に時代を設定した研究をおこなった。そのため、本年度は、下記の5項目にわたる研究とその成果をあげることができた。

- (1) 研究所が保管する、明治期に日仏間で活動した美術商林忠正宛の書簡(フランス語、772通)の読みおこし作業が、小山ブリジット(武蔵大学)、馬淵明子(日本女子大学)の研究協力をあおぎ、完了した。その成果報告を『林忠正宛書簡集』として、次年度6月の刊行をめざして、編集作業をすすめた。
- (2) 平成11年度に第1回をおこなった「大正期美術展覧会等の基礎資料集成のための研究協議会」の第2回を下記の専門家をまじえて、平成13年2月23日におこなった。そこで、これまで収集し、データ化した資料の検討とその成果報告である『大正期美術展覧会出品目録』の内容と構成について、最終的なとりまとめと今後の課題について協議をおこなった。

他機関からの出席者：

尾崎正明(東京国立近代美術館)

島田康寛(京都国立近代美術館)

三木哲夫(国立国際美術館)

菊屋吉生(山口大学教育学部)

前川公秀(佐倉市立美術館)

- (3) 大正期から昭和期にかけて、多岐にわたり活動した美術家木村荘八の未公開の「日記」が発見され(小杉放庵記念日光美術館所蔵)、美術ばかりでなく、文学、芸能、演劇、風俗にわたる記録として資料的に価値の高いものであることから、下記にあげる各分野の研究者の参加をあおぎ、「木村荘八「日記」研究協議会」を発足させ、今年度は7月5日、平成13年1月23日の2回にわたりおこなった。

出席者：

福島さとみ(調布市立武者小路実篤記念館 日本近代文学)

伊藤 陽子(同)

横山 泰子(法政大学 芸能史)

児玉 竜一(芸能部研究員)

田中 正史(小杉放庵記念日光美術館)

森 登(中央公論美術出版)

青木 茂(美術部調査員)

- (4) 個人で収集し、研究者への公開をつづけられてこられた笹木繁男氏主宰「現代美術資料センター」所蔵資料の寄贈をうけ、その資料の整理と寄贈目録の編集作業をすすめた。寄贈資料の内訳は、展覧会カタログ約3,100冊、作家・画廊等のファイル825件、単行図書、雑誌約1,000冊であり、当研究所が所蔵する資料の補完作業もあわせてすすめた。
- (5) 黒田清輝の作品と黒田記念室をもつ研究所として、より深い研究情報を提供することを目的に、インターネット・ホームページ上で、「黒田記念館」を設け、公開しているが、今年度は、黒田のフランス留学中に滞在したグ

レー・シュル・ロワン市での現地調査の報告として「グレー紀行」を作成し、公開した。

# 研究組織

○田中 淳、山梨絵美子、塩谷 純（以上、美術部）



構造社第六回美術展覧會パンフレット



第二回旺玄社展出品目録

## 「翁」の技法集成

(7年計画の第7年次)

### 目 的

「翁」は、現在、能楽師が伝承し上演する演目の中で最も古い芸態を残している。しかし従来、秘事として扱われたため譜は公開されず、流儀差も大きいので技法の全容をとらえた研究は行われていない。本研究では、全役籍全流儀の譜を収集し、比較総合して「翁」の全体像を把握することを目的とする。

### 成 果

今年度は、兵庫県上鴨川住吉神社に伝えられる民俗芸能の「翁舞」の調査を行い、能楽の「翁」とは異なる語りについて考察した。また、能の中の異式演出についての歴史的な考察も行った。成果は第31回芸能部公開学術講座で発表した。

### 研究組織

○高桑いづみ、中村 茂子、小田 幸子(以上、芸能部)



金春流の異式演出  
十二月往来の上演風景



上鴨川住吉神社の神事舞  
公開学術講座での上演風景

# 日本伝統楽器の変遷研究

(6年計画の第1年次)

## 目 的

日本では縄文時代から多数の楽器が造られてきた。そのうちのかかなりの数が各地の博物館や有力な寺社に所蔵されているが、その全貌が正確に把握されているとはいいがたく、一部の楽器をのぞいては精密な調査も行われていない。本研究では博物館での所蔵状況についてデータ化をおこない、そのなかの主要な楽器について時代により、またジャンルによって形態がどのように変化するか、調査研究をおこなう。

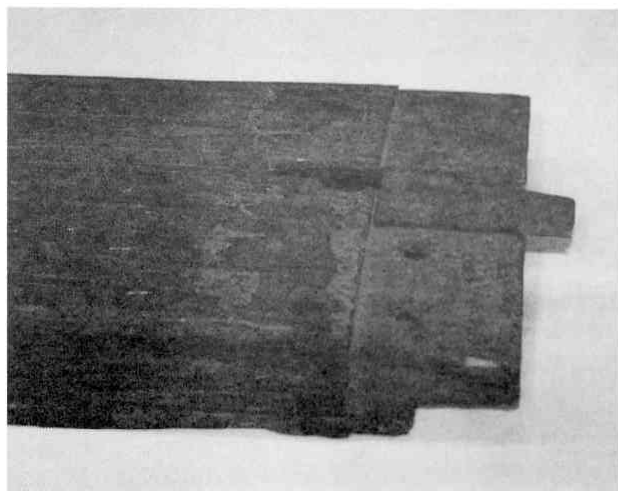
## 成 果

春日大社若宮の御神宝の中から、正倉院蔵の和琴に近い形態を有し、平安時代後期の作と目される和琴が発見された。この和琴の製作年代や特性を明確にするため、各地の博物館に所蔵される和琴の調査をおこない、現在に至る和琴の形態が南北朝時代まで溯りうることを解明した。成果は東洋音楽学会定例研究会において、シンポジウム形式で発表した。

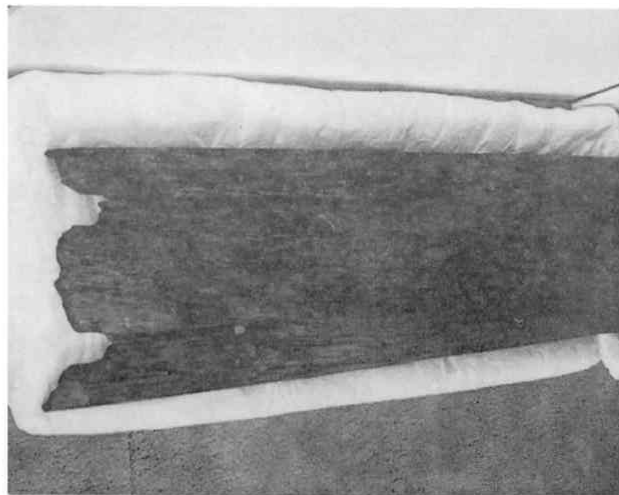
## 研究組織

○高桑いづみ、野川美穂子、高橋 美都（京都市立芸術大学日本伝統音楽センター）

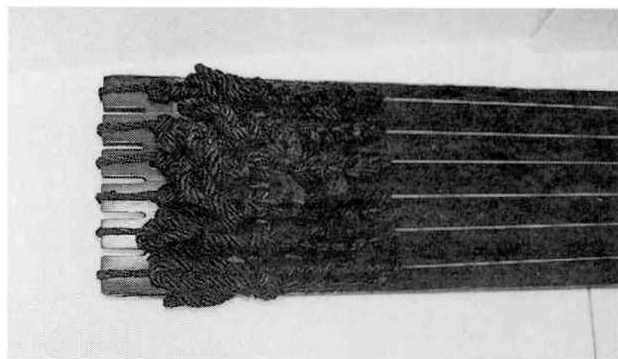
## 和琴の尾部の変遷



1 春日大社蔵和琴の尾部（切れ込みのない古い形態）



2 鳥羽離宮後より出土された楽器の尾部



3 彦根城博物館蔵和琴「葵」（南北時代）の尾部（切れ込みのある現行の形態）



4 男衾三郎絵巻（鎌倉時代）に描かれた和琴の絵（切れ込みの形が現行と異なる）



# 無形文化財・無形民俗文化財の伝承に関する研究

(5年計画の第3年次)

## 目 的

古典芸能や民俗芸能については、伝承の困難さが指摘されているところであるが、個々の芸能の変遷の歴史や現状などについての調査研究、資料作成を通じて、伝統芸能の継承のあり方を考察する。

## 成 果

### (1) 民俗芸能の伝承に関する研究(星野、中村)

- 1) 前年に引き続き盆踊り、念仏踊りの上演場所について、徳島県美馬郡貞光町の「木屋堂」と「川見堂」の現地調査を行った。また、お堂や神社拝殿の板敷きの床の上で踊る貴重な盆踊り、念仏踊りの伝承に関する資料を、徳島県、岡山県、鳥取県、京都府、岐阜県分について収集し、整理分析を行った。成果は、『芸能の科学』第29号に公表の予定である。
- 2) 愛知県北設楽軍に伝承される霜月神楽の一つ、花祭りに伝承する疫病神駆逐祈願と芸能構成、芸能の相互関係について調査研究を行った。成果は『芸能の科学』第29号に公表の予定である。
- 3) 民俗芸能用具の保存・修復・新調・活用の問題は、全国各地の伝承地が当面している課題である。その現状と問題点について、第3回目の民俗芸能研究協議会を催して研究討論を行い、成果を調査報告書としてとりまとめた。

### (2) 上方芸能の調査

- 1) 近世芸能研究の一環として、芸能部記録作成室において、上方落語の記録作成を行なった。上方落語には、「はめ物」とよばれる下座の鳴物をふんだんに用いた演題が多くあり、歌舞伎・浄瑠璃などとの関係がきわめて深い。今回は、桂吉朝氏による「軽業」「蛸芝居」の二席を撮影した。「軽業」は、小屋掛けの軽業見世物の様子を描き、今では失われた芸態を知る手がかりともなる演目である。「蛸芝居」は、幕末期の上方歌舞伎のお家騒動劇で描かれる様々な局面を、戯画化した芝居噺である。通常は見る事が出来ない、下座の演奏の様子も、あわせて撮影を行った。
- 2) 上方歌舞伎の製作に一貫して携わった中川芳三氏の聞き取り調査を行い、戦後、壊滅の危機に瀕した上方歌舞伎の状況を、裏方、下座音楽専従者らの現状とともに調査・研究を行った。また関係する私家版の文献等の調査によって、上方歌舞伎周辺の関係者の動向を研究した。

## 研究組織

○星野 紘、鎌倉 恵子、中村 茂子、児玉 竜一(以上、芸能部)

## 備 考

一部調査研究等特別推進経費

# 文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究—大型資料の保存

（6年計画の第1年次）

## 目 的

社寺仏閣に納められた文化財や移築民家などで公開されている資料は、博物館・美術館など文化財の公開を目的として建設・運営されている単独の施設とは異なる状況で保管・管理されている。このように公開活用状況が異なり、また施設設備が不十分なため外界の影響を受けやすい環境下で保存されている文化財に対して適切な保存対策を講じるためには、その保存環境を的確に評価できる計測手法を確立する必要がある。

本研究では、従来保存科学部が行ってきた博物館等文化財公開施設の環境調査手法の研究成果を基に、より厳しい条件下での保存環境調査手法の確立のための研究を行う。また、文化財の劣化状況を的確に評価するため文化財材料の物性調査手法の研究を行い、併せて、適切な保存対策の構築に資する。

## 成 果

### (1) 文化財の劣化状況および環境調査法の研究

#### イ 温湿度変動評価の限界の検証

山車や鉾、曳山のように、年に一度の祭礼の際には市内を練り歩き、それ以外の時期は博物館や山倉などに納められ保管される資料がある。公開活用としてもっとも条件の厳しい、保存の難しい資料の一つであるが、条件の大きく異なる空間・使用条件を行き来する資料の保存環境を把握し評価するため、研究対象として選定した。本年度は長浜市曳山博物館収蔵庫、大阪市住まいのミュージアム展示室および山倉の保管環境を比較するための温湿度分布を計測した。

#### ロ 凍害調査手法の確立

寒冷地など厳しい環境条件の下では、材料の凍結状況、水分分布、水分移動の把握が保存対策構築のために重要である。本年度は北海道開拓記念館の歴史的建造物など寒冷地の文化財を研究対象として調査を行った。その結果、特に、漆喰壁でも石壁でも南面の方が北面よりも顕著な劣化の見られることが明らかになった。また、モデル実験により、土壁の凍結劣化が生じる温度条件、水分条件を明らかにすることができた。

#### ハ 空気環境調査法の限界の検証

変色試験紙は、新設博物館内の空気環境評価に用いられてきたものであるが、既存の施設や外界の影響の大きな空間に対して有効であるか、検討する必要がある。そのため今年度は、変色試験紙の各種室内汚染ガスに対する吸着特性を検討した。その結果、アンモニアガスに対しては吸着速度がいくらか遅く、また十分な吸着量があることがわかったが、酢酸ガスに対しては吸着速度が速くすぐに飽和することがわかった。また新たに、大気汚染ガスである窒素酸化物に対しても、微量ではあるが放置時間に対してリニアな吸着特性を持っていることがわかった。

### (2) 研究会の開催

平成13年3月28日（水）「壁画および土壁の保存に関する研究会」

### (3) まとめ

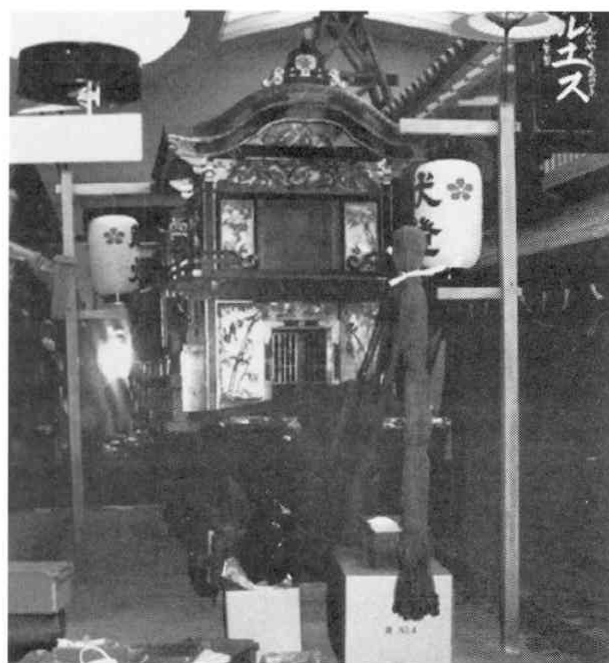
本年度の成果から、特に曳山や船など高さのある大型木製資料の保存に、従来の研究手法をそのままあてはめられないことが明らかとなった。そのため次年度より本テーマを組み替えて、大空間における大型資料の保存を主題に研究を進めることとした。

## 研究組織

○三浦 定俊、石崎 武志、佐野 千絵、平尾 良光、早川 泰弘、木川 りか（以上、保存科学部）、  
小林 幸雄（北海道開拓記念館）、秀平 文忠（長浜市曳山博物館）



曳山を収蔵している山蔵の全景



住まいのミュージアムでの曳舟の展示



北海道開拓記念館（開拓の村）の旧小樽新聞社の建物



同 石壁南面の凍害による剝離と剝落

# 無公害な文化財生物劣化防除法の研究

(5年計画の第4年次)

## 目 的

オゾン層の保護のため、かねてより文化財燻蒸ガスとして広範に用いられてきた臭化メチルの全廃時期が2004年末に前倒しとなることが決まり、これに変わる方法が以前にも増して緊急に求められている。本研究では、化学物質を主とする従来の方**法**に変わり、文化財材質にも影響が少なく環境や人体への影響も考慮した文化財生物劣化防除法の検討・開発を目指し、具体的な対処法の確立を目指すものである。

## 成 果

### (1) 新たな虫害防除法に関する基礎研究

低酸素濃度殺虫法、二酸化炭素による殺虫法について、具体的な処理仕様案をさらに充実させ、学会等においてその成果を発表した。また、特に二酸化炭素による殺虫法については、(財)元興寺文化財研究所等との共同研究により現場で処理を行い、共同で処理仕様を策定した。さらに、欧米・東南アジアなどで書籍などの収蔵品の殺虫法として採用されている低温処理法についても、日本の文化財への適用の可能性を探るため、各種の文化財材質に及ぶ物理的な影響についてもさらに実験を進め、その成果を学会等で発表した。また、新たな防虫剤、防黴剤などの化学物質が文化財材質に与える影響についても評価試験を継続している。

### (2) 臭化メチル燻蒸の代替法の整理

低酸素濃度処理、二酸化炭素処理、温度処理、新規燻蒸剤や防虫・防黴剤などについて、各方法のおおまかな使い分けを一覧として整理し、資料として「文化財の生物被害防止に関する日常管理の手引き」(文化庁文化財部、平成13年3月)をはじめ、各種の機関誌などに提供した。IPMのプログラムを策定するうえでの基礎資料として活用できるよう、今後もデータの更新を行う予定である。

### (3) 研究会の開催

本年度は『寺社・歴史的建造物における生物被害対策』、『文化財展示収蔵施設における害虫モニタリングの実践と応用』を主題に2回の研究会を行い、各研究者と成果交流し情報の普及に努めた。(各回参加者約40名、約20名)

## 研究組織

○三浦 定俊、木川 りか、山野 勝次、佐野 千絵、石崎 武志(以上、保存科学部)、増田 勝彦(修復技術部)

## 備 考

一部調査研究等特別推進経費



二酸化炭素による文化財の殺虫試験  
(財)元興寺文化財研究所、液化炭酸株式会社との共同研究)

# 東アジア地域における金属文化財の自然科学的研究

(3年計画の第1年次)

## 目 的

日本文化を東アジア地域の中でとらえ、中国、朝鮮半島、日本という文化の流れとして、考古学的資料、仏教関係資料などのなかで金属材料の変遷という側面から自然科学的な手法を用いて解析する。

## 成 果

- (1) 日本の資料 弥生時代資料を主として約300点を測定した。
- (2) 朝鮮半島資料 湖巖美術館等の協力を得て、約50点の資料を測定した。
- (3) 中国資料 東京国立博物館所蔵品など約60点を測定した。

科学研究費補助金の中の出版助成金を得て、今までに集めた東アジア地域における青銅製品の科学的測定値(化学組成・鉛同位体比)に関して『古代東アジアにおける青銅の流通』(P350頁、図版150以上 鶴山堂)という公刊本としてまとめた。

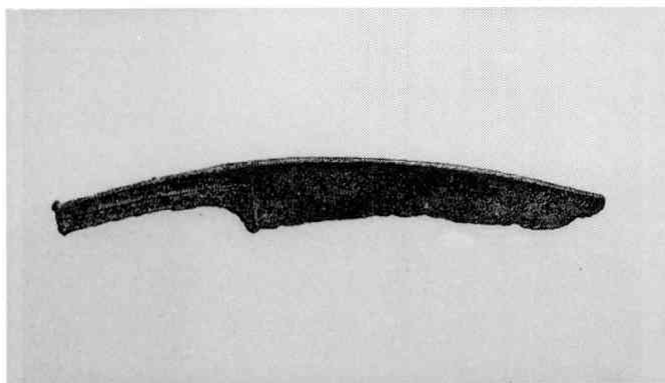
なお、本研究は前年からの研究を引き継ぎ、日本の古墳時代資料、奈良時代の仏教関係資料を集めることに努力した。幾つかの資料を集めることができたので、来年度に測定とまとめを行う予定である。

## 研究組織

○平尾 良光、早川 泰弘(以上、保存科学部)、金 正耀(中国社会科学院世界宗教研究所)、  
楊 秀麗(中国香港中文大学)、李 午憲(韓国湖巖美術館保存修復研究所)

## 備 考

本研究の一部には科学研究費補助金基盤研究一般『早期中国青銅器の原料産地に関する研究』を含む。



山形県三崎山で発見された縄文時代後期の青銅製刀子  
鉛同位体比測定から、殷墟出土資料と類似の値を示した。



# 文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発研究

(5年計画の第5年次)

## 目 的

近年の酸性雨の発生など周辺環境の悪化によって文化財は様々な影響を受けている。また、海浜など過酷な条件下において周辺環境からの影響が文化財に及ぼす効果は無視できない。そのため、屋外の文化財周辺の環境を観測・評価し、その影響を軽減するための材料と技法を開発することをめざしている。

## 成 果

日光磨崖仏群、厳島神社、日光社寺群の3地域において環境観測と種々の修復材料、技法の開発・試験を行っている。

日光磨崖仏群においては、前年度に引き続き、温度・湿度・雨量・湧水量・日射量・亀裂変化・生物観測などを継続し、次の修復事業の基礎データの収集をしている。また、岩石表面の改質や生物制御のために、岩体に種々の材料を塗布することによってその効果を評価している。

厳島神社においては、漆を用いた建造物の耐候性を向上させるために、漆を原料とする耐候性の高い塗料の開発や塗装方法の研究を行い、現地暴露実験を行ってきた。今年度は、高舞台の修復においてこの材料を実際に使用し、今後、経過観察を継続する。また、木造建造物の彩色に用いられた丹が、海水と日光の影響によって変色することが明らかになった。この変色を防止するために丹塗り彩色表面の改質などによる変色防止方法の開発を行っている。今年度は、そのうちのいくつかの仕様について、厳島神社西回廊の塗装を用いて実験中である。

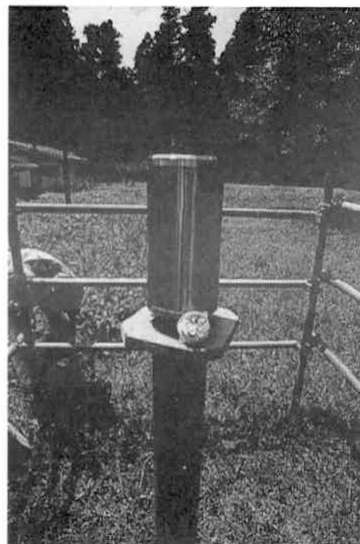
日光地区では、漆塗膜上に発生する変色の原因究明を行った。胡粉彩色上の黴発生と環境との関連調査を行い、環境制御による対策立案の基礎資料を得た。温度、湿度、雨量などの通年観測を行い、継続的な環境観測システムの構築に向けた基礎資料を得ることができた。また、日光市内50カ所の窒素酸化物を測定し、自動車排出ガス測定局のデータと比較して日光市内広域の大気汚染状況を推定した。

## 研究組織

○川野邊 渉、加藤 寛、早川 典子、井口 智子、高橋 千恵（以上、修復技術部）、  
朽津 信明（国際文化財保存修復協力センター）



日光磨崖仏古園地区でのデジタルデータの収録



日光本宮裏気象観測ステーション

# 近代の文化遺産の修復に関する調査研究

(5年計画の第2年次)

## 目 的

近代の文化遺産は、従来の文化財とは、その規模、材質、製造方法などに大きな違いがあるために、保存修復方法や材料に大きな違いがある。近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型煉瓦建造物の劣化機構の究明とその修復方法立案、航空機、船舶など大型機械類の修復保存上の問題点とその解決方法の究明などを目指している。

## 成 果

大型の煉瓦建造物の劣化状況調査と劣化原因究明及びその修復材料と方法の提案の具体的な事例として取り上げてきた重要文化財旧下野煉化製造会社ホフマン窯は、今年度一部の修復事業が実施されることとなり、全体の微少変異測定を除きすべての観測項目を終了した。観測開始時に予測されたような地盤の不当沈下による変形は観測されず、その劣化原因は、主に、窯本体に用いられた材料に含まれる硫酸イオンと、煉瓦焼成時に燃料の石炭から発生し、窯本体に吸収された硫酸イオンの移動と塩類の析出の原因となった雨水の浸入であると推測された。その対策として、水分移動経路の異なるそれぞれの壁面において個々の樹脂処理試験を行い、塩類析出の軽減が観察されている。今回の一部修復事業によって、雨水対策が行われ、今まで明確でなかった内部構造とその材料が明らかにされることで今後の保存修復作業に大きな資料となることが期待される。

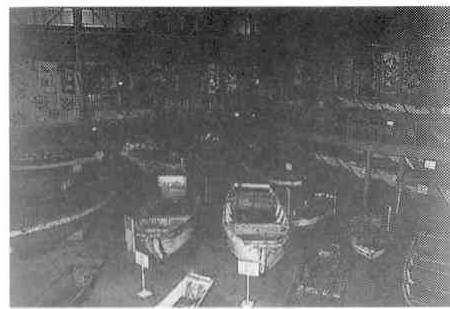
大型の機械類の保存修復に関する調査研究では、航空機の整備と保存対策について、航空自衛隊入間基地、靖国神社や日本航空整備工場などに保存されている機体の修復材料・方法などの調査と保存環境の測定を行った。また、船舶の保存修復に関しては、みちのく北方漁船博物館をはじめいくつかの博物館を調査した。さらに国内外6名の研究者を招き、船舶の保存に関する研究会を行った。

## 研究組織

○川野邊 渉、加藤 寛、早川 典子、井口 智子、高橋 千恵（以上、修復技術部）、  
朽津 信明（国際文化財保存修復協力センター）



「船航の保存と修復」(雲鷹丸の調査)



青森県みちのく北方漁船博物館

# 漆の加熱硬化のメカニズムに関する調査研究

(3年計画の第3年次)

## 目 的

指定建造物修理報告書に記載されている、建築金物に対する漆の焼付方法には数種類の仕様が見られる。漆の焼付技法は、いまだ具体的な調査が行われておらず、その効果や物性についても未知な分野といえる。すなわち、金属表面と漆膜との密着性や表面硬度などを高めるために行うか、または急速乾燥をさせるための利用であったかなど判然としないのが現状である。今年度は、3年計画の最終年として18世紀後半に輸出用として大量に作られた蒔絵ブラック（壁掛け）の復原を行い、銅板と漆塗装の実践的研究を行った。

## 成 果

1998（平成10）年度は、焼付漆を文化財に活用している3工房で、漆塗りおよび焼付方法などの調査を行い、条件によつての相違点を検討した。各工房での調査結果から、焼付手板を作成し、塗膜の硬度・光沢・色などの物性を試験した。さらに、漆の種類や焼付温度の違いによつて生じる、物性の変化についての検討を行った。漆の硬化速度は、焼付温度が高いほど短くなる相関を持つ。例えば、120℃では2時間を要する最高硬度が、270℃では10分に短縮される。文献上の焼付温度は120℃から記載があるが工房での調査では、表面温度が240～300℃であった。また、生漆と素黒目漆を鉄板に塗布し、付着性の試験をおこなった。その結果は、常温硬化（20℃）と高温硬化（240～300℃）で作成した手板では、生漆を270℃で焼き付けた塗膜がもっとも良好と評価した。

1999（平成11）年度は、120℃で4時間といった低温焼き付けを含む焼付漆の耐久性について実験を行い、結果について検討した。伝統的技法としての漆の焼き付けの理由は「常温乾燥では金属に対しては付着性が悪く、膜が剥がれてしまうため」であったが、実験の結果、耐久性試験では常温乾燥も含めたすべての焼き付け条件で剝離は起こらなかった。伝統的な焼き付け法は、炭火を使用していたために低温焼き付けを行えなかったが、焼付漆の耐候性に関する物性の状態は120℃4時間の焼き付けが最もふさわしい結果であった。これら実験で作成した手板は暴露実験を行い、検討材料とする。

2000（平成12）年は、前年までの研究結果をふまえて、18世紀後半の輸出漆器である蒔絵ブラックをもとに、銅板への焼付漆の耐候性や蒔絵、螺鈿などの伝統的装飾への影響を製作工程を追って復原を行い、暴露実験の成果とともに本研究のまとめとした。また、成果である蒔絵ブラックの復原についての報告は、平成13年度「保存科学」並びに「日本の美術」（至文堂）の誌上に掲載する。

## 研究組織

○加藤 寛（修復技術部）、宮田 聖子（漆芸修復家）

# 美術情報システムの研究

## ーデータの共有化を中心としてー

(12年計画の第12年次)

### 目 的

人文科学研究における学術データベースの構築例の増大と、パーソナルコンピュータの普及にともなう研究者個人によるデータ生産の日常化とが近年顕著である。一方、多様な目的・種類に有効利用できるデータベースの利用環境が十分に整備されているとはいえず、データの生産・利用に関する具体的なシステム像を多角的かつ総合的に検討することが強く求められている。本研究は、こうした視野に立ち、美術史の基礎資料のデータベース化と、広範な研究者による相互利用システムの確立を通じ、資料の共有化と研究支援環境の整備を具体化することを目的とする。

### 成 果

12年計画の最終年度における本年度の研究成果は、共有データの生産・蓄積については、これまでと同様、新たなデータの追加を行ったほか、パイロットシステムの構築については、新営庁舎における新システムの構築・運用にこれまでの成果が広く反映されている。

#### (1) 共有データの生産・蓄積

先年度までの研究をふまえ、美術史研究において共有化の望まれるデータの生産・蓄積を継続した。

##### 1) 文献・図書データ

定期刊行物所載の文献と所蔵図書データの inputs を継続。また新営建物への移転にともない、図書台帳と現有図書の照合作業を行った（約19,000冊）。新たに保存・修復技術および芸能関係の図書を書庫に一括して収蔵することになったため、その受け入れ準備を開始し、図書データの input 作業を進めた。

##### 2) 美術史研究資料

『日本美術年鑑』のデータ化を継続し、5年分5冊（昭和39年～昭和43年分）を完了した。

##### 3) 近現代美術基礎資料の所在調査ならびに収集

博覧会関係資料、美術団体出品目録、美術雑誌について、大阪府立中之島図書館、大阪府立図書館、奈良国立博物館、京都国立博物館において調査・収集を行った。

##### 4) 貴重雑誌・資料等のCD化

パリ万国博覧会、セントルイス万国博覧会、ウィーン万国博覧会資料のほか、雑誌『アトリエ』をCD化した。

##### 5) マイクロフィルムの複製

資料の保全をはかるため、所蔵マイクロフィルムの原本ボジのクリーニングを行うとともに、クリーニング済ボジから新規ネガを作成した。（180本）

##### 6) 博覧会・展覧会データベースの作成

明治期の地方博覧会関係出品目録、および大正期美術展覧会出品目録をデータ化した。

#### (2) パイロットシステムの構築

##### 1) データベースの運用・評価

定期刊行物所載文献データベースおよび所蔵図書データベースを継続的に運用中である。なお、所内イントラネットシステム上にSQLサーバーによる検索システムを構築し、前記データベースについて、所内ネットワーク上の各端末からブラウザで検索できるようにした。

##### 2) ローカルエリア・ネットワーク・システムの整備・運用・評価

新庁舎において1ギガビット光ケーブル幹線による高速ネットワークシステムを構築し、運用中である。所内の情報化を強化するため、所内スケジュール管理・文書管理・メーリングシステムを統括するソフト（サイボーズ）を導入した。

### 3) 画像データベース構築のための基礎実験

所内における画像管理検索システム導入のための基礎条件を検討中である。今後は、デジタル撮影の増加が見込まれ、画像の撮影から処理・管理までを一貫して行うルーチンを再検討している。

### 4) インターネット環境におけるホームページの運用・評価

情報資料部は、研究所全体に関わるページと黒田記念館のページを担当している。本年度は、英文ページの充実を図るため、美術部・情報資料部の国際シンポジウムを報告するページを作成し、黒田記念館のページに新たにグレー紀行を追加した（口絵参照）。なお、各部のページは自主的に更新されている。一日平均で約700件のアクセスがあった。

## (3) 「共有化」環境の検討

### 1) 「共有化」環境をめぐる諸問題についての研究会の開催

昭和初年の美術研究所創設時期に収集された朝鮮・満洲の文化財研究関係資料について、その整理・共有化の方法等をめぐり考古学・建築史関係の研究者5名を招聘し、協議会を開催した。

### 2) 文化庁を中心とする文化財情報ネットワークシステムへの対応

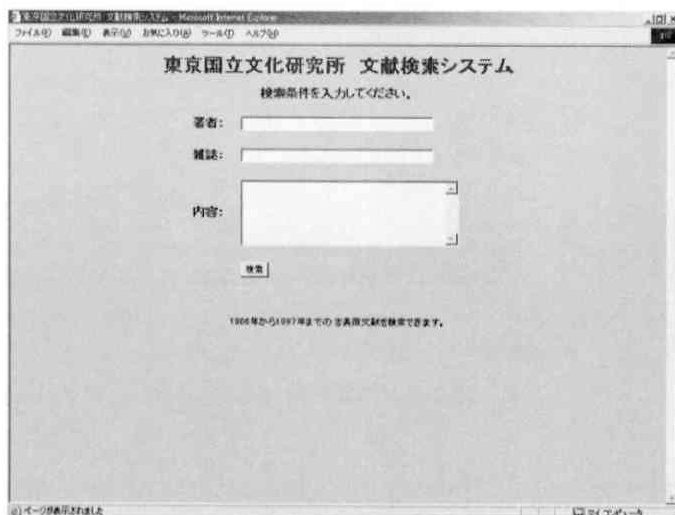
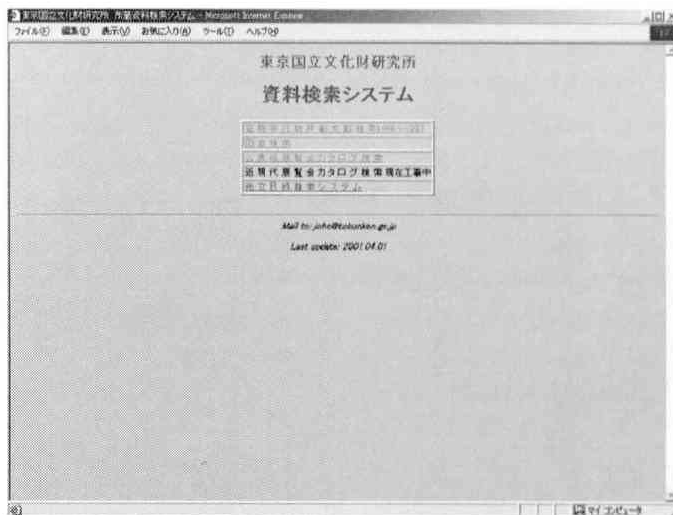
ホームページを通じて、所蔵資料の公開を行っている。

### 3) データベースの有効活用

学術情報センター、国文学研究資料館など学術利用を目的とする各種データベースの利用を通じて将来のインターネット環境における所蔵データベース公開に向けた基礎条件を検討するとともに、所内イントラネットシステム上にSQLサーバーを設けて所蔵資料の検索システムを試験的に運用している。インターネット上におけるデータベース公開に伴う技術的な問題はすでに解決されており、今後は、著作権等の諸問題について、所内のコンセンサスを形成する協議を重ねていく必要がある。

## 研究組織

○米倉 迪夫、鈴木 廣之、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英、中村 節子(以上、情報資料部)、田中 淳(美術部)、伊与田光宏(客員研究員)



資料閲覧室では所蔵資料のうち、美術関係の和漢書・展覧会カタログ・売立目録をブラウザで検索することができる。



## 文化財に関する研究文献情報の活用

(5年計画の第2年次)

### 目 的

過去10年ほどの間に、文化財に対する関心は著しく多様化した。現在では、人文科学・自然科学といった多分野の研究対象となり、日本にとどまらない地域的な広がりをもつようになった。文化財に関する研究を活性化し、関心の多様化に対応するためには「文献」という形で蓄積されてきた膨大な過去の成果物をいかに適切に活用できるかが第一に問われるが、従来型の分野縦割りの体制ではこれに対応できない。この研究では、美術工芸の分野を中心に、文献についての的確な情報を資料化し、多様な形態で流通をはかり、これによって、現状の課題に応えることを目的にしている。

### 成 果

本研究の第2年次にあたる本年度は、文献についての的確な情報を資料化するための基礎作業を前年度に引き続き行った。

- (1) 収集文献のデータ化作業を行うためのジャンル等の入力コードの改訂を昨年度に実施し、文献分類と検索の効率化を図ったが、今年度はその一環として現有図書・雑誌類の原本照合を進め、約19,000冊の作業を完了した。
- (2) また、近現代美術展覧会カタログについてはこれまで一切、データ化を行っていなかったが、本年度は美術部第二研究室の協力を得て、これらカタログ類の基本的な書誌データの入力に着手した。
- (3) 前年度に引き続き研究文献のCD化を行い、今年度は万国博覧会資料を中心にCD10枚(1,219コマ)を作成した。

なお、次年度に実施される本研究所の独立行政法人への移行に際し、情報資料部の改変が予定されているが、それにともない本研究は美術部に継承されることになっている。

### 研究組織

○鈴木 廣之、米倉 迪夫、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英、中村 節子(以上、情報資料部)、  
中野 照男(美術部)

# デジタル画像情報の多重化に関する研究

(5年計画の第2年次)

## 目 的

文化財から得られるX線写真、赤外写真、顕微鏡写真などの画像には、それぞれ質の異なる多様な情報が含まれている。従来、それらを総合して分析する作業、例えば顔料の推定などは、多くの部分を目視に頼ってきた。しかし、デジタル画像処理技術の進歩によって、個々の画像のもつ情報を重ね合わせて表示・解析するシステムを実現する基礎が整ってきた。本研究では、この技術を基礎に文化財から得られる情報を多重化して表示・解析する基礎的な条件について、いくつかの作品をサンプルとして具体的に考察する。

## 成 果

本年度は、前年度に引き続き「源氏物語絵巻」等の作品について蛍光撮影・赤外線撮影等による、また画像処理を加えての画像形成を行った。また本格的なデジタル撮影の時代を迎えるにあたって、これに対応するシステムを一部整備するとともに、デジタルカメラによる画像形成技術についての研究を行った。

### (1) デジタル画像形成システムの研究

デジタルカメラを用いての通常撮影・蛍光撮影・赤外線撮影等の実験を行い、十分に実用可能であることを確認し、またパーソナルコンピュータを接続しての現地での画像確認等、調査システムの変更についての検討とシミュレーションを行った。

### (2) 作品分析と特殊画像の形成

本年度は、五島美術館蔵の「源氏物語絵巻」四面について、各種の画像を形成し、特に「御法」では画像復元のシミュレーションを行った。また知恩院蔵「阿弥陀浄土図」、鏡神社蔵「楊柳観音像」、法華寺蔵「阿弥陀・二童子像」などの日本・中国・朝鮮の仏画について、有機色料の分布と鉱物性顔料との分離を示せるような画像形成を目指して研究を行った。これらの過程で、約430件の特殊画像を形成した。

### (3) システム整備

上記の研究を遂行するために、光学解像度 5,600×14,000dpiの高性能フラットベッドスキャナ、600万画素のワンショットタイプ・デジタルカメラ、制御用パーソナルコンピュータ等を導入し、通常の研究レベルでの使用に耐え得る入力・出力システムを整備した。

### (4) 四ツ切ガラス乾板のデータベース化

所蔵する四ツ切ガラス乾板のデジタル化と活用のための前段として、撮影対象等の基礎データをデータベース化した。

## 研究組織

○島尾 新、米倉 迪夫、鈴木 廣之、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英、城野 誠治(以上、情報資料部)、  
吉村 稔子(調査員)

## 国宝「源氏物語絵巻」の調査研究

### 目 的

徳川美術館・五島美術館が所蔵する「源氏物語絵巻」19面について、各種の光学的手法による調査・分析を行い、使用されている色料を明らかにすることを通じて、作画技法・作画過程また歴史的研究を行うための基礎データを形成する。

### 成 果

本年度は、主として五島美術館蔵の4面について、通常撮影・透過X線撮影・赤外線撮影・蛍光撮影・蛍光X線分析など、5回延べ8日間の調査を行った。その結果、顔等に用いられる白色顔料に、鉛・水銀を主成分とするもの、また組成不明の三種類の顔料があることが判明した。特に「夕霧」では鉛と水銀を主成分とする白色顔料が混在し、「鈴虫(二)」では画風が非常に近いとされている「柏木(三)」などとは異なる顔料が用いられていることが明らかとなった。また「御法」では、現在ではほとんど目視不可能な秋草の図様がかなり復原でき、有機色料をまじえた複雑な表現がなされていることが明らかとなった。

これらの成果については、五島美術館に於けるシンポジウム「科学の目で見る国宝源氏物語絵巻Ⅱ」(五島美術館・徳川美術館・東京国立文化財研究所共催、11月11日)において中間報告を行った。内容は下記の通り。

- 米倉 迪夫(情報資料部) 「私たちは何を知りたいのか？」
- 早川 泰弘(保存科学部) 「蛍光X線分析による顔料の同定」
- 城野 誠治(情報資料部) 「特殊撮影による画像再現と可能性」
- 島尾 新(情報資料部) 「絵作りのパターン」
- 四辻 秀紀(徳川美術館) 「水銀を含む白色顔料について」
- 名児耶 明(五島美術館) 「今回の分析結果からみた鈴虫と御法」

### 研究組織

- 米倉 迪夫、島尾 新、津田 徹英、城野 誠治(以上、情報資料部)、
- 三浦 定俊、早川 泰弘(以上、保存科学部)

# 世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集

(10年計画の第10年次)

## 目 的

世界の貴重な文化財の恒久的保存のため、世界の国々に対しその保存に協力する際には、各国の文化財の状況について調査し理解すべきであることは言うまでもないが、同時に、各国における文化財保護体制を把握し理解することが重要である。

本研究は、世界、特にアジア諸国の文化財の保存状態および文化財保護に関わる組織・機構・活動状況について、情報を収集し、さらにその問題点を検討することにより、より有効かつ円滑な文化財保存協力の実施へ貢献することを目的とする。

## 成 果

### 国内専門家からの情報収集

昨年度に引き続き、国際文化財保存修復研究会の参加者を中心とした専門家を対象にアンケート調査を行い、保存修復国際協力事業の相手国の実状について調査を行っている。また、文化財保存人材データベース（非公開）のデータ収集、整理を行ってデータの充実・更新をはかるとともに、情報交換のための人的ネットワーク作りを行っている。

### 海外の専門家からの情報収集

#### ・アジア文化財保存セミナーにおける調査

昨年度に引き続き、アジア文化財保存セミナーのプレプリントを順次整理し、国際文化財保存修復協力センターのホームページ上で公開している。

#### ・海外での現地調査

中国、タイ、パキスタン、ベトナム、カンボジア、ドイツなどにおいて遺跡や建造物、町並みなどの現地調査を行うとともに、専門家との協議を通じて、当該国の文化財保存に関する現状や問題点に関する情報を収集している。

また、ユネスコ、イクロムにおいて、世界各国の文化財保存に関わる法律の資料を収集した。

### その他

インターネットを利用して、世界各国の文化財保存に関わる機関や文化財関連の情報を掲載したホームページの情報を収集している。収集・整理した結果の一部は、国際文化財保存修復協力センターのホームページにおいて「文化財保存関連情報リンク集」として公開している。

### 研究組織

○斎藤 英俊、西浦 忠輝、松本 修自、朽津 信明、河原 脩、二神 葉子、野口 英雄、宗田 好史

(以上、国際文化財保存修復協力センター)

# 屋外石造（レンガ造）文化財の劣化と保存修復に関する調査研究〔国内〕

（10年計画の第10年次）

## 目 的

屋外の石造（レンガ造）文化財の保存は重要な課題の一つである。本研究は、屋外の石、レンガおよび関連材質造文化財の劣化原因、過程を地質学、岩石学、鉱物学的に検討するとともに、気象環境と劣化原因との因果関係を考察し、さらには実際の保存修復処置についての実験ならびに応用研究を行って、保存修復対策についての基礎的データを集積し、石やレンガ等の文化財の保存技術を向上させることによって、文化財保存に貢献することを目的とする。

## 成 果

洞窟、磨崖仏等の調査研究を行っているが、北海道、史跡・フゴッペ洞窟において特に詳細な調査を行った。フゴッペ洞窟では、藍藻をはじめとする生物の繁茂が問題となっており、これに対する対策を検討している。壁画面で観察された生物を用いて、与える光をさまざまに変えて室内実験を行い、その成長に関する照明の影響を検討したところ、以下の性質を持つことが明らかにされた。

1. 照度と照射時間を同様にした場合には、波長を制御することにより、成長を抑制できる。
2. 同様の光源を用い、照射時間が同様であれば、照度が低ければ低いほど成長は抑制できる。
3. 照射時間を十分に短くすれば（例えば一日あたり一時間の照射とする）、照度に関わらず成長はほぼ抑制できる。

以上のことから、今後の公開環境に関しては、照射時間になるべく短くなるようにし（一日あたり4時間以内が目安）、照度をなるべく低く抑え（20ルクス以下が目安）、それでも問題がある場合には波長制御光を用いるという方向で対応することが好ましいと考察された。

長崎県、重文・幸橋は、1702年に平戸湾近くの河口に構築された石造単アーチ橋で、1980～83年に全面解体修理が行われた。この際、海水の影響による塩類風化により劣化したアーチリングストーン（迫石）を、撥水性シリコーン樹脂の浸漬含浸により強化、防水処理し、再使用した。樹脂処理後約20年が経過した2000年3月に、石材の状態についての詳細な調査を行った。その結果、新たな変化は認められず、20年前の処理直後の状態を維持していることが確認された。塩水の河口に架けられた石橋の石材を、完全浸漬法で樹脂含浸処理して再利用したというのは、幸橋が唯一の例である。石材の樹脂処理効果を検討、考察する上で、長期にわたって調査を続けるべき貴重な事例である。

## 研究組織

○西浦 忠輝、朽津 信明（以上、国際文化財保存修復協力センター）、石崎 武志（保存科学部）、  
渡辺 邦夫、尾崎 哲二（以上、埼玉大学）、三田 直樹（地質調査所）、大石不二夫（神奈川大学）



北海道、史跡・フゴッペ洞窟



長崎県、重文・幸橋



# 屋外石造（レンガ造）文化財の劣化と保存修復に関する調査研究〔海外〕

（10年計画の第10年次）

## 目 的

屋外石造（レンガ造）文化財は建造物、遺跡等世界の主要な文化財であるが、その多くが現在崩壊の危機に瀕しており、保存対策の策定が急務である。本研究は、海外の屋外石造、レンガ造文化財の劣化原因、過程を地質学、岩石学、鉱物学的に検討するとともに、気象環境と劣化原因との因果関係を考察し、さらには実際の保存修復処置についての実験ならびに応用研究を行って、保存修復対策についての基礎的データを集積し、石造ならびにレンガ造文化財の保存技術を向上させることによって、世界の文化財保存協力に貢献することを目的とする。

## 成 果

早稲田大学古代エジプト調査隊（隊長：吉村作治教授）により1991年から発掘調査が行われているアブ・シール南丘陵頂部遺跡では、第19王朝ラメセスの王子カエムワセト（BC13世紀）に所属する石造建造物遺構が発掘され、また第18王朝に遡る日乾煉瓦遺構が発掘された。これらの建造物遺構の保存修復計画策定に協力するための現地調査を行った。石灰岩からなる石造建造物遺構は、丘陵頂部という地理的条件と気象条件等により、現状保存は困難と判断された。遺構の崩壊を阻止し保存するためには、何らかの補填、補強が必要であり、発掘された当初石材を利用する方法、新石材を用いる方法、石灰岩以外の材料（焼成煉瓦等）を応用する方法などが考えられる。全体的な基礎調査を行うとともに、自然環境条件を把握するため、無電源（電池稼動）自動環境計測システムを設置し、計測を行っている。

ユネスコ日本信託基金による「ガンダーラ仏教遺跡の保存修復事業」は本年度より第2期に入り、4年計画でのラニガト遺跡の本格的な保存修復事業が開始された。この国際協力事業に対しては、第1期より技術協力を行っている。保存修復事業の対象となるラニガト遺跡は、パキスタン・北西辺境州ブネル県にあり、ガンダーラ地域でも屈指の規模を持つ仏教寺院遺跡で、年代はAD. 1～6世紀中頃とされている。第1期では、粘土を応用した防水保存処理（キャッピング）の現地実験と試験施工を行い、大きな成果を得た。本年度は、ストゥッコ像の処置、キャッピングを行いつつ、遺跡全体の保存・修復・整備の具体的な方法についての詳細な調査を行った。現地に無電源（電池稼動）自動環境計測システムを設置し、温度、湿度、風向、風速、雨量の計測を行っている。なお、本研究成果の一部を、シドニー（オーストラリア）で開催されたIIC（国際文化財保存学会）大会で発表した。

カンボジア国アンコール遺跡群の環境と劣化現象ならびに保存修復対策に関する調査を行った。また、今後の研究協力に向けての協議を、カンボジア側のカウンターパートであるカンボジア政府アンコール地域保存維持管理機構（APSARA）との間で行った。その結果、現地での共同調査研究を通してAPSARAの若い研究者を育てるとの方向性で合意した。また、シェムリアップで開催された第5回バイヨンシンポジウムに参加し、講演と討議を行った。

## 研究組織

○西浦 忠輝、斎藤 英俊、朽津 信明、二神 葉子、野口 英雄（以上、国際文化財保存修復協力センター）、石崎 武志（保存科学部）、増井 正哉（奈良女子大学）、中田 英史（文化財保存計画協会）



パキスタン・ラニガト遺跡における調査



エジプト・アブシール南丘陵頂部遺跡

# 文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究

## 目 的

近年急速に劣化が進んでいる国内外に所在するレンガ造文化財の保存、修復に資するため、レンガの劣化現象と保存対策についての調査、研究により、有効な保存対策を開発し、国内外のレンガ造文化財の保存技術の向上に貢献することを目的とする。

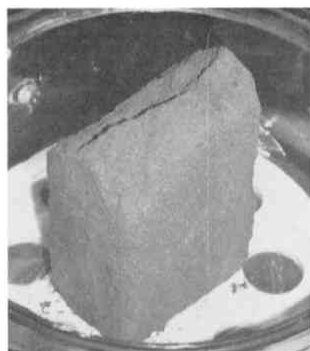
## 成 果

レンガの劣化の大きな要因である塩類風化を軽減する方法を検討している。これまでに、栃木県の重要文化財・旧下野煉化窯などにおける観察から、塩類風化は、周りの環境変動に伴って、冬場の乾燥期に析出した塩類が、春からの湿潤期に潮解することによって引き起こされることを明らかにした。従ってその対策としては、環境変動を制御して、このサイクルを引き起こさないことが有効と考えられる。塩類では、周りの環境がそれ以上の湿度になるとその塩類が潮解してしまう値である「平衡相対湿度」という概念が存在し、例えば旧下野煉化窯で塩類風化の主要因となっているエプソマイトでは、相対湿度90%以上になると潮解することが知られている。従って、それ以上の湿度を保てば、理論的にはエプソマイトは少なくとも析出できないことになる。試みにデシケータ内にエプソマイトの飽和溶液を入れ(すなわち、中の湿度は平衡相対湿度である90%で一定になる)、そこに塩類を多量に含んだ旧下野煉化窯のレンガ片を入れて実験してみたところ、塩類は全く析出しなかった(下図A)。同じ試料を、塩化カルシウムの飽和溶液を入れたデシケータ(湿度は平衡相対湿度である33%)に入れたところ、多量の塩類(エプソマイト)を析出した(下図B)ことから、環境の制御によって、塩類の析出を、すなわち塩類風化をある程度制御できることが示唆された。

海外においては、タイ国のアユタヤ遺跡を中心に調査、研究を行っている。アユタヤ遺跡の中心であるマハタート寺院におけるレンガの著しい塩類風化には、地下水よりも雨水の影響が大きいと判断されたため、それに対する具体的な対策を検討している。実際の遺跡の近傍に、実際の構造物の縮小模型をレンガで2つ作成し、片方の上面に撥水处理を施し、もう片方はそのままにして、その後の経過を観察している。これまでの観察によれば、無処理の部分の表面には既に生物の付着が見られ、色が黒ずんでいるのに対し、処理した面には全くそのような変化は見られないことから、撥水处理は有効に機能していることが確認される。従って、今後の調査で処理の有無による塩類の析出状況の違いや、劣化状況の違いなどが観察されれば、この保存対策の有効性が確認されたことになり、実際の遺跡保存にも応用可能となるであろう。

## 研究組織

○西浦 忠輝、朽津 信明、斎藤 英俊、二神 葉子(以上、国際文化財保存修復協力センター)、  
石崎 武志(保存科学部)、渡辺 邦夫、尾崎 哲二(以上、埼玉大学)、三田 直樹(地質調査所)



A



B

レンガの塩類風化実験



アユタヤ遺跡の実験用縮小模型構造物

## 4. 受託研究

### 茨城県新治村武者塚古墳出土金属製品の修復研究

#### 目 的

武者塚古墳は、7世紀の円墳である。この古墳では毛髪や刀の鞘などの有機物がよく保存されていた。これらは保存科学部の指導で、保存環境を制御する方法で保存を行ってきたが、刀が腐食したり、鞘の木材が腐朽し、漆膜が暴れたりして環境制御だけでは保存することが不可能になっていた。このようなことから3ヵ年計画で修復研究を実施することになり、本年度は最終年度である。

#### 成 果

本年度は大刀の修復を行った。この大刀は鞘の漆膜がよく残っている。刀身については鞘の木質は、ほとんど残っていなかったが、鞘に塗られた漆膜は比較的よく残っていた。その漆膜は、新しく制作した鞘に移植された。漆膜の接着はホットメルト樹脂を使用した。刀身は脱塩処理後気化性防錆剤を使用して錆を防止する処置を行った。

#### 研究組織

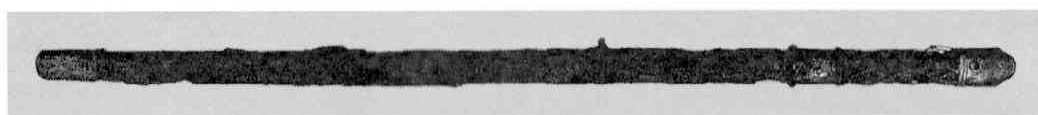
○青木 繁夫（修復技術部）

#### 備 考

当研究は茨城県新治村より依頼された。



（処置前）



（処置後）

「出土鉄剣の保存処置」

## 装潢材料の物性研究

### 目 的

古糊は、装潢の際に用いられてきた伝統的修復材料の一つであり、小麦粉デンプンを数年以上、一定の状態で保存することにより得られる。伝統的な古糊の製法は、大寒の時期に炊かれた糊を原料とし、陶器の瓶等に入れた後、表面に汲みおき水を張って保存という過程を経る。保存場所は地下の土蔵であることが多い。保存期間は各工房により異なるが、一般的には10年前後で古糊として用いられるようになる。保存中の古糊は、多少の差異はあるものの、表面に微生物による膜層が形成される。糊を瓶に入れた保存中、毎年大寒の時期に表面の形成膜を除去して汲みおいた水を張る「水替え」の作業を行う工房もある。

古糊の特性としては、生麩糊よりも粘度が低いこと、接着強度が弱いこと等が挙げられ、このような物性を要求される場面において、伝統的に用いられてきている。しかし一方で、pH値の低下や微生物の関与など、文化財への影響が不透明な部分も存在している。

この古糊は、化学的な組成や特徴的な物性を与えている要因についてはほとんど解明されてきていないまま、装潢文化財の修復に数多く用いられているのが現状である。本研究は、従来研究されてこなかった古糊の化学組成や物性に焦点を当てて行っており、今までにも生麩糊に比べて著しく分子量が小さいこと、粘度が低いことが明らかにされている。

本研究における、生麩糊および古糊などの試料は株式会社岡墨光堂より提供を受けた。

### 成 果

古糊の保存状態は、表面に膜状の微生物層が形成されるという共通点はあるものの、各瓶において色や膜の形態は大きく異なっている。加えて、生成された古糊自体の状態も、各々のばらつきが大きい。従って、生成された古糊がどれも同様な物質であるとは推定されにくかった。

そこで、古糊のサンプルを複数採取し比較することで、古糊の個体差がどの程度あるのかを調査した。個体差が想定される分子量分布を測定するために、ゲルパーミエーションクロマトグラフィーにより測定を行った。

測定の結果、状態の異なる複数の古糊においても、ほぼ同様なクロマトグラムが得られた。これは、状態の異なる古糊でも、化学組成が類似あるいは同様であることを示唆しており、状態が異なっても材料としては一様の生成過程を経ている可能性が示された。

### 研究組織

○川野邊 渉、早川 典子（以上、修復技術部）、木川 りか（保存科学部）

### 備 考

当受託研究は株式会社岡墨光堂より依頼された。

## 5. 文化財保存修復に関する国際交流促進事業

### ベルン歴史博物館およびエルミタージュ美術館所蔵の 日本美術品に関する調査

#### 目 的

近年、日本美術品を所蔵する外国の美術館・博物館から、さまざまなルートを通じて、作品の調査と評価、展示コーナーの開設あるいは充実、さらには保存修復処置、保存修復担当者の養成など、多岐にわたる内容での協力要請が寄せられている。本調査は、その要請にこたえ、所蔵作品の悉皆的調査を実施して、修復や展示に関する有効なアドバイスをを行い、各国の人々の日本美術、日本文化理解に貢献することを目的とする。

#### 成 果

##### ベルン歴史博物館

スイス連邦の首都ベルンにあるベルン歴史博物館は、1881年に創立されたスイス第2番目の展示規模を有する博物館であるが、同館には約6,000点にのぼる日本美術品が所蔵されている。これは主に19世紀中頃から20世紀初頭にかけて訪日したスイス人によって収集され、同館へ寄贈されたものである。内容は漆器、陶磁器、版画、武具、日本画、仏像等多岐にわたる。これらは収蔵以来すでに長年月を経て保存状態の悪いものも少なからずあるが、同館には日本美術の専門家がいなかったため、作品についての調査、整理、修復の作業はほとんど行われていなかった。今回の調査では、対象を美術工芸品に絞り、のべ10日間の調査を通じて、①仏像および仮面の彫刻作品47点、②漆工、牙彫、金工による印籠、根付、道具類等の工芸作品203件、③屏風、掛け軸、巻物、版画等の絵画作品468点について、調査作成、写真撮影、データベース（日本語）の作成を行った。これによって作品の評価を行うとともに、保存方法、修理の考え方などについて、提言を行った。

同博物館の作品調査は、金工品と絵画作品を中心に2001年度も継続して実施され、担当学芸員との緊密な連絡をとりつつ、将来の日本美術展示コーナー開設に向けて、長期にわたるパートナーシップを構築しようとしている。

##### エルミタージュ美術館

エルミタージュ美術館からの希望が「日本画、手書き文書」について「ロシア側修復家が自助努力により修復および保存を行うことを重点とする」という主旨であることを受け、今回の調査は、同館の日本絵画コレクションの量と内容、およびどのような修復・保存方法の指導が必要であるかを明らかにすることを目的とした。こうした作業は作品の基礎台帳となる所蔵品総目録をもとに行うのが通常であるが、同美術館が所蔵する日本美術品の法量、材質、技法などのデータを伴う総目録は作成されていない。そのため、先の目的を達成する基礎作業として、日本絵画について作品基礎台帳の作成作業（名称の確定、法量測定、時代推定、材質確認、保存状況の確認）を行い、265点の調査作成、写真撮影、データベース構築を行って、日本絵画ほぼ全点の調査を終了した。作成した調査原本、写真（ネガフィルム、焼き付けとも）、データ（フロッピーディスク）はエルミタージュ美術館に渡し、東京国立文化財研究所側がそれぞれにつき一部副本を持ち帰った。修復・保存方法の助言についても、具体的な見通しを得ることができた。

こうした成果を、エルミタージュ美術館館長、副館長を交えての成果報告会議において報告し、今後の作業について協議した。

2001年には、同美術館所蔵日本美術品調査が継続して行われる予定であり、所期の目的の達成に向けて、相互の協力関係が築かれつつある。

#### 研究組織

○中野 照男、山梨絵美子、岡田 健、塩谷 純（以上、美術部）、増田 勝彦、加藤 寛（以上、修復技術部）、津田 徹英（情報資料部）

#### 備 考

当調査は、外務省文化交流部より依頼され、国際交流基金の助成により実施された。



## スミソニアン研究機構との国際研究交流

### 目 的

アメリカのスミソニアン研究機構は、フリア・サックラー美術館のように東洋の美術品を集めた美術館や文化財の科学的研究を行っている保存分析研究所など様々な博物館、美術館、研究所を持つ、世界最大の文化財研究機関である。その研究者と文化庁の博物館・研究所の研究者が、文化財保存に関する共同研究を行うことを目的とする。

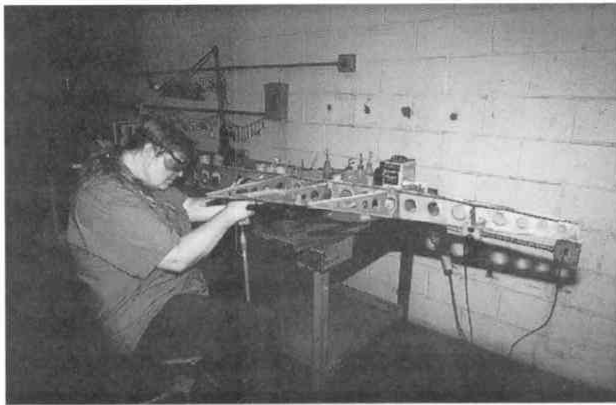
### 成 果

本研究の始まりには次のような経緯がある。昭和63年(1988年)5月に文化庁の大崎仁長官とスミソニアン研究機構のアダムス長官(いずれも当時)が、文化財の保存技術について日米が提携することで合意し、奈良国立文化財研究所、東京国立博物館、国立歴史民俗博物館等の協力を得て、東京国立文化財研究所を中心に共同研究を開始した。平成12年度は近代の文化遺産の保存に関連して、スミソニアン研究機構の中の国立航空宇宙博物館などと航空機の保存について情報交換を行った。

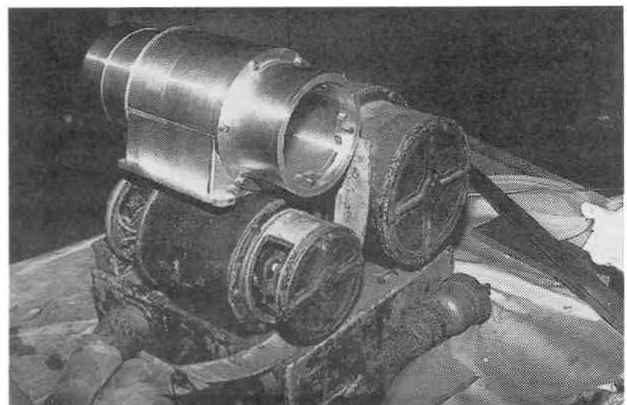
なお本研究は当初より科研費(国際学術研究)を用いて主要な研究を行ってきたが、研究代表者であった西川杏太郎所長(当時)が平成7年3月に退官したため、代表者を沢田正昭奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長に交替した。平成8～10年度「陶磁器文化の交流に関する科学的研究」に引き続き、平成11年度からは「アジア地域における陶磁器の流通に関する自然科学的研究」を行っている。

### 研究組織

○三浦 定俊(保存科学部)、町田 章、沢田 正昭、西村 康、巽 淳一郎、村上 隆(以上、奈良国立文化財研究所)、齋藤 孝正(文化庁)、二宮 修治(東京学芸大学)、L.V. ツェルスト、R.L. ビショップ、P.B. ヴァンディバー、L.A. コート、P.R. ジェット(以上、スミソニアン研究機構)



愛知M6A1「晴嵐」を修復するための補助翼の分解



「晴嵐」の複製発電機、下は参考にした日本製爆撃機のもの

## 文化財保護に関する日独学術交流

### 目 的

日本とドイツ両国は、古い歴史と多くの文化財を持っている点だけでなく、第二次世界大戦の惨禍から急速に復興し高度に産業化された社会を作り上げたが、その反面、古来の文化や文化財が衰退や破壊の危機に晒されている点も共通している。本研究は互いの国の文化財保護に関する知識や経験を交換し、それぞれの国の文化財保護に資することを目的としている。

本研究の背景には次のような経緯がある。日本とドイツとの間では、昭和49年（1974年）に科学技術に関する学術交流のための協定書が調印され、医学・物理学などを中心に日独学術交流が行われてきたが、平成2年（1990年）の第13回日独科学技術合同交流委員会においてドイツ側から「文化財保護に関する日独学術交流」の提案があり、平成4年（1992年）から交流が開始された。日本側では東京国立文化財研究所が、ドイツ側ではミュンヘンのバイエルン州立文化財研究所が、それぞれ事務局となって共同研究を行っている。また建造物の保護に関する学術交流は、ドイツ側ではヘッセン州文化財保護局が中心となっている。

### 成 果

1999年3月11～13日にICOMOSドイツ国内委員会などと共催した、国際シンポジウム「東アジアとヨーロッパのラッカー技術」の論文集をまとめ、バイエルン州立文化財研究所から出版した。この論文集には、輸出漆器について竹内奈美子、日本の漆器について宮腰哲夫、岡田文男、三浦定俊、室瀬和美の日本側研究者が執筆している。またドイツ連邦政府の担当者も含めて、バイエルン州立文化財研究所と今後の共同研究の進め方について協議し、併せてドイツの彩色技法について資料を収集した。この他、日本の彩色文化財に関する論文の翻訳を行った。

### 研究組織

○三浦 定俊、石崎 武志、佐野 千絵、早川 泰弘（以上、保存科学部）、渡邊 明義（所長）、岡田 健（美術部）、加藤 寛（修復技術部）、津田 徹英（情報資料部）、斉藤 英俊、松本 修自（以上、国際文化財保存修復協力センター）、沢田 正昭（奈良国立文化財研究所）、宮腰 哲雄（明治大学）、北村 昭斎（漆芸家）、M. キューレンタール、M. ペツェット、K. ヴアルヒ（以上、バイエルン州立文化財研究所）  
E. エマーリン（ミュンヘン工科大学）、G. エンデルス（ヘッセン州文化財保護局）



日独共同編集による国際シンポジウム  
「東アジアとヨーロッパのラッカー技術」の論文集



共同研究の進め方に関するドイツ側関係機関との討議

# 文化財の保存修復技術に関する国際共同研究

## —屋外遺跡の保存修復に関する日タイ共同研究—

### 目 的

本国際共同研究は、屋外遺跡の保存修復技術について、この分野の東南アジアの中心的存在であるタイ国の芸術総局との共同研究である。本研究は、タイ国のみならずカンボジア、ラオス、ベトナム等東南アジア諸国の遺跡の保存技術の向上をめざし、もって世界の文化遺産の保存に貢献することを目的とする。

### 成 果

スコータイ遺跡のスリチュム寺院大仏は、1998年3月に保存修復処理を行った。その後、詳細な経過観察と含水率測定を続けている。処理後3年が経過し、処理直後の純白に近い状態と較べると、確かに灰色化してきている。これは、埃等が堆積した部分でごく表面的に藻類等が繁殖したためと考えられる。大仏の表面層の含水率が、年間を通して、また雨の前後で、ほとんど変化せず、総体的に徐々に減少している、という測定結果から判断して、この生物の繁殖は部分的なものであって、今後活発化して大きく増殖することはないと考えている。しかし、いずれにしろ、今後の保存を考えると、何らかの形で覆屋を検討せざるを得ない。この場合、下記のことを考える必要がある。

- ・大仏が納められている本堂には、もともと木造瓦葺きの屋根があったことは間違いない。しかし、その形、様式が不明である以上、その復元は適当でない。
- ・金属、ガラス、プラスチック等の新材料による覆屋の架設は、遺跡と調和せず不自然である。
- ・外の通常的位置からは見えない形で、新材料による覆屋を付設するのは一つの方法であるが、この場合は密閉式とならざるを得ず、明るさを考えて透明性の材料を用いると、温室効果による堂内温度の上昇の影響が懸念される。また、清掃、洗浄等の十分なメンテナンスが要求される。

かくして、メンテナンスが容易で、安価であり、遺跡の雰囲気も損なわないものとして、草葺き簡易屋根が提案された。そこで、この草葺き屋根が実際にどの程度有効であるかを試験するために、スリチュム寺院の敷地内に、モデル構築物を設置し、実験を開始した。4本のレンガ造漆喰塗りの柱を立て、その内の2本を草葺き屋根で覆った。今後、柱への生物の付着等による外観変化の観察、含水率の測定を続ける予定である。

1999年3月にバンコクで開催した第1回日タイ共同研究セミナー（First Seminar on Thai-Japanese Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand）の成果をまとめた英文の報告書（Conservation of Monuments in Thailand [I]）を編集、印刷、刊行し、500部を国内外の関係機関、個人に配布した。

本書に収められている日本側研究者による論文は下記の5編である。

N. Miyamoto; Remarks on the Conservation Methodology between Thailand and Japan.

T. Nishiura, T. Ishizaki, Chiraporn A., Kitcha.Y.; Conservation Treatment for the Giant Buddha of Wat Sri Chum in Sukhothai, Thailand.

N. Kuchitsu, T. Ishizaki, T. Nishiura; Salt Weathering of the Brick Monuments in Ayutthaya, Thailand.

T. Ishizaki, N. Kuchitsu, T. Nishiura et al; Numerical Analysis of the Water Regime in Historical Brick Buildings and Monuments in Thailand.

T. Nishiura et al; Conservation of Excavated Monument in Syria;  
Conservation Project of Ain Dara Temple (BC10).

### 研究組織

- 西浦 忠輝、斎藤 英俊、二神 葉子、朽津 信明、  
野口 英雄（以上、国際文化財保存修復協力センター）、  
石崎 武志（保存科学部）、大石不二夫（神奈川大学）



スコータイ遺跡・スリチュム寺院に  
設置した実験用モデル構築物

# 龍門石窟の保存修復に関する調査研究

## —中国文化財保存修復に関する調査研究—

### 目 的

龍門石窟は河南省洛陽市の南13km、伊水の東西兩岸に対峙する石灰岩の岩山に開かれた仏教石窟寺院である。北魏の孝文帝による洛陽遷都(494年)に前後する頃に最初の造仏が行われ、6世紀初頭に盛期を迎えた。さらに7世紀半ば頃から8世紀にかけて、奉先寺大仏に代表される唐代造像の展開を見た。北魏から宋時代までに2千余の大小仏龕が開かれ、仏像の数は10万体にのぼるといわれる。また造像銘記約2,800が現存しており書法芸術の宝庫としても知られている。しかし、この岩山はもともと無数の断層が走り、石質も場所によって精粗の差があり、永年の風雪、断層を通過して洞窟内へ滲出してしてくる水などの厳しい自然環境によって、さまざまな傷みが生じている。加えて近年は、酸性雨の発生によって風化の進行は一層深刻な問題となっている。

当研究所は、すでに数年来龍門石窟研究所から保存修復担当者の養成についての協力要請を受けていたが、それとは別に、2001年度から日本政府の信託基金をもとにしたユネスコによる龍門石窟保存修復事業が始められることになり、そのアドバイザーとしての役割が求められることになった。このような状況のもと、龍門石窟研究所との緊密なパートナーシップを構築し、龍門石窟の現状を詳細に調査し、保存修復の方法についての研究開発と具体的な処置、人材の養成など、多角的で実効的な成果をあげようとするのが、本研究の目的である。

### 成 果

#### 人材養成

2000年1月23日から1月29日の日程で実施した現地予備調査をもとに、龍門石窟研究所保護研究室の若手研究員養成のためのプログラムを作成した。このための財源として、文化財保護振興財団に対して資金援助を要請したところ、2000年度においては1名/10カ月間の助成が認められ、11月から馬朝龍氏が来日して研修に入った。これに関連して、当研究所、龍門石窟研究所、文化財保護振興財団は2000年10月に洛陽市において協議し、3者による「龍門石窟保護のための研究・修復プロジェクトに関する議定書」に調印し、①人材養成、②専門家派遣、③設備配置、④指定洞窟での徹底調査と保全指針探求、⑤研究集会の開催を主な内容として、共同で事業を推進することに合意した。

#### ユネスコ文化遺産保存信託基金

日本政府からのユネスコ文化遺産保存信託基金として、2001年度から5カ年間の予定で、龍門石窟保存修復事業が開始されることとなり、2000年9月に外務省、ユネスコ北京事務所、中国側専門家、日本側専門家による事業形成ミッションが現地を訪れ、龍門石窟研究所、洛陽市文物局、河南省文物管理局等の担当者とともに調査および協議を行った。当研究所からは、斎藤英俊センター長以下5名(外部1名を含む)がアドバイザーとして参加した。帰国後、その内容をもとに、ユネスコ北京事務所と共同で5カ年間の具体的な作業計画を作成した。5カ年間の本ミッションにおいては、当研究所とユネスコとがコンサルタント契約を結び、事業を推進していくことになっている。

#### 研究組織

○斎藤 英俊、西浦 忠輝、朽津 信明、二神 葉子(以上、国際文化財保存修復協力センター)、  
石崎 武志(保存科学部)、岡田 健(美術部)、中田 英史(文化財保存計画協会)

## パナマ歴史地区保存修復協力事業（中南米諸国文化財保存協力事業）

### 目 的

パナマ共和国の首都、パナマ市は、城壁に囲まれた旧市街地を中心に発達してきた。半島状に海に突き出たその形状から、この地は「古い兜（カスコ・アンティグオ）」と呼ばれ知られてきたが、城壁とその外を巡る濠は、現在破却されてほとんど跡をとどめない。都市の建設は17世紀末期にさかのぼり、城壁の規模は東西約600メートル、南北約400メートルで、90メートルおきに配された三本の東西道路を軸に、碁盤目状に街区が形成され、19世紀初期の独立以前のもを含めた、数百の伝統的建築によって埋め尽くされている。建物の材質はほとんどがレンガ造・漆喰塗であるが、旧城壁の西側に発達した街区には、かなりの割合で木造の建築も建ち並び、全体として多様な中にも統一感のある、すぐれた街並み景観が形成されている。

1997年、この地区は、地区内の記念的建造物であるサロン・ボリバールとともに世界文化遺産として登録され、大統領府・文化省・住宅省・パナマ市の傘下にあるカスコ・アンティグオ保存事務所が中心となって、このパナマを代表する遺産地区の保存に乗り出した。しかしながら、地区内全体に住民が密集して居住し、不法占拠によるスラム化が蔓延している一方で、空家となって荒廃した建物も目立ち、修復と整備には困難な課題が山積している。1998年にパナマ政府から発せられた旧市街地復興計画支援の要請に応じて、昨年度基礎調査のための専門家を派遣し、また今年度は協力事業の具体的対象と方法を策定するための調査を行なった。

今後のよりよい協力関係を作り上げ、修復の具体的な成果を挙げる事が最終的な目的となる。

### 成 果

調査の結果、旧城壁の西に隣接する街区にある2棟の木造建築と、17世紀の建物が移築されたと推定されるメルセデス教会の石造ファサードとが、修復協力事業の対象としてふさわしいとの結論に達し、保存事務所とも合意を得た。また、これに関連した研究交流の内容についても意見交換を行ない、次年度からの開始に向けての準備を整えた。今後は事業実現のために、何らかの財源を求めることが課題である。

### 研究組織

○斎藤 英俊、西浦 忠輝、松本 修自、野口 英雄、宗田 好史（以上、国際文化財保存修復協力センター）、  
菊谷 勇雅（文化庁）



カスコ・アンティグオ中心部の町並



修復対象候補の木造住居

## 6. 文部省科学研究費補助金による研究

### 日本における美術史学の成立と展開

(4年計画の第4年次)

#### 目 的

西洋近代の学を範として明治20年前後にはじまった日本の美術史学は、近代国家として西洋に認知されようとする国情を背景として、国家的制度や機構と密接な関係を維持し、日本の文化的ナショナルアイデンティティの構築に寄与してきた。今日、一般的に用いられる美術史の言葉や思考が、こうした美術史学の歴史のなかで形成されてきたことは、美術史研究者が広く認識すべき問題となっている。

本研究はこのような問題意識にたち、日本における美術史学成立期以来の資料を収集するとともに、1)美術行政・美術教育と美術史学、2)「作品」概念の成立とその社会的機能、3)日本におけるアジア美術研究、4)美術史家の美術批評と創作、5)近代の言説と日本美術史観の形成という5つの観点から美術史学の歴史に分析を加え、美術史学の今日的な課題と可能性を問い直すことを目的とする。

#### 成 果

##### (1) データ化

東北地方で開催された明治期博覧会についての現地調査を行い(東北大学附属図書館、宮城県図書館、秋田県立図書館、秋田県公文書館)、関連資料を収集、データ化を行った。

##### (2) 分析・報告

前年度に引き続き『京都日の出新聞』(明治27年～28年2月)の美術及び文化財関連記事を収集、冊子化したほか、各分担者の専門分野にしたがって個々の美術史言説が形成される背景を分析した。各テーマは以下の通り。

米倉迪夫「美術史の場」、中野照男「クムトラ出土塑像頭部再考」、鈴木廣之・小林純子「明治期府県博覧会」、島尾新「『雪舟研究史』雑感」、田中淳「『近代日本美術』史の成立を考えるためのノート」、岡田健「展覧会と作品評価」、山梨絵美子「大正後期の洋画壇における東洋的傾向についての一考察」、井手誠之輔「宋風受容の言説をめぐる一断章」、勝木言一郎「濫觴期における敦煌学の位相」、津田徹英「日本彫刻史研究における仏像の法量計測をめぐる」、塩谷純「『日本画』の10年」、金子一夫「近代日本美術史と近代日本美術教育史」、宮島新一「美術史の成立と日本画の成立」、玉蟲敏子「『古画備考』の原本と刊本をめぐる諸問題」、北澤憲昭「美術史研究のアポリアとしての『アヴァンギャルド』」、佐藤道信「目的と方法論」、高木博志「平安文化論の成立」、長岡龍作「仏像を描く」、古田亮「『知情意』論をめぐるノート」

##### (3) 研究会の開催(平成12年7月26日 於東京国立文化財研究所)

美術・美術史学の制度をめぐる問題についてより多角的に検討すべく、今年度はとくに考古学の分野から研究者を招聘し、研究会と総合討議を行った。発表者・発表内容は以下の通り。

広瀬繁明「明治期における〈文化財〉保護行政の展開—美術史から建築史そして考古学」、内田好昭「日本考古学の形成」

#### 研究組織

○米倉 迪夫(情報資料部)、渡邊 明義(所長)、中野 照男、田中 淳、山梨絵美子、岡田 健、塩谷 純(以上、美術部)、鈴木 廣之、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英(以上、情報資料部)、宮島 新一(東京国立博物館)、三輪 英夫(九州大学)、金子 一夫(茨城大学)、北澤 憲昭(跡見女子大学)、玉蟲 敏子(静嘉堂文庫美術館)、佐藤 道信(東京芸術大学)、安達 直哉(東京国立博物館)、高木 博志(京都大学)、長岡 龍作(東北大学)、横溝 廣子(東京芸術大学)、古田 亮(東京国立近代美術館)、小林 純子(沖縄県立芸術大学)



# 世界の文化財の保存

## —わが国による国際協力体制構築のための調査・研究—

(4年計画の第3年次)

### 目 的

人類共通の遺産である文化財の保存に対し、この分野で進んだ技術を有するわが国の役割は大きく、諸外国からの協力依頼も数多く寄せられている。このような背景の下、かなりの数の国際協力事業が行われている。しかし文化財の種類、材質は多様であり、保存修復に携わる研究者の専門分野も広範囲にわたり所属学会も異なるなどの理由から、意見交換の場が得難く、情報交換や人的ネットワークづくりが遅れており、事業を実施する中で得られたノウハウが他の事業に有効に生かされていない現状がある。また、専門家、実務者からも事業についての情報を得たいという要請が多く出されていた。

本研究では、日本が行った、また現在行っている文化財保存国際協力事業の実態を総合的に調査、研究し、問題点を明らかにして、解決方法を検討、考察する。また、事業を行っている（または行った）研究者間の情報交換のためのネットワークを構築する。このことにより、文化財保存国際協力事業が適切かつ効率的に行えるようになり、人類共通の貴重な文化遺産の保存に寄与すると同時に、わが国の文化面での国際貢献に役立てることが本研究の目的である。

### 成 果

#### 海外における調査

タイ、パキスタン、カンボジアにおいて、現地専門家との協議や現地での調査を通じて、文化財保存修復事業についての現状や問題点のレビューを行った。

#### 国際文化財保存修復研究会の実施および成果の刊行

「国際文化財保存修復研究会」を平成12年11月、平成13年2月の計2回実施した。研究会には文化財保存修復国際協力事業に積極的に携わっている日本国内の専門家、実務家が多数参加し、専門家による国際協力事業の事例紹介と、発表に関する質疑応答・討議という形で進められた。文化財の保存修復に関する技術的問題についての議論はもちろん、事業の運営上、財政上の問題を含めた総合的な議論が行われた。また、研究会における報告・討議内容をまとめた「国際文化財保存修復研究会報告書」を2回刊行した。さらに、これまでの研究会の場で提起された、事業に関する問題点やその解決の事例を整理し、「我が国による文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点(II)―国際文化財保存修復研究会からの知見(2)―」を『保存科学』40号に発表した。

#### データベースの構築、データ収集

文化財保存修復に携わる主として国内の専門家・技術者について、昨年度来作成しているMicrosoft Accessによるデータベースの更新を行った。また、日本の専門家が行った文化財保存修復国際協力事業に関するデータを収集した。さらに、GIS(地理情報システム)を利用した地図情報と組み合わせたデータベース構築のために、現地調査を行っているタイ、カンボジアの遺跡の情報、特にGPSによる位置情報のデータを収集した。

### 研究組織

○西浦 忠輝、斎藤 英俊、松本 修自、朽津 信明、二神 葉子（以上、国際文化財保存修復協力センター）、  
松本 健（国士舘大学イラク古代文化研究所）、井上 洋一（東京国立博物館）

# 彩色文化財の材料と技法に関する科学研究

(6年計画の第2年次)

## 目 的

伝統的な絵画、彫刻、建造物などの文化財に用いられている彩色文化財の技法と材料について、美術史など歴史研究者、伝統的彩色技術者、自然科学者が共同して科学的層位分析を行い、その保存と修復に貢献することを目的とする。特に、多くの彩色文化財は後世補修を受けているので、文化財の保存修復においてはそのオーセンティシティを考えるために、当初の彩色だけでなく後世の補彩についても材料と技法を明らかにすることも重要な課題とした。

## 成 果

平成12年度は、まず日本側だけで予備的にポータブル蛍光X線装置を用いて、三重県の日土市立博物館と東京芸術大学で彩色彫刻の顔料分析を行い、装置の性能について実地試験を行った。その上で8月に南ドイツ（バイエルン地方）を訪れ、中世彩色木造彫刻をドイツ側研究者と共に調査した。調査を行ったのはニュルンベルグの聖ローレンス教会、アンスバッハのマルグレーテ辺境侯の館、ローテンブルグの聖ヤコブ教会、ネルトリンゲンの聖ゲオルグ教会、そのほかバイアッハ教会、聖アンナ教会、アルトミュンスター教会、オットー・ボイレレン教会などである。それぞれ彩色木彫像の修復現場を訪れて、ドイツの修復技術者と材料や技法について討議と調査を行った。またバイエルン州立文化財研究所の修復工房で、顕微鏡を利用した試料のサンプリングとクロスセクションの作成など、科学的調査方法の実践について、修復中の彩色彫刻を用いて意見と技術交換を行った。また最終年度の報告書の作成について、どのような内容と形式にするか打ち合わせた。ドイツ側研究者は10月から11月にかけて来日し、神奈川県立金沢文庫、永勝寺、鎌倉国宝館、静嘉堂文庫美術館、京都国立博物館、琵琶湖文化館、石山寺などの彩色文化財を、ポータブル蛍光X線装置やドイツから持参したポータブル顕微鏡を用いて調査した。併せて東京の明珍修復工房を訪問し、日本の修復技術者と共に討議を行った。研究成果を各種論文誌に発表すると共に、12月には科学的調査法に関する研究会を開催した。

## 研究組織

○渡邊 明義（所長）、三浦 定俊、石崎 武志、佐野 千絵、早川 泰弘（以上、保存科学部）、加藤 寛（修復技術部）、岡田 健（美術部）、津田 徹英（情報資料研究部）、斎藤 英俊、松本 修自（以上、国際文化財保存修復協力センター）、沢田 正昭、木村 勉（以上、奈良国立文化財研究所）、田淵 俊夫、長澤 市郎（以上、東京芸術大学）、神庭 信幸（東京国立博物館）、後藤 文子（宮城県美術館）、宮腰 哲雄（明治大学）、M. キューレンタール、K. ヴァルヒ（以上、バイエルン州立文化財研究所）、E. エマーリン（ミュンヘン工科大学）、S. エンデレス（ヘッセン州立文化財保護局）



東京芸術大学における技芸天像の調査



バイエルン州立文化財研究所におけるクロスセクションの作成

# 早期中国青銅器の原料産地に関する研究

(3年計画の第2年次)

## 目 的

中国における金属器文化の発展は東アジア地域における文化の発展の重要な足跡の一つである。中国における青銅器文化の発展を理解することは中国文化および日本文化の本質に迫る重要な研究である。古代中国青銅器に関する研究は従来は考古学分野で行われてきたが、本研究では自然科学的な方法およびその結果を歴史の理解に加えようとしている。そして、今までとは異なった自然科学的な視野を考古学へ導入し、歴史の流れをより深く理解しようとしている。

## 成 果

本年度は中国山東省の青島および斉南地域および北京の文物研究所、香港の中文大学などと連携して研究できるように中国側と折衝をすすめた。また実際の資料に関しては東京国立博物館の東洋課が所蔵する資料に関して、また中国新疆地域における初期青銅器時代の資料採取および鉛同位体比と化学組成の測定をすすめた。

中国から研究者を招請し、鉛同位体比測定および早期中国青銅器の発展に関して、討議を行った。中国側研究者と測定および討議を続けることができたことは日本と中国の学術交流として有意義であった。

日本の研究者が山東省の青島・斉南・北京を訪れ、各所の研究グループと交流また遺跡の見学を行った。山東半島を車で縦断し、この地域における鉱物産地、あるいは稲作状況に関して見学し、出土青銅器の展示および修復現場を見学した。普通には見せてもらえない所蔵品および修理現場を見学できたことは今後の研究に大きな成果であった。青州博物館における石像物の塗料に関して、研究の可能性に関して討議した。

## 研究組織

○平尾 良光、早川 泰弘（以上、保存科学部）、森田 稔（文化庁美術学芸課）、三輪 嘉六（日本大学文理学部）、金正耀（中国社会科学院世界宗教研究所）、鄭 光（中国社会科学院考古研究所）



西周時代瑠璃河遺跡から出土した伯矩鬲



斉南市郊外における黄河の流れ

# 文化財の新たな総合的虫菌害防除対策（IPM）のシステム構築に関する研究

（4カ年計画の第3年次）

## 目 的

文化財の虫や菌などによる生物被害は全国いずれの場所においても起こり、またその進行は著しく速いため、生物被害の防除は極めて重要な問題である。しかしオゾン層保護のため、かねてより文化財燻蒸ガスとして用いられてきた臭化メチル全廃が2004年末に前倒しになり、これに替わる方法の導入が現場から強く要請されている。その状況のなかで、虫・菌などの生物被害を単独で考えずに、資料保存環境計画の一環の中の問題にとらえ、害虫とエコロジーに対する知識を総合的に活用してきめの細かい対応を行おうという総合防除対策（IPM（Integrated Pest Management））に対する関心が、欧米などを中心として高まっている。本研究はこのIPMの観点を生かし、臭化メチル燻蒸に文化財の害虫対策を全面的に頼ってきた我が国の従来の体制から、環境や人体への影響も考慮した総合的な資料保存体制への移行を目指し、具体的な対処法を検討・開発する。そのために現場のスタッフとともに、収蔵庫のデザイン、掃除の仕方、被害のモニタリングの方法、被害作品の隔離スペースの設置など具体的な項目について検討を行い、システムのモデル作りを行う。

## 成 果

### （1）文化財害虫事典の製作

IPMの一環として、現場で学芸員が被害のもととなった害虫を同定し、被害に対して的確に対処することは大変重要である。その助けとなる「文化財害虫事典」製作を計画し作業を進めてきたが、本年度さらに掲載内容を充実させ、また全編の構成を決定した。加害材質一覧、各害虫の特徴のほか、日常管理の方法、防除法についても掲載することとした。

### （2）生物被害防止のための日常管理法の策定

これまでの研究成果を活かして、IPMを基軸とした文化財の生物被害防止のための日常管理法に関する草案を作成した。これを元に研究者・専門学芸員等と論議し、現場に即したより具体的な対処法を著した。この成果は「文化財の生物劣化防除に関する調査研究協力者会議」（平成12年度、文化庁文化財部）に生かされ、最終的に、「文化財の生物被害防止に関する日常管理の手引き」（文化庁文化財部、平成13年3月）という形で公開された。

### （3）現場におけるIPMプログラムの実践

害虫駆除および害虫予防の計画を現場のスタッフと協力して作成し、2カ所の現場において、プログラムを試行している。今後も引き続き、モニタリング等の活動を通して、具体的なIPMプログラムのあり方を探る予定である。

## 研究組織

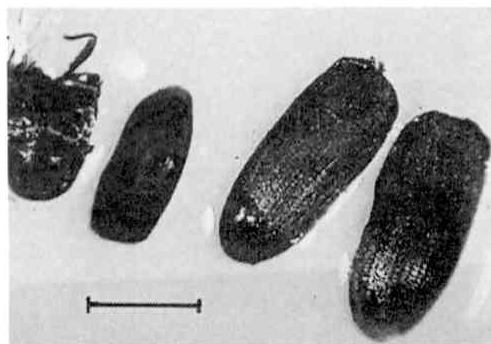
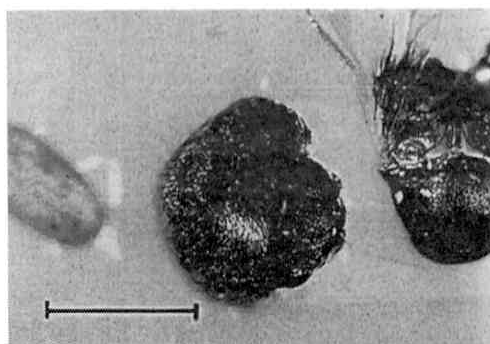
○三浦 定俊、木川 りか、山野 勝次、佐野 千絵、石崎 武志（以上、東京国立文化財研究所）、青木 睦（国文学研究資料館・史料館）、長谷川孝徳（石川県立歴史博物館）（以上、研究分担者）、岡部 央（群馬県教育庁）、長屋菜津子（愛知県美術館）（以上、研究協力者）

モニタリングにおける  
室内塵の調査で分離  
された昆虫片の一例

電気掃除機によって集  
塵した室内塵に存在する  
昆虫種を、定性的に調査  
することもできる。

図の中にはシバンムシ  
と思われる昆虫の破片が  
混じっている。

スケールは1 mm



# タイ国アユタヤ遺跡の保存修復に関する研究

(3年計画の第3年次)

## 目 的

人類共通の遺産である文化財の保存のための国際協力を行うについては、十分な調査、研究と当事国との緊密な連携が必要不可欠である。本研究は、世界を代表するレンガ造遺跡であり、ユネスコの世界文化遺産に登録されているアユタヤ遺跡の保存修復について、日・タイ共同で研究し、その恒久的な保存のための国際協力事業の推進に資することを目的とするものである。

## 成 果

- ・ラチャプラナ寺院に設置した無電源（電池稼働）自動環境計測システムにより環境条件（大気温度、大気湿度、雨量、日照強度、レンガ表面温度、レンガ内部温度）の計測を継続的に進めており、西暦2000年のデータの解析処理を行った。1998年、1999年のデータと比較してみると、1年中最高気温が30℃を超えること、雨量は雨季と乾季で大きく異なることなどは共通しているが、月毎の平均気温や雨量は、年によってかなり異なることなどが明らかとなった。
- ・マハタート寺院の一角の特にレンガの劣化の激しい部分において、詳細な観察と含有水分の変化についての測定を継続的に行っており、この部分における水分の動きについて、コンピュータによるモデル解析の結果、部分的に水分量が高まることが確認された。これを防止するために上層部分を撥水処理すること検討され、その効果を確認するための実験用レンガ構築物に水分センサーを取り付けての測定を行っている。今までに、上層部の撥水処理によって、含有水分量が大幅に低下することが確認されている。
- ・マエナムブルエム寺院の修復パイロット事業を開始した。屋根部分の修復による雨水対策が最も重要であり、まず、屋根の修復を先行して行っている。
- ・アユタヤ遺跡において今までに行われた保存修復対策についての資料収集と追跡調査を行った。1960年代に多く用いられたセメントが、すでに劣化し始めている点が大きな問題となっている。
- ・関連調査として、スコータイ遺跡の劣化と保存修復についての調査ならびに関連の文献資料等の収集も行ってきた。アユタヤとスコータイの遺跡はかなり類似しているが、個々にはかなり異なる例もあり、あらためての調査、研究が必要と考えられる。

## 研究組織

○西浦 忠輝、斎藤 英俊、朽津 信明、二神 葉子、松本 修自（以上、国際文化財保存修復協力センター）、  
石崎 武志（保存科学部）、今津 節生（奈良県立橿原考古学研究所）、  
チラボン・アラニヤナク、シリチャイ・ワンチャレオントラクル（以上、タイ国立博物館）



マハタート寺院に設置したモデル構築物での計測



マエナムブルエム寺院

# 古代日本の動物遺体のDNA解析および免疫学的分析

(4カ年計画の第2年次)

## 目 的

本研究では、古代日本の動物遺体の遺伝子DNAを調べることによって、家畜等の伝播経路等について有力なデータを得るために基礎的な系をつくることを目的としている。古代試料のDNA分析においては、DNAの保存状態が非常に悪いこと、細菌やカビ、人間を含めた現世の生物のコンタミネーションを避けられないことなどの制約がある。そこで、本研究では、古代試料中に多量に含まれる細菌やカビなどの汚染微生物の遺伝子の中から、目的の生物種の遺伝子を単離するための基礎的研究を行い、実際の試料に応用することを目的とする。また、DNA分析を補完する意味で免疫学的分析を併用し、より信憑性の高い分析系を作ることを目的としている。

## 成 果

研究代表者らは、これまでの研究において、古代試料中に含まれる細菌やカビなどの汚染微生物の遺伝子の中から、目的の生物種の遺伝子を単離するための方法の確立に取り組んできた。その結果、個々の生物の遺伝子に特徴的な遺伝子配列を利用することにより、一部の古代試料からその生物種の判別に有効なデータが得られる場合があることがわかってきた。解析するDNA領域をうまく設定すれば、さらにはその生物の地域的な分布等についても知見を得られるものと推測される。

そこで、本年度は現世の試料を解析し、種内の判別に適切なDNA領域を設定したのち、ある古代試料からDNA増幅を試み、地域的な分布等についても知見を得ようと試みた。しかし、その試料からDNA抽出を行う過程で、試料にもともと含まれる色素がDNAとともに共沈し、これがPCRによるDNA増幅を阻害することが判明した。検討により、この色素によるDNA増幅の阻害を緩和する条件がわかったが、現在のところ、この古代試料より有意なDNA増幅がみられていない。そこで、プライマーの設計を再検討したが、これでも良好な増幅がみられなかったため、今回の古代試料のDNAが非常に少なかったものと思われる。今後は、古代試料のDNA量を評価する系も必要と思われる。

## 研究組織

○木川 りか（保存科学部）



# 石造文化財の劣化機構と保存対策手法の研究

(3年計画の2年次)

## 目 的

世界遺産に登録されているタイのアユタヤ、スコータイのレンガ建造物や、日本の磨崖仏などの石造文化財の材料は、多孔質体と呼ばれる空隙のある材料からなっている。そのため、タイなどの雨季乾季のある地方では、表面からの蒸発に伴う表面からの塩類の析出などの原因による塩類風化が生ずる。また、寒冷地においては、材料中の水分の凍結、融解による凍結劣化などが大きな問題となっている。これらの文化財に対して適切な保存対策手法を構築するためには、材料中の年間を通じた水分分布、水分移動状況を正しく把握する必要がある。本研究では、これら文化財中の水分分布、水分移動に関するコンピューターによるシミュレーション手法を開発し、これを個々の現場に適用することにより適切な保存対策手法をたてることを主な目的としている。

## 成 果

本年度は、タイ、スコータイのワットスリチュム寺院大仏中の水分分布、水分移動等を有限要素法を用いて計算し、計算結果とTDR水分測定装置を用いた、現場調査の結果の比較を行った。計算に用いた有限要素法のメッシュを図1に、計算により求めた体積含水率の分布を図2に示す。計算結果と測定結果には、良い対応が見られた。本解析手法に関しては、インドネシアのバンドンで開催された国際会議The Second Asia/Pacific Conference on Durability of Building Systems Harmonized Standards and Evaluation と韓国の大田で開催された国際会議New Millennium International Forum on Conservation of Cultural Properties で研究発表を行った。

本研究課題に関して、Analysis of Water and Salt Flow in Porous Material and its Measuring Methodというセミナーを開催した。研究分担者の、独国、ドレスデン工科大学のブラーゲ助教授は、TDR法と定常法を統合した水分移動、塩分移動の同時測定に関する研究発表を行った。また、同大学のグルネワルド研究員は、保存対策手法を構築する上で重要である、建築材料中の水分、熱移動に関するシミュレーションプログラムの開発について講演を行った。本セミナーでは、研究者間で活発な討論を行い、報告書を作成した。

## 研究組織

○石崎 武志、三浦 定俊(以上、保存科学部)、朽津 信明(国際文化財保存修復協力センター)、溝口 勝(東京大学)、登尾 浩助(岩手大学)、マルチヌス・パンゲニヒテン、ユッカ・シムネック(以上、米国塩類研究所)、ピーター・ハウプ、ジョン・グルネワルド、ルドルフ・ブラーゲ(以上、ドイツ・ドレスデン工科大学)

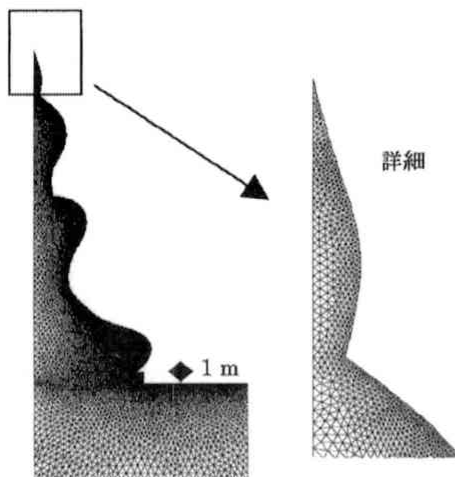


図1 タイの大仏中の水分分布計算のための有限要素法メッシュ

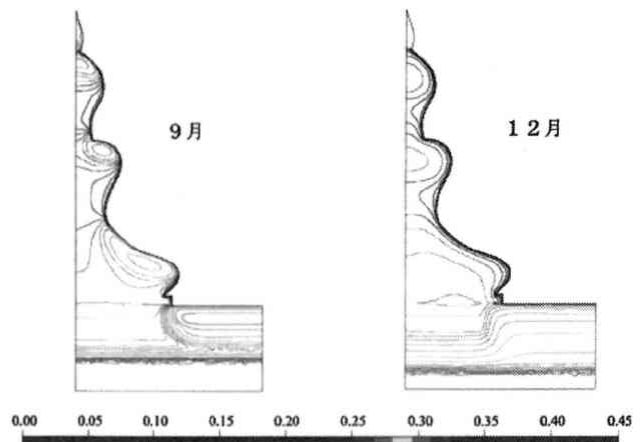


図2 大仏中の体積含水率分布の測定結果

# 屋外環境下での遺跡、石造文化財の保存対策手法の開発

(3年計画の2年次)

## 目 的

寒冷地では、北海道開拓記念館の明治時代の歴史的建造物の漆喰壁が、冬季の凍結、融解により剝離したり、岩手県志波城跡の築地塀の表面が劣化するなど、屋外の環境で公開されている遺跡や石造文化財などは、様々な影響を受け、劣化する。本研究では、これらの環境条件と劣化過程のメカニズムに関する研究を進めると共に、その保存対策手法の開発を目的とする。

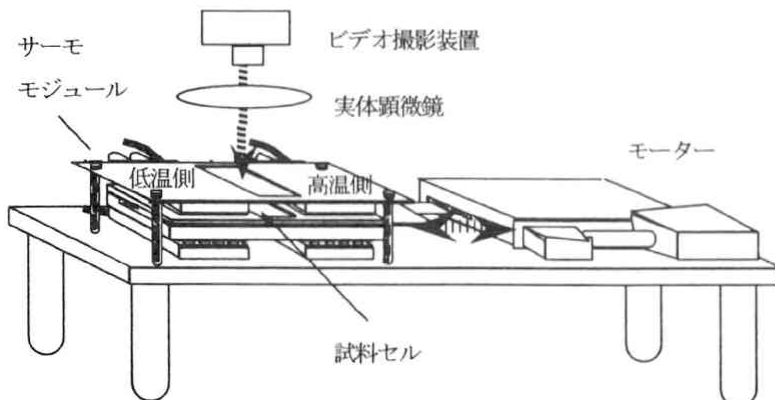
## 成 果

北海道開拓の村の歴史的建造物の漆喰壁が、春先に崩れ落ちるという事例があった。この漆喰壁の剝離の原因は、土壁の凍結、融解による劣化が原因であると考えられたため、日本壁の凍結実験を行った。日本壁の代表的な構造は、表層から、漆喰の上塗り、粘性土にすさと砂分を混ぜた中塗り、粘性土とすさを混ぜた荒壁からなっている。この中塗り土と荒壁土の様々な含水比条件下での凍結温度、凍上特性、凍結融解による劣化状況を調べる試験を行った。この実験に加えて、それぞれの土の水分特性を測定するために、サイクロメータを用いて、土試料の水分ポテンシャル測定を行った。実験結果から、土は、6%程度の含水比があれば凍結するが、凍上現象が起こり氷晶の析出によりクラックが入るためには、20%程度の含水率が必要なが分かった。また、平衡状態では、中塗り土の含水比が、荒壁土の含水比の半分程度になること、また、中塗り土の方が荒壁土より凍上性が低いことなどが分かった。これらの理由により、日本壁の構造は、乾燥に強いだけでなく、凍結にも強い理にかなったものになっていることが分かった。また、土壁中の含水比がある臨界値より大きくなると急激に凍上現象による劣化が進むことが分かった。

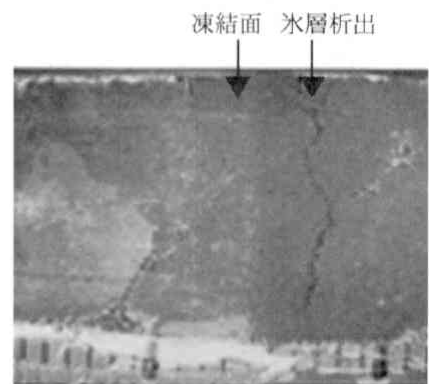
本研究課題に関して、「寒冷地の石造文化財、歴史的建造物の劣化と保存」というタイトルで、北海道開拓の村において研究会を開催した。本研究会では、寒冷地における漆喰壁の劣化、史跡志波城での熱と水分量の経時変化測定、北海道開拓の村の石造建造物、帯広のレンガ造りサイロの含水比、比抵抗、温度分布などの研究発表があり、本研究課題に関しての活発な討論を行った。

## 研究組織

○石崎 武志、三浦 定俊、早川 泰弘（以上、保存科学部）、青木 繁夫、川野邊 渉（以上、修復技術部）、朽津 信明（国際文化財保存修復協力センター）、小林 幸雄、小林 孝二（以上、北海道開拓記念館）、土谷富士夫（帯広畜産大学）、登尾 浩助（岩手大学）、武田 一夫（鴻池組技術研究所）、高見 雅三（北海道立地質研究所）



土の凍結劣化特性を測定するための一方向凍結実験装置の模式図



土試料の中に氷層の析出が見られる

# 極楽浄土を表象するモチーフとしての迦陵頻伽の諸相とその文化的特質

—鳥と人からなる動物を通して見た東西文化の交流とその中国的受容—

(3年計画の第3年次)

## 目 的

迦陵頻伽とは、人の頭をもち、鳥の脚や翅を有する想像上の動物である。その形態はインドのキンナラや中国の鳳凰にも類似する。それらは極楽浄土の世界に棲んでおり、ときに美しい声で仏法を説き、ときに楽器を演奏すると考えられてきた。この想像上の動物が絵画の分野では主に阿弥陀浄土変相や観経変相の中の図像として、工芸の分野では華鬘などの図柄として、建築の分野では斗キョウ飾りとして、そして音楽や芸能の分野では雅楽の曲目や舞踊として取り入れられてきた。

なぜ迦陵頻伽がこれほどまで多方面にわたって芸術の領域に取り入れられたのであろうか。この問に対する答えはいまだに十分でない。その原因は迦陵頻伽に対する研究が美術史や工芸史においても音楽・芸能史においても必ずしも多くないことに由来する。

そこで、本研究は迦陵頻伽をメディアとした東西文化の交流や中国側の受容形態を明らかにすることを目的とする。そして迦陵頻伽が極楽のイメージやムードを構成するモチーフとしてはたしてきた役割や文化的特質について検討を試みたい。

## 成 果

### 1. 迦陵頻伽の造形の研究

勝木が、中国の美術・工芸・建築などに取材し、迦陵頻伽、共命鳥そして金翅鳥（ガルダ）の図像について研究をすすめた。まず迦陵頻伽に関し、福建省泉州開元寺の建築意匠に取材し、図像学的な考察をすすめた。つぎに共命鳥の図像的研究については、まず唐代以前の中国における共命鳥の概念形成を明らかにした。さらに金翅鳥の図像についてはクチャ地方の石窟壁画に取材し、「猛禽類」型と「カラス天狗」型に分類し、それらに対する図像解釈および窟内構成中の位置づけを試みた。最後に「人面鳥」・「有翼人」というキーワードから考察を行い、その研究の展望を総括した。

### 2. 迦陵頻伽の持物としての楽器および迦陵頻伽をめぐる音楽・芸能の研究

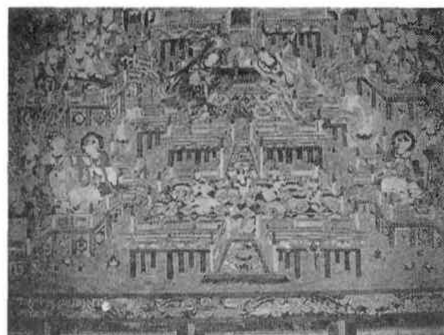
樋口が、中国の石窟壁画に描かれた楽器の図像に取材し、当時、演奏に用いられた楽器の形態について考察した。さらに舞楽「迦陵頻」の曲目に着眼し、その音楽様式について研究を行った結果、今日知るところの舞楽「迦陵頻」の「舞」と「音楽」に『明治撰定譜』以前の楽書との関連が認められた。

### 3. 迦陵頻伽をめぐる工芸意匠の研究

服部が、西北インド・ガンダーラの化粧皿をもとに楽園と饗宴のイメージを、センをもとに飛天のイメージを、そしてアッシロー・ウラルトゥの玉座をもとに有翼鳥獣のイメージをそれぞれ考察した。これらの考察を通じ、西アジアからインドにかけて広がる有翼像のイメージとその特質を明らかにした。

## 研究組織

○勝木言一郎（情報資料部）、樋口 昭（埼玉大学）、  
服部 等作（広島市立大学）



敦煌莫高窟第98窟南壁中央西側

観経変相 五代 迦陵頻伽による舞楽段

# 新史料翻刻による花祭りの芸能史的位置づけ

## ―大神楽から花祭りへ―

### (3年計画の第3年次)

#### 目 的

花祭りを伝承する7集落(愛知県北設楽郡豊根村4・東栄町3)所蔵の新史料を翻刻し、内容分析を通して、それらの文書の位置付けを行った。それによって、江戸時代末期に中断した数集落集合の式年祭である大神楽から、各集落の祭りである花祭りへ定着した過程を明らかにし、花祭りの芸能史的位置づけを行う。

#### 成 果

最終年度の今年度は、武井正弘氏の協力を得て、3年間に収集した史料、花祭りの現地調査、伝承者、有識者からの聞き取り調査によって収集した資料の全てを整理、分析し、それらを参考資料として、以下のような3本の論考を含む報告書を作成した。

#### 論 考

##### 1 「民俗芸能に見る祈願の形 ―花祭りの疫神駆逐祈願を中心に―」

花祭り伝承地各地に残る「牛頭天王祭文」「牛頭天王法」が、神事や芸能面でどのように用いられ、疫病駆逐祈願としてどのように機能したかを考察した。

##### 2 「花祭りの鬼 ―成立過程に関する研究―」

現行花祭りの鬼の成立過程を大神楽の鬼と比較しながら考察した。

##### 3 「霜月祭りにみる翁猿楽の影響 ―花祭りの「しずめ」を中心に―」

現行花祭りにおいて、最も神聖視されている「しずめ」について、その儀礼的所作や装束つけに翁猿楽の影響が考えられること、また、大神楽のへんばいが「土公神祭文」と並行して行われていたことを指摘しながら、伝播経路について考察した。

参考史料(翻刻・解題・注釈 武井正弘)

- 1 「花太夫祭文集」(御園)
- 2 「金山祭文・金山拝詞・天津祝詞」(御園)
- 3 「大土公祭文・土公神法大事護身法・宝数え」(御園・大入)

#### 研究組織

○中村 茂子(芸能部)

# 石造、レンガ建造物の劣化にかかわる材料物性の研究

(2年計画の2年次)

## 目 的

石造文化財や歴史的レンガ建造物の構成材料である多孔質な石材やレンガ材料は、寒冷地では凍結・融解による劣化、タイ、パキスタンなどの気温の高い地域では塩類風化による劣化が顕著である。これらの劣化過程を調べると、多孔質中の熱、水分、塩分移動が重要な役割を演じている。この水分移動速度は材料中の不飽和透水係数、水分特性曲線などの材料の物性値に大きく依存している。そのため、この塩類風化や凍結劣化のプロセスを定量的にシミュレーションなどによって評価するためには、これらの物性値を精度良く求めることが必要である。本研究では、特に多孔質材料の不飽和透水係数、水分特性曲線を精度良く求める手法について研究を行う。

## 成 果

本年度は、石造文化財、レンガ建造物、日本壁など土構造物の劣化に係わる多孔質材料の物性で特に重要な、粒度分布、間隙径分布、比表面積等の測定を行った。また、水分特性曲線に関しては、昨年行った加圧板法、乾燥していく過程での水分ポテンシャル、水分量を継続測定することによる乾燥法に加えて、水の凝結温度を求めることにより、土中水と平衡状態にある空気相の相対湿度を測定するサイクロメータ法により、より乾燥した領域での多孔質材料の水分特性曲線を求めた。これらの研究成果は、日本文化財科学会で発表した。

寒冷地の石造文化財、レンガ建造物や日本壁などを構成する多孔質材料の劣化には、凍結・融解による凍上現象が大きく影響している。そこで、多孔質材料の凍上性を評価するための凍上試験装置を作成した。実験に於いては、様々な上載荷重、温度条件のもとで凍結実験を行った。現在、凍上試験法として、主として日本で用いられている、試料上面温度を凍結温度（0℃）に保ち、下面温度を一定速度で降下させる方法と、主として海外で用いられている両端面温度を一定速度で降下させる試験方法の比較試験を行った。実験結果から、双方の実験で、凍結面への吸水速度は、凍土中の温度勾配と線形関係にあり、凍結条件によらないことが分かった。このことから、凍土中の温度勾配を把握しながら、数回に実験を行うことにより、多孔質材料の凍上性を評価できることが分かった。本研究成果は、保存科学40号で報告した。図1に水分特性曲線を求めるための測定装置、図2に凍上試験装置の写真を示す。

## 研究組織

○石崎 武志（保存科学部）、朽津 信明（国際文化財保存修復協力センター）、 溝口 勝（東京大学）、  
登尾 浩助（岩手大学）

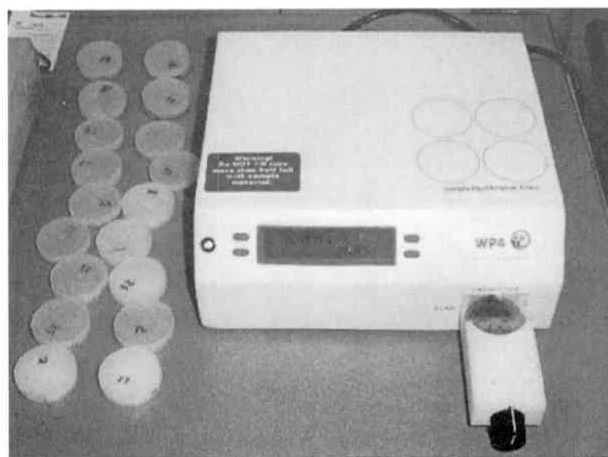


図1 多孔質体の水分特性を測定するための測定装置

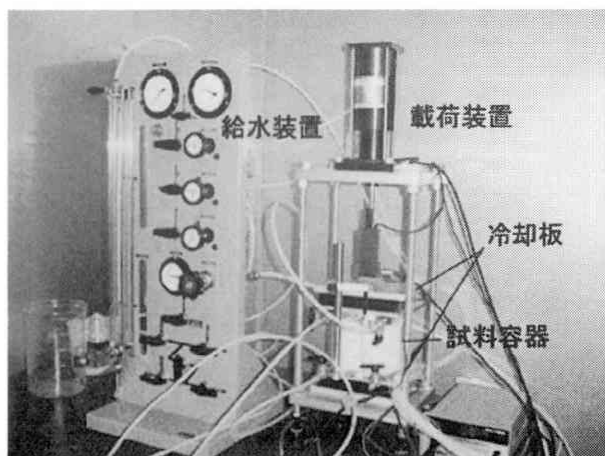


図2 多孔質体の凍上性を評価するための凍上性試験装置

# 宋元時代の江南仏教世界と舶載仏画

(3年計画の第1年次)

## 目 的

日本には、中世以来、数多くの宋元時代に制作された仏画が舶載され伝来している。これらの宋元仏画は、日本への影響の側面が重視され、等価な一群として語られることが多いが、個々の作品が、元来、中国のいかなるを文化的・社会的文脈のなかで成立したのかについては等閑視されてきた。舶載された宋元仏画は、中国における宮廷・士大夫・庶民の信仰心を反映し、その表現・内容は多種多様である。各仏画に反映する仏教信仰の宗派性も、禪宗から天台・華嚴・律・浄土教団の広がりがあり、その制作地も日中交渉の窓口であった寧波ばかりでなく江南地方の他地域に及んでいた。本研究は、このような問題意識に立ち、中国文化の中心地であり、仏教が栄えた杭州や寧波などの江南地方における有力寺院や有力教団の宗教活動に注目しながら、舶載仏画の個々の作品が、どのような場のどのような信仰や儀礼と関係し、またどのような階層の人々の関与のもとで制作されたかを明らかにし、宋元絵画史の語りを、複層的・地域的な視点から、より豊かに肉づけるとともに、高麗や日本などの東アジア世界における宋元仏画の受容の実際を、より具体的に検証していきたい。

## 成 果

日本には、中世以来、数多くの宋元時代に制作された仏画が舶載されている。一方、戦後の研究のなかで朝鮮半島の高麗時代に制作されたと認知されてきた仏画にも、じつは、中国製とみとめてよい作例も含まれている。

本年度は、まず、高麗仏画と宋元仏画の違いを明確にすることにつとめるために、一部、高麗仏画の有力な作品の調査をふくめて研究を行った。また今後2年間の調査研究を遂行するためには、宋元仏画の多様性の大枠を提示する必要があるため、南宋仏画における杭州と寧波地域との差異と共通を、天台宗関係の画像を中心に分析した。さらに、南宋仏画と元仏画との違いが、仏教と道教との習合の過程と密接な関係をもつ点に求められることを考えた。いずれも、井手誠之輔『日本の宋元仏画』に、その成果を発表している。

日本に舶載された宋元仏画の所在情報は、研究分担者との協議をとおして、すでにデータベース化を完成しており、次年度以降の調査、および写真撮影の指針を立案することができた。

### 論文発表等

- ・井手誠之輔「叡福寺蔵 涅槃変相図」『国華』1263号 2001年2月
- ・井手誠之輔『日本の宋元仏画』日本の美術第418号 至文堂 2001年3月
- ・井手誠之輔「高麗仏画の世界—宮廷周辺における願主と信仰—」『日本の宋元仏画』所収 日本の美術第418号 至文堂 2001年3月

## 研究組織

○井手誠之輔（情報資料部）、宮崎 法子（実践女子大学）、板倉 聖哲（東京大学）



# 壁画顔料の現地非破壊分析法に関する研究

(2年計画の第1年次)

## 目 的

壁画顔料の分析は、美術史的研究としての側面だけでなく、文化財の保存修復を考える上でも必要不可欠であるが、その分析のために試料を採取することは通常は許されない。そこで本研究では、壁画の現場に装置を持ち込んで、対象に対して完全に非破壊・非接触で顔料調査が行える方法を確立することを目的とする。対象に非接触の状態では、元素分析を行う方法は既にこれまでも試みられているが、壁画のように実験室に持ち込むことが不可能な文化財では、スペースや電源環境など、測定にはさまざまな制約が考えられる。そこで本研究では、既存の非破壊分析法をもとにしながら、軽量で、しかもバッテリーで駆動できる方法を確立することにより、文化財の現地調査に寄与することを目的とするものである。

## 成 果

従来から行われていた、低レベル放射線を用いた元素分析法をもとにしながら、それをバッテリー装置で稼働することを可能とし、これにより全体として4kgに満たないカメラバッグ一つに収まる大きさの装置で、対象に触れることなく元素分析を行えるに至った。これは使用場所や使用方法に関わる法律上の規制もないため、気軽に一人の人間が十分に持ち運びながら、自由に任意の場所で現地調査を行うことができることを意味する。また、線源として従来から用いられていたアメリシウム241に加え、鉄55線源によりスタンダードを測定することにより、従来に比べて低元素（カリウムや硫黄など）の計測感度を上げることに成功したため、壁画顔料を推定する上で、精度的な向上も実現された。この装置を用いることにより、函館市におけるアイヌ絵の顔料調査、出雲地方の壁画顔料の調査、そして九州装飾古墳における顔料調査などを行い、成果の一部は既に学術論文や学会発表の形で報告している。

## 研究組織

○朽津 信明（国際文化財保存修復協力センター）、下山 進（デンマテリアル）



測 定 風 景

# 菊池容斎についての基礎的研究

(2年計画の第2年次)

## 目 的

幕末から明治初年にかけて活躍した画家・菊池容斎については、幕末の俗気を帯びた画家、もしくは忠孝・攘夷思想を鼓舞した勤王画家という両極の評価が災いし、とくに戦後は研究対象として疎んじられる傾向にあった。しかし近年、明治期に洋画・日本画を問わず流行した歴史画の先駆者であるという位置づけが定着しつつあり、新出作品の紹介などもあってその注目度を高めている。そうした動向をふまえながら、本研究では容斎についての基礎的研究であることを旨とし、作品調査を中心にその実像に迫ることを目的とする。

## 成 果

### (1) 作品調査

米国・ボストン美術館にある菊池容斎の作品6点、および弟子の渡辺省亭の作品4点を調査した。うち菊池容斎の《地蔵・閻魔・脱衣婆図》《九相図》はそれぞれ弘化2年(1845)、嘉永元年(1848)の年記をもち、幕末期の容斎の画風を知る上で重要な作例。また明治4年(1871)の年記を有する渡辺省亭の《弁慶牛若》は現在確認される限りで省亭の最初期の画であり、のちに独自の花鳥画を開拓する省亭だが、この作品には歴史画家である師の作風が未だ色濃くみとめられる。

国内では個人が所蔵する菊池容斎の人物写生図を調査。前年度に調査を行った東京国立博物館所蔵の資料同様、容斎の描く歴史人物画が人体モデルの写生に基づいていることを裏付けるものであった。

### (2) 『前賢故実』の分析

菊池容斎が日本歴史上の賢人を絵画化した人物画伝『前賢故実』の人物図は、上記のように多く人体写生に基づいている。しかしながら中には過去の肖像画をほぼ踏襲したものもあり、その摘出を行いつつ『集古十種』等にみられる当時の古器旧物研究との関わりを考察した。

### (3) データ化

東京国立文化財研究所が所蔵する筆記録「災後要録」抜記のデータ化を行った。これは戦前に菊池容斎作品を多く有していた東京・神田の所蔵家の手記を抜粋したものであり、東京都下にその作品の所在が集中していたがゆえに震災・戦争によって大半が失われてしまった今日、それらをうかがう資料として貴重である。

## 研究組織

○塩谷 純(美術部)

# 可搬型分析機器を用いた未調査文化財の材質調査に関する研究

(2年計画の第1年次)

## 目 的

近年、博物館・美術館で所蔵している資料や、各地の遺跡から出土した遺物に対して様々な分析・解析が行われるようになってきた。しかし、実際に測定が行われているのは、資料そのものあるいはその一部を実験室や測定室に持ち込むことができるものだけであり、移動が困難な文化財については、ほとんど自然科学的な測定が行われていないのが実状である。

そこで本研究では、平成11年度に東京国立文化財研究所を中心として開発された可搬型の蛍光X線分析装置を大いに活用し、これまで未調査であった移動不可能な多くの文化財資料の材質調査を行うことを目的とした。材料の化学組成を中心に、顔料や鍍金銀など表面装飾の厚みの計測をその場で行うとともに、材料の劣化状況や周辺環境の調査を同時に行い、文化財のその場分析法を確立することを狙いとしている。

## 成 果

平成12年度は本研究課題の初年度として、絵画や障壁画といった平面的な資料の顔料分析を中心に行い、さらに適用範囲の拡大を狙いとして、木彫像の表面彩色の分析など、立体的で複雑な形状の資料についても分析を試みた。以下に、平成12年度に測定を行った代表的な資料と得られた結果の概要を示す。

### (1) 名古屋城本丸御殿天井画・障壁画の顔料分析

名古屋城本丸御殿の天井画および障壁画の復元模写の過程において、用いられている彩色材料や顔料の特定を目的に調査を実施した。名古屋城小天守閣において測定を実施し、剥落・変色などで材料が不明だった顔料の特定を行うことができた。

### (2) 四日市市立博物館での銅造仏の組成調査および木彫像の彩色材料調査

三重県内で近年出土した銅造仏および木彫彩色像について、四日市市立博物館で調査を実施した。彩色層の有無を確認するとともに木彫像表面の金箔厚みを評価した。

### (3) 神奈川県・称名寺本尊の彩色材料調査

称名寺において本尊弥勒菩薩立像表面の彩色材料調査を行った。台座部分に特徴のある緑色顔料が存在していることを見出した。

## 研究組織

○早川 泰弘 (保存科学部)



可搬型蛍光X線分析装置による仏像の表面彩色の測定

### 3. 個人の研究業績

#### 凡 例

#### 氏 名

- (1) 公刊図書等
- (2) 報告書
- (3) 論文
- (4) 解説、翻訳等
- (5) 学会発表
- (6) 講演会、研究会発表

#### 青 木 繁 夫 AOKI Shigeo (修復技術部)

- (1) (論文) 博物館科学『新版博物館講座』1 pp.162-167 雄山閣出版 00.4
- (4) (解説) 材料から見た鎌倉大仏(松田、青木)『週刊朝日百科日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅』7 pp.31-32 00.8
- (4) (解説) 日韓国際共同研究—文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究(青木、姜)『文化庁月報』382 pp.17-18 00.7
- (4) (解説) 酸性化による文化財被害とその対策『資源環境対策』36—11 pp.37-40 00.9
- (5) (発表) Development of Image-based Information System for Restoration of Cultural Heritage (Hongo, Matsuoka, Fujiwara, Masuda and Aoki) IAPRS, Vol XXXIII, Amsterdam 00.7
- (5) (発表) 遺跡の保存 韓国保存学会研究大会特別講演 00.5.26

#### 青 木 茂 AOKI Shigeru (美術部)

- (3) (論文)「幻の」山岡コレクション 日本近代洋画への道展図録 笠間日動美術館 01.3
- (4) (評論) よろず手控帖(八)『近代画説』9 pp.176-179 00.12

#### 石 崎 武 志 ISHIZAKI Takeshi (保存科学部)

- (2) (報告書) 平成11、12年度科学研究費補助金(基盤研究(CX2))『石造、レンガ建造物の劣化に関わる材料物性の研究』01.3
- (3) (論文) Deterioration of historical stone monuments and brick buildings and their protective measures. (Ishizaki, Simunek and van Genuchten) Proc. of the second Asia/Pacific Conference on durability of building systems harmonized standards and evaluation, pp.1-14, 00.7
- (3) (論文) Frost deterioration of historical stone monuments and brick buildings and its protective measures. Proc. on the International Symposium on Ground Freezing and Frost Action in Soils 2000, pp.79-84, 00.9
- (3) (論文) Role of water in deterioration of historical stone monuments and brick buildings in Asia, Proc. of New Millennium International Forum on Conservation of Cultural Property, pp.69-83, 00.12
- (3) (論文) Conserving compacted earth walls in a cold region. (Noborio, Ishizaki and Takeda) Proc. of New Millennium International Forum on Conservation of Cultural Property, pp.192-203, 00.12
- (3) (論文) ガラス多孔質体中のアイスレンズの観察(武藤、渡辺、石崎、溝口)『雪氷』63—1 pp.3-9 01.1
- (3) (論文) 土の凍上性評価手法に関する研究『保存科学』40 pp.22-34 01.3
- (3) (論文) 東京国立文化財研究所新宮収蔵庫の環境調査『保存科学』40 pp.120-127 01.3
- (3) (論文) 展示公開施設の館内環境調査報告—平成11年度—(石崎、佐野、三浦)『保存科学』40 pp.120-127 01.3
- (3) (論文) Evaluation of Physical Effects of Thermal Methods on Materials of Artifacts, Proc. Integrated Pest Management in Asia for Meeting the Montreal Protocol, 23rd International Symposium on the

Conservation and Restoration of Cultural Property Held by Tokyo National Research Institute of Cultural Properties. pp.99-108 01.3

- (5) (学会発表) 日本の伝統的文化財材料に対する低温処理法の物理的影響(石崎、福村) 文化財保存修復学会第22回大会 00.6.10-11
- (5) (学会発表) 土の凍結膨張率に対する温度勾配、凍結速度の影響(石崎、伊豆田、赤川) 第35回地盤工学研究発表会 00.6.12-14
- (5) (学会発表) 現場凍結膨張予測における未凍土温度勾配の影響評価(伊豆田、石崎) 第35回地盤工学研究発表会 00.6.12-14
- (5) (学会発表) 蒸発法による遺跡レンガの水分特性推定(登尾、佐々木、石崎) 日本文化財科学会第17回大会 00.7.29-30
- (6) (研究会) 文化財を構成する多孔質体材料の劣化事例 セミナー「多孔質体中の水分、塩分移動解析とその測定法」 00.12.15
- (6) (研究会) 中国山西省寺院の土壁の構造と劣化 平成12年度保存科学部研究会「壁画および土壁の保存に関する研究会」 01.3.28
- (6) (研究会) 土壁の凍結劣化に関する研究(石崎、瀧野沢) 平成12年度保存科学部研究会「壁画および土壁の保存に関する研究会」 01.3.28

井 手 誠之輔 IDE Seinosuke (情報資料部)

- (1) (著書)『日本の宋元仏画』(日本の美術第418号) 至文堂 01.3
- (3) (論文) 高麗仏画の領分 菊竹淳一・鄭于澤編『高麗時代の仏画』(日本語版) pp.368-376 時空社 00.4
- (3) (論文) 南宋の道釈絵画 嶋田英誠・中澤富士雄編『世界美術大全集東洋編6 南宋・金』 pp.123-140 小学館 00.4
- (3) (論文) 叡福寺蔵 涅槃変相図 『国華』1263 pp.41-46 01.2
- (3) (論文) 高麗仏画の世界—宮廷周辺における願主と信仰『日本の宋元仏画』(日本の美術第418号) pp.88-98 至文堂 01.3
- (3) (論文) 宋風受容の言説をめぐる一断章『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』報告書 pp.420-432 01.3
- (3) (報告) 研究会報告—日本美術史学の内と外—『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』報告書 pp.12-15 01.3
- (3) (報告) 討論—建築史学と美術史学『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』報告書 pp.52-76 01.3
- (4) (解説) 高麗仏画解説7点 菊竹淳一・鄭于澤編『高麗時代の仏画』(日本語版) 時空社 00.4
- (4) (解説) 南宋絵画解説19点 嶋田英誠・中澤富士雄編『世界美術大全集東洋編6 南宋・金』 小学館 00.4
- (4) (自著紹介) ブックレビュー 井手誠之輔『日本の宋元仏画』(日本の美術第418号 至文堂)『デアルデ』17 01.3
- (5) (学会発表) “In and Around the Koryo Royal Family; Patronage and Production of Buddhist Images”, the proceeding of International Workshop on Patrons & Art in Korea, Center for Korean Studies & Department of Art and Archaeology, School of Oriental and African Studies, University of London, 00.7.14
- (5) (学会発表) “Beliefs in the Afterlife as Represented in Buddhist Paintings of the Late Koryo Period”, in the panel of Examining Religious Beliefs within the Context of Koryo Funerary Practices, the 53rd Annual Meeting of the Association for Asian Studies, the Chicago Sheraton, 01.3.24
- (6) (研究会) 南宋の涅槃変相図をめぐって 所内総合研究会 00.6.13
- (6) (研究会) 宋風受容の言説をめぐって 美術部・情報資料部研究会 01.2.28
- (6) (研究会) 東銭湖の四時水陸道場と大徳寺伝来の五百羅漢図 美術部・情報資料部研究会 01.3.5

岡田 健 OKADA Ken (美術部)

- (1) (著書) 興福寺監修『阿修羅を極める』(共著) 小学館 01.1
- (1) (監修)『世界美術大全集東洋編3 三国・南北朝』(曾布川寛と共同監修) 小学館 00.11
- (3) (論文) 中国仏教彫塑史研究の回顧と展望—日本・韓国における中国仏教彫塑研究の意味 『美術史論壇』10 韓国美術研究所 00.8
- (3) (論文) 南北朝後期仏教美術の諸相 『世界美術大全集東洋編3 三国・南北朝』小学館 00.11
- (3) (論文) 展覧会と作品評価—青州龍興寺址出土石仏研究をめぐって— 『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』報告書 pp.237-247 01.3
- (4) (随筆) 彫刻にこめられる思い—舟越桂の木彫と仏像 『現代の眼』526 東京国立近代美術館 01.2

小田 幸子 ODA Sachiko (芸能部)

- (3) (論文)『恋重荷』演出とその歴史 『観世』9月号 00.9
- (3) (論文)『邯鄲』演出とその歴史 『観世』3月号 01.3
- (3) (論文) 金春流と『道成寺』(1, 2) 『金春月報』2月号・3月号 01.2, 3
- (4) (台本作成・監修)『碇潜』 国立能楽堂主催公演 00.4.5
- (4) (台本作成)『鐘巻』 第6回大槻文蔵の会 00.12.13

小野寺 節子 ONODERA Setsuko (芸能部)

- (2) (報告) 絵馬講の解散 『東松山上岡観音の絵馬市の習俗』 pp.41-42 東松山市教育委員会 01.3
- (2) (報告) 現在の縁日 『東松山上岡観音の絵馬市の習俗』 pp.107-117 東松山市教育委員会 01.3
- (2) (報告) 芸事の習得と発表の機会 『新宿の民俗(5)牛込地区編』 pp.30-31 新宿歴史博物館 01.3
- (2) (報告) 芸の世界 『新宿の民俗(5)牛込地区編』 pp.36-51 新宿歴史博物館 01.3
- (2) (報告) 芸能『後屋敷の民俗』 pp.237-270 山梨市史編さん委員会 01.3
- (2) (報告書)『いたばし民謡調査報告』編集 板橋区民謡等調査団 01.3
- (3) (論文) 埼玉県のものづくりに関して 特集「民謡記録ビデオ」作成の諸問題 『民俗音楽研究』25 pp.12-16 日本民俗音楽学会 00.7
- (3) (論文) 多摩と関東の祝い歌 『くにたち郷土館研究紀要』3 pp.53-63 01.3
- (3) (論文) 声と音(特論) 『青森県史民俗編 資料南部』青森県 pp.479-518 01.3
- (4) (解説) いたばしの歌—実演と収録— 板橋民謡調査公開事業 板橋民謡調査会・板橋区教育委員会 板橋区立郷土芸能伝承館 00.4.27
- (4) (解説) 日本民謡大観と松戸一家「時代を紡ぐ57」 『広報いたばし』1484 00.8
- (4) (解説) 郷土芸能のひろば 板橋区民まつり 板橋区教育委員会 00.10.17
- (4) (解説) 説経浄瑠璃鑑賞会 板橋区教育委員会 成増アクトホール 01.1.13
- (4) (採譜)「早物語」譜例作成 『青森県史民俗編 資料南部』青森県 01.3
- (4) (監修・解説) ビデオCD『いたばしの歌』 板橋区教育委員会 01.3
- (5) (学会発表) 豊島区の「長崎獅子舞」と板橋区の「徳丸四ツ竹踊り」の場合 フリーディスカッション「民俗音楽の継承を考える—地域・学校・行政—」第2回民俗音楽研究会 日本民俗音楽学会 00.8.20
- (6) (講演) 小野寺節子先生と歌う わらべうたのつどい 子育て倶楽部すういんぐ・まむ 浦和市領家南箇公民館 00.7.12
- (6) (講演) ころのうた 中央かがやき学園教養コース 川越市中央公民館 川越市中央公民館 00.9.6
- (6) (講演)「広田のささら」と獅子舞芸能 平成12年度第1回歴史セミナー 川里村教育委員会 川里村立図書館 00.9.23

勝木 言一郎 KATSUKI Gen'ichiro (情報資料部)

- (3) (論文) 唐代以前の中国における共命鳥の概念形成 『古代文化』52-12 pp.3-13 00.12
- (3) (論文) 濫觴期における敦煌学の位相 『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展



開』報告書 pp.433-454 01.3

- (4) (解説) 表紙を語る 四川料理でもてなす 『アジア遊学』 21 00.11
- (4) (解説) 人面鳥と有翼人 『古代文化』 52-11 00.11
- (4) (解説) 迦陵頻伽研究の展望 『古代文化』 52-12 00.12
- (6) (口頭発表) 中央アジア探検隊と敦煌学 美術部・情報資料部研究会 00.10.18
- (6) (講演) 中央アジア・シルクロード探検とそのコレクションについて 多摩交流センター 01.1.28
- (6) (口頭発表) キジル石窟・クムトラ石窟におけるガルダ・イメージの展開とその解釈をめぐって —「金翅鳥」から「迦楼羅」への造形推移を中心に— 内陸アジア出土古文献研究会 01.3.17

**加 藤 寛 KATO Hiroshi (修復技術部)**

- (3) (論文) 海外での輸出漆器の保管状況 『近世輸出品の保存と修復』 東京国立文化財研究所 00.7
- (3) (論文) 中国の螺鈿 『漆工史』 23 pp.84-92 00.11
- (3) (論文) 輸出漆器の技法的復元研究(1) 『保存科学』 40 pp.84-92 01.3
- (3) (論文) 一橋徳川家伝来白糸威緞胴丸具足に於ける銹金具緑青除去の研究 『保存科学』 40 pp.106-112 01.3
- (3) (解説) 在外日本古美術修復作品について 報告書『在外日本古美術品保存修復協力事業 工芸品／絵画』 東京国立文化財研究所 01.3
- (5) (講演) 献茶と法隆寺献納宝物 日本煎茶堂協会 自民党会館 00.7.22
- (5) (学会発表) 漆—不思議な樹液— 漆工史学会 林原美術館 00.11.11

**川野邊 渉 KAWANOBE Wataru (修復技術部)**

- (3) (論文) 焼損文化財の保存処置に関する研究—焼損木材の現状維持に関する研究—(杓名、川野邊) 『保存科学』 40 pp.47-51 01.3
- (3) (論文) 臼杵磨崖仏群における紫外線を用いた生物制御の試み(川野邊、朽津、早川) 『保存科学』 40 pp.64-68 01.3
- (3) (論文) 臼杵磨崖仏における表面樹脂処理試験(早川、川野邊) 『保存科学』 40 pp.69-74 01.3
- (3) (解説) 紫外線を当てて国宝の石仏を守る 『ナショナルジオグラフィック』 71 p.17 01.2
- (6) (講演) 環境が文化財に及ぼす影響 文化財建造物主任技術者研修会 上中里文化財建造物保存技術協会研修センター 00.9.14

**木 川 り か KIGAWA Rika (保存科学部)**

- (3) (論文) 低酸素濃度および二酸化炭素による殺虫法 —日本の文化財害虫についての実用的処理条件の策定— (木川、宮澤、山野、三浦、後出、木村、富田) 『文化財保存修復学会誌』 45 pp.73-86 01.3
- (3) (論文) 東大寺法華堂・戒壇堂におけるアナバチ類の被害とピレスロイド樹脂蒸散剤による防除対策(山野、木川、三浦) 『文化財保存修復学会誌』 45 pp.99-105 01.3
- (3) (論文) Low Oxygen Atmosphere and Carbon Dioxide Treatments for Eradication of Insect Pests in Japan (Kigawa, Yamano, Miura, Zippo, Miyazawa, Maekawa, Nochide, Kimura, and Tomita) Integrated Pest Management in Asia for Meeting the Montreal Protocol, Proceedings of the 23rd International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property Held by Tokyo National Research Institute of Cultural Properties pp.87-97 01.3
- (4) (解説) 今後の文化財の虫害対策(木川、山野、三浦) 『文化財の虫菌害』 40 pp.3-14 00.12
- (4) (解説) 第11章 文化財保存とオゾン層破壊 臭化メチル殺虫燻蒸に代わる方法は? (富永、木川) 馬淵、富永編 『考古学と化学をむすぶ』 pp.271-295 東京大学出版会 00.7
- (4) (解説) 美術工芸品の防虫(一部協力執筆)、掛軸装の技術の合理性と科学(渡邊) 『茶の湯と科学』 茶道学体系第8巻 pp.277-278 淡交社 00.9
- (4) (解説) 臭化メチル代替法をめぐる新しい保存技術 『記録と史料』 11 pp.13-30 01.3
- (5) (学会発表) 低酸素濃度および二酸化炭素による殺虫 —日本の文化財害虫についての実用化(2)— (木川、実宝、

宮澤、山野、三浦、後出、木村、富田) 文化財保存修復学会第22回大会 00.6.10-11

- (6) (講演) 臭化メチル燻蒸の代替策について 第22回文化財(書籍・古文書等を含む)の虫菌害保存対策研修会(財文化財虫菌研究所 00.6.30
- (6) (講演) 今後の文化財の虫害対策 第20回文化財防虫防菌処理実務講習会(財文化財虫菌研究所 00.10.26
- (6) (講演) 2005年臭化メチル全廃問題と害虫対策(青木、木川) 第26回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会研修会 00.10.31
- (6) (講演) 2005年臭化メチル全廃問題と害虫対策 埼玉県地域史料保存活用連絡協議会平成12年度実務研究会 特別講演 01.2.22
- (6) (講演) 図書館・文書館の環境管理 ―IPM(総合的害虫防除計画)を中心に― 国立国会図書館 第14回保存フォーラム 01.2.26

朽 津 信 明 KUCHITSU Nobuaki (国際文化財保存修復協力センター)

- (3) (論文) 平沢屏山作『オムシャ図』と『熊送り図』の彩色について 『Museum』566 pp.22-25 00.6
- (3) (論文) Process of salt weathering observed at a brick building, Shimoren Kiln, Central Japan. Transactions, J.G.U., 21, pp.261-276 00.7
- (3) (論文) 函館市に残る幕末・明治絵画の顔料調査(朽津、下山) 『市立函館博物館研究紀要』11 pp.1-20 01.3
- (3) (論文) フゴッペ洞窟の赤色顔料について 『余市水産博物館研究報告』4 pp.45-48 01.3
- (3) (論文) 加曽利貝塚における遺構保存を目的とした環境調査(朽津、青木) 『貝塚博物館紀要』28 pp.1-10 01.3
- (3) (論文) 臼杵磨崖仏で観察される彩色表現について 『保存科学』40 pp.52-63 01.3
- (3) (論文) 文化財の保存を目的として煉瓦の樹脂処理効果に関する研究(朽津、早川) 『保存科学』40 pp.35-46 01.3
- (3) (論文) 臼杵磨崖仏群における紫外線を用いた生物制御の試み(川野邊、朽津、早川) 『保存科学』40 pp.64-68 01.3
- (5) (学会発表) 大分県下の石仏の彩色について(朽津、山田) 文化財保存修復学会第22回大会 00.6.10
- (5) (学会発表) 非破壊・非接触によるアイヌ絵の顔料調査(朽津、下山) 日本文化財科学会第17回大会 00.7.29, 30
- (5) (学会発表) 鮎物から見た出雲大社境内遺跡の赤色顔料(朽津、景山、松尾、松本) 日本地質学会第107年学術大会 00.9.30
- (5) (学会発表) 国宝・臼杵石仏の保存に関わる応用地質学的調査(予報) 日本応用地質学会平成12年度研究発表会 00.11.1
- (6) (講演) 建築彩色の分析について 平成12年度文化財建造物主任技術者講習会(上級コース) 00.9.7

児 玉 竜 一 KODAMA Ryuichi (芸能部)

- (2) (報告書) 五代目中村歌右衛門展図録(共編) p.72 早稲田大学演劇博物館 00.9
- (4) (解説) 戦中戦後歌舞伎日録―1940～1950― 『歌舞伎 研究と批評』25 pp.42-83 00.6
- (4) (解説) 雑誌細目『文楽』『歌舞伎 研究と批評』25 pp.116-117 00.6
- (4) (コラム) 上方歌舞伎という文化 『上方芸能』137 pp.82-83 00.8
- (4) (解説) 五代目中村歌右衛門展関連企画「中村芝翫家所蔵フィルム」 早稲田大学演劇博物館 00.10.29
- (4) (解説) 片岡我当氏に聞く 『教育芸術社シリーズ・インタビュー』7 00.12
- (4) (解説) 歌舞伎編年資料篇一九八六～二〇〇〇 『歌舞伎の20世紀』pp.132-165 演劇出版社 01.1
- (4) (コラム) 近代歌舞伎新奇列伝 『春秋』1月号 pp.7-10 01.1
- (4) (解説) 山本順之氏に聞く 『教育芸術社シリーズ・インタビュー』8 01.2
- (4) (コラム) 今尾哲也先生のこと 『武蔵野日本文学』10 pp.82-83 01.3
- (5) (シンポジウム) 猿之助歌舞伎の検証 歌舞伎学会フォーラム 00.7
- (5) (学会発表) 中村芝翫家所蔵フィルムについて 歌舞伎学会秋季大会 00.12

- (6) (講演) 五代目中村歌右衛門展関連企画「山の手の歌舞伎——五代目歌右衛門の時代」 早稲田大学演劇博物館 00.10.8
- (6) (講演) 近代における歌舞伎俳優と能 武蔵野女子大学能楽資料センター公開講座 00.12.14

斎藤 英 俊 SAITO Hidetoshi (国際文化財保存修復協力センター)

- (3) (論文) 近世宮廷文化サロンの文芸と遊興の場 『茶室・露地』 茶道学大系第6巻 pp.35-63 淡交社 00.4
- (3) (論文) 建築の再生—桂離宮御殿群の修理工事から 『木の建築』 pp.9-15 木造建築研究フォーラム 00.7
- (3) (論文) 文化遺産保存の国際協力—その意義と東京国立文化財研究所の活動 『文部時報』 pp.34-37 00.11
- (3) (論文) 文化の多様性へのまなざし 『建築雑誌』 1465 p.27 日本建築学会 01.1
- (3) (論文) 歴史地区における修景の理念と方法—日独の事例を比較して— 『白川郷合掌造り集落の景観』 pp.89-95 財団法人世界遺産白川郷合掌造り保存財団 01.2
- (3) (論文) 文化と文化遺産の多様性—人類の貴重な財産として 『月刊文化財』 449 pp.6-7 01.2
- (3) (論文) 近世諸藩の建築指図の所在調査報告(後藤、山口、斎藤、吉田、伊東) 『生活環境科学研究所研究報告』 pp.23-83 宮城学院女子大学 01.3
- (6) (講演) 中世・近世住宅の食空間「食と住を通してみた日本文化」 宮城学院女子大学公開シンポジウム 00.4.22
- (6) (講演) 建築の再生—桂離宮御殿群の修理工事から「老化と再活性」 木造建築研究フォーラム総会講演会 00.5.22
- (6) (講演) 歴史的景観保存の手法「白川村荻町伝統的建造物群保存地区の景観評価に関する調査・研究報告会」 財団法人世界遺産白川郷合掌造り保存財団 00.7.14
- (6) (講演) 文化財保存における国際協力「ベトナム・ホイアン世界遺産への歩み」 昭和女子大国際文化研究所 00.10.13
- (6) (講演) 桂離宮御殿群の構造補強「日独共同研究：歴史的建造物の耐震診断と構造補強」 奈良国立文化財研究所研究会 00.10.20
- (6) (講演) 近世宮廷文化サロンと御茶屋 財団法人常陽藝文センター講演会 00.10.24
- (6) (講演) ドイツ・ルール地方の旧産業施設の活用—異なる3つの事例から「ドイツに学ぶ近代化遺産のつかい方・活かし方」 建築修復学会研究会 00.11.19
- (6) (講演) 文化と文化遺産の多様性—人類の貴重な財産として「国際シンポジウム：文化の多様性と文化遺産」 東京国立文化財研究所・文化庁 00.12.18
- (6) (講演) 文化遺産に関する国際社会の動向「世界の文化遺産を護る」 第15回「大学と科学」公開シンポジウム 01.1.28
- (6) (講演) 文化的景観の概念について 白川村伝統的建造物群保存地区保存審議会景観分科会 01.2.9
- (6) (講演) 桂離宮の意匠と技法 社団法人金沢職人大学校 01.2.9
- (6) (講演) 桂離宮の建築様式と文化的背景「炬燵を囲んで建築史」 昭和のくらし博物館講演会 01.3.3
- (6) (講演) 国際社会における文化遺産の保存 日本建築セミナー講演会 01.3.31

佐野 千 絵 SANO Chie (保存科学部)

- (2) (報告) 展示公開施設の館内環境調査報告—平成11年度—(石崎、佐野、三浦) 『保存科学』 40 pp.136-140 01.3
- (3) (論文) Degradation and Color Fading of Cotton Fabrics Dyed with Natural Dyes and Mordants (Kohara, Sano, Ikuno, Magoshi, Becker, Yatagai, Saito) "Historic Textiles, Papers, and Polymers in Museums" Edited by Jeanette M. Cardamone & Mary T. Becker, American Chemical Society pp.74-85 (2001)
- (3) (論文) Degradation and Color Fading of Silk Fabrics Dyed with Natural Dyes and Mordants (Kohara, Sano, Ikuno, Magoshi, Becker, Yatagai, Saito) "Historic Textiles, Papers, and Polymers in Museums" Edited by Jeanette M. Cardamone & Mary T. Becker, American Chemical Society pp.86-97 (2001)
- (3) (論文) 変色試験紙上に捕捉された化学種(II)—室内空気汚染物質の暴露時間依存性— 『保存科学』 40 pp.14-21 01.3

- (3) (論文) 東京国立文化財研究所新庁舎収蔵施設の空気環境 『保存科学』 40 pp.113-119 01.3
- (3) (論文) 電子線劣化など各種劣化促進処理された補修用絹の劣化機構に関する考察 (佐野、米山、川野邊、増田、三浦、馬淵) 『保存科学』 40 pp.1-13 01.3
- (3) (論文) 漆・漆類似物質の判別 『国立歴史民俗博物館研究報告』 86 pp.271-308 01.3
- (3) (報告) Chemical Effects of Various Insecticides and Fungicides on Museum Materials: Reviews and Case Studies to Japanese Antiques (SANO) "Integrated Pest Management in Asia for Meeting the Montreal Protocol", Proceedings of the 23rd International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property pp.111-124 01.3
- (4) (解説) 漆の文化財に関する科学研究 宮腰哲雄・永瀬喜助・吉田孝編 『漆化学の進歩—バイオポリマー漆の魅力—』 pp.367-396 (株)アイピーシー 00.5
- (4) (解説) 歴史的な漆工芸品の分析 (佐野、宮腰) 宮腰哲雄・永瀬喜助・吉田孝編 『漆化学の進歩—バイオポリマー漆の魅力—』 pp.397-410 (株)アイピーシー 00.5
- (4) (解説) 美術館・博物館の空気質の現状と望ましいレベル・対策 『空気清浄』 38-1 pp.20-26 00.5
- (5) (発表) 変色試験紙上に吸着された室内空気汚染物質—リモートモニタリングの可能性 第22回文化財保存修復学会大会 別府 00.6.10-11
- (5) (発表) 変色試験紙上に吸着された室内空気汚染物質—パッシブサンプリングとアクティブサンプリング 第41回大気環境学会年会 さいたま 00.9.26-28
- (5) (発表) 展示ケース内における日本画顔料へのギ酸・酢酸の吸着と変色 2000年度室内環境学会年会 東京 00.12.19-20
- (6) (講演) Deterioration of Silk by Electron Irradiation (Sano) Consultant Meeting on "The Use of Radiation for Conservation of Archaeological Artifacts" International Atomic Energy Agency ウィーン 00.6.14-16
- (6) (講演) インキによる文字の伝達—その特性 DJIエグゼクティブセミナー7「文字の伝達—インキの世界—」国際資料研究所 01.3.9

塩谷 純 SHIOYA Jun (美術部)

- (3) (論文) 「日本画」の10年—制度の内から 『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』 報告書 pp.351-367 01.3
- (3) (報告) 討論二—工芸と美術史学 『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』 報告書 pp.102-123 01.3
- (4) (解説) 下村観山《木の間の秋》、菱田春草《落葉》、速水御舟《炎舞》、前田青邨《洞窟の頼朝》、小林古徑《髪》、小倉遊亀《浴女(その1)》、横山操《溶鉱炉》、杉山寧《灼》、奥村土牛《吉野》 『20世紀の美 日本の絵画100選』 日本経済新聞社 00.10
- (4) (論説) 「菊池容斎」と明治の美術 『東美』 33 pp.51-62 01.1
- (4) (論説) 歴史画のつくりかた—菊池容斎の『前賢故実』 『is』 85 pp.64-68 01.3
- (6) (講演) 菊池容斎と明治の美術 東京美術青年会講演会 00.6.14

島尾 新 SHIMAO Arata (情報資料部)

- (1) (著書) 禅と天神 吉川弘文館 00.11
- (3) (論文) 破墨山水図の画と詩 『天開図画』 3 pp.32-46 01.3
- (3) (論文) 「雪舟研究史」雑感 『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』 報告書 pp.410-419 01.3
- (3) (報告) 討論三—書と美術史学 『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』 報告書 pp.144-158 01.3
- (4) (解説) 『皇室の至宝 東山御文庫御物』 4 毎日新聞社 00.4
- (4) (解説) 『皇室の至宝 東山御文庫御物』 5 毎日新聞社 00.9

- (5) (論説) トウトテンジンの画像 『本郷』 32 01.3
- (5) (論説) 禅宗美術の諸問題 『花園史学』 21 01.3
- (6) (発表) 特殊撮影による絵画の分析について—「源氏物語絵巻」調査の中間報告を兼ねて— 美術部・情報資料部研究会 00.6.28
- (6) (発表) 絵作りのパターン 「科学の目で見る国宝源氏物語絵巻II」シンポジウム 五島美術館 00.11.11
- (6) (講演) 禅宗美術の諸問題 花園大学歴史博物館開館記念シンポジウム 花園大学 00.11.25
- (6) (発表) 美術史研究と光学的手法 第30回文化財保存修復研究協議会「光学的方法の明日」 東京国立文化財研究所 00.12.15
- (6) (コメント) 美術館と観衆 美術史学会全国大会シンポジウム 00.5.27

**城野 誠治 SHIRONO Seiji (情報資料部)**

- (6) (発表) 特殊撮影による画像再現と可能性—蛍光撮影を中心に— 「科学の目で見る国宝源氏物語絵巻II」シンポジウム 五島美術館 00.11.11
- (6) (発表) ポリライトを用いた蛍光画像の調査 第30回文化財保存修復研究協議会「光学的方法の明日」 東京国立文化財研究所 00.12.15

**鈴木 廣之 SUZUKI Hiroyuki (情報資料部)**

- (2) (報告) <研究報告> 明治期府県博覧会—附・明治期府県博覧会調査資料目録、明治期博覧会一覧(稿)—(小林純子と共著) 『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』 報告書 pp.1-4 01.3
- (2) (報告) 明治期府県博覧会調査資料目録 『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』 報告書 pp.5-39 01.3
- (3) (論文) 「風俗画」というイデオロギー—佐藤康宏著「高雄観楓図論」(『美術史論叢』一六)への異論として— 『美術史論叢』 17 pp.39-51 01.2
- (5) (発表) 明治期におけるミュージオロジー—ゲッティ研究所の紹介をかねて— 美術部・情報資料部研究会 99.12.22 (前年度業績追記)
- (6) (講演) “Historical Survey of Japanese Art,” Lecture for the Japanese Paper Conservation Course at TNRICP, November 28, 2000.

**高桑 いづみ TAKAKUWA Izumi (芸能部)**

- (3) (論文) 鼓胴の形態変化 『東洋音楽研究』 65 pp.1-12 00.8
- (3) (博士論文) 能楽囃子の歴史的研究—楽器形態・技法・演出をめぐって— 01.2
- (3) (書評) 藤田隆則「能の多人数合唱」 『楽劇学』 8 pp.205-209 01.3
- (4) (対談) 能楽対談440回「笛の魅力を伝えたい」 『能楽タイムズ』 581 00.8
- (4) (解説) 鼓のひびき NHKラジオ 00.8.20, 27
- (5) (学会発表) 楽器史への試み—春日大社和琴をめぐって— 第436回東洋音楽学会定例研究会 01.2.10
- (6) (講演) 講座「能の演技—憑く・狂う—」 鉄仙会公開講座 第3回 物に狂う 00.4.25
- (6) (講演) 能の翁；舞の異式演出 第31回東京国立文化財研究所芸能部公開講座『「翁」の技法—舞う翁・語る翁—』 矢来能楽堂 00.10.31

**田中 淳 TANAKA Atsushi (美術部)**

- (3) (論文) 「基礎」の人—久米桂一郎の生涯と芸術— 久米美術館所蔵品目録 久米美術館 00.5
- (3) (論文) 黒田清輝と萬鉄五郎 黒田清輝と萬鉄五郎展図録 萬鉄五郎記念美術館 pp.8-15 00.7
- (3) (報告) 「近代日本美術」史の成立を考えるためのノート—「名作」という評価と「移植」という言葉— 『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』 報告書 pp.335-350 01.3
- (4) (評論) 近代美術アーカイヴとダンボール箱 『現代の眼』 523 pp.3-4 東京国立近代美術館 00.8
- (4) (評論) [展覧会評] 危機の時代と絵画—一九三〇—一九四五 『美術フォーラム21』 3 pp.145-146 00.11

- (4) (評論) [書評]「田中恭吉展」カタログ 『美術史』150 pp.251-255 01.3
- (6) (発表)「近代日本美術史」研究における「受容」の諸問題 美術部・情報資料部研究会 00.4.26
- (6) (講演) 日本近代美術における「受容」史研究の課題 京都工芸繊維大学 00.7.21
- (6) (講演) 黒田清輝と萬鉄五郎 萬鉄五郎記念美術館 00.8.6
- (6) (講演) 1912年・東京・美術―木村莊八の「日記」をとおして 国立東洋言語文化研究所・パリ大学 00.11.22
- (6) (発表) 夏目漱石の美術批評―「個」のあり方と批評する眼 国立東洋言語研究所・パリ大学 00.11.29

**津 田 徹 英 TSUDA Tetsuei** (情報資料部)

- (3) (論文) 書写山門教寺根本堂伝来 滋賀・舎那院蔵 薬師如来坐像をめぐる『佛教藝術』250 pp.53-92 00.5
- (3) (論文) ポータブル蛍光X線分析法による木彫像の彩色材料調査(三浦、早川、津田)『保存科学』40 pp.75-83 01.3
- (3) (論文) 醍醐寺霊宝館所在 五大明王像考 『佛教藝術』255 pp.13-65 01.3
- (3) (論文) 潔斎する女神―横浜・瀬戸神社像の周辺―『系累にもとづく神像彫刻の総合研究(課題番号9610062)平成9・10・11年度科学研究費補助(基盤研究(C)I)研究成果報告書』pp.36-42 01.3
- (3) (論文) 日本彫刻史研究における仏像の法量計測をめぐる『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』報告書 pp.384-409 01.3
- (5) (学会発表) 滋賀・錦織寺天安堂毘沙門天像の造立と天台系所伝「北方毘沙門天王随軍護法真言」の周辺 日本宗教文化史学会第四回大会研究発表 京大会館 00.11.25
- (6) (講演) 中世の童子形と神 第34回美術部・情報資料部公開学術講座 東京都美術館 00.10.25
- (6) (講演) 蒙古襲来と神仏 神奈川オープンカレッジ 神奈川県立金沢文庫 00.10.28

**中 野 照 男 NAKANO Teruo** (美術部)

- (1) (著書) 仏画の見かた 描かれた仏たち 『歴史文化ライブラリー110』 吉川弘文館 01.1
- (3) (論文) クムトラ出土塑像頭部再考 『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』報告書 pp.455-465 01.3
- (3) (報告) 討論四―考古学と美術史学 『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』報告書 pp.193-212 01.3
- (4) (書評) 書評 菊竹淳一・鄭于澤責任編集「高麗時代の仏画」『デアアルテ』17 pp.102-104 01.3
- (6) (発表) クムトラ石窟の現状と問題点 東洋文庫内陸アジア出土古文献研究会 00.7.8
- (6) (発表) 中国新疆キジル石窟壁画の仏伝図の諸問題 第34回美術部・情報資料部公開学術講座 00.10.25
- (6) (発表) 蔵経洞発見と東洋美術史研究 唐代史研究会秋期シンポジウム「敦煌文献の封蔵をめぐる―敦煌『発見』100年に寄せて―」 00.11.18
- (6) (発表) 元末・明の水陸画 ―毘盧寺と宝寧寺の画題― 美術部・情報資料部研究会 01.3.14

**中 村 茂 子 NAKAMURA Shigeko** (芸能部)

- (2) (報告書)『新史料翻刻による花祭りの芸能史的位置づけ―大神楽から花祭りへ―』(文部省科学研究費補助金・基盤研究(C)(2) 1998年度～2000年度) 01.3
- (4) (報告) 紀伊半島民俗芸能祭2000―子どもたちへの伝承― 『民俗芸能 研究』31 pp.80-87 00.9
- (4) (コラム) なら民俗通信83「紀伊半島民俗芸能祭2000―子どもたちへの伝承―」 『奈良新聞』 00.10.6
- (4) (解説) 第24回「茨城県郷土芸能の集い」 茨城県庁用地 00.10
- (6) (発表) 第4回「紀伊半島民俗芸能祭2000―子どもたちへの伝承―」シンポジウム 和歌山県かつらぎ総合文化会館 00.8
- (6) (発表) 鬼の芸能・鬼の行事が示唆するもの―九州を中心に― 昭和女子大学芸能史懇話会 00.9
- (6) (講演) 民俗芸能に伝承する翁猿楽の特色 第31回東京国立文化財研究所芸能部公開学術講座「『翁』の技法―舞う翁・語る翁―」 矢来能楽堂 00.10.31
- (6) (講演) 伝統文化の保存と活用―民俗芸能の催し物を中心に― 千葉県東葛飾郡関宿町公民館 00.12



西 浦 忠 輝 NISHIURA Tadateru (国際文化財保存修復協力センター)

- (2) (編集) Conservation of Monuments in Thailand (I); Proceedings of the First Seminar on Thai-Japanese Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand, The Fine Arts Department, Thailand and the Tokyo National Research Institute of Cultural Properties, Japan p.145 00.8
- (3) (論文) Conservation Treatment for the Giant Buddha of Wat Sri Chum in Sukhothai, Thailand (Nishiura, Ishizaki, Chiraporn and Kitcha), Conservation of Monuments in Thailand (I) pp.43-53 00.8
- (3) (論文) Salt weathering of the brick monuments in Ayutthaya, Thailand (Kuchitsu, Ishizaki and Nishiura), Conservation of Monuments in Thailand (I) pp.54-71 00.8
- (3) (論文) Numerical Analysis of the Water Regime of Historic Brick Buildings and Monuments in Thailand (Ishizaki, Kuchitsu and Nishiura), Conservation of Monuments in Thailand (I) pp.92-89 00.8
- (3) (論文) Conservation of Excavated Monument in Syria; Conservation Project of Ain Dara Temple<BC10> (Nishiura, Ebisawa, Inoue, Yamazaki, Hamade and Khayata), Conservation of Monuments in Thailand (I) pp.124-133 00.8
- (3) (論文) 我が国による文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点〔2〕(二神、西浦)『保存科学』40 pp.128-135 01.3
- (4) (論説) 木造文化財の保存と修復(西浦、今津)『木材工業技術短信』18-1 pp.1-11 00.5
- (4) (論説) 21世紀の考古学は保存と一体である『生きる』別冊 pp.43-47 01.2
- (4) (解説) シリアのアインダラ神殿遺跡の保存修復「JAPAN ICOMOS INFORMATION」4-11 pp.20-22 00.6
- (5) (発表) 古建築の保存を目的とした古瓦の強化防水処理—屋外曝露20年後の処理瓦の物性—(西浦、高品) 第22回文化財保存修復学会大会 00.6.10
- (5) (発表) 磨崖仏これからの千年(パネルディスカッション) 第22回文化財保存修復学会大会 00.6.10
- (5) (発表) New Conservation Method for Stone Remains Applying Traditional Mud Wall Technique—Conservation Treatment of Remains at Ranigat Site, Gandhara, Pakistan (Nishiura, Masui and Ebisawa), Tradition and Innovation; Advances in Conservation, IIC Melbourne Congress 00.10.10-14
- (6) (発表) Preservation and Maintenance of Monuments After Restoration, A Comparative Study: Thailand, Pakistan and Syria, Fifth Bayon Symposium in Siem Reap, Cambodia 00.12.12
- (6) (発表) タイ・スコタイ遺跡の大仏の保存修復 第15回「大学と科学」公開シンポジウム：世界の文化遺産を護る 01.1.28
- (6) (発表) 文化遺産の保護と国際協力—よりよい保存修復協力に向けて—(パネルディスカッション) 第15回「大学と科学」公開シンポジウム：世界の文化遺産を護る 01.1.28

野 川 美穂子 NOGAWA Mihoko (芸能部)

- (3) (論文) 江戸音曲の平曲受容 軍記文学研究叢書第12『軍記語りと芸能』pp.243-271 汲古書院 00.11
- (4) (解説) 歌詞になった浦島伝説—《蓬萊》《寿くらべ》—『山田流箏曲協会会報』23 00.5
- (4) (解説)『日本歴史大事典』小学館 00.
- (5) (学会発表) 楽器史への試み—春日大社和琴をめぐって—第436回東洋音楽学会定例研究会 01.2.10
- (6) (発表) 三味線組歌《浮世組》京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究会 00.12.9 01.1.8

早 川 典 子 HAYAKAWA Noriko (修復技術部)

- (3) (論文) 白杵磨崖仏群における紫外線を用いた生物制御の試み(川野邊、朽津、早川)『保存科学』40 pp.64-68 01.3
- (3) (論文) 事例報告：白杵磨崖仏における表面樹脂処理試験(早川、川野邊)『保存科学』40 pp.69-74 01.3
- (3) (論文) 文化財の保存を目的とした煉瓦の樹脂処理効果に関する研究(朽津、早川)『保存科学』40 pp.35-46 01.3
- (3) (報告) ミネアポリス美術館所蔵阿弥陀来迎図 表面除去物質分析報告『在外日本古美術品保存修復協力事業修

理報告書 工芸品/絵画』 pp.269-271、274 平成12年度

- (5) (発表) 古糊の物性と化学組成に関する基礎的研究(早川、川野邊、岡墨光堂) 文化財保存修復学会第22回大会 00.6.10
- (6) (講演) 漆芸品クリーニングの際の溶剤選択 漆文化財修復技術講座 木曽地域産業振興センター 00.9.23

早 川 泰 弘 HAYAKAWA Yasuhiro (保存科学部)

- (3) (論文) 江戸時代銀貨の色揚げに関する調査(早川、三浦、大貫) 『文化財保存修復学会誌』 45 pp.44-60 01.3
- (3) (論文) ポータブル蛍光X線分析法による木彫像の彩色材料調査(早川、三浦、津田) 『保存科学』 40 pp.75-83 01.3
- (4) (解説) 分析化学と特許問題 『ぶんせき』 7 p.425 00.7
- (4) (解説) -社会生活と分析化学- 考古学と分析 『ぶんせき』 11 pp.652-657 00.11
- (4) (解説) 中国二里头遺跡出土青銅器の化学組成(早川、平尾、金、鄭) 『古代東アジア青銅の流通』 pp.175-186 01.2
- (5) (発表) 蛍光X線分析法による江戸期銀貨の化学組成の測定(早川、三浦、大貫) 第61回分析化学討論会 00.5.17
- (5) (発表) Analysis of the Pigments Used in the Scroll Paintings of *the Tale of Genji*, National Treasure, by Portable X-ray Fluorescence Spectrometer (Sugihara, Tamura, Satoh, Hayakawa, Hirao, Miura, Yotsutsuji, Tokugawa) 49th Annual Denver X-ray Conference 00.8.2
- (5) (発表) アイヌ玉の化学組成と産地(佐々木、斉藤、中井、早川、平尾) 日本文化財科学会第17回大会 00.7.29
- (5) (発表) オージェ電子分光法による江戸期銀貨表面の元素分布の測定(早川、三浦、大貫) 日本分析化学会第49年会 00.9.26
- (5) (発表) On-site XRF Analysis for the Materials Characterization of Cultural Properties (Hayakawa, Hirao, Satoh, Sugihara, Tamura) 2001 Pittsburgh Conference 01.3.6
- (6) (講演) ポータブル蛍光X線分析装置による文化財材料の調査 台湾大学講演会「材料の元素分析に関する検討会」 00.6.27
- (6) (講演) ポータブル蛍光X線分析装置による文化財の材質調査 中国社会科学院講演会「文化財の調査・保存に関する研究会」 00.10.25
- (6) (講演) 蛍光X線分析による顔料の同定 「科学の目で見る国宝源氏物語絵巻II」シンポジウム 五島美術館 00.11.11
- (6) (講演) ポータブル蛍光X線分析装置の利用 文化財保存修復研究協議会 「光学的方法の明日」 東京国立文化財研究所 00.12.15

平 尾 良 光 HIRAO Yoshimitsu (保存科学部)

- (1) (編著) 平尾良光編 『古代東アジア青銅の流通』 鶴山堂(東京) 01.2
- (2) (報告) 有田遺跡群第177次調査ST001・002から出土した弥生時代青銅鏡についての鉛同位体比(平尾、鈴木) 「福岡市有田・小田部 第34集」 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第651集』 pp.49-54 00.4
- (2) (報告) 上月隈遺跡群第3次調査ST007甕棺墓から出土した中細形銅剣の鉛同位体比(平尾、鈴木) 「上月隈遺跡群3」 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第634集』 pp.29-33 00.4
- (2) (報告) 高塚遺跡出土の銅鐸・貨泉・棒状銅製品の鉛同位体比(馬淵、平尾、榎本、早川) 「高塚遺跡 三手遺跡2」 『山陽自動車道建設に伴う発掘調査18』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150 pp.1063-1070 00.5
- (2) (報告) 長野県須坂市の八丁鎧塚2号墳から出土した帯金具の自然科学的研究(平尾、榎本、小林) 須坂市教育委員会編 『長野県史跡『八丁鎧塚』』 pp.37-48 00.5
- (2) (報告) 下栗野方台遺跡から出土した銅製品の自然科学的研究(早川、榎本、平尾) 『村史紀要 千代川村の生活 第6号』 pp.21-32 00.6
- (2) (報告) 風返稲荷山古墳出土資料の鉛同位体比(平尾、榎本、早川) 霞ヶ浦町教育委員会編 『風返稲荷山古墳』

pp.243-252 00.6

- (2) (報告) ガラス材料の鉛同位体比と化学組成(平尾、榎本、早川) 『「北周田弘墓」原州聯合考古隊発掘調査報告2』 pp.85-97 00.6
- (2) (報告) 福岡県平原遺跡から出土した大型内行花文八葉鏡12号鏡の破片に関する考察(早川、鈴木、平尾) 『「平原遺跡」前原市文化財調査報告書第70集』 pp.121-124 00.6
- (2) (報告) 埼玉県立博物館が所蔵する銅鐸の自然科学的研究(早川、鈴木、平尾) 『埼玉県立博物館紀要』26 pp.13-16 01.3
- (3) (論文) 神戸市立博物館が所蔵する桜ヶ丘銅鐸・銅戈の鉛同位体比(平尾、鈴木、早川) 神戸市立博物館編 『国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈』 pp.83-92 00.5
- (3) (論文) 天馬-曲村遺跡西周墓地青銅器的鉛同位素比值研究(金、チェイス、平尾、馬淵) 鄒衛主編 『天馬-曲村発掘報告書』付録5 pp.1174-1177 00.12
- (3) (論文) Analysis of pigments used in scroll paintings of a national treasure "Tale of Genji" using a portable X-ray fluorescence spectrometer (Sugihara, Tamura, Sato, Hayakawa, Hirao, Miura, Yotsusuiji and Tokugawa) "X-ray Fluorescence Conference Volume in 2000" 01.2
- (3) (論文) 古代中国青銅器の自然科学的研究(平尾、早川、金、チェイス) 『古代東アジア青銅の流通』 pp.93-140 鶴山堂(東京) 01.2
- (3) (論文) 中国北方系民族の青銅器(高浜、早川、平尾) 『古代東アジア青銅の流通』 pp.187-252 鶴山堂(東京) 01.2
- (3) (論文) 古代の銅の科学 『古代東アジア青銅の流通』 pp.308-325 鶴山堂(東京) 01.2
- (4) (解説) 大仏の材料の産地はどこか 『週刊朝日百科日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅』7 pp.32-33 00.8
- (4) (解説) 鉛同位体比法の可能性 『考古学ジャーナル』470 pp.9-13 01.2
- (5) (発表) アイヌガラスの化学組成(佐々木、齋藤、中井、早川、平尾) 第17回日本文化財科学会 佐倉市民音楽ホール 00.7.29
- (5) (発表) 愛媛県朝日谷古墳出土銅鐸の鉛同位体比(平尾、榎本、早川、管井、渡辺、梅木) 第17回日本文化財科学会 佐倉市民音楽ホール 00.7.29
- (6) (講演) 文化財資料の非破壊的測定 韓国湖巖美術館 00.5.24
- (6) (講演) 古代中国北方民族の青銅器の鉛同位体比 中国文物局文物研究所 00.10.25

## 二 神 葉 子 FUTAGAMI Yoko (国際文化財保存修復協力センター)

- (3) (論文) 我が国による文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点(II)―国際文化財保存修復研究会からの知見(2)―(二神、西浦) 『保存科学』40 pp.128-135 01.3
- (4) (翻訳) 戦国古貨幣の鉛同位体比の研究―また、同時期の広東嶺南の鉛について(金正耀ほか著) 『古代東アジア青銅の流通』 pp.255-264 01.2
- (4) (翻訳) 江西新干大洋洲商墓青銅器の鉛同位体比の研究(金正耀ほか著) 『古代東アジア青銅の流通』 pp.265-269 01.2
- (4) (翻訳) 広漢三星堆遺物坑青銅器の鉛同位体比の値に関する研究(金正耀ほか著) 『古代東アジア青銅の流通』 pp.270-278 01.2
- (4) (翻訳) 中国両河流域青銅文明の間の関係―出土商代青銅器の鉛同位体比の研究結果を中心として(金正耀ほか著) 『古代東アジア青銅の流通』 pp.279-286 01.2
- (4) (翻訳) 商代青銅器中の高放射性成因鉛：三星堆器物とサックラー美術館収蔵品との比較研究(金正耀ほか著) 『古代東アジア青銅の流通』 pp.287-293 01.2

## 星 野 紘 HOSHINO Hiroshi (芸能部)

- (1) (編著) 星野紘、野村伸一編著 『歌・踊り・祈りのアジア』 勉誠社 00.11
- (1) (著書) 星野紘、チモフェイ・モルダノフ共著 『シベリア ハンティ族の熊送りと芸能』 勉誠社 01.2
- (3) (論文) 神歌にみる沖縄と雲南の類似点 『沖縄と中国少数民族の基層文化の比較研究』 pp.37-48 沖縄県立芸

術大学付属研究所 01.3

- (4) (解説) 綾子舞 「第11回全国地芝居サミット」(新潟県松之山町) (社)全日本郷土芸能協会、松之山町主催 00.8.27
- (4) (解説) 中国毛南族の師公舞 「平成12年度国際民俗芸能フェスティバル 福井公演」 文化庁、福井県教育委員会主催プログラム 00.10.8
- (4) (解説) 中国毛南族の師公舞 「平成12年度国際民俗芸能フェスティバル尾道公演」 文化庁、広島県教育委員会主催プログラム 00.10.14
- (4) (解説) 神楽について 「平成12年度国民文化祭・神楽の祭典」(広島県美土里町) 文化庁、広島県主催 00.11.4
- (4) (解説) 綾子舞 「第50回全国民俗芸能大会」文化庁企画(財)日本青年館主催プログラム 00.11.25
- (5) (学会発表) 中国田間遊戯表現芸術 「海峡兩岸昆侖文化考察与學術研討会」(中国青海省西寧市) 中国青海省文化庁、台湾伝統芸術中心主催 00.8.13
- (5) (学会発表) 民俗音楽の継承を考えるー地域・学校・行政の役割ー「日本民俗音楽学会・第2回民俗音楽研究会」(群馬県高山村) 00.8.19
- (6) (講演) アジアの中の民俗芸能 「平成12年度東京国立文化財研究所芸能部夏期学術講座」 00.7.17-19
- (6) (講演) 民俗芸能復活再生への方策 「平成12年度伊那民俗芸能団体連絡協議会総会」(長野県喬木村) 00.7.27
- (6) (講演) 21世紀へつなぐ日本の民俗芸能 「民俗芸能指導者研修会」(国立オリンピック記念青少年総合センター) (社)全日本郷土芸能協会主催 01.3.22

増 田 勝 彦 MASUDA Katsuhiko (修復技術部)

- (5) (発表) 揉みから紙の製作技法 文化財保存修復学会大会 00.6.10-11
- (5) (発表) 歴史絵画の補修用資材として放射線劣化絹を利用するー放射線劣化絹を用いた歴史的絵画の補修技術ー Consultant Meeting on “The Use of Radiation for Conservation of Archaeological Artifacts” IAEA国際原子力機関本部 00.6.12-18
- (6) (講演) 材料と環境 一橋大学社会科学古典資料センター主催第1回西洋古典資料保存講習会 00.7.5
- (6) (講演) さわって考えるー古くて新しい和紙の話ー 長野市立博物館特別展「風土がはぐくんだ信濃の和紙」記念講演会 00.8.27
- (6) (講演) 修復概論 東京国立文化財研究所博物館実習 00.9.1
- (6) (講演) 材料特論ー紙についてー 文化財建造物主任技術者講習会上級コース 00.9.14
- (6) (講演) 史料の保存環境と劣化損傷要因/劣化損傷史料の保存修復 国立史料館史料管理学研修 00.9.18-19
- (6) (講演) 阪神淡路大震災と文化財保存ー官と民の活動ー 台湾国立歴史博物館主催地震災後文化資産保存維護国際学術研討会 00.10.15-18
- (6) (講演) 日本における種々の表装技術 国際研修「紙の保存修復」 00.11.27/12.21
- (6) (講演) 絵画と古文書の修復 朝日カルチャーセンタ公開講座 01.1.6-20/2.3/2.17
- (6) (講演) 和紙についてわかったこと 東京国立文化財研究所総合研究会 01.3.13

松 原 美智子 MATSUBARA Michiko (国際文化財保存修復協力センター)

- (4) (翻訳) On the Publication of the Restoration Report (WATANABE Akiyoshi) 「在外日本古美術品修復協力事業修理報告書 工芸品/絵画」 東京国立文化財研究所 p.2 01.3
- (4) (翻訳) Conservation and Exhibition of a Work of Japanese Art in a Foreign Collection (KAWAHARA Osamu) 「在外日本古美術品修復協力事業修理報告書 工芸品/絵画」 東京国立文化財研究所 pp.4-5 01.3
- (4) (翻訳) Color Captions 「在外日本古美術品修復協力事業修理報告書 工芸品/絵画」 東京国立文化財研究所 pp.25-28 01.3
- (4) (翻訳) On the Restoration of the “*Dai-Hannyakyo Zushi*” in the Collection of The Cleveland Museum of Art, Ohio, U.S.A. (KITAMURA Shosai) 「在外日本古美術品修復協力事業修理報告書 工芸品/絵画」 東京国立文化財研究所 pp.55-65 01.3
- (4) (翻訳) On the Restoration of “*Hoo-mon Makie Raden Quiver*” in the Collection of The Metropolitan

Museum of Art (KATSUMATA Satoshi) (澤田美由紀と共訳) 「在外日本古美術品修復協力事業修理報告書 工芸品/絵画」 東京国立文化財研究所 pp.93-111 01.3

- (4) (翻訳) On the Restoration of “Kuro-urushi Helmet” in the Collection of The Metropolitan Museum of Art, New York (TAGUCHI Yoshiaki) 「在外日本古美術品修復協力事業修理報告書 工芸品/絵画」 東京国立文化財研究所 pp.122-128 01.3
- (4) (翻訳) On the Restoration of “Kikumon Raden Saddle” in the Collection of The Metropolitan Museum of Art, New York (YAMASHITA Yoshihiko) 「在外日本古美術品修復協力事業修理報告書 工芸品/絵画」 東京国立文化財研究所 pp.144-155 01.3
- (4) (翻訳) On the Restoration of “Hyotan Makie Hyomon Saddle” in the Collection of Museum für Östasiatische Kunst, Köln (YAMASHITA Yoshihiko) 「在外日本古美術品修復協力事業修理報告書 工芸品/絵画」 東京国立文化財研究所 pp.171-184 01.3
- (4) (翻訳) Analyses of Materials for Restoration of Exported Urushiware (HAYAKAWA Noriko and KUCHITSU Nobuaki) 「在外日本古美術品修復協力事業修理報告書 工芸品/絵画」 東京国立文化財研究所 p.202 01.3
- (4) (翻訳) Illustrations 「在外日本古美術品修復協力事業修理報告書 工芸品/絵画」 東京国立文化財研究所 pp.204-209 01.3
- (4) (翻訳) Glossary of Urushi Terms 「在外日本古美術品修復協力事業修理報告書 工芸品/絵画」 東京国立文化財研究所 pp.215-228 01.3

松 本 修 自 MATSUMOTO Shuji (国際文化財保存修復協力センター)

- (3) (論文) 遺跡建造物の保存修復、その理念と実践—ギリシャ・アクロポリスを中心として—(下) 『文建協通信』 59 pp.2-29 00.7
- (3) (論文) The Preservation of Traditional Craftsmanship and Skills in Japan in Relation to Architectural Restoration “Das Konzept ‘Reparatur’, Ideal und Wirklichkeit” (ICOMOS Hefte des Deutschen Nationalkomitees X X X II München, 2000) pp.52-55 00.
- (4) (解説) Vent’anni di Restauro “Il Giornale dell’ Architettura” (Il Giornale dell’Arte N.189 Torino, Giugno 2000) pp.17 00.6

三 浦 定 俊 MIURA Sadatoshi (保存科学部)

- (3) (論文) 博物館・美術館の環境づくり—文化財にも人にも優しい施設を— 文化財保存修復学会編 『文化財の保存と修復 2 —博物館・美術館の果たす役割』 pp.27-36 クバ・プロ刊 00.6
- (3) (論文) 保存箱の科学 千宗室監・堀内國彦編 『茶の湯と科学』 茶道体系第8巻 pp.270-276 淡交社刊 00.9
- (3) (論文) 今後の文化財の虫害対策(木川、山野、三浦) 『文化財の虫菌害』 40 pp.3-14 00.12
- (3) (論文) 江戸時代銀貨の色揚げに関する調査(早川、三浦、大貫) 『文化財保存修復学会誌』 45 pp.44-60 01.3
- (3) (論文) 低酸素濃度および二酸化炭素による殺虫—日本の文化財害虫についての実用処理条件の策定—(木川、宮澤、山野、三浦、後出、木村、富田) 『文化財保存修復学会誌』 45 pp.73-86 01.3
- (3) (論文) 東大寺法華堂・戒壇堂におけるアナバチ類の被害とピレスロイド樹脂蒸散剤による防除対策(山野、木川、三浦) 『文化財保存修復学会誌』 45 pp.99-105 01.3
- (3) (論文) ポータブル蛍光X線分析法による木彫像の彩色材料調査(早川、三浦、津田) 『保存科学』 40 pp.75-83 01.3
- (3) (論文) 国宝「武蔵埼玉稲荷山古墳出土品」修復1—銀装馬具について—(大森、早川、三浦、青木) 『保存科学』 40 pp.93-104 01.3
- (3) (論文) 展示公開施設の館内環境調査報告—平成11年度—(石崎、佐野、三浦) 『保存科学』 40 pp.136-140 01.3
- (3) (論文) Methyl Bromide Phase-out: Controversial Points for Future Pest Control (Miura) Integrated Pest



Management in Asia for Meeting the Montreal Protocol, Proceedings of the 23rd International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property pp.37-46 01.3

- (4) (解説) 収納展示機器の地震対策 『文化財保存修復学会誌』 45 pp.128-140 01.3
- (4) (解説) フゴッペ洞窟発見から50年(下) 保存と活用 『北海道新聞』(夕刊) 00.11.16
- (5) (発表) 低酸素濃度および二酸化炭素による殺虫—日本の文化財害虫についての実用化(2)—(木川、実宝、宮澤、山野、三浦、後出、木村A 富田) 文化財保存修復学会第22回大会 00.6.10-11
- (5) (発表) 土の遺構保存—樹脂散布による土の水分蒸発抑制の研究—(三石、青木、三浦) 文化財保存修復学会第22回大会 00.6.10-11
- (5) (発表) InGaAs 赤外線 CCDカメラの文化財調査への応用 文化財保存修復学会第22回大会 00.6.10-11
- (5) (発表) Development of Preventive Measures against Earthquakes: Japanese Experiences, IIC Melbourne Congress—Tradition and Innovation, Advances in Conservation— 00.10.10-14
- (6) (講演) 文化財の保存と計測技術 第61回分析化学討論会(長岡) 00.5.17-18
- (6) (講演) 文化財の保存環境 愛知県重要文化財所有者連絡協議会総会(名古屋) 00.6.7
- (6) (講演) 文化財の保存とデジタル情報化 地域文化情報セミナー(東京) 00.6.26
- (6) (講演) 臭化メチルの使用規制について 第22回文化財(書籍・古文書等を含む)の虫菌害保存対策研修会(東京) 00.6.30
- (6) (講演) 国宝日光東照宮陽明門彩色の秘密 文化財の保存と修復—伝統に生かすハイテク技術—(東京) 00.10.7
- (6) (講演) 科学的分析の実際 平成12年度回指定文化財(美術工芸品)修理技術者講習会(東京) 00.10.26
- (6) (講演) 梱包の科学 第2回指定文化財(美術工芸品)企画・展示セミナー(東京) 00.7.12(京都) 00.11.17
- (6) (講演) 古美術品を科学する—何でできているのだろうか— 朝日カルチャーセンター(東京) 00.11.18
- (6) (講演) フゴッペ洞窟の保存と活用 発見50周年記念フゴッペ洞窟シンポジウム(北海道) 00.11.19
- (6) (講演) 文化財の非破壊計測 日本分析化学会関東支部山梨地区講演会(山梨) 00.11.22
- (6) (講演) 古美術品を科学する—どのように作られているのだろうか— 朝日カルチャーセンター(東京) 00.12.2
- (6) (講演) 博物館の保存環境 アジア・太平洋地域文化遺産保護調査修復研修(奈良) 00.12.8
- (6) (講演) 古美術品を科学する—なぜ傷んだのだろうか— 朝日カルチャーセンター(東京) 00.12.16
- (6) (講演) 国宝源氏物語絵巻の非破壊調査 日本学術振興会第36産業計測委員会(東京) 01.2.23

山 梨 絵美子 YAMANASHI Emiko (美術部)

- (3) (論文) 明治期の洋画界における林忠正の位置づけをめぐって 『林忠正コレクション』別冊 ゆまに書房 00.9
- (3) (論文) ふたつの『林忠正蒐集西洋絵画図録』について 『林忠正コレクション』別冊 ゆまに書房 00.9
- (3) (報告) 大正後期の洋画壇における東洋的傾向についての一考察 『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』報告書 pp.323-334 01.3
- (4) (書評) 吉田和正著 「アウトローと呼ばれた画家」 『週刊ポスト』 6月23日号 00.6
- (4) (書評) 津神久三著 「画家たちのアメリカ」 『週刊ポスト』 9月29日号 00.9
- (4) (解説) それぞれの分野からみたトヨタコレクション 美術史学 『国立科学博物館ニュース』 381 00.12
- (6) (発表) 黒田清輝とラファエル・コラン 美術部・情報資料部研究会 00.5.24
- (6) (発表) 日本最初の写真師の一人横山松三郎画。書画から西洋画へ シンポジウム 「江戸時代のモノづくり—日本の科学技術の源流」 国立科学博物館 01.3.6

山 野 勝 次 YAMANO Katsuji (保存科学部)

- (1) (著書) 被害・探知・予防 日本しろあり対策協会編 『シロアリと防除対策』 pp.127-166 00.11
- (2) (報告) 平塚市美術館における生物被害調査報告 01.3.15
- (2) (報告) 国立歴史民俗博物館における生物被害調査報告 01.3.19
- (3) (論文) 今後の文化財の虫害対策(木川、三浦) 『文化財の虫菌害』 40 pp.3-14 00.12
- (3) (論文) 低酸素濃度および二酸化炭素による殺虫法：日本の文化財害虫についての実用的処理条件の策定(木川、



宮澤、三浦、後出、木村、富田)『文化財保存修復学会誌』45 pp.73-86 01.3

- (3) (論文) 東大寺法華堂・戒壇堂におけるアナバチ類の被害とピレスロイド樹脂蒸散剤による防除対策 (木川、三浦)『文化財保存修復学会誌』45 pp.99-105 01.3
- (3) (論文) Low Oxygen Atmosphere and Carbon Dioxide Treatments for Eradication of Insect Pests in Japan (Kigawa, Yamano, Miura, Zippo, Miyazawa, Maekawa, Nochide, Kimura, and Tomita) Integrated Pest Management in Asia for Meeting the Montreal Protocol, Proceedings of the 23rd International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property Held by Tokyo National Research Institute of Cultural Properties pp.87-97 01.3
- (4) (解説) 文化財防虫防菌用認定薬剤について『文化財の虫菌害』39 pp.22-24 00.6
- (4) (解説) 文化財害虫の防除対策: 虫害ゼロを目指して独自の総合的害虫管理システムの確立を『文化財の虫菌害』40 pp.51-55 00.12
- (4) (解説) シロアリならびにシロアリ被害の探知・診断方法 日本住宅・木材技術センター編『森林資源有効活用促進調査事業報告書』(木造住宅のメンテナンスマニュアル作成に関する調査) pp.100-110 01.3
- (5) (学会発表) 低酸素濃度および二酸化炭素による殺虫: 日本の文化財害虫についての実用化(2) (木川、実宝、宮澤、三浦) 文化財保存修復学会第22回大会 00.6.10
- (6) (講演) シロアリ 日本家屋害虫学会第3回基礎講座 00.10.24
- (6) (講演) 文化財害虫と防除対策 第20回文化財防虫防菌処理実務講習会 00.10.26
- (6) (講演) 昆虫の基礎的知識・昆虫による文化財の被害と防除・文化財の殺虫燻蒸 第22回文化財虫菌害防除作業主任者資格認定試験とその講習会 01.2.6

吉 村 稔 子 YOSHIMURA Noriko (情報資料部調査員)

- (4) (解説) 仏画解説10点『寛永寺及び子院所蔵文化財総合調査報告(第二巻)絵画編』東京都教育庁生涯学習部文化課 01.3

米 倉 迪 夫 YONEKURA Michio (情報資料部)

- (2) 美術史の場『文部省科学研究費・基盤研究(A)(2) 日本における美術史学の成立と展開』報告書 pp.214-221 01.3
- (5) (発表) 描かれた姿かたちの問題—伝源頼朝像をめぐる—: 軍記物語り物研究会2000年度大会 国学院大学栃木短期大学 00.8.22
- (5) (発表) 私たちは何を知りたいのか「科学の目で見る国宝源氏物語絵巻II」シンポジウム 五島美術館 00.11.11
- (5) (発表) 神護寺画像のゆくえ 美術部・情報資料部研究会 01.3.21

渡 邊 明 義 WATANABE Akiyoshi (所長)

- (3) (論文) 掛軸装の技術の合理性と科学性『茶の湯と科学』茶道大系第8巻 pp.246-265 淡交社 00.12
- (3) (論文) 文化の多様性と文化遺産—求められる対応力—『月刊文化財』449 pp.4-5 01.2

## 4. 事業

### 1. 研究集会など

#### (1) 国際研究集会

文化財保護法50年記念国際シンポジウム「文化の多様性と文化遺産」  
(第24回文化財の保存および修復に関する国際研究集会)

##### 開催趣旨

西暦2000年は、20世紀最後の年であると同時に、日本の文化財保護の歩みにとっても記念すべき年であった。すなわち、文化財保護法の1950（昭和25）年制定から50周年に当たったのである。これを記念して、文化庁との共催のもと、12月18日から21日までの4日間に亘り、東京国立博物館大講堂において国際シンポジウムを開催した。

「多様性」という概念をテーマとしたことには、いくつかの背景がある。すなわち、1994年に奈良で開催された、文化遺産のオーセンティシティについての国際会議の結論として、「奈良ドキュメント」が採択されたが、その全13項目のうち、「文化の多様性と遺産の多様性」に4項目が割かれ、ユネスコや国際社会がこのことを配慮し、尊重すべきことを強くうたった。以降この主張は世界の遺産保護の現代的指針となった感がある。その反面、価値の多様性を標榜して、文化遺産についての身勝手な解釈や破壊が横行したり、また地球的規模の文化の均一化が急速に進んだ結果、貴重な地域固有の文化が失われる、といったことが起こってきた。

そこで、「地球化」が進む今、文化と文化遺産の「多様性」の真の意味を見直し、それをさらに世界に発信するために、この主題が企画された。これは、50年を記念するわが国の文化財保護法にも大きなかわりを持つ。保護法は制定当初から「無形文化財」という概念を持ち、また「記念物」のなかには「名勝」や「天然記念物」といった範疇を織り込んでいるが、これは世界でも類のない先進的な独自性であり、まさに日本の伝統や感性によってはぐくまれた「多様性」を体現したものである。国際社会が「無形文化遺産」の重要性を意識し、議論するようになったのは、つい最近のことにすぎない。

会議は、京都での二日間の事例視察の後、東京国立博物館大講堂を会場として、以下の4つのセッション、計16名の講演と討議が行われ、最終日の総合討議において、「文化の多様性と文化遺産に関する東京宣言」が採択された。宣言の原文（英語）ならびに和訳は研究所のホームページに掲載した。

12月18日

開会の辞 渡邊 明義（東京国立文化財研究所）

挨拶 佐々木正峰（文化庁長官）

趣旨説明 斎藤 英俊（東京国立文化財研究所）、野口 英雄（同）

〈基調講演1〉

セナカ・バンダラナイケ（インド駐在スリランカ大使）

「文化の多様性と文化遺産」

〈基調講演2〉

石井 米雄（神田外語大学長）

「民族のアイデンティティとしての文化遺産」

12月19日

〈セッション1：『多様な文化と文化遺産』〉

議長：サイード・ツルフィカー（エジプト）、西浦忠輝（東京国立文化財研究所）

主題解説 議長

報告1 アウグスト・ピラロン (フィリピン)

「フィリピン山脈とバタネス群島の棚田：困難に直面している伝統」

報告2 本中 眞 (文化庁)「名勝：文学・芸術と景観」

報告3 シルヴィ・ギシャール・アウニス (フランス)

「日本の木の小箱から世界の文化の多様性の概念まで」

報告4 D.D. ディエン (ユネスコ)「文化の多様性の意味」

〈セッション2：『多様性への理解、尊重、共有』〉

議長：ディヌ・ブンバル (カナダ)、松本修自 (東京国立文化財研究所)

主題解説 議長

報告1 笹村 二郎 (北海道ウタリ協会理事長)

「アイヌ文化の復興と継承」

報告2 ガイア・スカルソープ (オーストラリア)

「オーストラリアのアボリジニーと非アボリジニーの「場所の価値」の融和」

報告3 オマーク・アパング (インド)

「多民族国家インドの文化と文化遺産」

報告4 アゼディン・ベシャウシ (チュニジア)

「多様な信仰と文化遺産」

〈パネルディスカッション1：『文化の多様性と文化遺産の役割』〉

コーディネーター：ジョーン・ドミセリ (オーストラリア)

パネリスト1：セナカ・バンダラナイケ (スリランカ)

パネリスト2：ラム・イウ・トン (中国)

パネリスト3：ディヌ・ブンバル (カナダ)

パネリスト4：エディ・セディヤワティ (インドネシア)

12月20日

〈セッション3：『多様性を脅かすもの、または豊かにするもの』〉

議長：ジョーン・ドミセリ (オーストラリア)、宗田好史 (京都府立大学)

主題解説 議長

報告1 ラザール・スマノフ (マケドニア)

「文化の多様性への橋となる文化遺産、マケドニアの場合」

報告2 石森 秀三 (国立民族学博物館)

「文化遺産と観光開発」

報告3 ブルーノ・ペドレッティ (イタリア)

「現代性と伝統の危機」

報告4 ミハエル・ヤンセン (ドイツ)

「グローバリゼーションと文化的景観の変化」

〈セッション4：『文化遺産の保護と継承』〉

議長：エディ・セディヤワティ (インドネシア)、大和 智 (文化庁)

主題解説 議長

報告1 マリ・ボイ (ユネスコ)

「有形無形遺産の維持と継承を守る手段、方法、そして技術：土地の独自性—キアカロの場合」

報告2 サイド・ヅルフィカー (エジプト)

「国境なき遺産」

報告3 大島暁雄 (文化庁)

「文化の多様性の継承—民俗文化財の試み—」

#### 報告4 ハーブ・ストーベル (ICCROM)

##### 「遺産保存の多様性と世界基準」

〈パネルディスカッション2:『文化遺産の持続可能な保存』〉

コーディネーター:野口 英雄 (都留文科大学)

パネリスト1:渡邊 明義 (東京国立文化財研究所)

パネリスト2:シークフリート・エンデルス (ドイツ)

パネリスト3:稲葉 信子 (ICCROM)

パネリスト4:D.D. ディエン (ユネスコ)

12月21日

総合討議『文化遺産の多様性保持のための行動計画』

議長団:斎藤 英俊 (東京国立文化財研究所)、野口 英雄 (都留文科大学)、ジョーン・ドミセリ (オーストラリア)、ハーブ・ストーベル (ICCROM)

『宣言』採択

閉会の辞 渡邊 明義 (東京国立文化財研究所)

## (2) 各種の研究協議会

### 1) 文化財保存修復研究協議会

本協議会では、保存修復に関する研究成果を発表し、関係の専門家とともに協議することを目的として、毎年テーマを定めて開催している。2000年度が第30回にあたる。保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターが交替で担当しているが、2000年度は、保存科学部が担当した。

主 題 光学的方法の明日

会 場 東京国立文化財研究所 セミナー室

日 時 2000 (平成12) 年12月15日 (金)

参加者 80名

#### 主 旨

X線、赤外線などを用いた文化財の画像計測は、「光学的方法」として呼び慣わされ、代表的な非破壊測定法として広く利用されてきた。この手法は1950年代に、東京国立文化財研究所が中心となり、日本美術へ応用し画期的な成果を上げた古くからの調査方法である。光学的方法は貴重な文化財を移動することなく現場で手軽に調査できる手法として、現在もその価値を失っていない。本研究会では近年開発された新しい手法をも含めて、「光学的方法」と歴史研究との新たな結びつきの発展の可能性を探ることを目的とする。

#### プログラム

10:00 開会・挨拶

10:15~11:00 光学的方法の歴史と現在 三浦 定俊

11:00~11:45 ポータブル蛍光X線分析装置の利用 早川 泰弘

11:45~13:15 昼食

13:15~14:00 ポリライトを用いた蛍光画像の調査 城野 誠治

14:00~14:45 蛍光画像と三次元蛍光分析 佐野 千絵

14:45~15:30 美術史研究と光学的方法 島尾 新

15:30~15:45 休憩

15:45~16:30 総合討議 (司会 米倉 迪夫)

## 2) 民俗芸能研究協議会

### 第3回 芸能用具の保存・修復・新調・活用

#### 目 的

民俗芸能に用いられる用具について、使用不能になった用具の再活用（保存・修復・展示）を考慮した事例は少ない。民俗芸能用具を文化財として位置づけ、再活用するためには、伝承団体・地域社会・行政・技術者などが、それぞれの立場で協力し、地域に相応しい再活用の方法を確立すべきである。また、新調についても各伝承地に適した用具の新調方法を確立すべきであろう。

第3回目は「芸能用具の保存・修復・新調・活用」をテーマに、4件の事例報告とアドバイザーによる研究協議を行い、報告書を公刊した。

#### 開催日時

日 時 2000（平成12）年11月28日（火）10：00～17：00

会 場 東京国立文化財研究所 セミナー室

#### 事例報告

I 用具の修復と行政的施策について	岩手県北上市鬼の館館長	門屋 光昭
II 伊那谷人形芝居の場合	長野県伊那谷人形芝居研究家	伊藤 善夫
III 森町舞楽の場合	静岡県周智郡森町役場	北嶋 恵介
IV 秋川歌舞伎発展維持のための努力	東京都あきる野市文化財保護審議委員	坂上 洋之
	東京都あきる野市教育委員会	関谷 学

総合討議 司会 星野 紘・中村 茂子

アドバイザー 京都府教育委員会

原田 三寿

宮崎県東臼杵郡椎葉村椎葉民俗芸能博物館学芸員 永松 敦

#### 協議結果

- ① 補助金の使途については最後までチェックする必要がある。
- ② 修復・復元・新調等に関する細かいデータを残す。これらのデータは資料的価値が高く、関連して多くのことを解明するためにも役立つ。
- ③ 伝承芸能に適した用具の新調・修復・復元には、技術者養成の時間と費用が必要である。
- ④ 伝承者・住民・行政担当者が役割分担をしてことに当たるべきである。
- ⑤ 新調・修理等の経験をもつ業者一覧を公表すべきである。

### ユネスコ「無形の文化遺産の保存に関する国際ワークショップ」

1 開催期間 2001（平成13）年2月19日（月）～23日（金）

2 会 場 三田共用会議所

3 主 催 ユネスコ、日本ユネスコ国内委員会、文化庁、東京国立文化財研究所

4 開催趣旨・内容

世界各地に伝承されている音楽、舞踊、演劇、工芸技術などの無形の文化遺産は、それぞれの国や民族、地域特有の歴史や風土の中で生まれ、そこに住む人々の独特の生活感覚や芸術的感性を反映して多種多様な様相を呈している。これらの文化遺産は、人々のアイデンティティの源泉となるなど人類にとってかけがえのない存在である。

だがこれらは、その無形という性格から社会や経済の変化による影響を受けやすく、今日、現代文明が急速に変化、発展し、情報化の進展や交通手段の発達を背景とした文化の世界的画一化が進行する中で、急激に消滅・変容する危機に直面している。

ユネスコでは、1989年の第25回総会において、各加盟国に対して無形文化遺産を保護するよう要請した「伝統的文化及び民間伝承の保護に関する勧告」を採択し、1993年には第142回執行委員会において、日本、韓国が実施している無形文化財保護の制度を他の国々でも執り行うように求め韓国、イタリアで無形の文化遺産の保存に関するワーク

ショップ（人間国宝制度に関するワークショップ）を開催してきた。また新たに「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」プロジェクトを開始し、2001年5月には第1回の宣言が行われることになっている。

今回の趣旨は、音楽、舞踊、演劇等の芸能を主たる対象に、調査や目録作成の方法と無形文化遺産の範囲、採択の方法と基準、保護施策の三点を検討し、今後の無形文化遺産保護に資することにある。

#### 5 参加者

(1) 下記世界15カ国の文化財保護を所管する政府機関の専門研究家

ベニン、ブラジル、中国、チェコ、フィンランド、フランス、ガーナ、イタリア、日本、メキシコ、フィリピン、韓国、ロシア、タイ、ベトナム

(2) ユネスコ代表

#### 6 協議事項

(1) 保護されるべき無形文化遺産の範囲と国家が無形文化遺産目録を作成するための調査方法について

(2) 無形文化遺産の様々な保存方法と評価について

(3) それぞれの国の人間国宝制度における選択方法とその基準について

### 3) 国際文化財保存修復研究会

#### 目 的

人類共通の遺産である文化財を守るためには、国家、民族を越えて保存修復に当たらなければならず、国際協力は不可欠である。世界、特にアジア地域の文化遺産の保存修復のために日本が果たすべき役割は大きく、海外の文化財の調査研究、保存修復事業への協力が多く行われている。しかし、社会体制、経済状況等が異なる中で文化遺産の保存修復を行う際には、様々な問題に直面しているのが現状である。

本研究会は、海外の文化財の調査研究、保存修復事業に携わるさまざまな分野の国内の専門家を招き、文化財保存修復の国際協力事業に関するさまざまな問題点について議論し、その解決に向けて方策を探ることを目的とする。また、本研究会は情報ネットワーク構築の一環としても位置づけている。

なお、平成11年度は第8回、第9回の研究会を実施した。

#### 第8回国際文化財保存修復研究会

日 時：2000（平成12）年11月21日

会 場：東京国立文化財研究所 セミナー室

出席者数：90名あまり

「バングラデシュ・パハルプール僧院遺跡およびバゲラート都市遺跡の保存修復」

都留文科大学／東京国立文化財研究所 野口 英雄

「中国・大明宮含元殿の保存修復」

(株)文化財保存計画協会 矢野 和之、友田 正彦

「ルーマニア・プロボタ修道院の保存修復」

慶應義塾大学 三宅 理一

#### 第9回国際文化財保存修復研究会

日 時：2001（平成13）年2月26日

会 場：東京国立文化財研究所 セミナー室

出席者数：60名あまり

「シリア・パルミラ東南墓地F号墓の保存修復」

奈良県立橿原考古学研究所 西藤 清秀、滋賀県立大学 濱崎 一志

「イタリア・カツァネッロ遺跡の発掘と保存修復」

京都造形芸術大学 内田 俊秀

「東南アジアにおける埋蔵文化財の保存修復と活用」

鹿児島大学 新田 栄治



### (3) 研究会・講演会など

#### 1) 総合研究会

総合研究会では、各部・センターが順番に研究発表を行っている。

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名
00. 5.16	龍門石窟遺跡の保存状況と研究協力事業	国際文化財保存修復協力センター	斎 藤 英 俊
		国際文化財保存修復協力センター	西 浦 忠 輝
		美術部	岡 田 健
00. 6.13	南宋の涅槃変相図をめぐる	情報資料部	井 手 誠之輔
00.10.10	トヨタ・コレクションへの視点	美術部	山 梨 絵美子
00.11.14	歌舞伎と複製メディア —中村芝翫家所蔵フィルムを中心に—	芸能部	児 玉 竜 一
01. 1.16	結露、カビ…東文研新館の一年 —環境調査のあらまし	保存科学部	石 崎 武 志
		保存科学部	佐 野 千 絵
01. 3.13	和紙についてわかったこと	修復技術部	増 田 勝 彦

#### 2) 美術部・情報資料部

〈美術部・情報資料部研究会〉

2000年6月28日(水)

特殊撮影による絵画の分析について—「源氏物語絵巻」調査の中間報告を兼ねて—

島尾 新・城野 誠治

情報資料部

2001年2月14日(水)

福岡・本岳寺の釈迦誕生図

鄭 于澤

韓国美術研究所

韓国の近代工芸における二元構造

崔 公鎬

韓国馬事博物館

2001年3月21日(水)

神護寺画像のゆくえ

米倉 迪夫

情報資料部

〈「日本における美術史学の成立と展開」関係研究会〉

2000年7月26日(水) ミニシンポジウム

明治期における〈文化財〉保護行政の展開—美術史から建築史そして考古学

広瀬 繁明

京都・木曜クラブ

日本考古学の形成

内田 好昭

京都市埋蔵文化財研究所

〈「日本における外来美術の受容についての研究」関係研究会〉

2000年4月26日(水) 研究会

「近代日本美術史」研究における「受容」の諸問題

田中 淳

美術部

2000年5月24日(水)

黒田清輝とラファエル・コラン

山梨絵美子

美術部

2000年6月21日(水)

二つの仏陀イメージ—優曇王像と阿育王像

岡田 健

美術部

2000年10月18日（水）研究会

中央アジア探検隊と敦煌学

勝木言一郎

情報資料部

2000年11月8日（水）研究会

龍門石窟研究史

岡田 健

美術部

六朝書道の日本への受容について

松村 茂樹

大妻女子大学

2001年2月28日（水）研究会

宋風受容に関する言説をめぐって

井手誠之輔

情報資料部

美術家とパトロン 福島繁太郎と薩摩治郎ハーパーで開かれたふたつの日本人展

江川 佳秀

徳島県立近代美術館

2001年3月14日（水）ミニシンポジウム「水陸画の受容」

東銭湖の四時水陸道場と大徳寺五百羅漢図

井手誠之輔

情報資料部

元末・明の水陸画—毘盧寺と宝寧寺の画題—

中野 照男

美術部

愛知県下の水陸画と考えられる作例

山本 泰一

徳川美術館

日本に請来された水陸画

鷹巣 純

愛知教育大学

### 3) 芸能部

記録作成・研究会

「ロシア ハンティ族の熊送りの歌と踊り」

日 時：平成12年10月19日（木）午後1時～4時30分

場 所：東京国立文化財研究所 実演記録室及びセミナー室

「上方落語」

日 時：平成13年4月6日（金）午後1時～午後4時

場 所：東京国立文化財研究所実演記録室

演 目：「東の旅 発端」「軽業」「蛸芝居」

出 演：桂米吉 桂吉朝（下座）桂米左、桂あさ吉、大川貴子

### 4) 保存科学部

日 時：2000（平成12）年7月7日（金）

「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」平成12年度第1回研究会—寺社・歴史的建造物における生物被害対策—

場 所：東京国立文化財研究所 会議室

プログラム

歴史的建造物における虫害状況とその修理

鳴海 祥博 〔和歌山県文化財センター〕

歴史的建造物における日常管理と害虫対策—日本民家園での事例—

丸石 暢彦 〔文化財建造物保存技術協会〕

歴史的建造物、茅葺屋根の煙による燻蒸、スーパーケムラーについて

吉村 潤 〔茅葺屋根保存協会〕

歴史的建造物等の腐朽菌対策

五十嵐 玲 武田薬品工業株式会社

日 時：2000（平成12）年12月15日（金）

「多孔質体中の水分、塩類移動解析とその測定法」

場 所：東京国立文化財研究所 会議室

#### プログラム

文化財を構成する多孔質体材料の劣化事例		石崎 武志	保存科学部
温度勾配のある多孔質中の水分移動の解析手法	ジョン・グルネワルド	ドイツ、ドレスデン工科大学	
実験家屋の壁中の水分移動の実測と解析	ハイコ・フェヒナー	ドイツ、ドレスデン工科大学	
TDR-SS（時間領域誘導電率測定）法を用いた、含水率、塩分量の同時測定手法	ルドルフ・ブラーグ	ドイツ、ドレスデン工科大学	

日 時：2001（平成13）年2月14日（水）

「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」平成12年度 第2回研究会

—文化財展示収蔵施設における害虫モニタリングの実践と応用—

場 所：東京国立文化財研究所 会議室

#### プログラム

意味のあるモニタリングとは？ —イギリスの博物館等におけるモニタリングの具体例とその目的—

博物館の害虫モニタリング —千葉県立中央博物館の事例紹介—	木川 りか	保存科学部
国文学研究資料館における害虫のモニタリングの実践例と今後の展望	斉藤 明子	千葉県立中央博物館
	青木 睦	国文学研究資料館・史料館

日 時：2001（平成13）年3月28日（水）

「壁画および土壁の保存に関する研究会」

場 所：東京国立文化財研究所 会議室

#### プログラム

研究会の趣旨説明	石崎 武志	保存科学部
中国山西省の時間壁画調査概要	岡田 健	美術部
中国山西省寺院の土壁の構造と劣化	石崎 武志	保存科学部
土壁の構造、工法の概要	増田千次郎	日本建築セミナー
漆喰の機能と特性	高田 修一	田川産業㈱
土壁の凍結劣化に関する研究	石崎 武志	保存科学部、瀧野澤聡子
特別講演 敦煌莫高窟保存のための電気探査の利用	谷本 親伯	大阪大学大学院工学研究科
		東京芸術大学大学院

#### 5) 修復技術部

「近代の文化遺産」に関する研究会

修復技術部では、平成10年11月に開催した国際研修集会「近代の文化遺産の保存と活用」（東京国立文化財研究所主催）を受けて、平成11年度は航空機、平成12年度は船舶に焦点を当てて研究調査を実施した。

航空機については、『未来につなぐ人類の技・航空機の保存と修復』を刊行、船舶については、以下のように研究会を実施した。

日 時：平成12年11月7日（火） 9：00～17：00

会 場：東京国立文化財研究所 セミナー室

#### 講演者

船舶保存の現状と課題について	小堀 信幸	船の科学館 学芸部長
文化財としての船舶の修復	ジョン・ロビンソン	元イギリス国立科学・産業博物館
ノルウェーにおける船舶保存	ヨハン・クロスター	ノルウェー海事博物館主任学芸員
「なにわの海の時空館」と菱垣廻船の復元	中村 陽一	なにわの海の時空館 副館長
考古学と教育の間で ベルリンドイツ技術博物館での海洋文化財修復2例		

フォルカー・キスリング    ベルリン技術博物館 修復科学分析室  
北日本地方における漁船の収集・保存について    昆    政明    青森県立郷土館 学芸主幹

## 6) 国際文化財保存修復協力センター

### センター保存計画研究会

建造物を中心に、文化財の保存修復への様々なアプローチを試みているこの研究会は、1999年から随時開催され、これまでに「建造物保存修復教育のカリキュラム」、「英仏の保存修復理念の伝統と実践」といったテーマを取りあげてきた。今年度は、建造物保存修復の今日的課題について、2回の開催を行なった。

### 第3回センター保存計画研究会「近代化遺産の保存と活用」

明治時代から昭和戦前に作られた産業・交通・土木に関する遺構は、産業構造の変化や技術革新による効率化、建造物の老朽化などにより急速に失われつつある。我が国の近代化の歴史を具体的に知ることができるこれらの貴重な文化財については、近年、文化庁においても重点施策の1つとして、その所在調査と重要文化財、史跡、登録文化財などへの指定・登録が進められている。しかしながら、大規模な工場や鉱山施設、港湾施設、鉄道施設、発電所といった近代化遺産は、国や地方自治体による指定だけでは保存は困難であり、それらの他の目的への転用・活用を必要とする。

この研究会では、近代化遺産の保存に関わっている研究者・地方自治体の担当者に参加を要請し、各地で進められている保存活動や活用事例の報告と、これを受けての全体討議を行った。

日    時：2000（平成12）年11月20日（月）  
会    場：東京国立文化財研究所 セミナー室  
出席者数：60名

基調報告：「近代化遺産の全国調査と指定・登録の現状」    堀    勇良    文化庁

報   告 1：「ひがし大雪コンクリート橋梁群の魅力と保存活動」

角田   久和    北海道土幌町・ひがし大雪アーチ橋友の会

報   告 2：「小坂鉱山近代化の足跡と観光活用」

亀沢    修    秋田県小坂町教育委員会

報   告 3：「企業所有の近代化遺産の活用」

原    国土    三菱マテリアル株式会社

報   告 4：「箱根町における近代化遺産の保存と活用」

伊藤    潤    神奈川県箱根町教育委員会

報   告 5：「赤煉瓦建造物の再生によるまちづくり」

矢谷   明也    京都府舞鶴市

報   告 6：「旧三井三池炭鉱関連施設の保存と活用」

平島   勇夫    福岡県大牟田市教育委員会

報   告 7：「旧三井三池炭鉱万田坑跡の保存と活用」

勢田   廣行    熊本県荒尾市教育委員会

報   告 8：「旧曾木水力発電所の保存と活用」

御書   辰志    鹿児島県大口市

全体討議：「近代化遺産の保存と活用を考える」

### 第4回センター保存計画研究会「歴史的建造物の保存・活用と構造補強—ドイツの事例」

東京国立文化財研究所では、文化財保存の分野における日独学術交流の一環として平成11年度から「歴史的建造物の保存・活用と構造補強に関する研究」を行っている。この研究に関してドイツから研究者・専門家を招聘し、歴史的建造物の保存・活用と構造補強に関するドイツの事例を紹介する研究会を開催した。

日    時：2001（平成13）年2月27日（火）  
会    場：東京国立文化財研究所 セミナー室  
出席者数：34名

講   演 1：「ケルン市の文化財建造物の保護と活用」

ハンス・ベルナー・ツァヴィスラ    ケルン市文化財建造物保護部副部長

講演Ⅱ：「炭素繊維による歴史的建造物の構造補強」オラフ・インゴ・ケンペ ドレスデン技術経済大学教授  
討議：「日独の文化財保存・活用の現状と展望」

「大学と科学」公開シンポジウム「世界の文化遺産を護る」

近年、外国の文化財保存修復に関して、日本の大学やその他の研究機関等が協力を行う事例が多くなってきている。しかしながら、日本と異なる気候風土や社会体制、経済状況のなかでの協力は、時には大きな困難に直面することもしばしばである。

このような状況を考慮して、東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力センターでは、「国際文化財保存修復研究会」を開催し、外国の文化財の保存修復に関わっている専門家・研究者による事例報告と討議を通して、さまざまな問題の解決に向けての方策を探る場としてきた。

これらの研究会の成果をシンポジウムとして公開し、文化財保存修復の分野における国際協力の重要性和日本が果たしている役割についての認識を一般に広めた。

なお、この公開シンポジウムは、平成12年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」によって開催されたものである。

日時：2001（平成13）年1月27日（土）、28日（日）

会場：有楽町朝日ホール

出席者数：延べ約900名

第1日目〔1月27日（土）〕

【基調講演】

「世界の文化遺産を護る－国際協力と日本の役割－」 伊藤 延男 財団法人文化財建造物保存技術協会

【木造建築を護る】

「ベトナム・フエ王廟の保存修復」 重枝 豊 日本大学

「ベトナムの民家調査と修復協力」 友田 博通 昭和女子大学

「ブータンの建造物集落の保存技術協力」 江面 嗣人 文化庁

【土の建造物遺跡を護る】

「中国・交河故城の保存修復」 矢野 和之 株式会社文化財保存計画協会

「チャルチュアパ遺跡の土製建造物の発掘と修復・保存活用」 大井 邦明 京都外国語大学

【石造の建造物と遺跡を護る】

「カンボジア・アンコール遺跡バイヨン北経蔵の保存修復」

中川 武 JSA日本国政府アンコール遺跡救済チーム団長／早稲田大学

「パキスタン・ガンダーラ遺跡の保存修復」 増井 正哉 奈良女子大学

「チリ・イースター島モアイ石像の保存修復」 沢田 正昭 奈良国立文化財研究所

第2日目〔1月28日（日）〕

【国際機関、国際条約と日本の役割】

「ユネスコの役割と日本の貢献」 野口 英雄 都留文科大学

「ICCROM（文化財保存修復研究国際センター）、ICOM（国際博物館会議）の役割と日本の貢献」

三浦 定俊 東京国立文化財研究所

「イコモス（国際記念物遺跡会議）の役割と日本の貢献」 宗田 好史 京都府立大学

「文化遺産に関する国際社会の動向」 斎藤 英俊 東京国立文化財研究所

【レンガ造の建造物と遺跡を護る】

「ルーマニア・プロボタ修道院の保存修復事業」 三宅 理一 慶應義塾大学

「イラン・チョガー・ザンビール遺跡の保存修復」 岡田 保良 国士舘大学

「タイ・スコータイ遺跡の大仏の保存修復」 西浦 忠輝 東京国立文化財研究所

【パネルディスカッション】

「文化遺産の保護と国際協力—よりよい保存修復協力に向けて—」

パネリスト：野口 英雄（都留文科大学）

石澤 良昭（上智大学）

中川 武（JSA日本国政府アンコール遺跡救済チーム団長／早稲田大学）

西浦 忠輝（東京国立文化財研究所）

友田 博通（昭和女子大学）

宗田 好史（京都府立大学）

司 会：斎藤 英俊（東京国立文化財研究所）

彩色彫刻保存修復研究会

彩色彫刻の保存修復に関する国際協力事業を円滑かつ有効に進めるために、ヨーロッパを代表する専門家であるベルギー王立文化財研究所・修復部長のミリアム・サークドワイデ氏を招へいし、技術的諸問題についての講演と討議を行った。

日 時：平成12年11月29日（水） 14：00～16：30

会 場：東京国立文化財研究所 セミナー室

出席者数：60名

共催機関：東京芸術大学、文化財保存修復学会

講 演：ミリアム・サークドワイデ「彩色彫刻の修復について」

討 議：司会 西浦 忠輝（東京国立文化財研究所）

コメンテーター 牧野 隆夫（東北芸術工科大学）

通訳およびコメンテーター 園田 直子（国立民族学博物館）



## 2. 調査指導など

### (1) 所外経費による調査指導

公費・文部省科学研究費補助金・受託研究費などの所内の経費によらずに調査指導を行った事例は下記の通りである。

氏 名	調 査 先	目 的
青 木 繁 夫	大阪市中央会堂	外壁保存の方法等に関する技術指導
青 木 繁 夫	金沢城	鉛汚染調査
青 木 繁 夫	京都府智恩寺	鉄湯船一口保存修復事業
青 木 繁 夫	群馬県お富士山古墳	お富士山古墳の石棺の保存処理指導
青 木 繁 夫	埼玉県立さきたま資料館	遺構保存管理指導
青 木 繁 夫	高松塚古墳	古墳壁画の保存点検作業
青 木 繁 夫	東大寺	国宝八角灯籠調査
青 木 繁 夫	鳥栖北部丘陵文化財調査研究資料室	鳥栖北部丘陵文化財調査に伴う調査指導
青 木 繁 夫	奈良市法蓮町	流麿寺出土「鉄剣」科学調査委員会
青 木 繁 夫	西都原古墳群	遺構保存管理指導
青 木 繁 夫	福井県佐賀市	国宝「朝鮮鐘」の保存調査
石 崎 武 志	滋賀県長浜市曳山博物館	館内環境調査
石 崎 武 志	長浜市曳山博物館	環境調査
井 手 誠之輔	京都国立博物館	宋元仏画に関する調査・研究
井 手 誠之輔	奈良国立文化財研究所	法華寺所蔵国宝阿弥陀三尊及び童子像の調査
白 井 国 明	奈良国立文化財研究所	独立行政法人化に関する打合せ
大 森 信 宏	埼玉県立さきたま資料館	遺構保存管理指導
大 森 信 宏	高松塚古墳	古墳壁画の保存点検作業
岡 田 健	北京、洛陽	龍門石窟遺跡保存プロジェクト予備調査及び協議
岡 田 健	ベルン歴史博物館	日本美術品の調査
加 藤 寛	沖縄県立博物館	尚家関係総合調査
加 藤 寛	林原美術館	尚家関係資料調査
加 藤 寛	フィラデルフィア美術館	在外日本古美術品保存修復協力事業海外調査
加 藤 寛	ベルン歴史博物館・リヨン美術館	日本美術品の調査
鎌 倉 恵 子	園田学園女子大学	近松研究所合同研究所
川野邊 渉	厳島神社	高舞台の修復材料の検討
川野邊 渉	大分県臼杵市	臼杵磨崖仏保存修理事業
川野邊 渉	京都国立博物館	「汚れ」の調査
川野邊 渉	京都市岡墨光堂	古糊のサンプリングと新糊の仕込み環境測定

氏 名	調 査 先	目 的
川野邊 渉	国立民族博物館	共同研究会
川野邊 渉	日光社寺保存会	雨量計及び冬季用電源設置と動作確認
川野邊 渉	厳島神社	高舞台の修復手法の打合せ
河 原 脩	クリーヴランド美術館	在外日本古美術品保存修復協力事業海外調査
河 原 脩	フィラデルフィア美術館	在外日本古美術品保存修復協力事業海外調査
木 川 り か	大浦天主堂	保存修理工事に係わる技術指導
木 川 り か	国立民族学博物館	資料の保存、管理方法の助言
朽 津 信 明	大分県臼杵市	臼杵磨崖仏保存修理事業
朽 津 信 明	大分県臼杵市臼杵磨崖仏	薬剤調査、含水量調査等
朽 津 信 明	京都国立博物館	保存修理事業
朽 津 信 明	日光東照宮	建造物彩色顔料の成分解明調査
朽 津 信 明	北海道余市町	史跡フゴッペ洞窟保存調査委員会
小 関 仁 志	奈良国立文化財研究所	独立行政法人化に関する打合せ
小 関 仁 志	メルパルク仙台	平成12年度文部省共済組合地区別事務担当者打合せ会議
斎 藤 英 俊	島根県教育委員会	島根県近代化遺産総合調査委員会
斎 藤 英 俊	白川村教育委員会	伝統的建造物群保存審議会
斎 藤 英 俊	奈良国立文化財研究所	共同研究会
斎 藤 英 俊	北京、洛陽	龍門石窟保存修復調査・協議
坂 巻 信 宏	奈良国立文化財研究所	独立行政法人化に関する打合せ
佐 野 千 絵	MOA美術館	環境調査
佐 野 千 絵	秋田市立千秋美術館	環境調査
佐 野 千 絵	大阪市すまいの博物館	研究打合せ、調査
佐 野 千 絵	大阪府立狭山池博物館	環境調査
佐 野 千 絵	春日市奴国の丘歴史資料館	環境調査
佐 野 千 絵	小松市立宮本三郎美術館	環境調査
佐 野 千 絵	筑波大学図書館貴重書庫	環境調査
佐 野 千 絵	平等院宝物館	環境調査
塩 谷 純	滋賀県立近代美術館	黒田清輝巡回展撤収
塩 谷 純	ベルン歴史博物館	日本美術品の調査
塩 谷 純	萬鉄五郎記念美術館	出品作品点検及び作品撤収立ち会い
島 尾 新	京都国立博物館	調査研究
島 尾 新	奈良国立博物館	法華寺所蔵国宝阿弥陀三尊及び童子像の調査
島 尾 新	山口県立美術館	雪舟研究会
庄 司 義 則	大阪教育大学	企業会計制度についての講演
庄 司 義 則	奈良国立博物館	独立行政法人化に関する打合せ
城 野 誠 治	京都国立博物館	宋元仏画の撮影にかかる技術指導
城 野 誠 治	京都国立博物館	写真撮影にかかる指導

氏 名	調 査 先	目 的
城 野 誠 治	高野山	中尊経撮影にかかる技術的指導
城 野 誠 治	奈良国立文化財研究所	法華寺所蔵国宝阿弥陀三尊及び童子像の調査
高 橋 千 恵	大分県臼杵市	臼杵磨崖仏保存環境調査の補助
田 中 淳	京都工芸繊維大学	講演会講師
田 中 淳	萬鉄五郎記念美術館	黒田清輝作品点検及び展示指導
津 田 徹 英	京都国立博物館	調査研究
津 田 徹 英	中尊寺	金色堂諸仏の調査
津 田 徹 英	奈良国立博物館	法華寺所蔵国宝阿弥陀三尊及び童子像の調査
津 田 徹 英	ロシア	エルミタージュ美術館所蔵日本美術品に関する調査
中 野 照 男	四街道市役所	四街道市文化財審議会
中 野 照 男	中国	クムトラ千仏洞遺跡保存修復プロジェクトに関する美術史的調査と助言
中 村 茂 子	竜ヶ崎市民俗資料館	文化財保護審議会
西 浦 忠 輝	エジプト カイロ	遺跡保存、修復調査
西 浦 忠 輝	パキスタン	遺跡保存、修復調査
早 川 典 子	大分県臼杵市	臼杵磨崖仏保存修理事業
早 川 泰 弘	名古屋城	障壁画の化学測定
早 川 泰 弘	那覇市歴史資料室	尚家関係資料調査事業、美術工芸品の理科学調査
平 尾 良 光	名古屋城	障壁画の化学測定
星 野 紘	沖縄県立芸術大学	沖縄と中国雲南省少数民族の基層文化の比較研究合同研究会
星 野 紘	熊本市市民会館	舞台芸術参加事業の実施状況の調査
星 野 紘	しまなみ交流館テアトロシエルネ	国際民俗芸能フェスティバル
星 野 紘	上海	学術会議
星 野 紘	ハーモニーホールふくい	国際民俗芸能フェスティバル
星 野 紘	北海道立総合体育センター	国際民俗芸能フェスティバル
増 田 勝 彦	石川県立美術館	石川県文化財保存修復工房運営委員会
増 田 勝 彦	京都国立博物館	板絵著色神像の修復に關しての指導助言
増 田 勝 彦	京都国立博物館	文化財保存事業
増 田 勝 彦	クリーブランド美術館	在外日本古美術品保存修復協力事業
増 田 勝 彦	ロシア	エルミタージュ美術館所蔵日本美術品に関する調査
松 本 修 自	富田林市役所	伝統的建造物群保存審議会
松 本 修 自	松山市	史跡来往廃寺跡調査検討委員会
松 本 修 自	ユネスコ・アジア文化センター	文化遺産保護協力事業委員会
三 浦 定 俊	京都国立博物館	指定文化財企画・展示セミナー講師
三 浦 定 俊	国際日本文化研究センター	シンポジウム討議参加
三 浦 定 俊	国立民族学博物館	資料の保存、管理方法の助言

氏 名	調 査 先	目 的
三 浦 定 俊	高松塚古墳	古墳壁画の保存点検作業
三 浦 定 俊	奈良県薬師寺	薬師寺玄奘三蔵院保存会議出席
三 浦 定 俊	奈良市唐招提寺	「国宝 鑑真和上展」展示環境打合せ
三 浦 定 俊	北海道余市町	史跡フゴッペ洞窟保存調査委員会
三 浦 定 俊	北海道余市町	フゴッペ洞窟シンポジウム講師
三 浦 定 俊	ユネスコ・アジア文化センター	アジア・太平洋地域文化遺産保護調査修復研修講師
三 浦 定 俊	ローマ	イクロム諮問委員会議出席
森 田 健 一	奈良国立文化財研究所	独立行政法人化に関する打合せ
山 梨 絵美子	滋賀県立近代美術館	黒田清輝巡回展展示
山 梨 絵美子	ロシア	エルミタージュ美術館所蔵日本美術品に関する調査
米 倉 迪 夫	京都国立博物館	中世絵画資料の調査
米 倉 迪 夫	京都国立博物館	調査研究
米 倉 迪 夫	奈良国立文化財研究所	法華寺所蔵国宝阿弥陀三尊及び童子像の調査
米 倉 迪 夫	毛利博物館	中世絵画資料の調査
渡 邊 明 義	京都国立博物館	寂光院木造地藏菩薩立像の調査
渡 邊 明 義	敦煌	協議及び調査等
渡 邊 明 義	奈良県経済倶楽部	シルクロード学研究センター研究評議員及び企画運営委員会
渡 邊 明 義	奈良国立文化財研究所	アンコール文化遺産保護共同研究に関する検討委員会
渡 邊 明 義	奈良国立文化財研究所	文化財保護審議会第一専門調査会
渡 邊 明 義	萬鉄五郎記念美術館	「黒田清輝と萬鉄五郎」展オープンセレモニー

## (2) その他の調査指導

### 1) 文化財の材質に関する調査

金属製文化財を中心に、その材質やさび・付着物等に関する化学組成および構造解析の測定、さらには材料の産地推定等に関する調査を行った。

総依頼件数 50件 432試料 (2000.04～2001.03)

分析内容内訳 (1 資料あたり複数箇所の分析あり)

蛍光X線分析 (XRF)	: 約300測定
ポータブル蛍光X線分析 (P-XRF)	: 約350測定
鉛同位体比測定 (PBIR)	: 約300測定
X線回折分析 (XRD)	: 約40測定
ICP-発光分光分析/質量分析 (ICP)	: 約40測定

(1)	2000.04	文化庁	銅製品他	6 試料	XRF, PBIR
(2)	2000.04	東京大学	ベトナム出土金属器	3 試料	PBIR
(3)	2000.04	徳川美術館	水銀軽粉	9 試料	XRF, XRD
(4)	2000.04	四日市市立博物館	銅造仏ほか	6 試料	P-XRF
(5)	2000.05	さきたま資料館	鉄剣	1 試料	P-XRF
(6)	2000.06	元興寺文化財研究所	銅鏡	1 試料	XRF, PBIR
(7)	2000.06	元興寺文化財研究所	銅鏡破片	2 試料	PBIR
(8)	2000.06	元興寺文化財研究所	銅鐸片	1 試料	XRF, PBIR
(9)	2000.06	元興寺文化財研究所	耳環ほか青銅製品	11試料	XRF, PBIR
(10)	2000.06	岩手県立博物館	出土金属器	5 試料	PBIR
(11)	2000.06	奈良国立博物館	漆製手箱ほか	2 試料	P-XRF
(12)	2000.06	東京芸術大学	木彫像	1 試料	P-XRF
(13)	2000.06	情報資料部	金銅仏	1 試料	P-XRF
(14)	2000.07	名古屋市	障壁画・天井画	13試料	P-XRF
(15)	2000.07	元興寺文化財研究所	銅鐸片	1 試料	PBIR
(16)	2000.07	修復技術部	漆製品	2 試料	P-XRF
(17)	2000.07	兵庫県立博物館	銅鏡	1 試料	XRF, PBIR
(18)	2000.08	西本願寺	銅製品	1 試料	XRF, PBIR
(19)	2000.08	筑波大学	ガラス玉	10試料	XRF, PBIR
(20)	2000.08	東京国立博物館	銅鐸	1 試料	XRF, XRD, PBIR
(21)	2000.08	修復技術部	金属腐食溶液	16試料	ICP
(22)	2000.09	東京芸術大学	中国青銅器	3 試料	PBIR
(23)	2000.09	韓国湖巖美術館	ガラス製品	18試料	PBIR
(24)	2000.09	静岡県埋文調査研究所	銅鐸	1 試料	PBIR
(25)	2000.09	東京国立博物館	銅剣他	4 試料	XRF, P-XRF, PBIR
(26)	2000.09	早稲田大学	銅鏡	1 試料	PBIR
(27)	2000.09	千葉県金鈴塚資料館	出土銅製品	10試料	PBIR
(28)	2000.10	東京国立博物館	青銅製品	1 試料	XRF, XRD
(29)	2000.10	東京国立博物館	青銅製品	4 試料	XRF, XRD
(30)	2000.10	称名寺	木彫像ほか	2 試料	P-XRF
(31)	2000.10	情報資料部	木彫像	1 試料	P-XRF, XRF, XRD
(32)	2000.11	川崎市能満寺	木彫像	1 試料	P-XRF
(33)	2000.11	愛媛県立博物館	絵画	2 試料	P-XRF

(34)	2000.11	東京国立博物館	銅鏡	1 試料	XRF, PBIR
(35)	2000.11	東京国立博物館	銅鏡	1 試料	XRF, PBIR
(36)	2000.11	埼玉大学	ペルー出土金製品	50試料	XRF
(37)	2000.11	東京家政学院大学	シリア出土銅製品	3 試料	XRF, XRD
(38)	2000.12	辰馬考古資料館	銅鐸	27試料	XRD, PBIR
(39)	2000.12	鎌倉市教育委員会	出土銅器	5 試料	XRF, PBIR
(40)	2000.12	中近東文化センター	トルコ出土金属製品	123試料	XRF, PBIR
(41)	2000.12	東京国立博物館	銅鏡	22試料	XRF, XRD, PBIR
(42)	2000.12	京都・大將軍八神社	木彫像	9 試料	P-XRF
(43)	2000.12	那覇市歴史資料館	所蔵品	11試料	P-XRF
(44)	2001.01	修復技術部	出土銅製品	10試料	XRF
(45)	2001.01	青森県埋蔵文化財センター	銅鏡片	1 試料	PBIR
(46)	2001.02	文化庁	金銅仏	1 試料	XRF, PBIR
(47)	2001.02	沖縄県浦添市美術館	朱漆絵皿	5 試料	XRF
(48)	2001.03	東京国立博物館	北魏仏	8 試料	XRF, PBIR
(49)	2001.03	文化庁	金製品	12試料	XRF
(50)	2001.03	文化庁	青銅製品	11試料	XRF

## 2) 美術館・博物館等館内の環境調査

国宝・重要文化財などの指定品および東京国立博物館収蔵資料の借用に関して館内環境調査を行い、報告書を作成・提出した。

岩手	中尊寺讃衡蔵	滋賀	(財)長浜曳山文化協会曳山博物館
福島	郡山市立美術館	京都	平等院宝物館
茨城	(財)水府明德会彰考館徳川博物館		(財)細見美術財団細見美術館
栃木	馬頭町広重美術館	大阪	大阪府立狭山池博物館
東京	(財)東京都教育文化財団東京都現代美術館		大阪市立住まいのミュージアム
	(財)東京都文化歴史財団江戸東京たてもの園		和泉市いずみの国歴史館
	府中市美術館		大阪狭山市立郷土資料館
	(財)凸版印刷印刷博物館	兵庫	芦屋市美術博物館
神奈川	平塚市美術館	島根	島根県立美術館
	相模原市立博物館	福岡	春日市奴国の丘歴史資料館
新潟	新潟県立歴史博物館		ふるさと館ちくしの
長野	茅野市尖石縄文考古館	大分	大分県立先哲史料館
愛知	知多市歴史資料館	鹿児島	鹿児島県歴史資料センター黎明館
	田原町博物館		(財)尚古集成館
三重	朝日町歴史博物館	沖縄	沖縄県立埋蔵文化財センター

現地調査は秋田県立近代美術館、秋田市立千秋美術館、筑波大学附属図書館貴重書庫、参議院、国立西洋美術館、三の丸尚蔵館、東京都美術館、東京都現代美術館、府中市美術館、印刷博物館、小松市立宮本三郎美術館、MOA美術館、曳山博物館、平等院宝物館、宇治市源氏物語ミュージアム、大阪府立狭山池博物館、大阪市立住まいのミュージアム、大阪歴史博物館、大阪狭山市立郷土資料館、浜田市世界子ども美術館、春日市奴国の丘歴史資料館の21館。

また 青森県立美術館（仮）など、全国147館の新設既設美術館・博物館等文化財展示収蔵施設に対して環境改善に関する相談を受け、助言を行った。これらの館については各館ごとに環境調査ファイルを作成して調査を行っている。



青森	青森県立美術館 (仮)	福井	織田町文化歴史館
岩手	岩手県立美術館	山梨	山梨県立美術館
	花巻市博物館 (仮)	長野	茅野市八つ岳総合博物館
	中尊寺讃衡蔵		茅野市尖石縄文考古館
宮城	東北歴史博物館		御代田町博物館 (仮)
	村田町歴史みらい館		おぶせミュージアム
	雄勝硯伝統産業会館		八つ岳シルクロードミュージアム
秋田	秋田県立近代美術館	岐阜	岐阜県立博物館
	秋田市立千秋美術館		セラミックパークMINO
	赤レンガ郷土館		美濃加茂市市民ミュージアム
山形	米沢市博物館		飛騨世界生活文化センター
	山寺芭蕉記念館	静岡	焼津市教育委員会
福島	福島県文化財センター白河館		MOA美術館
	郡山市立美術館	愛知	名古屋市立博物館
茨城	国土地理院地図と測量の科学館		西尾市岩瀬文庫
	筑波大学附属図書館貴重書庫		知多市歴史民俗博物館
	茨城県陶芸美術館		田原町博物館
	霞ヶ浦町郷土資料館	三重	三重県立美術館
	(財)水府明德会彰考館徳川博物館		松阪市文化財資料館
栃木	馬頭町広重美術館		朝日町歴史博物館
群馬	かみつけの里博物館		東明寺収蔵庫
	草津ベルツ記念館		伊勢神宮神宮文庫
埼玉	川越市美術館 (仮)	滋賀	滋賀大学経済学部附属資料館
千葉	船橋市郷土資料館		滋賀県立琵琶湖博物館
	城西国際大学水田美術館		(財)長浜曳山文化協会曳山博物館
東京	参議院管理部御休息室		能登川町立博物館
	宮内庁三の丸尚蔵館	京都	京都国立近代美術館
	宮内庁書陵部		宇治市源氏物語ミュージアム
	日本銀行金融研究所貨幣博物館		みやづ歴史の館歴史資料館
	国立西洋美術館		八幡市松花堂交流施設博物館 (仮)
	(財)東京都現代美術館		大谷大学総合施設博物館 (仮)
	(財)東京都美術館		平等院宝物館
	(財)江戸東京たてもの園		(財)細見美術館
	府中市美術館	大阪	大阪府立狭山池博物館
	墨田区文化振興財団		大阪市住まいのミュージアム
	文化学園服飾博物館		大阪市歴史博物館
	日本刀装具美術館		大阪城天守閣
	松岡美術館		和泉市いずみの国歴史館
	泉屋博古館東京分館 (仮)		大阪狭山市郷土資料館
	(株)凸版印刷印刷博物館		三原町人・夢・創造の交流館
神奈川	平塚市美術館		高槻市歴史遺物展示館 (仮)
	鎭木清方記念美術館		大阪青山短期大学博物館
	横須賀市博物館 (仮)	兵庫	兵庫県立美術館芸術の館 (仮)
	相模原市立博物館		芦屋市立美術館
	箱根神社収蔵庫		小野市好古館
	八剣神社収蔵庫	奈良	奈良国立博物館
	ポーラ美術振興財団		奈良県立美術館
新潟	新潟県立歴史博物館		万葉文化館
	新潟県立近代美術館	和歌山	和歌山県立近代美術館
	新潟県立万代島美術館	島根	島根県立博物館
	上越市立総合博物館		島根県立美術館
富山	富山県水墨美術館		島根県古代文化センター
石川	小松市宮本三郎美術館		浜田市世界こども美術館
	真脇縄文館		浜田市郷土資料館
	薬師寺収蔵庫		三隅町立石正美術館
福井	福井県立朝倉氏遺跡資料館	岡山	岡山県立博物館
	福井市郷土資料館		尾道市立美術館
	三方町縄文博物館		井原市田中美術館

岡山	成羽町美術館	福岡	伊都歴史資料館
広島	蘭島閣美術館	佐賀	佐賀県立名護屋城博物館
	王舎城美術宝物館		中富記念くすり博物館
山口	山口県立萩美術館・浦上記念館	熊本	熊本県伝統工芸館
	下関市立考古博物館		熊本県立美術館
	萩市郷土資料館	大分	大分県立先哲史料館
愛媛	愛媛県美術館		大分市美術館
	愛媛県立歴史文化博物館		三浦梅園資料館
	風の博物館歌麿館	宮崎	西都原考古博物館
高知	高知県立美術館		都城市立美術館
	高知市立自由民権記念館		高鍋町美術館
福岡	九州国立博物館（仮）	鹿児島	鹿児島県歴史資料センター黎明館
	福岡市埋蔵文化財センター		奄美パーク・田中一村記念館
	北九州市立美術館		上野原縄文の森展示施設（仮）
	北九州市自然史歴史博物館		尚古集成館
福岡	ふるさと館ちくしの	沖縄	沖縄県立埋蔵文化財センター
	春日市奴国の丘歴史資料館		

### 3) 文化財の虫害等被害に対する調査指導

文化財の虫・カビ等の被害について問い合わせを受け、指導・助言を行った。

（木川りか・山野勝次・佐野千絵・三浦定俊）

- (1) 文化財の虫菌害に対する調査指導 5件
- (2) 相談受け付け件数 36件

### 4) 文化財の修復および整備に関する調査指導

- (1) 富山県高岡市重要文化財勝興寺の修理指導（青木繁夫）  
鉛屋根瓦の汚染調査を行い、葺きかえに関して指導を行った。
- (2) 史跡・千葉市加曽利貝塚住居跡保存整備指導（青木繁夫）  
発掘された住居跡を展示保存するために土壌水分を調整する保存処理方法の指導を行った。
- (3) 史跡・宮崎県西都市西都原古墳保存整備指導（青木繁夫）  
横穴古墳を展示保存するための覆屋および土壌処理方法について指導した。
- (4) 重文・京都府智恵寺鉄湯船の保存指導（青木繁夫）  
電気防食法について指導を行った。
- (5) 伊勢崎市富士塚古墳石棺の保存修復指導（青木繁夫）  
砂岩製石棺が劣化したために、その樹脂強化処理方法について指導した。
- (6) 史跡・埼玉県将軍塚古墳主体部の保存指導（青木繁夫）  
古墳の主体部を覆屋内で展示公開しているが、土壌の乾燥崩壊が激しい、親水性シリコンによる保存処置について指導を行った。
- (7) 大阪市中央公会堂に外壁クリーニングについて指導を行った。（青木繁夫）  
外壁石材に表面に付着した汚れにレーザークリーニングについて指導を行った。
- (8) 佐賀県吉野ヶ里出土遺物の保存について指導を行った。（青木繁夫）  
銅製品、織物の保存環境整備について指導を行った。
- (9) 高松塚古墳の保存状態点検（青木繁夫）
- (10) 重要文化財地蔵菩薩立像（京都寂光院）の保存処置に関して指導助言を行い、処置条件を決定するための種々の実験を行った。（川野邊渉）
- (11) 大浦天主堂の漆喰壁の生じた黒変の原因追及と対策に関する指導助言を行った。（川野邊渉）
- (12) 重要文化財称名寺壁画弥勒浄土図、弥勒来迎図の修復に関して、劣化の状態から処置方法の検討をし、助言指導を行った。（早川典子）
- (13) 重要文化財山口県会議事堂の修復作業に際して、複数箇所での塗装調査および分析を行った。（早川典子）

### 3. 研修

#### (1) 国際研修 第7回「紙の保存修復」

##### 趣 旨

和紙が多くの特長で修復材料として優れた性質を有することが、世界中の博物館、美術館、文書館、図書館などで次第に認識されてきている。さらに、材料としての和紙にとどまらず、和紙を使いこなす表具技術にも感心が寄せられている。

この20年ほどの間、ヨーロッパの美術館、博物館、文書館、図書館を中心として、紙を素材とした文化財、即ち、版画、素描、水彩画、文書、設計図、ポスターなどの保存に対する関心が高まり、高い安定性、適度な強度、経済的な価格、安易な取扱い、処置対象との相性などの性質を備えた保存処理素材が求められ、結果としての和紙が取り上げられている。

このため、文化庁、東京国立文化財研究所では、平成4年度から関係機関と協力し、和紙を中心とした紙文化財の保存修復の理論及び修復技術の基本について諸外国の文化財関係者を対象とする研修を実施している。また、平成10年度にはそれまでの研修を振り返るセミナーを開催し、研修内容の再検討と研修成果の相互発表を行った。今年度は、セミナーの検討を踏まえ内容の変更を行った。

この研修を通じ、日本と世界各国の文化財保護の相互理解が深められるとともに、今後の国際協力の発展への一助ともなっている。

主 催 文化庁 東京国立文化財研究所

国際交流基金 ICCROM

研修期間 平成12年11月28日～平成12年12月15日 18日間

(招聘期間) 平成12年11月27日～平成12年12月17日 21日間

会 場 11月28日～12月7日 東京国立文化財研究所

12月8日～12月10日 京都国立博物館 吉野紙漉工房地

受 講 者 12カ国 12人 (一覧表参照)

研修用語 英語及び日本語

事 務 局 東京国立文化財研究所 修復技術部

国際文化財保存修復協力センター企画室

##### 日 程

11月27日(月) 参加者来日

28日(火) 開講式 講義1、講義2、講義3、レセプション

29日(水) 解説：材料と道具、実技実習、参加者発表

30日(木) 実技実習、参加者発表

12月1日(金) 実技実習

2日(土) 休日

3日(日) 休日

4日(月) 実技実習

5日(火) 実技実習

6日(水) 実技実習

7日(木) 実技実習

8日(金) 研修旅行 京都国立博物館修理所ほか文化財施設

9日(土) 研修旅行 吉野紙漉工房見学

10日(日) 社寺など歴史的建造物見学

- 11日（月） 実技実習  
 12日（火） 実技実習、特別講演及び実習  
 13日（水） 実技実習、特別講演及び実習  
 14日（木） 実技実習  
 15日（金） 実技実習、閉会式  
 16日（土） 都内文化施設見学  
 17日（日） 参加者帰国

#### 参加者リスト

氏 名		国 籍
1. Ms. MURPHY Mary	マーフィー・マリー	カナダ
2. Ms. NATALE Claudia	ナターレ・クラウヂア	コロンビア
3. Ms. UKKONEN Paivi	ウッコネン・パイヴィ	フィンランド
4. Ms. BROWN Jean	ブラウン・ジャン	イギリス
5. Ms. KOLLAROU Sophia	コラル・ソフィア	ギリシャ
6. Mr. BHAT Chandrasa	ハット・チャンドラハサ	インド
7. Ms. CAMPBELL Lyne	キャンベル・リン	ニュージーランド
8. Ms. LANDRO Gry	ランドロ・グレイ	ノルウェー
9. Ms. REIS BETTENCOURT Katia	レイスペタンコー・カチア	ポルトガル
10. Ms. KRIAKINA Lubov	クリアキーナ・ルドフ	ロシア
11. Ms. CHANG Minli	チアン・ミンリ	シンガポール
12. Ms. SEIBERT Ann	サイバート・アン	アメリカ

## (2) 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修

近年博物館・美術館の数が増加すると共にその施設が近代化し、燻蒸室、保存・修理などの保存に関する設備が整備されて保存部門を担当する職員が配置されつつある。しかし、これらの職員が保存科学の知識や技術を修得しようとしても適当な学習の場がないのが現状である。そのために博物館、美術館などの学芸員の保存担当者を対象に、文化財の科学的保存に関する基本的な知識及び技術について研修を行い、その資質の向上を持って文化財の保護に資することを目的とし、第17回研修会を開催した。

期 間 2000（平成12）年7月17日（月）～28日（金）

参加者数 31名

プログラム

7月17日（月）

開校式・オリエンテーション

保存環境 総論

三 浦 定 俊

保存環境 各論 一光と劣化・照度基準一

佐 野 千 絵

保存環境 各論 一温湿度一

石 崎 武 志

保存環境〈実習〉一温湿度測定機器の取扱い一

石 崎 武 志

7月18日（火）

保存環境 各論 一大気汚染とその影響一

平 尾 良 光

保存環境 各論 一室内汚染一

佐 野 千 絵

保存環境 各論 一展示・梱包ケースの温湿度調節一

東京国立博物館 神 庭 信 幸

保存環境〈実習〉一湿度の制御法一

石 崎 武 志

7月19日(水)

生物被害 概論

木川りか・山野勝次

生物被害〈実習〉—文化財害虫同定—

山野勝次・木川りか

生物被害 各論 —生物防除法1—

木川りか

生物被害〈実習〉—殺虫処置1—

木川りか・石崎武志

7月21日(金)

生物被害 各論 —生物防除法2—

木川りか

生物被害〈実習〉—殺虫処置2—

木川りか

生物被害〈実習〉—殺虫処置3(温湿度計測を含む)—

木川りか・石崎武志

7月24日(月)

調査手法 各論 —画像計測—

三浦定俊

調査手法 各論 —材質調査—

早川泰弘

劣化と保存 各論 —日本画—

増田勝彦

劣化と保存 各論 —紙—

増田勝彦

劣化と保存 各論 —油彩画—

東京芸術大学 歌田真介

7月25日(火)

劣化と保存 各論 —漆工品—

加藤寛

劣化と保存 各論 —木造品—

西浦忠輝

劣化と保存 各論 —繊維—

佐野千絵

保存環境〈実習〉—調査1—

石崎武志・佐野千絵・木川りか

7月26日(水)

ケーススタディ —博物館・美術館における収蔵・展示の問題とその対策—

石崎武志・佐野千絵・木川りか

7月27日(木)

劣化と保存 各論 —修復材料—

川野邊 渉

劣化と保存 各論 —考古資料(無機)—

青木繁夫

劣化と保存 各論 —考古資料(有機)—

青木繁夫

保存環境〈実習〉—調査2—

石崎武志・佐野千絵

7月28日(金)

博物館の設計と防災計画

石崎武志・佐野千絵

閉校式

#### 研修参加者名及び所属

秋澤理香 Antique Museum 江戸民具街道  
秋山笑子 千葉県立大利根博物館  
生田ゆき 三重県立美術館  
石岡ひとみ 愛媛県立歴史文化博物館  
石田治郎 財三溪園保勝会  
伊原慎太郎 山口県立山口博物館  
岩井共二 山口県立美術館  
内山淳子 横浜市美術振興財団横浜市民ギャラリー  
梅崎真理 広島平和記念資料館  
大橋弘明 財東京富士美術館  
奥村一郎 和歌山県立近代美術館  
佐々木杏里 財手銭記念館  
里見和彦 高知県立牧野植物園

嶋 村 元 宏	神奈川県立歴史博物館
高 野 昌 二	山形県立博物館
高 橋 覚	国立歴史民俗博物館
土 屋 裕 子	東京国立博物館
永 島 明 子	京都国立博物館
中 田 利枝子	岡山県立博物館
長 舟 洋 司	京都府京都文化博物館
中 村 史 彦	財団法人日本相撲協会相撲博物館
新 田 建 史	静岡県立美術館
浜 崎 礼 二	宇都宮美術館
平 芳 幸 浩	国立国際美術館
廣 江 泰 孝	岐阜県美術館
福 田 雪 江	鳥取県立博物館
藤 田 励 夫	滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
保 坂 健二朗	東京国立近代美術館
松 川 綾 子	奈良県立美術館
村 上 美 保	愛媛県美術館
吉 村 智 博	大阪人権博物館

### (3) 資料保存地域研修

博物館・美術館などの文化財公開施設における資料の保存は、保存を担当する学芸員の努力によっていることはもちろんであるが、学芸員以外の館長、事務官や警備員、監視員、空調機器の管理・保守作業員など、博物館の様々な業務にたずさわる多くの人々の理解がなければ、円滑に進まない。特に2004年末の臭化メチルの全廃に向け、IPM(総合的害虫管理)を実施するためには、できるだけ多くの館関係者に文化財の保存に関する基礎的な知識を理解してもらう必要がある。本研修は文化財保護に関する基礎的な知識を、文化財公開施設に勤務するできるだけ多くの職員に短い日数で学んでもらうため、各地の博物館協議会などの協力を得て1998年度より開催するものである。

[第3回] 平成12年11月30日(木)・12月1日(金)

会 場 「いわみーる」研修室

共催機関 島根県文化施設連絡協議会、島根県歴史民俗資料館等連絡協議会

参加者数 約35名

プログラム・講師

保存環境調査の概要	三浦 定俊
温湿度の制御と管理	石崎 武志
照明の制御と管理	三浦 定俊
空気汚染物質の制御と管理	佐野 千絵
生物劣化の制御と管理	佐野 千絵

[第4回] 平成12年12月12日(火)

会 場 沖縄県立埋蔵文化財センター

共催機関 沖縄県立埋蔵文化財センター・沖縄県立博物館・那覇市歴史資料室

参加者数 約40名

プログラム・講師

保存環境調査の概要	三浦 定俊
温湿度の制御と管理	三浦 定俊



照明の制御と管理            三浦 定俊  
空気汚染物質の制御と管理   佐野 千絵  
生物劣化の制御と管理       佐野 千絵

#### (4) 海外学術調査員および研究者のための保存修復講座

日本人研究者による海外学術調査が多くなっている。それらの調査現場では保存の知識が必要不可欠である。欧米の調査隊では、保存の専門家が同行することが常識になっているが、日本の調査隊にはそのような専門家が同行する事が困難である。調査現場では、保存に関わる問題が多くあるが、前述したような事情から調査に参加している保存知識のない調査員によってこれらの問題が解決されなければならない。しかし、専門家でないためにかえって問題を大きくしてしまうことがよくある。このような状況を改善することを目的に、学術調査に参加している調査員、研究者に対して文化財の保存修復に関する基礎的な知識が得られるための講習会を行っている。

期 間 2000（平成12）年5月8日～2001（平成13）年2月19日  
場 所 会議室  
担 当 青木繁夫（修復技術部）

##### 講義内容

##### 第一期 保存修復とは？

保存計画  
資料の調査方法  
資料の保存方法と保存環境整備  
遺跡における応急的保存処理

##### 第二期 金属製品の保存処理

土製品の保存処理  
石製品の保存処理  
木製品の保存処理  
染織品・皮革・その他の保存処理

##### 第三期 遺跡の保存整備

参加者 12名

参加者および所属

石 田 恵 子	（古代オリエント博物館）	妹 尾 信 子	（共立女子大学大学院修士課程）
平 野 祐 子	（上智大学大学院博士課程）	小 西 祐 子	（早稲田大学大学院修士課程）
山 口 大 介	（筑波大学大学院）	川 崎 健 三	（創価大学国際仏教高等研究所）
佐々木 昌 孝	（早稲田大学大学院修士課程）	池 田 和 美	（早稲田大学大学院修士課程）
片 町 建	（日本大学大学院博士課程）	香 川 正 子	（日本大学大学院博士課程）
大 饗 一 輝	（日本大学大学院博士課程）	磯 矢 治 彦	（國學院大學）

#### (5) 博物館学実習

毎年、美術部と情報資料部は、近代美術を主な内容とする博物館学実習を行っている。

日 時：2000年（平成12年）8月28日～9月2日  
会 場：東京国立文化財研究所  
参加者数：10名

プログラム 〈日本近代美術資料を中心とした実習〉

第1日 8月28日(月)

10:00~10:30 オリエンテーション

美術部 山 梨 絵美子

10:30~12:00 展示について

美術部第二研究室 塩 谷 純

11:30~10:30 東京国立文化財研究所所蔵の美術資料

美術部 山 梨 絵美子

13:00~17:00 近・現代美術資料の収集・作成の意義と現状

美術部第二研究室

第2日 8月29日(火)

全日 近・現代美術資料の収集・作成

美術部第二研究室

第3日 8月30日(水)

全日 近・現代美術資料の収集・作成

美術部第二研究室

第4日 8月31日(木)

10:00~12:00 近・現代美術資料の収集・作成

美術部第二研究室

13:00~15:00 近・現代美術資料の収集・作成

美術部第二研究室

15:20~17:00 美術品の調査について

美術部第一研究室

第5日 9月1日(金)

10:00~12:00 近・現代美術資料の収集・作成

美術部第二研究室

13:00~14:00 文化財保存について

保存科学部長 三 浦 定 俊

14:00~15:00 文化財の修復について

修復技術部長 増 田 勝 彦

15:20~17:00 近・現代美術資料の収集・作成

美術部第二研究室

第6日 9月2日(土)

全日 展覧会見学とまとめ

## 4. 文化財修復協力

### (1) 在外日本古美術品修復協力事業

海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と協力して、保存修復に関連する研究を行う事業である。1991(平成3)年度から絵画を対象に事業を進めてきたが、1997(平成9)年度から工芸品など欧米の修復技術で修理の困難な分野にも協力対象を拡げた。

この事業により修復した作品の公開によってわが国の修復技術に対する理解が深まり、修復技術の交流が促進されている。本事業の立案のために、欧米に出張し、作品調査のほかに修復技術について所蔵博物館と討議し、併せて輸送の手続きについても協議を行っている。当研究所は修理内容の検討、修理作品の写真記録の作成および整理、保存し、輸送手続きに責任を持って当たっている。

この修復協力事業によって修理された作品の公開が増すことは当然であるが、修復協力事業が契機となって所蔵の日本古美術品に対する関心が新たに高まりつつあり、欧米諸国では日本古美術品を所蔵する博物館の間で協力関係を結ぶネットワークが構築されつつある。さらに、文化財保存の専門家の交流も促進され、わが国の文化財修復技術の普及と理解に対し、大きな役割を果たしている。

平成12年度、修復した絵画、工芸品の修理状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を文化庁、外務省、国際交流基金、東京国立文化財研究所の4者協力のもとに刊行した。また、この事業の企画と庶務を国際文化財保存修復協力センターと庶務課が、また修復に関する調査および修復業務を修復技術部が、写真記録の作成および整理業務を情報資料部がそれぞれ担当した。

この事業では、近世輸出土芸品を対象に関連調査を行った。調査研究会は、静岡県三島市の佐野美術館で開催中の特別展「寄木細工 海を渡った静岡の木工芸」に出品中の寄木作品約100点を対象に調査を行った。漆工品以外の近世輸出土芸品に関する歴史および美術的所見をまとめ特別展カタログとした。

### 第3回 在外日本古美術品修復技術研究会関連調査会

調査日程 平成12年6月8日(木) 10:00~15:00

調査場所 静岡県三島市 佐野美術館

調査対象 近世輸出の木画家具および調度(金子コレクション)

調査メンバー	高橋 隆 博	関西大学文学部教授
	赤石 敦 子	足立美術館学芸員
	勝 盛 典 子	神戸市立博物館学芸員
	金子 皓 彦	東京女学館大学教授
	室 瀬 和 美	
	勝 又 智 志	
	山 下 好 彦	
	田 口 善 明	
	松 本 達 弥	
	北 村 繁	
	永 島 明 子	京都国立博物館学芸員
	小 杉 拓 也	

平成12年度修復候補作品の調査（絵画）

調 査 国	調 査 地	調査作品の点数
アメリカ合衆国	バージニア美術館	絵画 15点
	クリーブランド美術館	絵画 10点
チェコ共和国	ナーブルステイク博物館	絵画 1点
	プラハ国立博物館（アジア館）	絵画 5点
	プラハ国立博物館（別館）	絵画 8点
ドイツ連邦共和国	バイエルン民俗博物館	絵画 7点

平成12年度修復候補作品の調査（工芸品）

調 査 国	調 査 地	調査作品の点数
アメリカ合衆国	フィラデルフィア美術館	漆工品 12点
	ウォルターズ美術館	漆工品 13点
	エール大学美術館	漆工品 10点
	メトロポリタン美術館	刀剣品 73点
チェコ共和国	キンズバルト博物館	漆工品 8点、具足 2点
	ナーブルステイク博物館	漆工品 7点、具足ほか4点
	プラハ国立博物館（アジア館）	漆工品 7点
	ナーブルステイク博物館（別館）	兜、具足21点
ドイツ連邦共和国	バイエルン民俗博物館	漆工品 13点 具足ほか12点

【協力機関】 文化庁、外務省文化交流部文化第一課、外務省現地公館、国際交流基金、芸術研究振興財団

## 5. 講座など

### (1) 公開学術講座

美術部と情報資料部、そして芸能部は、それぞれ、美術史研究と芸能研究の成果を一般に公開することを目的に、毎年1回公開学術講座を開いている。美術部・情報資料部の講座ではスライドを、また芸能部の場合には演者の実技を通じて、専門性の高い学術研究をわかりやすく解説している。1966年度（昭和41年度）に始まった美術部・情報資料部の講座は本年度で第34回を数え、また1967年度（昭和42年度）に始まった芸能部の講座は本年度で第31回を数える。

#### 第34回美術部・情報資料部公開学術講座

日 時 2000（平成12）年10月25日（水） 13：30～16：00

会 場 東京都美術館講堂

入場者数 125名

発表者・演題・発表要旨

1) 津田 徹英（情報資料部写真資料研究室研究員）

「中世の童子形と神」

わが国の古代・中世において、老人とともに子供（童子）が神に近い存在であったという認識は早くから文化史や国文学の方面から指摘されている。しかし、実際の造形（美術作品）においてこれがどのように関わって造形表現として昇華をみたかはあまり明確でない。本講演では、中世の彫刻・絵画作例から聖性をもつ童子を集め、そこに認められる共通する特徴を指摘しながら、童子形像が聖性と関わる場合の暗黙の了解事項を分析した。



美術部・情報資料部  
公開学術講座風景

2) 中野 照男（美術部第一研究室長）

「中国新疆キジル石窟壁画の仏伝図の諸問題」

西域は、仏教説話に関わる美術の宝庫である。西域北道最大の石窟群であるキジル石窟にも多くの仏伝図があるが、時代によって仏伝図の内容と表現形式が変化している。簡単には、釈尊の事跡への関心、釈尊の追慕から、釈尊の説いた法への関心、その法の不滅性の強調へと変化したと言えよう。その変化のありさまを、宗派、民族、石窟造営の担い手、典拠となった経典などの視点から分析した。



#### 第31回芸能部公開学術講座

日 時 2000（平成12）年10月31日（火）

場 所 矢来能楽堂

入場者数 250名

発表者・発表要旨

1) 中村 茂子（芸能部民俗研究室長） 民俗芸能に伝承する翁猿楽の特色

民俗芸能には、各時代に猿楽の翁から取り入れた翁の芸能が全国各地で、さまざまに変容した芸態で伝承されている。その中の一つ、語る「翁」を伝承するのが、兵庫県の上鴨川住吉神社翁舞と三信遠（愛知・長野・静岡）地方に分布するおこないの「翁」である。白色尉が語る内容は〈宝数え〉を中心としたもので、各伝承地に共通しているが、上鴨川住吉以外には、冠者・父の尉という名称はみられない。三信遠地域に伝承する「翁」の〈松かげ〉は、その詞章内容から父の尉の変容と推定されるが、松かげという名称は、白色尉の宝数えに引きつけた〈神仏数え〉の雛子詞に由来する。三信遠地域や上鴨川住吉神社翁舞には三番叟が見られないが、語る「翁」においては三番叟が軽視され

ていたと考えられる。

## 2) 高桑いづみ(芸能部主任研究官) 能の翁：舞の異式演出

能の演目の中で、もっとも古くから上演されているのが「翁」である。天下泰平を言祝い、祝福の舞を舞うという内容のため古来から神聖視されてきたが、演出は流動的で、さまざまなパリエーションが考案されてきた。興福寺の神事と関係して演じられた替えの「翁」が「弓矢立合」と「十二月往来」である。複数の大夫が舞台上で同一の演技をすることを立合というが、「弓矢立合」は世阿弥時代から演じられていたし、翁が三人登場し、十二月の風物を掛け合いで謡う「十二月往来」には、民俗芸能の「語る翁」との関連性がうかがえる。こうしたさまざまな演出を紹介し、「翁」の舞には能の「道成寺」で舞う「乱拍子」に似た部分があるが、それは能以前の古い舞の特徴だったこと、小鼓三調で囃すのは立合で演じたことと無関係ではないこと、なども指摘した。



### 実 演

#### 1) 〈兵庫県上鴨川神社翁舞より「冠者・父の尉」〉

上鴨川住吉神社保存会

#### 2) 〈能「翁 十二月往来」〉 金春安明他

## (2) 夏期学術講座

### 第25回夏期学術講座

伝統芸能研究の発展と文化財保護に役立てるため、当研究所芸能部の研究員が大学院生を対象に、その分野に関する無形文化財の調査の成果を講義する。

### テ ー マ アジアの中の民俗芸能

期 間 2000(平成12)年7月17日(月)～19日(水)

10:30～12:00、13:15～14:45、15:00～16:30

場 所 東京国立文化財研究所 セミナー室

参 加 者 70名

担当講師 星 野 紘(東京国立文化財研究所芸能部長)

野 村 伸 一(慶應義塾大学教授)

細 井 尚 子(立教大学助教授)

### 趣 旨

かつて伎楽、雅楽の伝播の経緯やモンゴル・チベットと日本民謡との類似性が研究されたことがあったが、国際化の進展を背景に日本の伝統芸能をアジアの中で位置づけようとする調査研究が、民俗芸能分野においても展開しようとしている。

従来、民俗芸能の成立展開は日本国内だけの問題とすまされて来た。ところが中国、韓国などには、訪れ神、神事舞踊田遊び、人形劇(戯)など日本の民俗芸能に近い伝承が存在することが報告されている。これは日本、中国、韓国に共通する東アジア的性格に起因するものであろう。そこには当然歴史風土や民族性の違いによる差異も認められ、芸能の成立や伝播受容に関わる時代差も反映しているが、その差異に注目することで日本の民俗芸能の特色を明瞭にしよう、という視点に立った比較研究の一端を紹介する。



プログラム

- 7月17日 総説・中国と日本の輪踊りを例に  
中国少数民族の訪れ神  
日本と中国の神事舞踊の足運び
- 7月18日 中国の田遊び風芸能  
神様としての中国の糸繰り人形  
朝鮮の葬と芸能
- 7月19日 朝鮮の葬と芸能 続 シツキムクツ  
朝鮮の葬と芸能 まとめ  
質疑

## 6. 大学院教育

### —東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学教室—

1995年（平成7年）4月より東京芸術大学大学院と連携して大学院教育に従事し、これからの文化財保存を担う人材を育成している。システム保存学は、文化財の保存環境を研究する保存環境学講座と保存修復に用いる材料について研究する修復材料学講座に分かれている。各講座3名ずつ、所員が併任教官として指導に当たっている。

受入学生の定員は修士・博士課程ともに各学年2名である。2000年（平成12年）は修士課程に4名が在籍している。

#### (1) 併任教官および担当授業

##### 保存環境学講座

併任教授 三浦 定俊（保存科学部長）

保存環境計画論（前期）

併任教授 石崎 武志（保存科学部物理研究室長）

保存環境学特論Ⅰ（後期）

併任助教授 佐野 千絵（保存科学部主任研究官）

保存環境学特論Ⅱ（前期）

##### 修復材料学講座

併任教授 増田 勝彦（修復技術部長）

修復材料学特論Ⅰ（前期）

併任教授 青木 繁夫（修復技術部第三修復技術研究室長）

修復計画論（後期）

併任助教授 川野邊 渉（修復技術部第二修復技術研究室長）

修復材料学特論Ⅱ（後期）

客員教授 渡邊 明義

助 手 谷口 陽子

#### (2) 文化財保存学演習

第1回 2001年（平成13年）1月16日（火）

「修復材料の評価に関する実験」（実習）都立産業技術研究所にて

さまざまな塗装材料、合成樹脂、天然材料の強度測定

青木 繁夫 併任教授

第2回 2001年（平成13年）1月23日（火）

「文化財のX線撮影実習」（実習）東京国立文化財研究所にて

X線撮影の原理に関する講義およびさまざまな材質によって構成される資料の撮影  
と画像解釈に関する実習

三浦 定俊 併任教授

## 7. 出版

当研究所は、毎年、学術雑誌・年鑑・国際研究集会プロシーディングス・研究会報告書・東文研ニュースなど、多種多様な出版物を発行している。これらに掲載された研究論文や発表などは文化財の分野において最新の情報を伝えるものである。

### (1) 定期刊行物

#### 1) 美術研究

昭和7年創刊の機関誌「美術研究」には、日本・東洋の古美術ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関連する西洋美術について、研究論文・解説・資料等を掲載している。

#### 『美術研究』第374号（編集）

朝鮮王朝時代肖像画の類型及び社会的機能  
後期印象派・考 —1912年前後を中心に（中の三）

趙 善 美  
田 中 淳

#### 2) 芸能の科学

古典芸能や民俗芸能に関する研究論文・調査報告・資料翻刻等を掲載している。

#### 3) 保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査、研究、受託研究報告等の論文報告及び修復処置概報等を掲載している。

#### 『保存科学』第40号

電子線劣化など各種劣化促進処理された補修用絹の劣化機構に関する考察

佐 野 千 絵・米 山 めぐ美・川野邊 渉・増 田 勝 彦・三 浦 定 俊・馬 淵 久 夫  
変色試験紙上に捕捉された化学種（Ⅱ）—室内空気汚染物質量の暴露時間依存性— 佐 野 千 絵  
土の凍上性評価手法に関する研究 石 崎 武 志  
文化財の保存を目的とした煉瓦の樹脂処理効果に関する研究 朽 津 信 明・早 川 典 子  
焼損文化財の保存処置に関する研究—焼損木材の現状維持に関する研究— 杓 名 貴 彦・川野邊 渉  
白杣磨崖仏で観察される彩色表現について 朽 津 信 明  
白杣磨崖仏群における紫外線を用いた生物制御の試み 川野邊 渉・朽 津 信 明・早 川 典 子  
白杣磨崖仏における表面樹脂処理試験 早 川 典 子・川野邊 渉  
ポータブル蛍光X線分析法による木彫像の彩色材料調査 早 川 泰 弘・三 浦 定 俊・津 田 徹 英  
輸出漆器の技法的復元研究（Ⅰ） 田 口 義 明・加 藤 寛・高 橋 千 恵  
国宝「武蔵埼玉稲荷山古墳出土品」修復Ⅰ—銀装馬具について—  
大 森 信 宏・早 川 泰 弘・三 浦 定 俊・青 木 繁 夫  
—橋徳川家伝来紫白緞威胴丸具足に於ける鍔金具緑青除去の研究（受託研究報告第71号）—  
小 杉 拓 也・加 藤 寛・高 橋 千 恵  
東京国立文化財研究所新営庁舎収蔵施設の空気環境—移転前調査結果— 佐 野 千 絵  
東京国立文化財研究所新営収蔵庫の環境調査 石 崎 武 志  
我が国による文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点（Ⅱ）—国際文化財保存修復研究会からの知見(2)—  
二 神 葉 子・西 浦 忠 輝  
展示公開施設の館内環境調査報告—平成11年度— 石 崎 武 志・佐 野 千 絵・三 浦 定 俊  
平成12年度 修復処置概報 修復技術部

#### 4) 日本美術年鑑

日本美術年鑑は各年の美術活動と美術研究・批評の状況を記録する刊行物である。美術部では、当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所が昭和11年から始めた「日本美術年鑑」の編集を引継ぎ、刊行を継続してきた。平成12年度版の内容は、下記のとおりであるが、近年の情報量の増大にともない、編集作業が限界に近づきつつあり、そのため編集作業と並行して、より精選した情報の収録につとめるべく、改編の検討にはいり、そのため今年度は発行が次年度に繰り延べになった。

平成11年度美術界年史

平成11年度主要美術展覧会（企画展、作家展、団体展）

美術文献目録（平成11年）

定期刊行物所載文献

美術展覧会図録所載文献（企画展、作家展、団体展）

物故者（平成11年）

#### (2) シンポジウム等の報告書

##### 1) 国際研究集会プロシーディングス

本書は毎年行われる「文化財の保存および修復に関する国際研究集会」の基調講演や発表内容をまとめた報告書であり、本年度は1999年（平成11年）9月に行われた「第23回 文化財の保存および修復に関する国際研究集会—アジアの文化財生物被害防除対策の今後：2005年臭化メチル全廃を控え—」の内容をまとめた英文報告書を発行するものである。

#### 《Integrated Pest Management in Asia for Meeting the Montreal Protocol》

- Preface Akiyoshi WATANABE
- Address by the Director-General of the Tokyo National Research Institute of Cultural Properties Akiyoshi WATANABE
- Address by the Councilor on Cultural Properties of the Agency for Cultural Affairs Jin'ichi MURAKAMI
- Approaches to the Research on Biodeterioration of Cultural Property Hideo ARAI
- Pest Controlling Methods in Thailand: Chemical Methods and Non-chemical Methods Chiraporn ARANYANARK
- History of Insect Controlling Methods in Japan: Chemical Methods and Non-chemical Methods Toshio ISHIKAWA
- Methyl Bromide Phase-out: Controversial Points for Future Pest Control Sadatoshi MIURA
- Integrated Pest Management: Practical, Safe and Cost Effective Control of Insect Pests in Museum Collections and Buildings David PINNIGER
- Overview of Oxygen-free Methods and Thermal Methods for Insect Control in Museums Shin MAEKAWA
- Application of Carbon Dioxide for Pest Control of Buildings and Large Objects Gerhard BINKER
- Low Oxygen Atmosphere and Carbon Dioxide Treatments for Eradication of Insect Pests in Japan Rika KIGAWA
- Evaluation of Physical Effects of Thermal Methods on Materials of Artifacts Takeshi ISHIZAKI
- Chemical Effects of Various Insecticides and Fungicides on Museum Materials: Reviews and Case Studies to Japanese Antiques Chie SANO

- A Historical Survey of Approaches to Pest Management in the National Museum of Singapore

LOH Heng Noi

- Control of the Biodeterioration of Cultural Properties in Korea

Oh-Hee LEE, Sung-Hee HAN

- Control of Pest Problems at Ishikawa Prefectural Museum of History

Takanori HASEGAWA

- Pest Problem Control in Aichi Prefectural Museum of Art

Natsuko NAGAYA

- Support of IPM Programs by Companies: Present Situation of Methods of Monitoring and Use of Insect Repellents for Preventive Conservation

Kazushi KAWAGOE, Koichiro KIKUCHI

- Overall Discussion

Appendix

I. List of Organizing Committee Members

II. List of Demonstration during the Symposium

## 2) 在外日本古美術品保存修復協力事業（工芸品／絵画）

Project for Conservation of Work of Japanese Art in Foreign Collection

平成12年度、在外日本古美術品保存修復協力事業の修復作品の修復に関する報告書。

平成13年3月31日発行。

### 目次

報告書の刊行にあたって

渡 邊 明 義 1 頁

在外日本古美術品の保存修復と展示

河 原 脩 3 頁

### 【工芸品】

カラー図版解説

加 藤 寛 25～28頁

大般若経厨子

北 村 昭 斎 29～54頁

鳳凰蒔絵螺鈿矢筒

勝 又 智 志 67～92頁

黒漆兜（雑賀鉢）

田 口 義 明 114～121頁

菊文螺鈿鞍

山 下 好 彦 129～143頁

蒔絵平文鞍

山 下 好 彦 158～170頁

樹下鳥獸蒔絵螺鈿洋櫃

山 下 好 彦 185～202頁

Illustrations and Glossary

加 藤 寛・山 下 好 彦 203～228頁

勝 又 智 志・小 杉 拓 也

以上 英 訳

松 原 美智子・澤 田 美由紀

### 【絵画】

作品解説

増 田 勝 彦 231～232頁

日吉山王祭礼図屏風

遠藤得水軒 248～249頁

屏風について

256～266頁

阿弥陀来迎図

光影堂 268～272頁

釈迦十六善神像

宇佐美松鶴堂 276～281頁

掛軸について

284～293頁

白描源氏物語絵巻

半田九清堂 298～300頁

弁財天図

岡墨光堂 303～306頁

靈照女図

山内墨申堂 309～312頁

用語解説

317～335頁

以上 英 訳

増 田 勝 彦・松 原 美智子

B 5 版、336頁、カラー図版26頁

英文翻訳 松 原 美智子、編集制作 至文堂

3) SPIDERWEBS AND WALLPAPERS: international applications of the Japanese tradition in paper conservation, Proceedings of the International Seminar on Japanese Paper Conservation 14-20 December 1998. 2000.12印刷

4) 『未来につながる人類の技①航空機の保存と修復』

はじめに	渡 邊 明 義 (東京国立文化財研究所所長)
刊行にあたって	川野邊 渉 (修復技術部)
目 次	
「二式大艇」保存の記録	小 堀 信 幸 (船の科学館学芸部)
スミソニアン航空宇宙博物館の航空機修復	ロバート・C・ミケシュ (アピシエーション・ライター)
ポール・E・ガーバー施設と航空機、宇宙船の保存修復	アン・マッコム (スミソニアン国立航空宇宙博物館／ポール・E・ガーバー保存修復施設修復担当官)
「晴嵐」の保存と修復	ロバート・マクレーン (スミソニアン国立航空宇宙博物館／ポール・E・ガーバー保存修復施設修復担当官)
オランダ空軍博物館のコレクションと国際協力	セバスチャン・クリュガー (オランダ空軍博物館学芸員)
ドイツの歴史的航空機の保存復元と展示	ホルガー・スタインレ (ドイツ技術博物館航空部長)
グラード式単葉機のレプリカ製作	早 川 博 康 (「グラード復元の会」)
国立科学博物館の航空機保存	鈴 木 一 義 (国立科学博物館研究員)
文化財としての航空機—日本の航空機の技術的特徴	ロバート・C・ミケシュ (アピシエーション・ライター)
旧日本軍機を保存する施設	
編集後記	

5) 国際文化財保存修復研究会報告書

国際文化財保存修復研究会で行われた、日本の専門家が海外で行った文化財保存修復国際協力事業に関する事例報告、質疑応答、および総合討議の内容をまとめたものである。平成12年度は第7回、第8回研究会についてそれぞれ作成した。

第7回国際文化財保存修復研究会報告書

「エジプト、アブ・シール南丘陵頂部遺跡の保存修復」	
	吉 村 作 治、中 川 武 (以上、早稲田大学)、
	柏 木 裕 之、齋 藤 正 憲 (以上、日本学術振興会特別研究員) … 1
「エジプト博物館王家のミイラ・コレクションの保存」	前 川 信 (ゲティ保存研究所) …15
「ギリシアにおける古代遺跡の保存修復」	伊 藤 重 剛 (熊本大学) …25
「レバノンの文化財とその現状」	松 本 健 (国士舘大学イラク古代文化研究所) …43
「総合討議」	…55
「参加者名簿」	…69

第8回国際文化財保存修復研究会報告書

「バングラデシュの文化財保存と国際協力」	野 口 英 雄 (都留文科大学／東京国立文化財研究所) … 1
「中国大明宮含元殿の保存修復」	矢 野 和 之、友 田 正 彦 (以上、(株)文化財保存計画協会) …19
「総合討議」	…31
「参加者名簿」	…45

6) 文化財建造物耐震補強研究会記録

平成11年11月26日に東京国立博物館資料館セミナー室で開催した、標記研究会の記録報告書である。内容は、林良



彦文化庁主任調査官の概況報告に引き続き、4例の重要文化財建造物修理工事およびその際の構造補強の報告、さらに「歴史的建造物の構造補強の考え方」と題するパネルディスカッションからなる。なお、当日は研究所の近隣にある国立図書館支部上野図書館改修工事（免震レトロフィット）の見学をも併せて行ない、参加者が70名を超える盛況であった。

## 7) 民俗芸能研究協議会報告書

第3回民俗芸能研究協議会報告書 テーマ「芸能用具の保存・修復・新調・活用」

### 目次

#### 1. 序にかえて

#### 2. 事例報告

##### I 「用具の修復と行政的施策について」 ..... 1

岩手県北上市立鬼の館館長 門 屋 光 昭

##### II 「伊那谷人形芝居の場合」 ..... 11

長野県伊那谷人形芝居研究家 伊 藤 善 夫

##### III 「森町舞楽の場合」 ..... 21

静岡県周智郡森町役場勤務 北 嶋 恵 介

##### IV 「秋川歌舞伎発展維持のための努力」 ..... 29

東京都あきる野市文化財保護審議委員 坂 上 洋 之

東京都あきる野市教育委員会 関 谷 学

#### 3. 総合討議 ..... 37

#### 4. 参考資料 ..... 63

#### 5. あとがき ..... 92

#### 6. 報告者・アドバイザー一覧 ..... 93

## 8. 公開・出品

### (1) 公 開

#### 1) 黒田記念室

黒田記念室は当研究所の創設者であり、帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であり、黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を収蔵公開している。

創立当時、主として黒田家から寄贈されたものは、油絵125点、素描170点、写生帖等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なものは、「湖畔」「智・感・情」「花野」「赤髪の少女」「もるる日影」「温室花壇」などである。なお、「湖畔」(平成11年度)につづき、平成12年度には「智・感・情」が国の重要文化財に指定された。

一般公開(無料) 毎週木曜日 午後1時～4時

特別公開 2000(平成12)年10月30日(月)～11月5日(日)(上野の山文化ゾーンフェスティバル)

年間入場者数 3,439人

(なお、黒田記念館改修工事のため2001(平成13)年1月から3月まで休室とした。)

#### 2) 資料閲覧室

当研究所所蔵資料のなかで、情報資料部が管理する各種図書資料・写真資料等は、文化財研究者・大学院生を対象に、原則として祝日・年末年始(12/25～1/7)を除く、毎週月・水・金(10:00～16:30)に閲覧に供してきた。閲覧業務は、平成11年11月以来、新館建物への移転と準備のため、長期にわたって中止を余儀なくされていたが、本年度9月より、新館2階の資料閲覧室にて再開した。

### (2) 黒田清輝巡回展

黒田清輝の遺作を多く所蔵している当研究所は、黒田清輝の功績を記念し、あわせて地方文化の振興に資するために、昭和52年からの事業として「近代洋画の巨匠 黒田清輝」展を年1回地方において開催してきた。

平成12年度は下記のように開催された。

会 場	滋賀県立近代美術館
会 期	2001(平成13)年1月13日(土)～2月18日(日)
主 催	東京国立文化財研究所 滋賀県立近代美術館
開館日数	32日間
入場者数	13,450名
陳列点数	油彩・パステル 61点 木炭デッサン 50点 写生帖 17冊 書簡 3点 日記 5冊 参考資料 6点
図 録	A4版変形、159頁、原色図版62頁、単色図版77頁



巡回展ポスター

#### (3) 所蔵作品等の貸与

本年度の所蔵作品等の貸与は下記の通りであった。

「明治、大正、ふたりの変革者 黒田清輝と萬鉄五郎展」

会 場 萬鉄五郎記念美術館

会 期 2000年7月20日～9月3日

貸与作品

「田舎家」「祈禱」「裸体・女（後半身）」「裸体・女（全身）」「裸体・男（半身）」「自画像（トルコ帽）」「画室の一隅」「少女の顔」「パリー風景」「ブレハの海岸」「昼寝」「横浜本牧海岸」「昔語り下絵（構図II）」「昔語りの下図」「昔語り下絵（清閑寺景）」「昔語り下絵（清閑寺門）」「昔語り下絵（僧）」「昔語り下絵（舞妓）」「昔語り下絵（仲居）」「昔語り下絵（男と舞妓）」「昔語り下絵（男）」「昔語り下絵（舞妓）」「昔語り下絵（草刈り娘）」「湖畔」「智・感・情」「少女・雪子十一歳」「花野下絵」「花野」「桂公肖像（画稿）」「婦人肖像」「自画像」「栗拾い」「温室花壇」「嵐」「案山子」「山つつち」「雪」「挹芳園」以上油彩画38点

「裸婦習作」「裸体習作」「裸婦習作」「裸体習作」「昔語り画稿（構図）」「昔語り画稿（僧半身像）」「昔語り画稿（僧の手）」「昔語り画稿（舞妓半身像）」「昔語り画稿（舞妓全身像）」「昔語り画稿（仲居半身像）」「昔語り画稿（仲居全身像）」「昔語り画稿（男着衣半身像）」「昔語り画稿（男裸体半身像）」「昔語り画稿（舞妓半身像）」「昔語り画稿（草刈り娘の顔）」以上素描15点 計53点

「グレー村の画家たち」展

会 場・会 期

山梨県立美術館 2000年10月21日～ 11月26日

府中市美術館 12月2日～2001年1月21日

西宮市大谷記念美術館 1月27日～ 3月4日

成羽町美術館 3月10日～ 4月15日

佐倉市立美術館 4月28日～ 6月3日

貸与作品

「楊樹」「原」「編物」「赤髪の少女」「七面鳥」「枯れ野原（グレー）」「風景（グレー）」「残雪」「野原の木立」「庭」「豚屋」「台所」写生帖3冊 以上15点

## 9. 年度内主要事業一覧

期 日	事 業 名
2000. 5.15	芸能部舞台紹介
2000. 7.17～ 7.19	第22回芸能部夏期学術講座
2000. 7.17～ 7.28	保存担当学芸員研修
2000. 8.28～ 9. 2	博物館学実習
2000.10.25	第34回美術部・情報資料部公開学術講座
2000.10.31	第31回芸能部公開学術講座（矢来能楽堂）
2000.11. 7	近代の文化遺産保存修復に関する講演会の研究会（船舶の保存・修復について）
2000.11.20	保存計画研究会
2000.11.21	平成12年度国際文化財保存修復研究会
2000.11.28	第3回芸能部民俗芸能研究協議会
2000.11.28～12.15	国際研修「紙の保存修復」
2000.12.13	研究評価委員会
2000.12.15	平成12年度文化財保存修復研究協議会
2000.12.18～12.21	国際研究集会「文化の多様性と文化遺産」
2001. 1.13～ 2.18	黒田清輝巡回展（滋賀県立近代美術館）
2001. 1.27～ 1.28	大学と科学 国際シンポジウム「世界の文化遺産を護る」
2001. 2.19～ 2.24	無形文化財国際ワークショップ（三田共用会議所）
2001. 3.27	平成12年度運営諮問委員会

## 5. 研究交流

### 1. 職員の海外渡航

氏 名	渡 航 先	期 間	目 的
青木 繁夫	台湾	00.04.23～04.29	台湾地震における危機管理講習会講師
青木 繁夫	中国	00.08.05～08.13	敦煌莫高窟及び西安近郊遺跡の調査
青木 繁夫	中国	00.09.04～09.13	敦煌研究院保護研究所との第三期共同研究に関する調査研究
石崎 武志	インドネシア	00.07.08～07.14	建造物の耐久性に関する第2回アジア太平洋会議での研究発表、討論
石崎 武志	ノルウェー、ベルギー、ドイツ	00.09.07～09.22	石造文化財の劣化とその保存に関する研究
石崎 武志	中国	00.09.24～09.30	龍門石窟保存修復調査と協議
石崎 武志	韓国、タイ	00.12.04～12.10	国際会議、日・タイ共同研究、日・タイ協議
石崎 武志	中国	01.03.01～03.09	中国山西省の寺院壁画の調査
井手誠之輔	イギリス	00.07.07～07.18	ロンドン大学東洋アフリカ学院等主催「韓国美術における美術とパトロン」ワークショップに発表出席
井手誠之輔	アメリカ	01.03.17～03.27	アジア学会大会における研究発表及びサンフランシスコ東洋美術館における仏画調査
白井 国明	タイ	00.12.03～12.10	日・タイ共同研究に関する関係機関との協議等
岡田 健	中国	00.08.05～08.13	中国仏教美術の調査
岡田 健	中国	00.09.24～09.30	龍門石窟遺跡保存プロジェクト予備調査及び協議
岡田 健	中国	00.10.11～10.17	龍門石窟調査及び関係機関との協議
岡田 健	スイス	00.11.12～11.26	ベルン歴史博物館所蔵美術品に関する調査
岡田 健	中国	01.02.13～02.16	中国の寺院壁画、古墳壁画の保存に関する研究
岡田 健	中国	01.03.01～03.09	中国山西省の寺院壁画の調査
勝木言一郎	中国	00.07.25～08.03	「敦煌文物保護研究特殊貢献奨」授与式出席及び河北省毘盧寺壁画保護等国際共同研究に関する協議
勝木言一郎	中国	00.09.04～09.13	敦煌研究院保護研究所との第三期共同研究に関する調査研究
加藤 寛	アメリカ	00.10.12～10.21	在外日本古美術品保存修復協力事業に関する事前協議及び調査
加藤 寛	スイス、フランス	00.11.12～11.30	ベルン歴史博物館所蔵美術品に関する調査・リヨン美術館所蔵日本美術品に関する調査
加藤 寛	チェコ、ドイツ	01.03.17～03.25	在外日本美術品保存修復協力事業に関する事前調査・協議
鎌倉 恵子	中国	00.10.07～10.12	中国を中心としたアジア地域の人形劇伝承に関する調査
川野邊 渉	韓国	00.11.15～11.17	日韓共同研究及び今後の研究交流に関する協議
川野邊 渉	中国	01.02.13～02.16	中国の寺院壁画、古墳壁画の保存に関する研究
河原 脩	アメリカ	00.10.12～10.21	在外日本古美術品保存修復協力事業に関する協議及び調査

氏 名	渡 航 先	期 間	目 的
河原 脩	アメリカ	00.10.31～11.09	在外日本古美術品保存修復協力事業に関する事前協議及び調査
河原 脩	タイ、カンボジア	01.03.05～03.14	遺跡保存日タイ共同研究及びアンコール遺跡保存に関する関係機関との協議等
朽津 信明	タイ	00.09.06～09.13	日・タイ共同研究
朽津 信明	韓国	00.11.15～11.17	日韓共同研究及び今後の研究交流に関する協議
朽津 信明	タイ	00.12.03～12.07	遺跡保存修復調査ならびに日・タイ共同研究
朽津 信明	タイ	01.03.11～03.14	遺跡保存修復日・タイ共同研究、日・タイ協議
二神 葉子	タイ	00.09.06～09.13	日・タイ共同研究
二神 葉子	タイ	00.12.03～12.10	遺跡保存修復日・タイ共同研究、日・タイ協議
二神 葉子	タイ、カンボジア	01.03.05～03.14	遺跡保存修復調査ならびに日・タイ共同研究
二神 葉子	イタリア、フランス	01.03.18～03.25	文化財保護制度に関する情報収集、協議
斎藤 英俊	ドイツ	00.08.26～09.07	産業遺産保存活用事例の調査及び情報収集
斎藤 英俊	中国	00.09.24～09.30	龍門石窟遺跡保存プロジェクト予備調査及び協議
斎藤 英俊	中国	01.02.13～02.16	中国の寺院壁画、古墳壁画の保存に関する研究
斎藤 英俊	タイ、カンボジア	01.03.05～03.14	遺跡保存修復調査ならびに日・タイ共同研究
佐野 千絵	オーストリア	00.06.12～06.18	“The Use of Radiation for Conservation of Archaeological Artifacts” 会議出席・発表
佐野 千絵	タイ	00.12.03～12.07	遺跡保存修復、日・タイ共同研究、日・タイ協議
塩谷 純	アメリカ	00.10.11～10.16	菊池容斎についての基礎的研究
塩谷 純	スイス	00.11.12～11.26	ベルン歴史博物館所蔵美術館に関する調査
島尾 新	中国	00.11.19～11.22	西湖周辺寺院の調査
田中 淳	フランス、アメリカ	00.10.01～12.30	明治期渡欧画家の実地調査及び日本美術史研究者との研究協議
津田 徹英	ドイツ	00.08.19～08.29	彩色文化財の材料と技法に関する調査
中野 照男	中国	01.02.13～02.16	中国の寺院壁画、古墳壁画の保存に関する研究
西浦 忠輝	エジプト	00.08.16～08.24	遺跡保存修復調査
西浦 忠輝	タイ	00.09.06～09.13	日・タイ共同研究
西浦 忠輝	中国	00.09.24～09.30	龍門石窟保存修復調査と協議
西浦 忠輝	オーストラリア	00.10.08～10.17	文化財保存修復国際動向調査と研究討議
西浦 忠輝	パキスタン	00.10.20～10.30	ガンダーラ仏教遺跡と出土石彫の保存に関する調査研究
西浦 忠輝	タイ、カンボジア	00.12.03～12.14	遺跡保存修復日タイ共同研究、日タイ協議、国際会議
西浦 忠輝	パナマ、アメリカ	01.01.10～01.20	カスコ・アンティゴ（パナマ市）の保存に関する研究協力事業計画策定のための事前調査
西浦 忠輝	タイ、カンボジア	01.03.05～03.14	遺跡保存修復調査ならびに日・タイ共同研究
早川 泰弘	台湾	00.06.25～06.29	台北大学において当研究所が中心となって開発した可搬型蛍光X線分析装置による文化財の調査手法に関する研究発表及び討論並びに故宮博物院における金属文化財の材質調査
早川 泰弘	アメリカ	00.07.29～08.04	X線を用いた文化財分析技術の調査および学術発表



氏 名	渡 航 先	期 間	目 的
早川 泰弘	中国	00.10.17～10.26	早期中国青銅器の原料産地に関する研究
早川 泰弘	アメリカ	01.03.01～03.09	彩色日本美術の調査、文化財の新しい分析手法の調査等
平尾 良光	韓国	00.05.22～05.26	金属文化財の自然科学的研究に関する共同研究
平尾 良光	中国	00.10.17～10.26	早期中国青銅器の原料産地に関する研究
星野 紘	ロシア、ペラルーシ	00.07.01～07.09	ロシアの仮面芸能の調査
星野 紘	中国	00.08.07～08.16	中国雲南省・四川省藏族における工芸と芸能の記録保存と文化伝承をめぐる国際共同研究
増田 勝彦	オーストリア	00.06.12～06.18	国際原子力機関で開催される「文化財保存と放射線利用(“The Use of Radiation for Conservation of Archaeological Artifacts”) 専門家会議に出席・発表
増田 勝彦	中国	00.07.25～08.03	「敦煌文物保護研究特殊貢献奨」授与式出席及び河北省崑崙寺壁画保護等国際共同研究に関する協議
増田 勝彦	中国	00.09.04～09.13	敦煌研究院保護研究所との第三期共同研究に関する調査研究
増田 勝彦	台湾	00.10.15～10.18	地震災後文化資産保存維持国際学術検討会に出席、発表
増田 勝彦	アメリカ	00.10.31～11.09	在外日本古美術品保存修復協力事業に関する事前協議及び調査
松本 修自	ドイツ	00.08.26～09.07	産業遺産保存活用事例の調査及び情報収集
松本 修自	パナマ、アメリカ	01.01.10～01.20	カスコ・アンティゴ（パナマ市）の保存に関する研究協力事業計画策定のための事前調査
三浦 定俊	中国	00.07.25～08.03	「敦煌文物保護研究特殊貢献奨」授与式出席及び河北省崑崙寺壁画保護等国際共同研究に関する協議
三浦 定俊	ドイツ	00.08.19～08.29	文化財保存に関する調査・研究打合せ
三浦 定俊	オーストラリア	00.10.08～10.16	彩色文化財の保存に関する調査・研究発表
三浦 定俊	イタリア	00.11.05～11.10	イクロム諮問委員会出席
三浦 定俊	イタリア	01.03.11～03.18	イクロム諮問委員会、理事会出席
山岸 智幸	タイ	00.12.03～12.10	日・タイ共同研究に関する関係機関との協議等
渡邊 明義	中国	00.07.25～08.03	「敦煌文物保護研究特殊貢献奨」授与式出席及び河北省崑崙寺壁画保護等国際共同研究に関する協議
渡邊 明義	中国	00.10.11～10.17	龍門石窟調査及び関係機関との協議
渡邊 明義	韓国	00.11.15～11.17	日韓共同研究及び今後の研究交流に関する協議

## 2. 招へい研究員等

### (1) 海外

今年度における海外からの招へいは下記のとおりである。

招へい期間	氏 名	国 籍	所 属	招 へ い 理 由
00.06.08～06.14	金思恵 (Kim SaDug)	韓 国	韓国国立文化財研究所研究員	文化財における環境汚染の影響と修復技術の研究協力
00.06.08～06.14	李奎植 (Lee KyuShik)	韓 国	韓国国立文化財研究所研究員	文化財における環境汚染の影響と修復技術の研究協力
00.10.17～10.28	Martin Hess	ド イ ツ	バイエルン州文化財研究所修復部研究員	彩色文化財の材料と技法に関する研究調査
00.10.17～11.06	Mark Richter	ド イ ツ	絵画・彫刻修復技術者	彩色文化財の材料と技法に関する研究調査
00.10.26～12.26	王旭東 (Wang XuDong)	中 国	敦煌研究院保護研究所副所長	敦煌莫高窟壁画保存修復共同研究
00.10.26～12.26	孫毅華 (Sun YiHua)	中 国	敦煌研究院保護研究所研究員	敦煌莫高窟壁画保存修復共同研究
00.10.27～11.06	Michael Kuhlenthal	ド イ ツ	前バイエルン州文化財研究所修復部長	彩色文化財の材料と技法に関する研究調査
00.10.27～11.06	Eva Kuhlenthal	ド イ ツ	工芸品修復技術者	彩色文化財の材料と技法に関する研究調査
00.11.05～11.15	John Robinson	イ ギ リ ス	海事文化財コンサルタント	近代の文化遺産の修復技術の研究交流
00.11.05～11.17	Volker Koesling	ド イ ツ	ベルリン交通・技術博物館修復科学分析室	近代の文化遺産の修復技術の研究交流
00.11.05～11.17	Johan H. Kloster	ノルウェー	ノルウェー海事博物館主任学芸員	近代の文化遺産の修復技術の研究交流
00.11.08～11.19	Dorota Ros Mielecka	ポーランド	ナロドエ国立博物館学芸員	近世輸出土芸品の保存と修復に関する共同研究
00.11.08～12.06	Klaus Joachim Brandt	ド イ ツ	リンデン美術館東洋美術部主任	日本美術・工芸品の保存及び修復方法の調査
00.11.13～11.23	John Grunewald	ド イ ツ	ドレスデン工科大学研究員	石造文化財の劣化機構と保存対策手法の研究
00.11.13～11.23	Rudolf Plagge	ド イ ツ	ドレスデン工科大学研究員	石造文化財の劣化機構と保存対策手法の研究
00.11.13～11.23	Heiko Fechner	ド イ ツ	ドレスデン工科大学研究員	石造文化財の劣化機構と保存対策手法の研究
00.11.27～12.17	Natale Claudia	コロンビア	紙保存専門家	第7回国際研修「紙の保存修復」
00.11.27～12.17	Ukkonen Paivei	フィンランド	国立美術館紙保存専門家	第7回国際研修「紙の保存修復」

招へい期間	氏 名	国 籍	所 属	招 へ い 理 由
00.11.27～12.17	Broun Jean	イ ギ リ ス	ノースウンブリア大学紙保存主任	第7回国際研修「紙の保存修復」
00.11.27～12.17	Kollarou Sophia	ギ リ シ ャ	ベナキ博物館紙保存専門家	第7回国際研修「紙の保存修復」
00.11.27～12.17	Bhat Chandrasasa	イ ン ド	INTACH美術保存センター紙保存専門家	第7回国際研修「紙の保存修復」
00.11.27～12.17	Campbell Lynn	ニュージーランド	ロバート・マクドガル美術館紙保存専門家	第7回国際研修「紙の保存修復」
00.11.27～12.17	Landro Gry	ノルウェー	国立美術館紙保存専門家	第7回国際研修「紙の保存修復」
00.11.27～12.17	Reis Bettencourt Katia	ポルトガル	リスボン国立図書館紙保存専門家	第7回国際研修「紙の保存修復」
00.11.27～12.17	Kriakina Lubov	ロ シ ア	国立東洋学研究所美術品修復室長	第7回国際研修「紙の保存修復」
00.11.27～12.17	Chang Minli	シンガポール	国立文書館保存専門家	第7回国際研修「紙の保存修復」
00.11.27～12.17	Seibert Ann	ア メ リ カ	国立国会図書館紙保存専門家	第7回国際研修「紙の保存修復」
00.11.28～02.17	Murphy Mary	カ ナ ダ	国立文書館紙保存専門家	第7回国際研修「紙の保存修復」
00.12.05～12.22	Fillip Suchomel	チ ェ コ	プラハ国立美術館工芸部長	日本輸出工芸品の修復方法の比較研究
00.12.10～12.15	Mark Sandiford	イ ギ リ ス	紙保存専門家	第7回国際研修「紙の保存修復」
00.12.14～12.22	Sylvie Guichard-Anguis	フ ラ ンス	ソルボンヌ大学教授	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.14～12.22	Doudou Dien	セ ネ ガ ル	ユネスコ「知的対話及び平和文化の多元性」部局部長	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.14～12.22	Gaye Sculthorpe	オーストラリア	ヴィクトリア博物館民族文化部長	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.14～12.22	Lazar Sumanov	マケドニア	イコモスマケドニア国内委員会委員長	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.14～12.22	Bruno Pedretti	イ タ リ ア	トリノ工科大学教授	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.14～12.22	Mari Voi	サ モ ア	ユネスコ太平洋地域文化アドバイザー	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.14～12.22	Said Zulficar	エ ジ プ ト	NGO「国境なき遺産」事務局長	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.14～12.22	Lam Yiu-tong	香 港	香港政庁民政事務局次官	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.14～12.22	Edi Sedyawati	インドネシア	インドネシア大学講師	文化財保護法50年記念国際シンポジウム

招へい期間	氏 名	国 籍	所 属	招 へ い 理 由
00.12.14～12.22	Dinu Bumbaru	カ ナ ダ	ヘリテッジモントリオールプログラムディレクター	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.14～12.22	Joan Domicelj	オーストラリア	ドミセリコンサルタンツ代表	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.17～12.21	Herb Stovel	イ タ リ ア	イクロム都市保存コース主任	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.17～12.22	Augusto Villaron	フィリピン	ユネスコ国内委員会文化遺産委員会理事	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.17～12.22	Michael Jansen	ド イ ツ	アーヘン工科大学教授	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.17～12.22	Senake Bandaranayake	スリランカ	駐インド スリランカ国特命全権大使	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.17～12.22	Siegfried Enders	ド イ ツ	ヘッセン州文化財保護局	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
00.12.18～12.21	Azedine Beschouch	チュニジア	前ユネスコ文化遺産部特別プログラム主任	文化財保護法50年記念国際シンポジウム
01.01.22～01.31	Cynthia Vialle	オ ラ ン ダ	ライデン国立大学助教授	日蘭交易文書の共同研究
01.01.25～03.06	王克微 (Kewei Wang)	ア メ リ カ	ミシガン大学付属美術館保存専門家	在外日本古美術品の修復技術に関する研究
01.02.01～02.07	呉加安 (Wu Jia'an)	中 国	中国文物研究所所長	中国文物局との文化財保存共同研究に関する協議
01.02.01～02.07	徐毓明 (Xu Yuiming)	中 国	中国文物研究所副所長	中国文物局との文化財保存共同研究に関する協議
01.02.01～02.07	謝方開 (Xie Fangkai)	中 国	中国文物研究所保護修復センター主任	中国文物局との文化財保存共同研究に関する協議
01.02.05～02.14	Tharapong Srisuchat	タ イ	スコータイ地区文化財保存事務所所長	日タイ共同研究に関する調査研究
01.02.05～02.14	Banchong Wongwichean	タ イ	アユタヤ地区文化財保存事務所所長	日タイ共同研究に関する調査研究
01.02.05～02.14	Somsak Tangpan	タ イ	芸術局保存部遺跡保存課長	日タイ共同研究に関する調査研究
01.02.05～02.14	Pongtohorn Hiengkaew	タ イ	芸術局保存部遺跡保存課建築技師	日タイ共同研究に関する調査研究
01.02.11～02.17	鄭于澤 (Choung WooThak)	韓 国	韓国美術研究所研究員	日韓美術における交流・影響・需要に関する研究
01.02.11～02.17	崔公鎬 (Choi GongHo)	韓 国	馬事博物館館長	日韓美術における交流・影響・需要に関する研究
01.02.18～02.24	Yuri Sheykin	ロ シ ア	文化芸術北極研究所芸術主任	無形文化遺産に関する国際ワークショップ
01.02.18～02.24	Tomas Gross	チ ェ コ	バレスケ自然博物館	無形文化遺産に関する国際ワークショップ
01.02.18～02.24	Lauri Harvilahti	フィンランド	文化調査研究所民俗研究部教授	無形文化遺産に関する国際ワークショップ

招へい期間	氏 名	国 籍	所 属	招 へ い 理 由
01.02.18～02.24	Christiane Havel	フ ラ ン ス	文化情報省芸術専門委員会 塑形芸術代表	無形文化遺産に関する国際 ワークショップ
01.02.18～02.24	Irene Odotei	ガ ー ナ	ACCRAレゴン大学アフリカ 研究所部長	無形文化遺産に関する国際 ワークショップ
01.02.18～02.24	Marco Guadagni	イ タ リ ア	トリエスト大学教授	無形文化遺産に関する国際 ワークショップ
01.02.18～02.24	Antonio Machuca	メ キ シ コ	国立人類学歴史研究所 社会 人類学民族部部長	無形文化遺産に関する国際 ワークショップ
01.02.18～02.24	Florentino Hornedo	フィリピン	アテネオ・デ・マニラ大学芸 術科学単科大学教授	無形文化遺産に関する国際 ワークショップ
01.02.18～02.24	Olabiya Yai	ベ ニ ン	ベニン共和国ユネスコ大使兼 常駐代表	無形文化遺産に関する国際 ワークショップ
01.02.18～02.24	Goncalves Ricardo Piquet	ブラジル	ロベルト マリニョ財団文化 遺産環境普及振興代表	無形文化遺産に関する国際 ワークショップ
01.02.18～02.23	梁鐘承 (Yang Jongsung)	韓 国	国立民族学博物館学芸研究官	無形文化遺産に関する国際 ワークショップ
01.02.18～02.23	蔡良玉 (Cai LiangYu)	中 国	中国芸術院音楽研究所外国音 楽研究部長	無形文化遺産に関する国際 ワークショップ
01.02.18～02.23	Sunantha Mit-Ngam	タ イ	教育省常任委員事務所対外関 係部タイユネスコ委員会	無形文化遺産に関する国際 ワークショップ
01.02.18～02.23	Uguen Quoc Hung	ベ ト ナ ム	文化情報省保存博物館部副部 長	無形文化遺産に関する国際 ワークショップ
01.02.24～02.28	Christoph Henrichsen	ド イ ツ	ヘッセン州文化財保護局調査 員	歴史的建造物の保存手法に関 する調査研究
01.02.24～02.28	Hans Werner Zawisla	ド イ ツ	ケルン市文化財建造物保護部 副部長	歴史的建造物の保存手法に関 する調査研究
01.02.24～02.28	Olaf Ingo Kempe	ド イ ツ	ドレスデン技術経済大学教授	歴史的建造物の保存手法に関 する調査研究
01.03.07～03.13	Khanh Trinh	ド イ ツ	ベルリン東洋美術館学芸員	海外美術館での日本美術品の 保存と修復に関する研究

## (2) 国 内

今年度における国内からの招へいは下記のとおりである。

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
00.04.14～04.15	湯山 賢一	京都国立博物館学芸課長	在外日本美術品修復指導委員会
00.05.10～05.11	千葉 秀夫	奈良国立文化財研究所庶務部長	独立行政法人化に関する打合せ
00.05.17	湯山 賢一	京都国立博物館学芸課長	在外日本美術品修復指導委員会
00.05.29～05.30	溝口 勝	東京大学助教授	石造、レンガ建造物の劣化調査
00.05.29～05.31	瀧野沢聡子	東京芸術大学大学院生	石造、レンガ建造物の劣化調査
00.05.29～06.01	武田 一夫	鴻池組技術研究所研究員	石造、レンガ建造物の劣化調査
00.06.07～06.08	室瀬 和美	漆芸修復家	近世輸出工芸品の実践的研究のための調査

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
00.06.07～06.08	高橋 隆博	関西大学文学部教授	近世輸出工芸品の実践的研究のための調査
00.06.07～06.08	小杉 拓也	漆芸修復家	近世輸出工芸品の実践的研究のための調査
00.06.07～06.08	田口 喜明	漆芸修復家	近世輸出工芸品の実践的研究のための調査
00.06.07～06.08	山下 好彦	漆芸修復家	近世輸出工芸品の実践的研究のための調査
00.06.07～06.08	松本 達弥	漆芸修復家	近世輸出工芸品の実践的研究のための調査
00.06.07～06.08	北村 繁	漆芸修復家	近世輸出工芸品の実践的研究のための調査
00.06.07～06.08	勝又 智志	目白漆芸文化財研究所主任研究官	近世輸出工芸品の実践的研究のための調査
00.06.07～06.08	赤石 敦子	足立美術館学芸員	近世輸出工芸品の実践的研究のための調査
00.06.07～06.08	金子 皓彦	東京女学館大学教授	近世輸出工芸品の実践的研究のための調査
00.06.07～06.08	永島 明子	京都国立博物館学芸員	近世輸出工芸品の実践的研究のための調査
00.06.07～06.08	勝盛 典子	神戸市立博物館学芸員	近世輸出工芸品の実践的研究のための調査
00.06.19～06.21	桜井 弘人	飯田市美術博物館学芸員	花祭り会館所蔵の花祭り関係資料調査
00.06.19～06.21	竹井 正弘	宗教芸能史研究家	花祭り会館所蔵の花祭り関係資料調査
00.06.27～06.30	勝又 智志	目白漆芸文化財研究所主任研究官	在外日本美術品修復協力事業に関する関連調査
00.06.30～07.01	多 昭彦	奈良国立文化財研究所庶務課長	独立行政法人化に関する打合せ
00.07.04～07.05	下山 進	デンマテリアル(株)色彩科学研究所所長	顔料の非破壊調査
00.07.07～07.08	根立 研介	京都大学助教授	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会
00.07.07～07.08	石川登志雄	京都府教育庁指導部文化財保護課主査	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会
00.07.07～07.08	岡部 央	群馬県教育委員会文化財保護課課長補佐	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会
00.07.07～07.08	鳴海 祥博	和歌山県文化財保護センター文化財建造物課課長	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会
00.07.07～07.08	日高 真吾	元興寺文化財研究所保存科学センター研究員	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会
00.07.07～07.08	吉村 潤	茅葺屋根保存協会代表取締役	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会
00.07.07～07.08	五十嵐 玲	武田薬品株式会社研究開発部主席研究員	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会
00.07.11～07.12	中川 正	奈良国立文化財研究所庶務係長	独立行政法人化に関する打合せ
00.07.12～07.13	尾立 和則	京都造形大学助教授	国際研修「紙の保存」に関する打合せ
00.07.13～07.16	島谷 弘幸	東京国立博物館	在外日本美術品修復協力事業に関する関連調査
00.07.23～07.29	内田 好昭	京都市埋蔵文化財研究所	明治期における文化財研究成立史資料の共有化に関する研究協議
00.07.23～07.29	広瀬 繁明	真陽社	明治期における文化財研究成立史資料の共有化に関する研究協議
00.07.26～07.27	中川 正	奈良国立文化財研究所庶務係長	独立行政法人化に関する打合せ
00.07.26～07.27	長岡 龍作	東北大学助教授	明治初期の仏像評価に関する文献調査
00.07.28～07.31	登尾 浩助	岩手大学講師	研究打合せ



期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
00.08.01～08.04	武田 一夫	鴻池組技術研究所研究員	研究打合せ
00.08.15	藤村 貞夫	帝京平成大学教授	研究協議
00.08.15	喜安 千弥	帝京平成大学講師	研究協議
00.08.19～08.29	明珍 基也	彫刻修復家	彩色文化財の材料と技法に関する調査
00.08.26～09.07	木村 勉	奈良国立文化財研究所建造物研究室長	調査打合せ
00.09.07～09.08	山下 登	奈良国立文化財研究所会計課長	独立行政法人化に関する打合せ
00.09.12～09.13	中川 正	奈良国立文化財研究所庶務係長	独立行政法人化に関する打合せ
00.09.13	多 昭彦	奈良国立文化財研究所庶務課長	独立行政法人化に関する打合せ
00.09.22	小杉 秀男	小杉建築研究室	黒田記念館の利用に関する懇談会
00.09.26	多 昭彦	奈良国立文化財研究所庶務課長	独立行政法人化に関する打合せ
00.09.26～09.27	千葉 秀夫	奈良国立文化財研究所庶務部長	独立行政法人化に関する打合せ
00.10.01～10.02	下山 進	(株)デンマテリアル色材科学研究所所長	顔料の非破壊調査
00.10.04	関口 正之	勸遠山記念館館長	黒田記念館の利用に関する懇談会
00.10.04	小杉 秀男	小杉建築研究室	黒田記念館の利用に関する懇談会
00.10.05～10.06	中川 正	奈良国立文化財研究所庶務係長	独立行政法人化に関する打合せ
00.10.11～10.12	板垣 義郎	明和産業部長	白杵磨崖仏の修復に関する調査
00.10.16～10.17	多 昭彦	奈良国立文化財研究所庶務課長	独立行政法人化に関する打合せ
00.10.17～10.26	森 純一		研究協力
00.10.17～10.26	三輪 嘉六	日本大学教授	研究協力
00.10.22～10.23	中村 康	京都国立博物館室長	彩色文化財の材料と技法に関する調査
00.10.23～10.28	武田 一夫	鴻池組技術研究所研究員	現場調査
00.10.24～10.25	中久保隆雄	奈良国立文化財研究所	独法移行後の会計事務講習会参加
00.10.24～10.25	車井 俊也	奈良国立文化財研究所	独法移行後の会計事務講習会参加
00.10.24～10.25	江川 正	奈良国立文化財研究所	独法移行後の会計事務講習会参加
00.10.28～10.31	長澤 市郎	東京芸術大学教授	彩色文化財の材料と技法に関する調査
00.10.30～11.01	大畑 秀市	上鴨川住吉神社保存会民俗芸能伝承者	第31回芸能部公開学術講座
00.10.30～11.01	大畑 康洋	上鴨川住吉神社保存会民俗芸能伝承者	第31回芸能部公開学術講座
00.10.30～11.01	大畑 悦夫	上鴨川住吉神社保存会民俗芸能伝承者	第31回芸能部公開学術講座
00.10.30～11.01	東谷 保	上鴨川住吉神社保存会民俗芸能伝承者	第31回芸能部公開学術講座
00.10.30～11.01	大畑 光正	上鴨川住吉神社保存会民俗芸能伝承者	第31回芸能部公開学術講座
00.10.30～11.01	西川 和明	上鴨川住吉神社保存会民俗芸能伝承者	第31回芸能部公開学術講座

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
00.10.30～11.01	小藪 久男	上鴨川住吉神社保存会民俗芸能 伝承者	第31回芸能部公開学術講座
00.10.30～11.01	宗田 好史	京都府立大学助教授	国際シンポジウム
00.11.06～11.07	中村 陽一	なにわの海の時空館副館長	船舶の保存修復の研究会
00.11.06～11.07	横山晋太郎	各務原市総合教育メディアセン ター館長	船舶の保存修復の研究会
00.11.06～11.07	昆 正明	青森県立郷土館学芸主幹	船舶の保存修復の研究会
00.11.06～11.07	平賀 大蔵	海の博物館資料室長	船舶の保存修復の研究会
00.11.09～11.10	小堀 信幸	船の科学館学芸部長	船舶の保存修復の研究会
00.11.11～11.15	竹内奈美子	東京国立博物館研究員	輪島塗の調査
00.11.19～11.20	小西 純一	信州大学工学部社会開竣工学科 助教授	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	角田 久和	ひがし大雪アーチ橋友の会事務 局長	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	伊藤 潤	箱根町教育委員会生涯学習課副 主幹	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	矢谷 明也	舞鶴市役所建設部建築住宅課主 任	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	平島 勇夫	大牟田市教育委員会生涯学習課 主査	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	勢田 廣行	荒尾市教育委員会社会教育課文 化係係長	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	東條 寛	四日市市教育委員会文化課文化 係係長	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	松島 吉伸	富山県教育委員会文化財文化財 係	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	久村 貞男	佐世保市教育委員会社会教育課 主幹	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	杉山 影梧	静岡市教育委員会社会教育課主 幹	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	柿森 和年	長崎市教育委員会文化財課	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	木村 勉	奈良国立文化財研究所建造物研 究室室長	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	村田 健一	奈良国立文化財研究所建造物研 究室主任研究官	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	中尾 正治	京都府教育庁指導部文化財保護 課文化財専門技術員	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	植田 哲司	奈良県教育委員会文化財保存課 建造物係長	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	寺本 就一	和歌山県文化財保護センター文 化財建造物課副主査	研究会「近代遺産の保存と活用」

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
00.11.19～11.20	御書 辰志	大口市企画財政課企画調整室企画政策係主事	研究会「近代遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	林 義久	大阪府教育委員会文化財課主査	研究会「近代化遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	村田 信夫	滋賀県教育委員会事務局文化財保護課主幹	研究会「近代化遺産の保存と活用」
00.11.19～11.20	亀沢 修	秋田県小坂町教育委員会 生涯学習・社会教育課主任	研究会「近代化遺産の保存と活用」
00.11.21	内田 俊秀	京都造形芸術大学教授	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	森本 晋	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター情報資料室主任研究官	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	森田 恒之	国立民族学博物館民族学研究開発センター教授	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	増田千次郎	「日本建築」セミナー	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	増澤 文武	元興寺文化財研究所保存科学センター センター長	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	濱崎 一志	滋賀県立大学人間文化学部助教授	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	中尾 芳治	帝塚山学院大学教授	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	鈴木 稔	帝京大学山梨文化財研究所保存科学研究室室長	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	坂井 隆	群馬県埋蔵文化財調査事業団	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	西藤 清秀	奈良県立橿原考古学研究所	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	川崎 了	大阪大学大学院工学研究科助手	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	上野 邦一	奈良女子大学教授	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	泉田 英雄	豊橋技術科学大学助教授	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	浅野 和生	愛知教育大学教育学部助教授	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	工業 善通	ユネスコ・アジア文化センター 研修事業部長	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	海老澤孝雄	㈱ざ・エトス 代表取締役	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	常木 晃	筑波大学助教授	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	増井 正哉	奈良女子大学助教授	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.21	宮川 朝一	東洋大学教授	第8回国際文化財保存修復研究会
00.11.23～11.24	尾立 和則	京都造形芸術大学助教授	国際研修「紙の保存修復」
00.11.24～11.25	千葉 秀夫	奈良国立文化財研究所庶務部長	独立行政法人化に関する打合せ
00.11.27～11.29	伊藤 善夫	伊那谷の人形研究家	第3回民俗芸能研究協議会事例報告
00.11.27～11.29	北嶋 恵介	静岡県森町教育委員会国民体育大会推進係	第3回民俗芸能研究協議会事例報告
00.11.27～11.29	原田 三壽	京都府教育庁指導部文化財保護課選定保存技術係	第3回民俗芸能研究協議会事例報告

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
00.11.27～11.29	門屋 光昭	盛岡大学教授	第3回民俗芸能研究協議会事例報告
00.11.27～11.29	永松 敦	椎葉民俗芸能博物館学芸員	第3回民俗芸能研究協議会
00.11.27～12.15	尾立 和則	京都造形芸術大学助教授	国際研修「紙の保存修復」
00.11.28	関谷 学	あきる野市教育委員会文化財主任	第3回民俗芸能研究協議会事例報告
00.11.28	坂上 洋之	秋川歌舞伎保存会あきる野市文化財専門審議委員	第3回民俗芸能研究協議会事例報告
00.11.28～12.06	原田 一敏	東京国立博物館学芸部工芸課金工室長	在外日本古美術品に係る調査協力
00.11.29	園田 直子	国立民族学博物館助教授	研究会出席
00.11.29	牧野 隆雄	東北芸術工科大学教授	研究会出席
00.11.29～12.01	榎本 淳子		資料採取
00.11.29～12.01	鈴木 浩子		資料採取
00.12.08～12.09	山下 登	奈良国立文化財研究所会計課長	独立行政法人化に関する打合せ
00.12.08～12.09	寺澤 邦裕	奈良国立文化財研究所経理係長	独立行政法人化に関する打合せ
00.12.13	日高健一郎	筑波大学教授	研究評価委員会
00.12.13	坂本 満	聖徳大学	研究評価委員会
00.12.13	表 章	法政大学名誉教授	研究評価委員会
00.12.13～12.14	有賀 祥隆	東北大学大学院文学研究科教授	研究評価委員会
00.12.13～12.14	増澤 文武	元興寺文化財研究所保存センターセンター長	研究評価委員会
00.12.13～12.14	馬淵 久夫	くらしき作陽大学食文化学部長	研究評価委員会
00.12.14～12.15	百橋 明穂	神戸大学文学部	彩色文化財に関する調査研究
00.12.14～12.15	浅湊 毅	京都国立博物館学芸課	彩色文化財に関する調査研究
00.12.14～12.22	野口 英雄	都留文化大学教授	文化財保護法50年記念シンポジウム
00.12.15～12.17	加用 祐子	通訳	文化財保護法50年記念シンポジウム
00.12.15～12.17	桜田 方子	通訳	文化財保護法50年記念シンポジウム
00.12.16～12.17	斉藤 祐嗣	文化庁文化財保護部伝統文化課主任調査官	文化財保護法50年記念シンポジウム
00.12.17～12.21	宗田 好史	京都府立大学助教授	文化財保護法50年記念シンポジウム
00.12.18～12.19	石井 米雄	神田外語大学	文化財保護法50年記念シンポジウム
00.12.18～12.21	笹村 二郎	北海道ウタリ協会理事長	文化財保護法50年記念シンポジウム
00.12.25～12.26	千葉 秀夫	奈良国立文化財研究所庶務部長	独立行政法人化に関する打合せ
00.12.25～12.27	藤巻 晴行	筑波大学講師	研究会及び調査
00.12.25～12.27	登尾 浩助	岩手大学講師	研究会及び調査
00.12.25～12.27	土谷富士夫	帯広畜産大学教授	研究会及び調査
00.12.25～12.27	伊藤 譲	摂南大学助教授	研究会及び調査
00.12.25～12.27	武田 一夫	鴻池組技術研究所研究員	研究会及び調査
00.12.25～12.27	多 昭彦	奈良国立文化財研究所庶務課長	独立行政法人化に関する打合せ

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
01.01.10～01.20	苅谷 勇雅	文化庁文化財保護部建造物課主任文化財調査官	カスコ・アンディゴ調査及び打合せ
01.01.16～01.17	野口 英雄	都留文科大学教授	国際協力事業推進に関する助言及び専門知識の提供
01.01.20～01.22	板倉 聖哲	東京大学助教授	調査
01.01.21～01.22	中川 正	奈良国立文化財研究所庶務係長	独立行政法人化に関する打合せ
01.01.22	下山 進	デンマテリアル(株)色彩科学研究所所長	顔料の現地非破壊分析
01.01.22～01.24	野口 英雄	都留文科大学教授	国際協力事業推進に関する助言及び専門知識の提供
01.01.24～01.26	宮下佐江子	古代オリエント博物館研究員	研究打合せと現地調査
01.01.29～01.31	野口 英雄	都留文科大学教授	国際協力事業推進に関する助言及び専門知識の提供
01.02.01～02.02	下山 進	デンマテリアル(株)色彩科学研究所所長	顔料の現地非破壊分析
01.02.05～02.07	野口 英雄	都留文科大学教授	国際協力事業推進に関する助言及び専門知識の提供
01.02.11～02.17	田邊三郎助	町田市立博物館	黒田記念館の利用に関する懇談会
01.02.13～02.14	多 昭彦	奈良国立文化財研究所庶務課長	独立行政法人化に関する打合せ
01.02.13～02.16	清水 真一	文化庁文化財部建造物課	研究打合せ及び現地調査
01.02.14	斉藤 明子	千葉県立中央博物館学芸研究員	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会
01.02.14～02.15	宇治谷 恵	国立民族学博物館	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会
01.02.14～02.15	長屋菜津子	愛知県芸術文化センター愛知県美術館	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会
01.02.14～02.15	松田 隆嗣	福島県立博物館	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会
01.02.14～02.15	廣田いづみ	小松市立宮本三郎美術館	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会
01.02.14～02.15	日高 真吾	元興寺文化財研究所保存科学センター研究員	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会
01.02.14～02.15	中川 正	奈良国立文化財研究所庶務係長	独立行政法人化に関する打合せ
01.02.19	河竹登志夫	早稲田大学名誉教授	無形文化遺産に関する国際ワークショップ
01.02.19～02.23	植木 行宣	京都学園大学教授	無形文化遺産に関する国際ワークショップ
01.02.21～02.23	山口 修	大阪大学教授	無形文化遺産に関する国際ワークショップ
01.02.22	浅枝 隆	埼玉大学教授	東京国立文化財研究所研究職員選考審査会
01.02.22～02.24	菊屋 吉生	山口大学助教授	研究協議会出席
01.02.22～02.24	三木 哲夫	国立国際美術館	研究協議会出席
01.02.22～02.24	島田 康寛	京都国立近代美術館	研究協議会出席
01.02.22～02.24	島谷 弘幸	東京国立博物館学芸部美術課書跡室長	在外日本美術品修復事業に関する文書調査
01.02.25～02.27	山田 拓伸	大分県立歴史博物館主幹研究員	第9回国際文化財保存修復研究会・第4回センター保存計画研究会
01.02.26	宮川 朝一	東洋大学教授	第9回国際文化財保存修復研究会

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
01.02.26	森田 恒之	国立民族学博物館民族学研究開発センター教授	第9回国際文化財保存修復研究会
01.02.26	森本 晋	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官	第9回国際文化財保存修復研究会
01.02.26	工藤父母道	プロジェクト ワールトヘリテッジ	第9回国際文化財保存修復研究会
01.02.26	海老澤孝雄	㈱ざ・エトス 代表取締役	第9回国際文化財保存修復研究会
01.02.26～02.27	内田 昭人	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究員	第9回国際文化財保存修復研究会・第4回センター保存計画研究会
01.02.26～02.27	内田 俊秀	京都造形芸術大学文化財研究センター教授	第9回国際文化財保存修復研究会・第4回センター保存計画研究会
01.02.26～02.27	西藤 清秀	奈良県立橿原考古学研究所総括研究員	第9回国際文化財保存修復研究会・第4回センター保存計画研究会
01.02.26～02.27	坂井 隆	㈱群馬県埋蔵文化財調査事情団 主幹専門員	第9回国際文化財保存修復研究会
01.02.26～02.27	佐々木花江	金沢大学埋蔵文化財調査センター助教授	第9回国際文化財保存修復研究会・第4回センター保存計画研究会
01.02.26～02.27	鈴木 稔	帝京大学山梨文化財研究所保存科学研究室室長	第9回国際文化財保存修復研究会・第4回センター保存計画研究会
01.02.26～02.27	谷本 親伯	大阪大学教授	第9回国際文化財保存修復研究会
01.02.26～02.27	西山 要一	奈良大学教授	第9回国際文化財保存修復研究会・第4回センター保存計画研究会
01.02.26～02.27	新田 栄治	鹿児島大学教授	第9回国際文化財保存修復研究会
01.02.26～02.27	濱崎 一志	滋賀県立大学	第9回国際文化財保存修復研究会
01.02.27	浅野 和生	愛知教育大学教育学部助教授	第4回センター保存計画研究会
01.02.27	木村 勉	奈良国立文化財研究所建造物研究室室長	第4回センター保存計画研究会
01.02.27	清水 重敦	奈良国立文化財研究所研究員	第4回センター保存計画研究会
01.02.27	長尾 充	奈良国立文化財研究所研究官	第4回センター保存計画研究会
01.02.27	佐々木達夫	金沢大学教授	第4回センター保存計画研究会
01.02.27	平井 俊行	京都府教育庁文化財保護課技師	第4回センター保存計画研究会
01.02.27	豊城 浩行	滋賀県教育委員会文化財保護課	第4回センター保存計画研究会
01.02.27	長谷川哲也	日本診断設計株式会社代表取締役	第4回センター保存計画研究会
01.02.27	青木 浩治	文化財建造物保存技術協会浄興寺本堂修理事務所所長	第4回センター保存計画研究会
01.02.27	安田 一男	文化財建造物保存技術協会大阪事務所副所長	第4回センター保存計画研究会
01.02.27	鳴海 祥博	和歌山県文化財保護センター文化財建造物課課長	第4回センター保存計画研究会
01.02.27～03.01	江川 佳秀	徳島県立近代美術館主任学芸員	美術部、情報資料部研究会



期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
01.02.28～03.02	内田 好昭	京都市埋蔵文化財研究所	満州・朝鮮関係文化財研究資料の共有化に関する協議
01.02.28～03.02	広瀬 繁明	有限会社 真陽社	満州・朝鮮関係文化財研究資料の共有化に関する協議
01.03.01～03.02	藤巻 晴行	筑波大学講師	道観壁画の調査
01.03.01～03.03	中谷 礼仁	大阪市立大学講師	満州・朝鮮関係文化財研究資料の共有化に関する協議
01.03.01～03.03	青井 哲人		満州・朝鮮関係文化財研究資料の共有化に関する協議
01.03.06～03.08	宗田 好史	京都府立大学助教授	文化的景観に関する研究打合せ
01.03.07～03.08	西澤 泰彦	名古屋大学助教授	満州・朝鮮関係文化財研究資料の共有化に関する協議
01.03.07～03.09	飯野 正仁	山梨県立文学館資料情報課長	わが国の近代美術の発達に関する調査研究
01.03.07～03.09	木下 悦子	笠岡市立竹喬美術館学芸員	大正～昭和前期の日本画に関する協議、共同調査
01.03.12～03.13	野口 英雄	都留文科大学教授	国際協力事業推進に関する助言及び専門知識の提供
01.03.13～03.15	鷹巣 純	愛知教育大学教育学部助教授	日本における外来の美術の受容についての研究
01.03.13～03.15	山本 泰一	徳川黎明会徳川美術館	日本における外来の美術の受容についての研究
01.03.16～03.17	野口 英雄	都留文科大学教授	国際協力事業推進に関する助言及び専門知識の提供
01.03.16～03.17	平澤 広	萬鉄五郎記念美術館学芸員	研究協議会出席
01.03.18～03.20	伊藤 実	広島県立歴史民俗資料館	保存担当学芸員研修将来検討会
01.03.19	椿坂 信弥	国立歴史民俗博物館展示課係長	保存担当学芸員研修将来検討会
01.03.19	中山 文人	松戸市立博物館	保存担当学芸員研修将来検討会
01.03.19～03.20	伊藤 羊子	長野県立歴史館学芸員	保存担当学芸員研修将来検討会
01.03.19～03.20	小林 宇壱	須坂市立博物館	保存担当学芸員研修将来検討会
01.03.19～03.20	高木 叙子	滋賀県立安土城考古博物館学芸員	保存担当学芸員研修将来検討会
01.03.19～03.20	市村 高規	瀧野市立歴史文化資料館学芸員	保存担当学芸員研修将来検討会
01.03.19～03.20	伊藤 仁美	元興寺文化財研究所保存科学センター室長	保存担当学芸員研修将来検討会
01.03.19～03.20	山田 拓伸	大分県立歴史博物館主幹研究員	保存担当学芸員研修将来検討会
01.03.21～03.22	野口 英雄	都留文科大学教授	国際協力事業推進に関する助言及び専門知識の提供
01.03.22	田中 恵	岩手大学教授	彩色文化財の調査、研究打合せ
01.03.26～03.28	植野 健造	石橋美術館学芸員	無形ワークショップの事後協議
01.03.27	関口 正之	勸遠山記念館館長	東京国立文化財研究所運営諮問委員会
01.03.27	田邊三郎助	武蔵野美術大学教授	東京国立文化財研究所運営諮問委員会
01.03.27～03.28	町田 章	奈良国立文化財研究所所長	東京国立文化財研究所運営諮問委員会
01.03.27～03.29	小杉 拓也	漆芸修復家	受託研究のための打合せ及び調査

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
01.03.27～03.30	四辻 秀紀	徳川美術館学芸課長	国宝源氏物語絵巻の調査資料の検討意見交換
01.03.27～03.30	吉川 美穂	徳川美術館学芸員	国宝源氏物語絵巻の調査資料の検討意見交換
01.03.28	増田千次郎	増田千次郎建築事務所事務所長	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28	谷本 親伯	大阪大学教授	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	高田 修一	田川産業(株)研究員	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	小林 幸雄	北海道開拓記念館普及課長	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	中島 宏一	北海道開拓の村学芸員	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	似内 啓邦	盛岡市教育委員会文化財主査	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	津嶋 知宏	盛岡市教育委員会文化財主事	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	松田 隆嗣	福島県立博物館専門学芸員	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	武田 一夫	鴻池組技術研究所研究員	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	高田 忠彦	(株)シリックス 副社長	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	秦光 次郎	青森県教育庁文化課	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	平塚 幸人	仙台市富沢遺跡保存館	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	石井 克己	子持村教育委員会	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	駒形 敏郎	長岡市科学博物館	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	白沢 勝彦	長野県立歴史館	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	西尾太加二	(財)静岡県埋蔵文化財調査事務所	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	比佐陽一郎	福岡市埋蔵文化財センター	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	池崎 譲二	福岡市教育委員会	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	細川 金也	佐賀県教育庁文化課	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.29	重山 郁子	宮崎県教育庁文化課	壁画および土壁の保存に関する研究会
01.03.28～03.30	松本 法子		漆芸修復協議会
01.03.28～03.30	松本 達也		漆芸修復協議会
01.03.29～03.30	宗田 好史	京都府立大学助教授	国際協力事業への指導と助言

### 3. 海外研究者等の来訪

#### (1) 来訪研究員

氏 名	国 籍	所 属
Raymond Leeuwenburg	オ ラ ン ダ	家具修復専門家
Silvia Cravero	イ タ リ ア	修復建築家
Anne Jacqin	フ ラ ン ス	IFROA研究員
Sandra E Ordway	ア メ リ カ	南カロライナ大学
金鐘吾	韓 国	慶州博物館学芸研究士
姜昌求 (Kang ChangGu)	韓 国	湖巖美術館文化財保存研究所研究員
劉景龍 (Liu JingLong)	中 国	龍門石窟研究所所長
馬朝龍 (Ma ChaoLong)	中 国	龍門石窟研究所研究員
范宇權 (Fan Yu Quan)	中 国	敦煌研究院保護研究所研究員
Paola Falini Di Rocco	イ タ リ ア	ローマ大学建築学部教授

#### (2) 表敬訪問

日 時	氏 名	国 籍	所 属 等	目 的
2000年4月	劉 景龍	中 国	龍門石窟研究所所長	研究交流に関する意見交換
2000年4月	Juan Carlos La Rotta 他1名	コロンビア	コロンビア大使館外交官	文化財保護に関する意見交換
2000年6月	Lam Yiu-tong	香 港	香港特別区内政第一事務次官補	文化財保護に関する意見交換
2000年6月	Karma Wangchuk 他7名	ブータン 他	文化委員会課長他	JICA「文化財修復コース」研修員
2000年7月	胡 偉	中 国	中央美術学院教授	研究交流に関する意見交換
2000年8月	陳 木杉 他10名	中 国	雲林科技大学文化資産 維護研究所所長他	事業説明及び施設見学
2000年9月	Koenraad Van Balen	ベルギー	ルーバン・カトリック 大学教授	文化財保護に関する意見交換
2000年10月	趙 喜明 他7名	中 国	中国人民政治協商会 議訪日団	事業説明及び施設見学
2000年10月	謝 飛	中 国	河北省文物局副局長	文化財保護に関する意見交換
2000年10月	Kouzmenko Larissa	ロ シ ア	ロシア国立東洋美術館 修復部副部長	文化財保護に関する意見交換
2000年11月	I G.M.Anom 他1名	インドネ シア	インドネシア教育文化 省文化総局長他	文化財保護に関する意見交換
2001年3月	Yury Piotrovsky 他1名	ロ シ ア	エルミタージュ美術館 考古学部副部長他	修復に関する意見交換及び施設見学

## 6. 主な所蔵資料

### 1. 図書資料

#### (1) 美術関係図書

日本・東洋・欧米の美術に関する書籍を中心に、各地方公共団体編集の文化財関係調査報告書、展覧会の図録・目録類、売立目録、美術関係雑誌（和文2,039種、韓文38種、中文108種、欧文399種）等を所蔵している。

特色としては、江戸期の写本版本や明治大正期刊行の大型図書・明治期開催博覧会関係資料・明治から昭和初期にかけて発行された和文美術雑誌など、多くの貴重書を所蔵している。

#### (2) 芸能関係図書

雅楽・寺後と能・歌舞伎・文学・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸、その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書11,628冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第1次）・テアトロ（第1次）・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説などの雑誌、また声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・謡本も収集している。

#### (3) 保存科学・修復技術関係図書

伝統的生産および工芸技術書、技術史またはそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書および化学・物理学・生物学部門の保存科学の関連和洋書、合わせて3,760冊を所蔵している。

本年度における収集数と総計は次表の通りである。

図書資料：1,556冊

区分（2000年度）	美術関係	芸能関係	保存科学・修復技術関係	計
和漢書	1,047冊	207冊	20冊	1,274冊
洋書	258冊	1冊	23冊	282冊
合計	1,305冊	208冊	43冊	1,556冊

カタログ類：601冊（古美術関係：216冊、近現代美術関係：385冊）

雑誌類：1,329冊（和文1,111冊、韓文17冊、中文95冊、欧文106冊）

平成12年度末における図書資料の累計

美術関係図書：61,385冊

芸能関係図書：10,568冊

保存修復関係図書：3,696冊

合計：75,649冊（但し図書資料に限る）

#### (4) 外国文化財関係図書

国際資料室では、外国の文化財および文化財保存に関する図書資料を約1,000冊所蔵している。また、国内外の文化財保護関連法規の収集を行っており、現在、100ヶ国余りについて資料が収集されている。

## 2. そ の 他

### (1) 美術関係資料

美術関係の資料は多岐にわたるが、写真撮影は、絵画・彫刻・工芸・建築等の台紙貼写真、売立目録カードなど、総数約26万点を所蔵している。写真原版は、モノクロ4×5フィルム約48,500点、カラー4×5フィルム約8,300点、四切ガラス乾板約7,800点をはじめとして、各種サイズのモノクロフィルム、X線フィルム・赤外線フィルムなどを多数所蔵している。本年度は、新規に約3,600カットを撮影し、約1,600カットを登録した。その他、拓本、作家伝記資料、落款印章資料、近現代作家・団体・作品資料、資料スクラップ等と図版カード、各種索引類などを所蔵している。

### (2) 芸能関係資料

シネフィルム、ビデオテープ、レコード、写真等による芸能資料を数多く備えている。レコードには、毎年各社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、1960（昭和35）年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションは、明治・大正・昭和3代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。ビデオテープおよび写真等は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした、写真、テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。資料別の所蔵数は、次の通りである。

区 分	録音テープ		シネフィルム		ビデオテープ			
	アナログ	デジタル	8mm	16mm	ベータ	8mm	B.C.	D 6
12年度	*	*	0	0	32	0	0	5
合 計	*	*	198	4	954	151	34	83

計 1,222本（テープ番号1835まで）

区 分	音 盤		
	SP・LP・EP	CD	VHD・LD
12年度	2	80	0
合 計	7,311	990	16

### (3) 保存科学・修復技術関係資料

考古遺物は美術工芸品など、諸部門の文化財を撮影したX線フィルムを多数所蔵する。X線透視撮影は昭和20年代から力を注いで行っており、近年それらのデータをデジタル化し、整理する作業を進めている。

## 7. 研究所関係資料

### 1. 設立の経緯

東京国立文化財研究所は、昭和27年4月1日に発足したが、その前身であり母体となったものは、昭和5年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選択を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鏖二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、またわが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

### 2. 年代別重要事項

期 日	事 項
昭和元年12月	前記の事業を遂行するため委員会が組織され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建物造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。
昭和2年2月	美術研究所準備事業を開始した。
同 年10月	東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192m <sup>2</sup> の建物1棟を起工した(本館)。
昭和3年9月	前記の建物が竣工したので、黒田記念館と名付け、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、黒田清輝の作品を陳列した。
昭和4年5月	遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。
昭和5年6月28日	勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。
同 年10月17日	美術研究所開所式を挙行了した。
昭和7年1月	美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物『美術研究』を創刊した。
同 年4月18日	株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。
同 年5月26日	帝国美術院はこの申出を受理した。 明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。
昭和9年10月18日	毎年10月18日を開所記念日と定めた。
昭和10年1月28日	鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129m <sup>2</sup> の書庫が竣工した。



期 日	事 項
昭和10年 4 月	『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。
同 年 6 月 1 日	勅令第148号により美術研究所官制が公布された。 研究資料閲覧規定を制定し、閲覧事務を開始した。
昭和12年 6 月24日	勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。
同 年11月29日	美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。
昭和13年 2 月12日	木造、平屋建、延面積97m <sup>2</sup> の写真室 1 棟が竣工した。
昭和19年 8 月10日	黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。
昭和20年 5 月28日	美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫 3 棟に疎開した。
同 年 7 ～ 8 月	酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曽根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。
昭和21年 3 月29日	酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。
同 年 4 月 4 日	酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し、引揚げを完了した。
同 年 4 月16日	東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。
昭和22年 5 月 1 日	美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。 国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた(保存科学部の前身)。昭和23年度より専任の職員を配置し、研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室(66m <sup>2</sup> )に設けた。
昭和25年 8 月29日	文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。
同 年 8 月29日	文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。
昭和26年 1 月31日	美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。
昭和27年 4 月 1 日	文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の 3 部 1 室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。 また文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。
同 年 7 月 1 日	芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。
昭和28年 4 月26日	保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫132m <sup>2</sup> を改造のうえ移転した。
昭和29年 7 月 1 日	東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。
昭和32年 3 月22日	東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平屋建、8m <sup>2</sup> の保存科学部の薬品庫が竣工した。
同 年11月30日	従来の 2 階建書庫の上にさらに 1 階を増築 3 階建とし、増築分延面積71m <sup>2</sup> が竣工した。
昭和34年 4 月30日	東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。
昭和36年 9 月16日	東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。
昭和37年 3 月31日	東京国立博物館内に保存科学部庁舎(保存科学部実験室)として、鉄筋コンクリート造、2 階建、延面積663m <sup>2</sup> の建物 1 棟が竣工した。
同 年 7 月 1 日	東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。
同 年 7 月20日	芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。
昭和43年 6 月15日	文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。
昭和44年 8 月23日	保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎(延1,950.41m <sup>2</sup> )の起工式が行われた。
昭和45年 3 月25日	前記の別館が竣工したので、同年 5 月26日竣工式が行われた。
同 年 3 月25日	芸能部は、別館 3 階に移転した。

期 日	事 項
昭和45年 5月 8日	保存科学部は別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を完了した。
同 年 6月29日	保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が完了した。
同 年11月 2日	所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した（本館は、美術部庁舎となる）。 これにより研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27号」に変更された。
昭和46年 4月 1日	保存科学部庁舎及び別館の敷地2,658m <sup>2</sup> を東京国立博物館から所管換された。
昭和48年 4月12日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。
昭和52年 4月18日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。
昭和53年 3月20日	本館構内の写場等（木造、平屋建、延面積144m <sup>2</sup> ）を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積569.95m <sup>2</sup> の建物が竣工した。
昭和53年 4月 5日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。
昭和59年 6月28日	文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。
平成 2年10月 1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、新たにアジア文化財保存研究室が置かれ、5部1室1課となった。
平成 5年 4月 1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、アジア文化財保存研究室は、国際文化財保存修復協力室となった。
平成 7年 4月 1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力室が廃止され、新たに国際文化財保存修復協力センターが設置された。同センターには、企画室及び環境解析研究指導室が置かれ、1センター5部1課となった。
平成 7年 4月 1日	東京芸術大学と「東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻の教育研究に対する連携・協力に関する協定書」が交わされ、連携併任分野として独立専攻大学院文化財保存学専攻（システム保存学）が設置された。
平成 9年10月 1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力センターに保存計画研究指導室が置かれた。
平成12年 2月 4日	新営庁舎として、鉄筋コンクリート造、地上4階地下1階、延面積10,557.99m <sup>2</sup> （建築面積2,258.48m <sup>2</sup> ）が竣工した。
平成12年 2月21日	新営庁舎の竣工にともない、別館（庶務課・芸能部・保存科学部・修復技術部・国際文化財保存修復協力センター）部分の移転が開始された。
平成12年 3月 6日	新営庁舎の竣工にともない、本館（美術部・情報資料部）の移転が開始された。
平成12年 3月22日	建設省関東地方建設局営繕部より、新営庁舎の外構工事、植栽等の引き渡しを受け、新営庁舎関係の工事が完了した。
平成13年 3月29日	黒田記念館改修工事が竣工し、展示スペースが黒田記念室及び展示室の2室になった。

### 3. 歴代所長（昭和5年～平成12年）

役 職	氏 名	期 間
主事	正 木 直 彦	昭和 5. 6.28～昭和 6.11.24
主事	矢 代 幸 雄	昭和 6.11.25～昭和10. 5.31
所長事務取扱	和 田 英 作	昭和10. 6. 1～昭和11. 6.21
所長	矢 代 幸 雄	昭和11. 6.22～昭和17. 6.28
所長事務取扱	田 中 豊 蔵	昭和17. 6.29～昭和22. 8.15
所長	田 中 豊 蔵	昭和22. 8.16～昭和23. 5.10
所長代理	福 山 敏 男	昭和23. 5.11～昭和24. 8.30
所長	松 本 栄 一	昭和24. 8.31～昭和27. 3.31
所長事務代理	矢 代 幸 雄	昭和27. 4. 1～昭和28.10.31
所長	田 中 一 松	昭和28.11. 1～昭和40. 3.31
所長	関 野 克	昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1
所長	伊 藤 延 男	昭和53. 4. 1～昭和62. 3.31
所長	濱 田 隆	昭和62. 4. 1～平成 3. 3.31
所長	西 川 杏太郎	平成 3. 4. 1～平成 8. 3.31
所長	渡 邊 明 義	平成 8. 4. 1～現在

#### 4. 名誉研究員

氏 名	退 職 時 官 職 名	在 所 期 間	名誉研究員 発令年月日
白 畑 よ し		昭和 5. 6.30～昭和27. 8. 1	昭和53.10.18
高 田 修	美術部長	昭和27.12. 1～昭和44. 3.31	昭和53.10.18
登 石 健 三	保存科学部長	昭和27.10. 1～昭和50. 4. 1	昭和53.10.18
岡 畏 三 郎	美術部長	昭和20. 5.15～昭和51. 4. 1	昭和53.10.18
関 野 克	所長	昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1	昭和53.10.18
秋 山 光 和	美術部第一研究室長	昭和16.10. 1～昭和42. 2. 1	昭和54.10.18
久 野 健	情報資料部長	昭和20. 5.31～昭和57. 4. 1	昭和57.10.18
川 上 涇	美術部長	昭和21. 2.28～昭和57. 4. 1	昭和57.10.18
関 千 代	美術部第二研究室長	昭和18.12.15～昭和58. 4. 1	昭和58.10.18
横 道 萬里雄	芸能部長	昭和28. 3.16～昭和51. 4. 1	昭和59.10.18
上 野 ア キ	情報資料部文献資料研究室長	昭和17.11. 3～昭和59. 4. 1	昭和59.10.18
江 上 綏	情報資料部主任研究官	昭和38. 5.18～昭和59. 3.31	昭和59.10.18
田 村 悦 子	美術部主任研究官	昭和22. 6.16～昭和60. 3.31	昭和60.10.18
猪 川 和 子	情報資料部文献資料研究室長	昭和22. 6.27～昭和60. 3.31	昭和60.10.18
伊 藤 延 男	所長	昭和53. 4. 1～昭和62. 3.31	昭和62.10.18
柳 澤 孝	美術部長	昭和21. 9.30～昭和62. 3.31	昭和62.10.18
三 隅 治 雄	芸能部長	昭和27.10. 1～昭和63. 3.31	昭和63.10.18
樋 口 清 治	修復技術部長	昭和37.11. 1～昭和63. 3.31	昭和63.10.18
田 實 榮 子	美術部主任研究官	昭和23. 3.31～平成元. 3.31	平成元.10.18
見 城 敏 子	保存科学部物理研究室長	昭和34. 4. 1～平成元. 3.31	平成元.10.18
濱 田 隆	所長	昭和62. 4. 1～平成 3. 3.31	平成 3.10.18
関 口 正 之	美術部長	昭和42. 2. 1～平成 3. 3.31	平成 3.10.18
佐 藤 道 子	芸能部長	昭和34. 4. 1～平成 4. 3.31	平成 4.10.18
馬 淵 久 夫	保存科学部長	昭和50.10. 1～平成 4. 3.31	平成 4.10.18
新 井 英 夫	保存科学部長	昭和45. 9. 1～平成 5. 3.31	平成 5. 4. 1
西 川 杏太郎	所長	平成 3. 4. 1～平成 8. 3.31	平成 8. 4. 1
門 倉 武 夫	保存科学部生物研究室長	昭和32. 4. 1～平成 8. 3.31	平成 8. 4. 1
三 輪 英 夫	美術部第二研究室長	昭和53. 8. 1～平成 8. 3.31	平成 8. 4. 1
蒲 生 郷 昭	芸能部長	昭和56. 4. 1～平成10. 3.31	平成10. 4. 1
中 里 壽 克	修復技術部第一修復技術研究室長	昭和39. 4. 1～平成10. 3.31	平成10. 4. 1
宮 本 長二郎	国際文化財保存修復協力センター長	平成 6. 4. 1～平成11. 3.31	平成11. 4. 1
羽 田 昶	芸能部音楽舞踊研究室長	昭和51. 4. 1～平成12. 3.31	平成12. 4. 1

※関野 克名誉研究員は、平成13年 1 月25日逝去。

## 5. 2000（平成12）年度予算等

### (1) 予 算

（単位：千円）

事 項	予 算 額
1. 人件費	569,227
2. 運営費	152,433
管理運営経費	152,433
3. 研究事業費	402,208
一般研究	70,843
受託研究	2,417
事業経費	149,041
国際研究協力経費	80,799
調査研究等特別推進経費	99,108
4. 文化財情報総合システムの整備	41,085
合 計	1,164,953

### (2) 調査研究等特別推進経費一覧

（単位：千円）

事 項	予 算 額
日本における外来美術の受容についての研究	
日本近代美術の発展に関する研究	
近世芸能の近代化と伝承に関する研究	
文化財施設の保存環境の研究	
文化財の保存を目的とした国際協力調査	
無公害な文化財生物劣化防除法の研究	
近代文化遺産の修復に関する調査研究	
合 計	99,108

### (3) 科学研究費補助金交付一覧

(単位：千円)

研究種目	研究課題	研究代表者	交付額
基盤研究(A)	日本における美術史学の成立と展開	米倉 迪夫	2,800
〃	世界の文化財の保存 —わが国による国際協力体制構築のための調査・研究—	西浦 忠輝	5,200
〃	彩色文化財の材料と技法に関する科学研究	渡邊 明義	6,300
〃	早期中国青銅器の原料産地に関する研究	平尾 良光	4,200
〃	文化財の新たな総合的虫菌害防除対策 (IPM) のシステム構築に関する研究	三浦 定俊	6,300
〃	中国の寺院壁画、古墳壁画の保存に関する研究	川野邊 渉	15,800
基盤研究(B)	タイ国・アユタヤ遺跡の保存修復に関する研究	西浦 忠輝	2,900
〃	古代日本の動物遺体のDNA解析および免疫学的分析	木川 りか	3,300
〃	石造文化財の劣化機構と保存対策手法の研究	石崎 武志	2,200
〃	屋外環境下での遺跡、石造文化財の保存対策手法の開発	石崎 武志	2,200
基盤研究(C)	極楽浄土を表象するモチーフとしての迦陵頻伽の諸相とその文化的特質—鳥と人からなる動物を通して見た東西文化の交流とその中国的受容—	勝木言一郎	700
〃	宋元時代の江南仏教世界と舶載仏画	井手誠之輔	1,200
〃	新史料翻刻による花祭りの芸能史的位置づけ —大神楽から花祭りへ—	中村 茂子	800
〃	石造、レンガ建造物の劣化にかかわる材料物性の研究	石崎 武志	1,500
〃	壁画顔料の現地非破壊分析法に関する研究	朽津 信明	3,300
奨励研究(A)	菊池容斎についての基礎的研究	塩谷 純	700
〃	可搬型分析機器を用いた未調査文化財の材料調査に関する研究	早川 泰弘	900
合計			60,300

### (4) 受託研究一覧

(単位：千円)

研究課題	受入額
武者塚古墳出土遺物の保存修復研究	399
漆塗り皮革製品に関する調査研究	1,297
琉球漆器における保存と修復技法開発に関する調査研究	152
銅板への焼き付け漆塗装の研究	228
装潢材料の物性研究	341
合計	2,417



## 6. 関係法規

◎文部省組織令（抄）（昭59.6.28 政令第227号）  
（最終改正 平9.8.22）

### 第2章 文化庁

#### 第3章 施設等機関

（施設等機関）

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国語研究所を置く。

2 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第144条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

（研究施設の指定）

第115条 国立国語研究所及び国立文化財研究所は、法第5条第37条に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則（抄）（昭28.1.13 文部省令第2号）  
（最終改正 平9.10.1）

### 第5章 文化庁の施設等機関

#### 第4節 国立文化財研究所

##### 第1款 名称及び位置

（名称及び位置）

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

##### 第1款の2 東京国立文化財研究所

（所 長）

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

（内部組織）

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課次の5部を置く。

一 美術部

二 芸能部

三 保存科学部

四 修復技術部

## 五 情報資料部

2 前項に定めるもののほか、東京国立文化財研究所に、国際文化財保存修復協力センターを置く。

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
- 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- 三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 四 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- 五 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- 六 庁内の取締まりに関すること。
- 七 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属さない事務を処理すること。

(美術部の二室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室及び第二研究室を置く。

2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査を行い、及びその結果の公表を行う。

3 第二研究室においては、わが国近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

4 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及び保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(保存科学部の三室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室及び生物研究室を置く。

2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む。)を行い、並びにその結果の公表を行う。

3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(修復技術部の三室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室、第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

2 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項及び第4項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

3 第二修復技術研究室においては、紙、布又は草を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

4 第三修復技術研究室においては、石、土又は金属を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

(情報資料部の二室及び事務)

第122条の3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

2 文献資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料(写真資料を除く)の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

3 写真資料室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料その他の資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

(国際文化財保存修復協力センター)

第122条の4 国際文化財保存修復協力センターにおいては、文化財の分野における国際的な貢献に資するため、世界の文化財の保存修復に関する国際協力、資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的、技術的な研修を行

う。

(国際文化財保存修復協力センターの長)

第122条の5 国際文化財保存修復協力センターに長を置く。

2 前項の長は、国際文化財保存修復協力センターの事務を掌理する。

(国際文化財保存修復協力センターの三室及び事務)

第122条の6 国際文化財保存修復協力センターに、企画室、環境解析研究指導室及び保存計画研究指導室を置く。

2 企画室においては、世界の文化財の保存修復に関する国際協力及び研修について、企画及び実施に係る事務を処理する。

3 環境解析研究指導室においては、世界の文化財の保存環境の解析に関する資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的、技術的な研修を行う。

4 保存計画研究指導室においては、世界の文化財の保存計画に関する資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的及び技術的な研修を行う。

(客員研究員)

第122条の7 東京国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。

2 客員研究員は、所長の命を受け、東京国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。

3 客員研究員は、非常勤とする。

## 東京国立文化財研究所年報 2000年度

---

2001 (平成13) 年11月30日 発行

発行所 独立行政法人文化財研究所  
東京文化財研究所

〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43

TEL 03-3823-2241 (番号案内)

FAX 03-3828-2434

<http://www.tobunken.go.jp/>

---